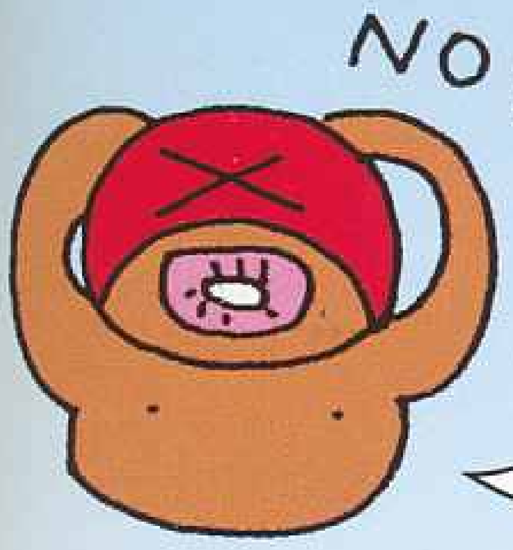


前人未到の超絶PRIDE本、ついに完成!!
enterbrain MOOK
MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2006 SPRING
860yen
PRIDEを支える女たち
アヤパンついに語る!
高島彩
巻き舌リングアナ登場!
レニー・ハート
奇跡の3大対談実現!
ノゲイラ兄弟×
髙田統括本部長
桜庭和志×
HG
ヴァンダレイ・シウバ×
インリン・オブ・ジョイトイ
超異色コラボ実現
「PRIDEまんが道」
ヒョードル"画伯"
相原コージ
にわのまこと
3大チーム誕生秘話
「PRIDEはじめて物語」
シュートボクセ
BTT ブラジリアン・トップ・チーム
RTT ロシアン・トップ・チーム
PRIDEわっしょい!!
あなたの知らない
PRIDE奇人変人伝
ジョー・サン
ヴァリッジ・イズマイウ
シャノン"ザ・キャノン"リッチ

スカパー!モバイル

総合バトルエンタテインメントサイト『スカパー!バトルLIFE!!』
オープン2ヶ月目にして早くも暗雲!?

スカパー!は、ちめーてき。
(バトルLIFE!!)



ここがちめーてき。その1
金沢“GK”克彦さんに「これからは“SK”(スカパー!金沢)を名乗ってもらえませんか?」とお願いしたところ、あっさり「お好きにどうぞ。がんばってね」と快諾されてしまうメディアとしてのナメられっぷり…。

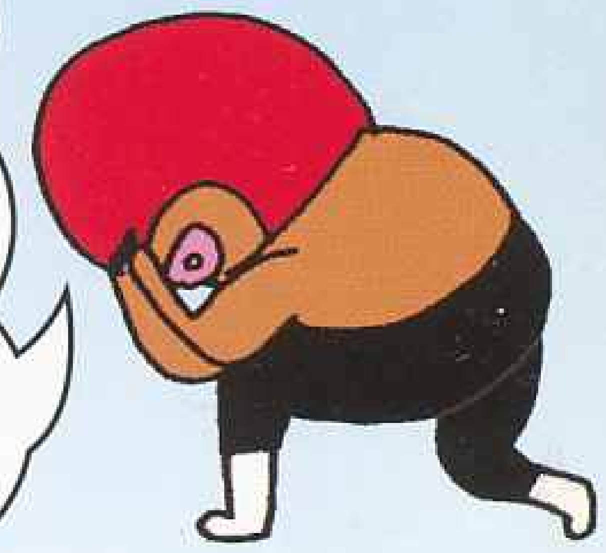


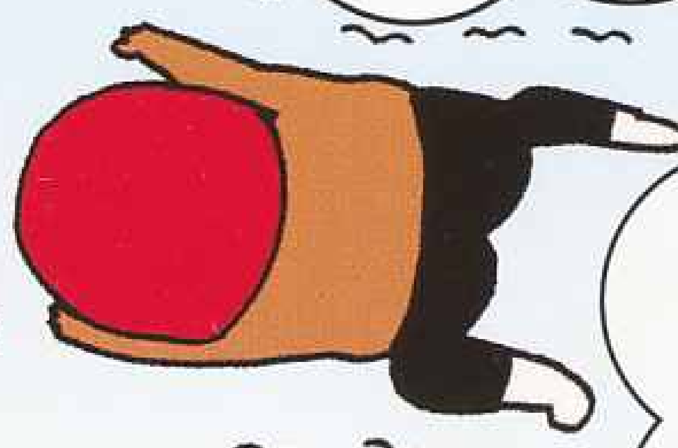
ここがちめーてき。その2
また、ターザン山本!さんに「スーザン山本!に変えてください」といまだに言えないヘタレっぷり。そんなにビビる相手じゃないっていうのは、わかってるつもりなんですけど…。



ここがちめーてき。その3
我らが永田裕志選手(新日本プロレス)の奥様が、本音まじりで新日本プロレスの試合レポート(その名も『ナガタルック』!)を書いているところ。大丈夫かなぁ…。もちろんヘタレなので、もらった原稿内容を修正することもできずそのまま配信しています…。

ここがちめーてき。その4
吉田豪さんにも連載コラム(『紙のプロ格 NOTV』)を書いていただいているところ。だってこの人、プロレス・格闘技の生観戦もろくにしないで、テレビやネット、紙媒体からの情報だけでマット界を語るんですよ…。





ここがちめーてき。その5
こんなこともありました。ビッグマウスの上井さんに「新しくメディアとしてスタートしました。うちにも会見情報などのプレスリリースを送ってください」とお願いしたら、「うーん…。わしは今、ネコの手も借りたいくらい忙しいんで…なんとかお力になりたいんですが、今回はちょっと…ご免なさい」と思いっきりなにか勘違いをされて断られてしまったところ…かな。

それでも「後発じゃない! 大トリだ!」な充実コンテンツ!!

- ★PRIDE、K-1、ハッスル、新日本プロレス、全日本プロレスを中心としたマット界の最新ニュースを毎日超速配信!
- ★最新ビッグマッチの詳細な試合リポート! そしてレビュー!
- ★旬のプロレスラー・格闘家への独占インタビュー!
- ★ターザン山本!×金沢“SK”克彦が定例対談でマット界を毎週ブッタ斬り!
- ★週刊! SK金沢の『疾風怒濤! SK激場2006』& ターザン山本!の『アブノーマルな水曜日(通称:あぶ水)』!
- ★DSE広報局 局長・笹原圭一氏がPRIDE、ハッスルに関する質問・疑問をすべて答える!
- ★至近距離の真実! K-1オフィシャルライター松井孝夫による『K-1、HERO'Sインサイドリポート』!
- ★あの名作が『バトルLIFE!!』で甦った! 渕正信の孤独私小説『ロンリーワン』!
- ★連載:漢たちの愛車、漢たちが愛するお店紹介!
- ★こちらも連載:『バトルWIFE!!』『素敵な奥様〜○○の妻でございます〜』!
- ★充実!選手プロフィール!
- ★スカパー!の放送と連動した企画もご用意!

増殖する
『バトルLIFE!!』ファミリー!

週刊・月刊・不定期コラムは、ちめーてきなまでの豪華執筆陣!!

ターザン山本!(元『週刊プロレス』編集長、現・野武士)金沢“SK”克彦(元『週刊ゴング』編集長、現スーパープロレスライター)・吉田豪(プロインタビュアー&プロ書評家)・笹原圭一(DSE広報局局長)・松井孝夫(K-1オフィシャルライター)・増田英彦(ますだおかだ)・永田ちえこ(永田裕志夫人)……などなど刻一刻と増殖中!

情報料	アクセス方法	受付時間
315円/月(税込)	◎iモード:iMENU→メニューリスト→スポーツ→格闘技/大相撲 ◎EZweb:EZトップメニュー→カテゴリで探す→スポーツ→格闘技 ◎Vodafone live!:Vodafone live!→メニューリスト→スポーツ→格闘技	カスタマーセンター 0570-033-103 平日 10:00〜20:00 土日祝 10:00〜18:00

※「EZweb」は、KDDI株式会社の登録商標です。「iモード」は、株式会社NTTドコモの登録商標です。「Vodafone」および「Vodafone live!」は、Vodafone Group Plcの登録商標または商標です。

てってーてきにやるよぉ。スカパー!バトルLIFE!!

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
表紙撮影／山口比佐夫
題字／富永泰弘


2006 SPRING CONTENTS

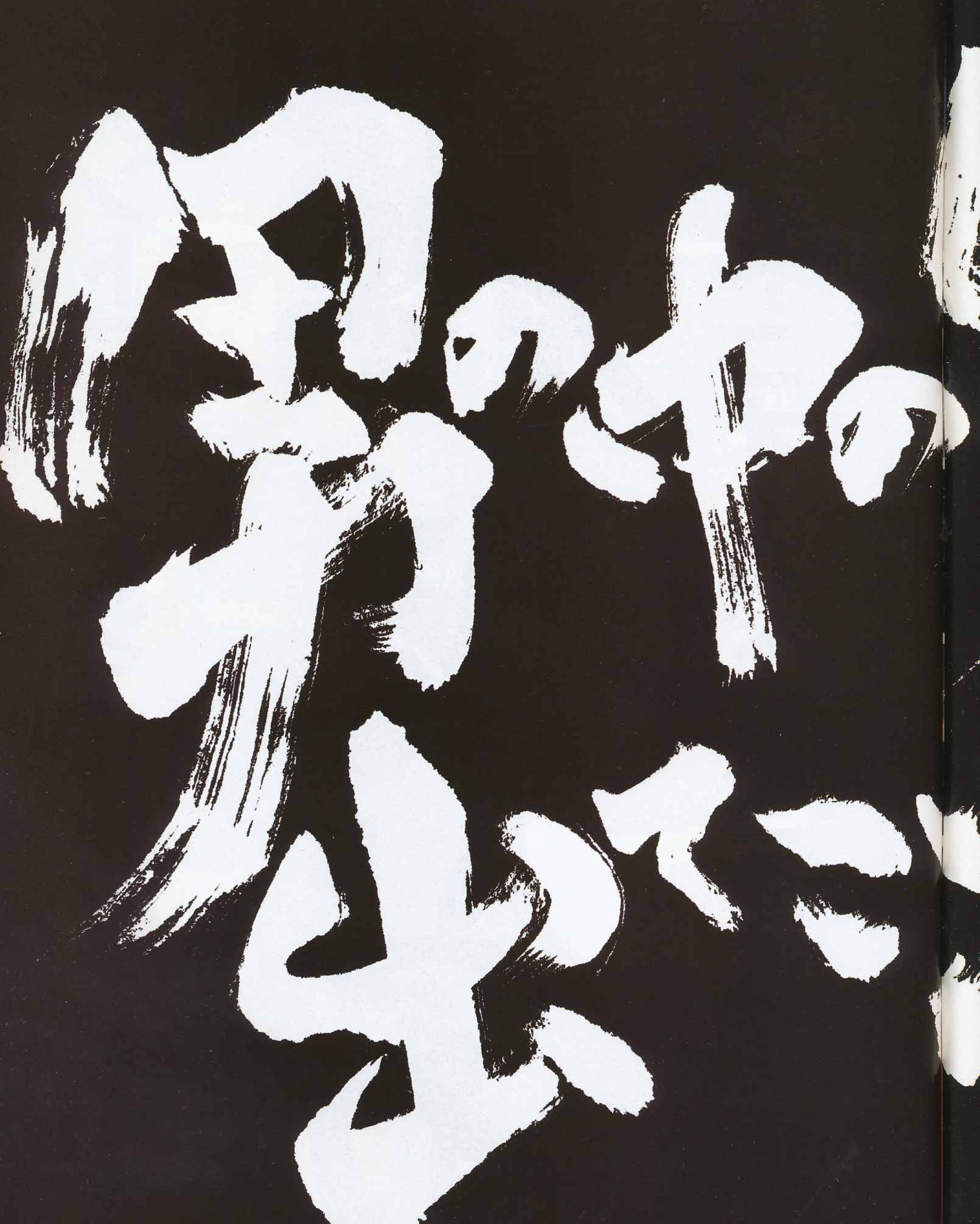






取材協力／（株）ドリームステージエンターテインメント、高田道場、吉本興業（株）、フジテレビジョン、ロシア・サンボ連盟、（有）ステイトリーズガーデン、クラタノフ、（株）マッドハウス


男たち、


風の中の

アントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ


褌兄弟（ふんどしきょうだい）

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ



いまやPRIDEマットでは“男”を象徴する
重要なアイテムとなった感がある、ふんどし暴れ太鼓。
これまでは大晦日、髙田本部長の独壇場であった
この男劇場にブラジルから2人の挑戦者が現れた!
ノゲイラ兄弟、お前らやっぱり男だ!

撮影/山口比佐夫　構成/堀江ガンツ、真下義之





褌兄弟






褌兄弟

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
ふんどしを語る

外国人格闘家としては初めてふんどし姿を披露し、名実ともに"男の中の男"の仲間入りを果たしたノゲイラ兄弟。最初こそ恥ずかしがっていたものの、いざ撮影が始まるとノリノリで男っぷりを見せつけてくれたノゲイラに、初ふんどしの感想を聞いてみました！

聞き手／堀江ガンツ

――というわけで、兄弟揃ってふんどし姿で特写させていただいたわけですけど、予想以上に似合いますね！

ノゲイラ ハハハ、そうかい？ でも、まさか自分がこの格好をするとは思わなかったなぁ。

――まさか自分が"タカダショーツ"を穿くことになるとは（笑）。※外国人ファイターのあいだでは、ふんどしは"タカダショーツ"と呼ばれているらしい。

ノゲイラ そうだね（笑）。

――最初に『男祭り』で髙田統括本部長のふんどし暴れ太鼓を見たとき、正直言ってどう思いましたか？

ノゲイラ あれを5万人の前でできるのは凄いなと思ったよ。彼こそ男の中の男だなと（笑）。

――「お前こそ、男だ！」と（笑）。

ノゲイラ だから今回の撮影も弟のホジェリオは最後まで「嫌だ」「恥ずかしい」って言ってゴネてたんだけど、「ミスター・タカダは5万人の前であの格好をしてるんだぞ。しかもその映像を何百万人もの人がテレビで観ているんだぞ。それなのに、なぜお前はこの少ない人数の前で雑誌のためにお尻を出せないんだ！」って説教したんだよ（笑）。

――我々に代わっての説得ありがとうございます（笑）。ノゲイラ選手自身は、初めて締めてみた、ふんどしの締め心地はいかがでしたか？

ノゲイラ 締めてるときはキツかったんで、気持ちよくなかったけど、外したときにおおいなるフリーダムを感じたよ（笑）。

――ダハハハハ！ 股間が解放された感じですか（笑）。

ノゲイラ そうだね。"モノ"が締めつけられてるわけだからね。

――ノゲイラ選手の場合、とくにキツかったんじゃないですか。なんせ"モノ"が無差別級チャンピオンクラスですからね（笑）。

ノゲイラ ハハハハハ！ たしかに最初締められたときは、折れるかと思ったよ（笑）。

――今回の撮影はブラジルから連れてきてたガールフレンドも現場に同席してましたけど、彼女たちの反応はいかがでしたか？

ノゲイラ 凄いジェラシーを感じてたよ。

――なんでジェラシーを感じるんですか？

ノゲイラ 「あなたの裸をそんな大勢の人に見せることはない。私だけに見せてくれればいいの」って言われたよ（笑）。

――そうですか（笑）。「似合う」とか「カッコいい」とかそういう反応はなかったんですか？

「この格好を5万人の前でするタカダは男の中の男だね（笑）」

ノゲイラ 「素敵だった」とは言ってくれたけど、凄く焼きもち焼きだから、試し撮りのポラロイド写真とか全部持っていっちゃったんだ（笑）。

――ちなみに、この写真は雑誌の表紙になって、日本全国の書店に出回るんですけど、どう思いますか？

ノゲイラ オーマイガー（笑）。やっぱりちょっと恥ずかしいなぁ。

――ちなみに男性と女性どっちに見てもらいたいですか？

ノゲイラ そんなのもちろん女の子だよ！ この撮影がきっかけで女性ファンが増えたら嬉しいね（笑）。

――これを機に、DSEから『PRIDE』のオープニングで「ふんどし暴れ太鼓」をやってほしいと言われたらどうしますか？

ノゲイラ それは条件次第だね。DSEからスペシャルボーナスが出るなら、考えてもいい（笑）。

――ノゲイラ兄弟でダブル暴れ太鼓をやってほしいなぁ（笑）。ちなみに、ふんどしというのは、日本では祭りにおける男の"正装"なんですけど、ブラジルではどんな格好をするんですか？

ノゲイラ ブラジルではリオのカーニバルとかで、女の子があいうお尻を出したり、ほとんど裸みたいな格好で踊るんだ。だから、もしブラジルで男があの格好をしたら、絶対にゲイだと思われるだろうね（笑）。

――そういう"合図"になってしまう（笑）。

ノゲイラ そう。たとえばミノワはビキニパンツで試合をするだろう？

――ああ、プロレス用のショートタイツですよね。

ノゲイラ あれでミノワはブラジルではゲイだと思われてるからね（笑）。

――ダハハハハ！ 美濃輪選手はブラジルではHGですか（笑）。では、次にもしまたスタジオ撮影の企画があったら、どんな格好をしてみたいですか？

ノゲイラ 次は日本のキモノやサムライの格好をしてみたいね。

――お～、それはいいですね。

ノゲイラ それか裸がよければ、日本の温泉に行くのもいい（笑）。

――温泉ですか。じゃあ、次の企画は「アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラのぶらり途中下車の旅」ということで（笑）。

ノゲイラ 今回で吹っ切れたから、次はタオル一枚とかでも大丈夫だよ（笑）。■

ダショーツ"とは何か!



アントニオ・ホドリゴ
×ノゲイラ

聞き手/堀江ガンツ　撮影/山口比佐夫

ふんどし頂上対談“タカ



高田延彦×

PRIDE統括本部長

――今日は『PRIDE』の〝象徴〟であるお二人に、〝男の象徴〟であるふんどしについて、おおいに語り合っていただきたいと思います！

髙田　ちょっと待ってよ。私は象徴じゃないから。『PRIDE』の象徴は彼らトップファイターだよ。

ノゲイラ　でも、タカダさんのあの格好は、世界中の格闘技ファンに有名ですよ（笑）。

――そうですよ。だから、今日は「ふんどし伝承対談」というか（笑）。

髙田　どんな対談だよ！（笑）。

――なんでも外国人ファイターのあいだでは、ふんどしのことを『タカダショーツ』って呼んでるらしいですよ（笑）。

髙田　ウソ!?　タカダショーツ？

ノゲイラ　はい。みんな『タカダショーツ』って呼んでます（笑）。

――いまや日本の文化に髙田さんの名前がついちゃってるんですよ（笑）。

髙田　複雑な気持ちだなぁ（笑）。じゃあ、いつも付けてないといけないじゃない。

ノゲイラ　今日、初めて締めてみたんですけど、かなり大変ですね。

髙田　でも、ミノタウロはふんどしのこと知ってたの？　下着だってわかってる？

ノゲイラ　よくは知らなかったです。どんな意味があるとかはわからないんですけど、一応スモウのときに締めているのは見たことあります。

髙田　なるほどね。相撲のマワシと同じように見えるんだね。

――（ノゲイラ兄弟のふんどし写真を見せながら）髙田さんから見て、このノゲイラのふんどしの締めっぷりはいかがですか？

髙田　いや、締めっぷりの前にまずホントに（ノゲイラとホジェリオが）どっちかわかんないよ（笑）。



外国人ファイターたちはこの〝ふんどし〟を〝タカダショーツ〟って呼んでるんですよ（笑）

複雑な気持ちだなぁ（笑）いつかノゲイラが引退したら、二代目として太鼓叩いてもらうかな

ノゲイラ　最近はなくなりましたけど、子どもの頃はよく母にも間違えられましたよ（笑）。

――では、髙田さん、どっちがミノタウロだか当ててみてください（笑）。

髙田　やっぱり大きいほうがミノタウロかな？　こっちでしょ！（と指を差す）。

――大正解です！（笑）。

ノゲイラ　確かにちょっと私のほうが大きいですね。

髙田　やっぱり、いまはヘビーとミドルに分かれてるからね。体重はどれぐらい違うの？

ノゲイラ　10キロぐらいですね。

――今日の撮影はホジェリオが恥ずかしがって、なかなかやってくれなかったんですよ。でも、兄弟二人でということでやってくれましたね。

髙田　この人数の前でやるのが恥ずかしかったらまだまだだよ（笑）。

ノゲイラ　だからホジェリオにも言ったんですよ。「タカダサンは5万人の前でお尻を出してるんだぞ」って。

髙田　そんな憐れまないでよ！（笑）。

ノゲイラ　しかも日本中の人がテレビで観ているわけですからね。でも、太鼓を叩いている姿が素晴らしくて驚きましたよ。

髙田　そうだった？　ありがとう。少しでもイベントを盛り上げる役に立てればと思ってやってるからね。本当にあの大切な空気感を壊さないように心がけてるよ。

ノゲイラ　ちょうど先日サカキバラ社長とも話したんですけれども、『PRIDE』では各選手のいろんな物語を映像で紹介するのがとてもうまいですよね。それが、たとえばアメリカではそういうことはなくて、ただ選手を紹介するだけで終わりなんですよ。

髙田　やっぱり『PRIDE』の目指すところっていうのは、コアなファンはもちろん大切にするけど、その周りにいるビギナーにもっともっと『PRIDE』に目を向けてもらいたいっていうのがあるからね。だから初めて『PRIDE』を観にきた人にも、たった一分間のVTRで、選手一人一人の生き様が凝縮して伝わるように心がけているんだよ。たとえばミノタウロはどういう人なのか、ヴァンダレイ・シウバはどういう人なのかっていうのがわかるようにね。

ノゲイラ　それはとても大事だと思います。私たちのファイトだけではなく人間性の部分とかも紹介してくれるのはとても嬉しいですね。

髙田　たとえば昨日（2・26『PRIDE・31』）のノゲイラのVTRもそうなんだけど、（ヘビー級の）「二番手」っていうところに思いを置いている。その「二番手」の重要性というか……テーマみたいなものが「あなたは二番じゃないか」っていうネガティブな表現じゃなくて、彼がいま二番に置かれている状況の重さとか、それから一番であるヒョードルへの距離感みたいなものが物凄くピュアに観客に伝わるようにできてたよね。凄くわかりやすく感情移入しやすくなる。

――そうですね。「ここまで強いヤツが二番手？」っていうような。

ノゲイラ　私もよくは見ていないんですけれども、入場のオープニングセレモニーのときに太陽を意識した紹介もありましたよね。

――そうですね。「太陽は沈んだままじゃなくて必ず昇る」っていう。

髙田　その可能性は充分あるということ



男の中の男たち、出てこいやーッ!!

を、昨日の試合で見せつけたよね。技術もそうだけど、肉体からして今年のノゲイラは違うぞ、と。

ノゲイラ　そうですね。無差別級GPに向けて6キロ増やして、いまは108キロあるんですよ。

髙田　どうやって大きくしたの？　あれだけ激しい練習してたら、なかなか体重は増えないでしょ？

ノゲイラ　そうですね。食事のほうも気をつけながらフィジカルトレーニングとかもしっかりやってきたんですよ。それから前は一日に4回食事を摂ってたんですけど最近は6回ぐらい摂ってますね。

髙田　それだけでも大変な作業だね。ファイターにとっては食べることもトレーニングだから。

ノゲイラ　その通りですね。

髙田　昨日放送席からミノタウロが入場してくるのを見たけど、凄くこう……なんていうのかな、強烈ないい色のオーラが出てたよ。

ノゲイラ　確かに久々の試合だったのでかなり気合いも入ってましたね。

髙田　オーラってのは出そうとして出るものじゃないからね。自然と湧き上がってきて、人々に発信するわけで。それが強烈に出てた。

ノゲイラ　自分の全エネルギーを試合に集中してましたからね。やはりタカダサンも試合に出ていたのでご存じだと思うんですけど、そういうのも凄く感じるわけですか？

髙田　うん、感じるね。同じ人を見ても「出てないな」と思うときもあれば、強烈に出てるときもあるし。

ノゲイラ　そうですね。同じ選手でも全然集中してないときとかは何も出てなかったりしますからね。

——最近は髙田さんも太鼓を叩いてるときはオーラが出てましたね（笑）。

髙田　なんで太鼓の話なんだよ。いまいい話してるんだから！

——ガハハハハハ！

髙田　無理矢理、話を太鼓に持っていくんじゃないよ！（笑）。

ノゲイラ　でも実際、タカダさんが太鼓を叩いてるときはオーラが出てると思いますよ。みんな「凄いなぁ」と思って見てますから。

髙田　まあ私なりに緊張感を持ってやってるからね。いつか引退したらミノタウロも太鼓打ってもらおうか。

——二代目として（笑）。

ノゲイラ　じゃあ、そのときは教えてください（笑）。ふんどしに関しては、今回締め方がだいたいわかったんで、自分でやれると思うんですけれども、太鼓はやっぱり自分一人ではできないのでぜひお願いします。

髙田　うん、そのときはしっかり私が指導しますよ。でも、その前にミノタウロには、『PRIDE』のトップファイターとして、まだまだ活躍してもらわないとね。

ノゲイラ　はい。GPで優勝できるように頑張ります。

——じゃあ、ふんどし暴れ太鼓の二代目への継承が決まったところで、今日はお開きにいたしましょう。


髙田　もう終わり？　もっと真面目ないい話しようと思ってたのに、ふんどしの話しかしてないじゃない（笑）。

——それはまた次回ということで（笑）。それでは、撮影お願いしま～す！

【06年2月27日／都内・某スタジオにて収録】

髙田統括本部長スタイリスト／水口卓磨　衣装協力／theory 03-5766-5271　ノゲイラ兄弟ふんどしスタイリスト／小松伸太郎


オマエハモウ、シンデイル！
PRIDE
“世紀末”ギャラリー
グラフィック／JERRY LUV (ANTONIO DESIGN SERVICE)


PRIDE
B-TOUGH

ヴァンダレイ・シウバ×インリン・オブ・ジョイトイ

“二人は同級生”対談



同じ年にブラジルに生まれたヴァンダレイ・シウバ、台湾に生まれたインリン・オブ・ジョイトイ。そんな二人がここ日本で初対面。活躍の場は違えども観客を前に「魅せる」職業を選んだ両者が日本、エロス、表現すること……を語り合うほのぼの同級生対談実現！

聞き手／ジャン斉藤、真下義之　撮影／松本崇



好きな店は……ドン・キホーテかな？――シウバ
私もドンキにはよく行きます！（笑）――インリン

インリン　シウバさん、初めまして!!

シウバ　（ニッコリ日本語で）ゲンキ!?

インリン　はい。元気です（笑）。

シウバ　俺もゲンキです!!

――シウバさんはインリンさんのことを前からご存知なんですか？

シウバ　もちろんだよ！　テレビで彼女を観たことがあるし、先ほども素晴らしい写真集を見させていただきました（と言いながら、ちゃっかりインリンさんの肩に手を回すシウバ）。

――いきなりボディタッチですか（笑）。

インリン　ウフフフフ（笑）。

シウバ　（インリン写真集のページをめくりながら）しっかし、インリンさんは写真写りが素晴らしいですねえ。キレイな人でも写真写りが良くなかったりする場合があるけど、インリンさんはとてもキレイだよ～。

インリン　ありがとうございます（ニッコリ）。

シウバ　たしかインリンさんは『ハッスル』のリングにも上がってるでしょ？　いろいろ活躍されてるんですね！

インリン　いや、じつはインリン様とわたしはまったくの別人なんです。親しい友人なんですけどね。

シウバ　え？　別人なんですか？　それにしても、似てますよねえ……（インリンさんの顔をマジマジと見つめて）。

インリン　よく間違われるんですけども（笑）。インリン様の試合はいかがでしたか？

シウバ　最高だったよ！『ハッスル』の映像は何度か観る機会があったんだけど、HGとかいうプロレスラーもおもしろかった。

インリン　あら、HGさんのファンなんですか（笑）。

――こちらで『ハッスル・マニア』の映像を用意いたしましたので、ちょっと鑑賞しましょうか。

【映像スタート。HGがリング上で腰をカクカク動かすシーンが流れ出すと……】

シウバ　（画面上を指差して）あ、HGだ！　ガハハハハハハハハハハハハハハ!!

インリン　（シウバの爆笑姿を見て）そんなにHGさんがおもしろいんですか？（笑）。

シウバ　ガハハハハ！　は、腹がよじれるぅ……ヒ～ィッヒッヒッ！（どうにも笑いが止まらないシウバ）。

――シウバさん、笑いすぎて涙が出てますよ（笑）。

シウバ　（涙を拭きながら）……い、いやあ～、HGはとにかく最高だな！　あの腰つきがなんとも……ガハハハハ！

インリン　インリン様の応援もしてくださいよ（笑）。

シウバ　インリン様も負けてないよ！　彼女も大変、素晴らしいプロレスラーです。

インリン　インリン様によくお伝えしておきます（笑）。

シウバ　（インリン様は）この試合で何戦目だったのかな？

インリン　たしか3回目ですかね。

シウバ　たったの3回目!?　いやあ、ベテランファイターと見まがう動きですね。逆に聞きたい。『PRIDE』での俺の試合はいかがでしたか？

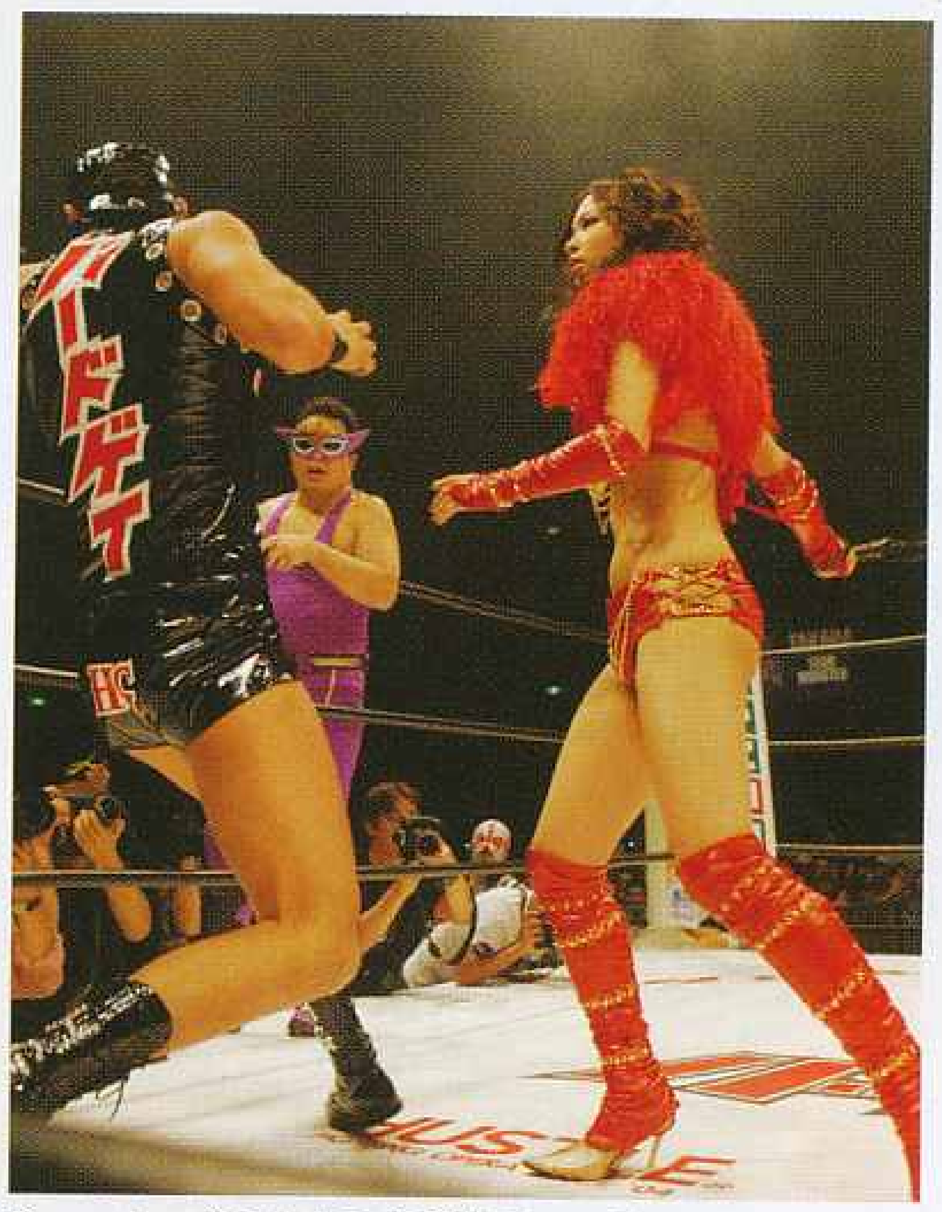
インリン　大晦日の『PRIDE男祭り』を観戦させていただいたんですが、シウバさんの入場からずっと声を張って応援してました。

シウバ　ホント？　それは嬉しいな！

インリン　じつはわたし、『PRIDE』はルールを含めてそんなに詳しいわけじゃないんです。でも、シウバさんはパッと見、「応援しなきゃ!!」と思わせるオーラを持っていますよね。

シウバ　ありがとう!!　いやあ～、とても嬉しいよ！

インリン　でも、プライベートのシウバさんは、試合とは違った雰囲気をお持ちですよね。



シュート・ボクセ内でも話題らしい『ハッスル・マニア2005』。シウバは（インリンさんとは別人の）インリン様の勇姿に感心しきりだったが、HGもお気に入りの様子。高速の腰振り芸に腹をかかえて大爆笑。

シウバ　じつはそうなんですよ。普段からリングへ立つときのような殺気立つ雰囲気を期待されるけど、試合をしてないときはいたって普通なんです。

インリン　シウバさんが"シウバシウバ"する瞬間があるということですか？

シウバ　リングに立った瞬間にそうなりますね。リングを降りた俺には、どんな印象がありますか？

インリン　笑顔がステキで、凄く優しい方ですね。それに……。

シウバ　（猛烈にさえぎって）いや、インリンさん！　貴方はまだまだ俺のことはよく知らないはずです（真剣なまなざしでインリンさんを見つめて）。

インリン　は、はい（笑）。

シウバ　これからよ～くわかり合いましょう！　ガーッハッハッ！

――やっぱりブラジル人男性は情熱的ですねぇ!!

シウバ　（無視して）ところで、失礼ですが、インリンさんはおいくつになるんですか？

インリン　28歳です。

シウバ　あ、俺と同い年だね。でもインリンさんは俺より全然、若く見える！

インリン　フフフ。それは喜んでいいんですか？（笑）。

シウバ　もちろんです（笑）。俺が思うに、28歳という年齢は、"表現者"にとってベストな年齢じゃないかな。意思や動機をしっかり持って仕事に取り組んできたことが、いい方向に転がる年齢というか。インリンさんは仕事に対して、何かテーマはあるんですか？

インリン　そうですね。わたしには"エロテロリスト"というキャッチフレーズが付いているんですが、そのコンセプトをひと言で言うと、エロスによる世界平和なんです。

シウバ　エロスによる世界平和？

インリン　はい。インリン・オブ・ジョイトイの"ジョイトイ"というのは、反戦と平和と女性の自立を訴えるテーマが込められていて、写真を通じて皆さんにメッセージを発信していくということなんです。

シウバ　エロスという部分は誰もが持っているものだけど、そんなテーマがあるうえで写真を撮っているのは本当に素晴ら



ガハハ！　HGはホントに最高だよな！——シウバ

え〜、インリン様も応援してくださいよ！——インリン

しいことだと思う。俺にエロスを感じるところはありますか?

インリン　う〜ん、リング上でのエロスと、普段のエロスとではまた違っていますよね。

シウバ　じゃあ、いまはどうかな?

インリン　リングに上がるときは、肉体的なエロスが凄く伝わってくるんですけど、普段は、内面から出てくるセクシーさっていうのを凄く感じますね。

シウバ　俺もインリンさんに対して同じようなことを感じるよ。表現者にとって一番大事なのは、真実は一面的じゃないということだと思うのです。リング上の姿に真の部分があるし、いまの俺の姿も真実。まったく違う姿でありながら、どちらの真実にも影響を与えているんじゃないと思う。

インリン　それはわかりますね。インリン様の中にも、彼女が抱く憧れの女性像があるからこそ、リング上で自分の中で潜んでるものが出せていると思うんですよ。

シウバ　俺もそれは理解できるよ。どちらかというと、男性より女性のほうが暴力的な部分はあるのかもしれないし、普段の生活でそういう部分は出せないけど、リングだとそういう部分を出せる。インリンさんは自分を表現するということには、どういう関心があるの?

インリン　もともとグラビア撮影がメインのお仕事だったので、写真を撮られるということは、もう一人の強い自分をつくる部分があったんですけど、それは静止してポーズで自分を表現するということだったんですよ。だからインリン様みたいに、身体を動かして、大きな声を発したりすることはまだないんですけど。

シウバ　リングで表現するということは、かなり大変だと思うよ〜。技を覚えたりもしなきゃいけないし、プロレスはレベルの高いエンターテインメントだからね。

インリン　そうでしょうね。さすがのインリン様にもプレッシャーはあったと思います。

シウバ　こないだはHGに負けちゃったけど、機会があれば、俺がHGに勝つ技を教えてあげるよ（笑）。

インリン　わ〜、ぜひインリン様にお伝えしておきます（笑）。

——インリン様とヴァンダレイの合同練習は見てみたいですね（笑）。ところでシウバさん。

シウバ　ハイ（日本語で）。

——インリンさんは台湾の方なので、お二人とも日本で活躍している外国人になるんですよ。

シウバ　インリンさんは台湾出身。じゃあ中国語を話すのかい?

インリン　北京語ですね。

シウバ　（即座に）ニーハオ!

インリン　あら、お上手ですね（笑）。

シウバ　フフフ!　じつは北京に行ったことがあるんだよ。北京には俺の大親友がいるから。もちろん、日本にも何回も来てるから、日本人の友だちもいっぱいいるけどね。

インリン　シウバさんの日本の好きなところってなんですか?

シウバ　そうだねえ〜。日本の国民性がとても好きだよ。遅刻をしなかったり、整理整頓がしっかりしてたり。最近は数多くのブラジル人が日本に住んでるけど、みんなに平等にチャンスを与えるというところも凄くいいと思う。

インリン　わたしは10歳の頃から日本に住んでるんですけど、人の気持ちを考えながら発言したりとか、一歩下がって謙虚な気持ちになったりするようなところが好き。逆に自己主張が少ないから、たまに困惑する部分もありますけど。

シウバ　俺は日本のあまり好きじゃないところが二つある。梅干しと納豆が大嫌いだ（笑）。

インリン　あ!　わたしも納豆はダメ。

シウバ　（うなずきながら）やっぱりそうだよねえ。納豆のどういうところがイヤ?

インリン　やっぱり匂いがキツイですね〜。納豆はお父さんがよく食べていたから、家が納豆臭かったんですよ（笑）。

シウバ　……それは本当に最悪だねえ。想像しただけでも気持ち悪くなってくる（顔をしかめながら）。

インリン　梅干しは大丈夫なんですけどね。

シウバ　え?　あんな酸っぱいものを食べられるんですか?

インリン　はい（笑）。台湾では梅干しを干したものをずっと食べてたんで。



昨年末の『PRIDE男祭り』にてヒカルド・アローナへのリベンジを果たしたシウバの勇姿。インリンさんはこの日がPRIDE初観戦！　シウバにも熱視線を送っていたことを本人に告白すると満足げな笑顔を浮かべた絶対王者だった。





日本のイヤなところ？　納豆と梅干しだよ！——シウバ
お父さんが納豆好きで、家が納豆臭くて（笑）——インリン

シウバ　う〜ん、俺はちょっと口にしただけだったけどダメだったよ。

インリン　たしかシウバさんは、うどんが大好きなんですよね。

シウバ　『はなまるうどん』の特別メニューにもなった〝シウバうどん〟（エビ3本入りうどん）が大好きです！　俺は『はなまるうどん』から一生無料券をもらったから、機会があれば〝シウバうどん〟をご馳走します（笑）。

インリン　へ〜、一生無料券って凄いですね（笑）。

シウバ　インリンさんは、うどんは好きなの？

インリン　わたしは同じ麺類の豚骨ラーメンが大好きなんですよ。

シウバ　ああ、そう……ア〜〜ァ！（突然、大あくびをするシウバ）。すいません。まだ時差ボケが残っているんです。

インリン　日本に着かれたばかりなんですか？

シウバ　それで昨日は夜中に起きてしまって、六本木のドン・キホーテに行って朝の6時まで時間を潰してました。

インリン　わたしもドン・キホーテはよく行くんですよ。いま家で使ってる電気毛布はドン・キホーテで買ったんです（笑）。

シウバ　俺はこないだ小さいフライパンを買ったんだけど、今回は大きいフライパンを買ったんだ。靴下も買ったし、（ジーンズをちょっとずり降ろして）このパンツもドンキで買ったんだよ！

インリン　アハハハ！　ドンキはなんでも置いてありますからね。

シウバ　ブラジル進出してほしいぐらいだよ（笑）。インリンさんはブラジルに行かれたことはありますか？

インリン　ないですけど、ブラジルの女性

ところで
インリン様の
次の試合の予定は？
——シウバ

インリン様は
〝普通の女の子〟
に戻ったんです
——インリン



ヴァンダレイ・シウバ■ブラジル・クリチーバ出身のブラジル人。初代PRIDEミドル級王者。『PRIDE GP2003ミドル級トーナメント』を制するなど“PRIDE絶対王者”として長きにわたって君臨する。05年の『PRIDE GP2005ミドル級トーナメント』ではヒカルド・アローナに敗北を喫するものの、05年末の『PRIDE男祭り』での再戦にて見事にリベンジに成功。今年開催される「無差別級トーナメントGP」にもミドル級を代表しての参加が期待される。

インリン・オブ・ジョイトイ■台湾生まれの台湾人。10歳より日本で生活する。B型。スリーサイズはB86（Eカップ）／W59／H86。95年、ヒラオカノフスキー・クラタチェンコのマルチメディアユニットJOYTOYにモデル兼ヴォーカリストとして参加、いまに至る。JOYTOYの最新アルバム『愛ゎまぼろし』、シングル『堕落のバーシニャ』（ビクターエンタテインメント）が好評発売中。最新写真集『МИРのM』が4月下旬に発売。
公式HP　http://www.mostsexy.net/

ヴァンダレイ・シウバ×インリン・オブ・ジョイトイ

には凄くセクシーなイメージがありますね。

シウバ　ブラジルの男性はどう思う？

インリン　う～ん、ちょっとわからないですね。いままでブラジルの男性とお話ししたことはなかったんで。

シウバ　ん？　俺はブラジルの男性だよ！（笑）。

インリン　アハハハ！　そうでしたね。ブラジルの男性も女性と同じで、ワイルドでセクシーなイメージはあるんですよ。だからちょっと近寄りがたい感じはあるんですけど、実際にシウバさんとお話しをして、凄く親しみやすい感じになったので、いままでと印象が変わりましたね。

シウバ　一度、ブラジルに遊びに来てください。もっともっとブラジルの印象が変わると思いますよ。

――ブラジルにはシウバさんの豪邸があるんですよね。

インリン　へえ～。そんなに大きい豪邸なんですか？

シウバ　家自体も大きいけど、庭もたくさんあるんですよ。まあ、ブラジルは日本に比べると物価が安いから。

インリン　でも、そこにいたるまでは凄く苦労されたんですよね。

シウバ　かなりハードな道のりだったよ。あまり恵まれてない家庭だったから、そういう面でも大変だったんだけど、いまでは俺が両親のサポートをしてるよ。インリンさんはどんな家庭で育ったの？

インリン　じつは凄く厳しい家庭に育ったんですよ。お父さんがカメラマンで、小さい頃から写真を撮られることは好きだったんですけど、家が厳しかったんでミニスカートとかも穿けなくて。

シウバ　え？　それは意外なエピソードだねえ。

インリン　だから、いまわたしは凄く露出の高い写真を撮ってるんですけども、それを許してもらうまではかなり時間がかかりましたね。



和気あいあいな現場となった同級生対談。とくにシウバはインリンさんに会えて超上機嫌！　同席したニンジャがはやしててる中、フォトセッションにもノリノリでリクエストに応えくれた両者。謝謝！＆オブリガード！

シウバ　俺もファイターになることを、両親からは大反対されたよ。周りの人間がかなりのサポートをしてくれて、やっと両親も折れてくれたけどね。だから夢をあきらめないことが大事だと思う。最近はファンの声援がもっともいいモチベーションになっているよ。

インリン　あ、それはわたしも同じです。ファンの皆さんがいるからこそ頑張れるんですよね。最近、とくにそういう気持ちが強くなりました。それにしてもシウバさんのファンは凄いですね。わたし、会場に行って驚いたんですけど、す～ごく熱狂的で声援で。

シウバ　インリンさんからも熱狂的な応援を期待してます（笑）。

インリン　はい。次の試合も応援させてください！

シウバ　俺も応援するよ！　インリン様の試合はいつ？

インリン　じつはインリン様は〝普通の女の子〟に戻ったんですよ。

シウバ　え？　引退しちゃったの？　それは残念だなあ～。

インリン　いや、12月に卵を産んだことが……って、理解してくださるかわからないですけどぉ（笑）。インリン様はちょっとお休みしてるんですよ。

シウバ　じゃあ休養期間を使ってリフレッシュするように伝えてください。

インリン　はい。お伝えしておきます！

シウバ　栄養ドリンクを飲んで、あとはトレーニングをしっかりすることですね。筋肉トレーニングはやってますか？

インリン　わたしはほとんどしてないです。インリン様もやってないみたいですけど。

シウバ　筋トレは絶対にやりなさい!!　俺のように強くなるから！

インリン　アハハハ！　ムキムキにならない程度に頑張ります（笑）。今日はありがとうございました！

シウバ　ドウモアリガト～!!（HGのように腰をカクカクさせて）。

【06年2月25日／某ホテルにて収録】

その後の二人TOPICS

インリン・オブ・ジョイトイ

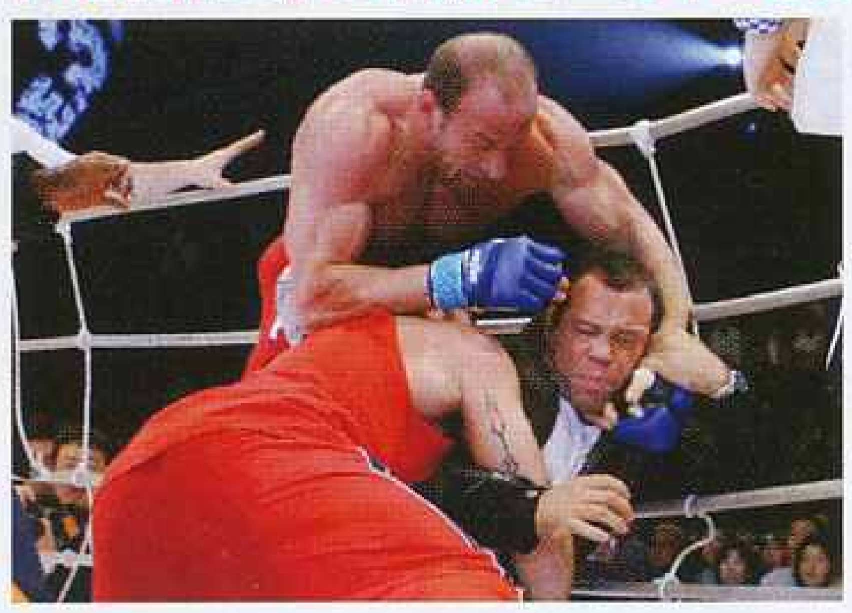
セクシーミリタリールックで新宿・歌舞伎町を占拠！



インリン・オブ・ジョイトイが3月7日、ロシア映画『大統領のカウントダウン』（3月25日公開）のイベントにアーミールックで登場し、会場を悩殺。映画のイメージに合わせ、新宿・歌舞伎町に軍用車や軍人に扮装したロシア人が登場。インリンも「セクシーミリタリー」ルックを披露、エヴゲニー・ラヴレンチェフ監督の来日を"エロテロリスト"的に歓迎した。

ヴァンダレイ・シウバ

『PRIDE.31』にて、M・コールマンと大乱闘！



『PRIDE.31』のM・コールマンvsM・ショーグン戦がアクシデントのレフェリーストップでコールマン勝利となったが、コールマンの追撃に激高したチームメイトのシウバがリングインしてコールマンと大乱闘！「『やりたい』って言うんならやってやる」と息巻くコールマンとシウバとの因縁が勃発、「無差別級トーナメント」一回戦で激突か？



×HG

昨年末の『PRIDE男祭り』、いつもサービス精神溢れる桜庭和志の入場シーンだが、このときはなんと オレンジ色のHGコスチュームで登場！ 話題となったのは記憶に新しいところ。今回はHGコスプレ姿の桜庭と現在、ハッスルのエースとしても活躍中の本家、HGによる禁断の初遭遇が実現！ 日本が世界に誇る"IQレスラー"と"ハードゲイ"による夢対談をお届けします！

聞き手／坂井ノブ　撮影／山口比佐夫



セイセイセイと……

桜庭和志



日本が世界に誇る
〝IQレスラー〟と
〝ハードゲイ〟が
禁断の初遭遇!!

——お二人は今日が初対面ですか？

HG　初体験……いや、初対面ですねぇ。間近で見ると桜庭さんのハードゲイ・コスチュームは素晴らしいですねぇ。

桜庭　ありがとうございます（微笑）。

HG　じつはこの姿を見るの、今日が初めてなんですよ。

——えっ、そうだったんですか？

HG　『PRIDE男祭り』で桜庭さんがこの格好をしはるということで「了承を得たい」とお話をいただきまして、「もちろんOKですよ」と。僕としても「凄いな、桜庭さんがやってくれるんだ」と思ってたんです。大晦日は仕事があったんで、オンタイムでは観られなかったからビデオに録って観ようと思ってたんですよ。

——大晦日から元旦にかけてヘリコプター移動とかしてましたもんね。

HG　そうなんです。で、オンタイムで『男祭り』の中継を観てた芸人の先輩に「どうでした?」って聞いたら、「すぐ脱ぎ捨てたよ」ということだったんでショックを受けまして……。

——たしかに花道に登場して、わりとすぐに脱ぎましたよね。

桜庭　いや、へんな意味はないですよ（微笑）。

HG　「ひょっとして嫌々やらされてたのかなぁ」とか考え始めたらビデオを観るのが怖くなってしまいまして、ずっと観てなかったんですよ。今日はその真相をぜひ聞きたいと思ってやってまいりました（笑）。

桜庭　あればですね、ハードゲイの衣裳ってパーツが多いじゃないですか？　だから早いタイミングで脱ぎ始めれば、花道の真ん中あたりで脱ぎ終わるかなっていう読みだったんです。でも、あとで周りの人に聞いたら「ちょっと早過ぎるよ」って（笑）。ホントは花道の真ん中ぐらいで「フォー！」のポーズをやるはずだったんですけど、歩いていたらだんだんと試合のモードに入ってしまったので。

HG　ああ、なるほど。花道に出る前はいろいろポーズとか考えていたのが、いざ本番になったら試合モードに入ってしまった、と。べつに嫌々やらされていたというわけではないんですね。

桜庭　違います、違います（笑）。試合のことでいっぱいいっぱいになっちゃいまして。リングの上で一つずつパーツを外すのも格好悪いじゃないですか？

HG　たしかにそうですね。私も着替えるところはあまりお見せしたくないですからねぇ。羞恥心、フォ〜！

桜庭　その「フォ〜！」をどうやったらいいか研究しましたから（微笑）。じつは最初に「フォ〜！」を観たとき、なんだかわからなかったんですよ。ちょうど流行り始めた頃にずっとブラジルにいたんで、帰国したら子どもたちが「フォ〜！」「フォ〜！」って言ってるんで「なんなんだろう?」と思って。「フォ〜！って何?」って聞いちゃいました（笑）。

——まあ、説明するのは難しいですよね。凄く簡潔に言うと「ハードゲイだよ」ってことになるんでしょうけど（笑）。

HG　そう説明されても「ああ、ハードゲイね」って一瞬では理解できないでしょうからねぇ（笑）。

桜庭　たしかに「なんだろう?」って思いました。日本に帰ってきたのは去年の夏頃なんですけど。

HG　ちょうど私がテレビにバンバン登場し始めた頃じゃないですか。

桜庭　テレビ観たら一発でわかりました（笑）。ブラジルでも日本のテレビは放送してるんですけど、NHKだけなんです。

HG　ハードゲイ的にはNHKは未知の領域ですからねぇ。今後も出る可能性は限りなく低いです。

——桜庭さんがブラジルにいるあいだ、日本では子どもから大人まで「フォ〜！」が一大センセーションを巻き起こしていたんですが、最初の印象はいかがでしたか?

桜庭　いままでにない感じで、いいキャラクターしてるなぁと思いましたね。

桜庭さんのHG姿を楽しみにしてたら、先輩が「すぐ脱ぎ捨てたよ」って——HG

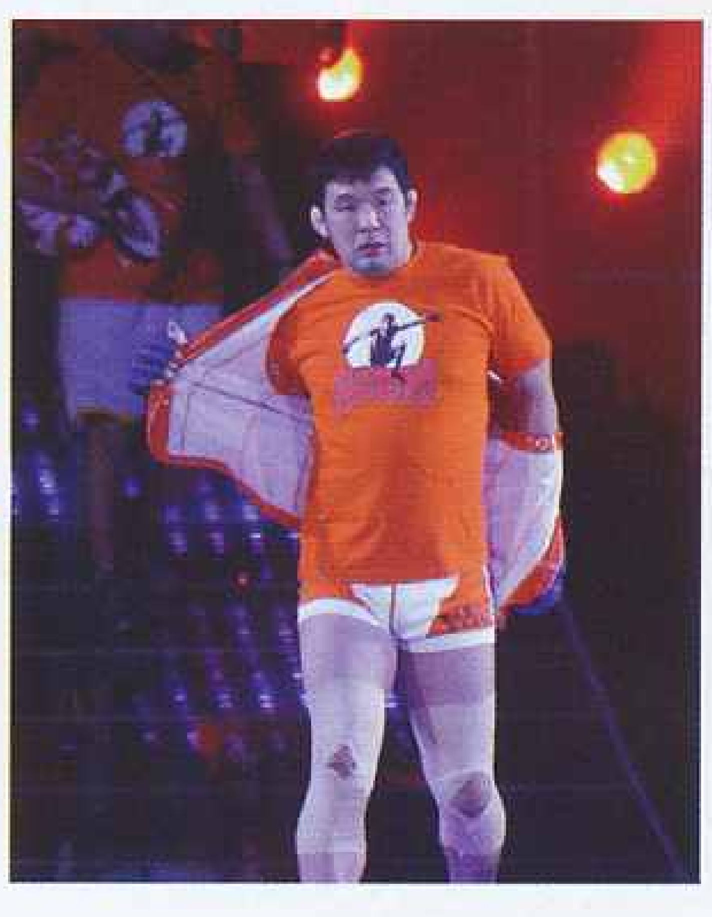
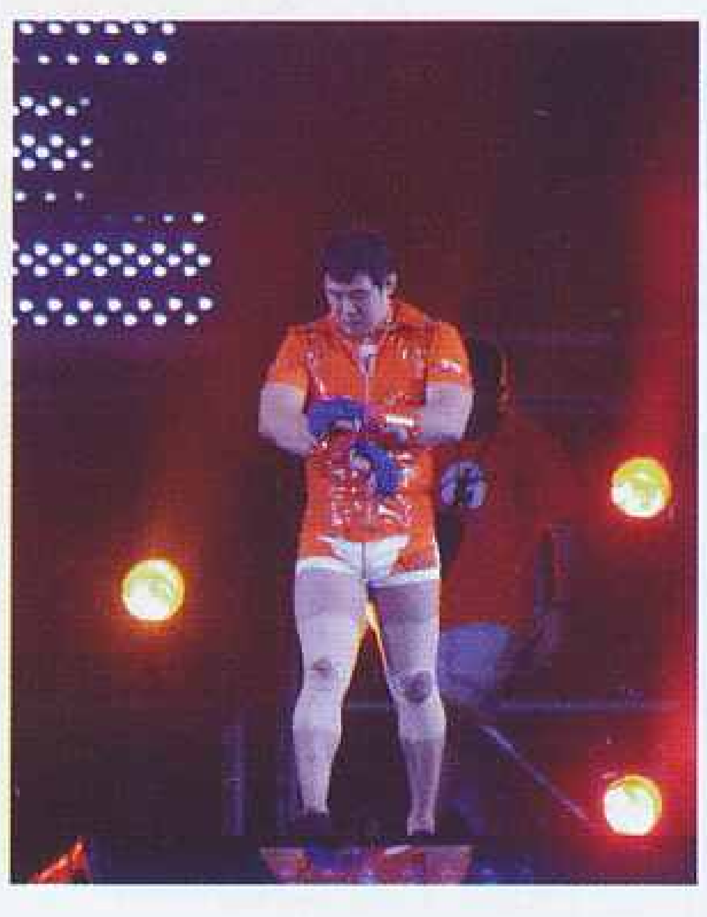
——ただ、小さいお子さんを持つ保護者の方々からは「教育上よろしくない」なんて声も一部で挙がってるんです。桜庭さんも小さいお子さんを持つ親でもありますよね。その点はいかがですか?

桜庭　僕はいいと思いますけどね。ただ、腰振りだけはちょっと（笑）。

——あ、腰振りはNG（笑）。

HG　セイセイセイ！　桜庭さん！　私から腰振りを取ったら何も残らないじゃないですか〜?

桜庭　いやいや、子どもはうまく腰振りをできないじゃないですか。せいぜい1〜


05年の大晦日、『PRIDE男祭り』のvs美濃輪育久戦の入場シーンで、オレンジカラーのHGコスプレで登場、会場からやんやの大声援を浴びた桜庭和志。だが実際に桜庭が完全なHGコスプレをしていたのは、エレベーターで降りている間くらいで、花道に歩を進め始めた途端、帽子とサングラス、腕バンド、そしてベストとあっと言う間にいつものTシャツ姿になってしまった。この速攻の脱ぎ捨て具合を見たら、確かにHGが不安になるのも無理はないかもしれない。


SAKU
RABA★


IC



2回しか振れないから、「この程度だったら、いいかな?」と思います（笑）。
HG　ありがとうございます（笑）。

——ところで、HGさんは桜庭さんの試合をご覧になったことは?

HG　ありますよ。去年、大阪ドームでやった『PRIDE　GP　2005開幕戦』はチケット買って観に行きました。世界中から集まったゴリゴリの男子がグラウンドで組んずほぐれつというハードゲイにはたまらん展開だったんですけど、場内は微妙な空気でしたねぇ。でも、そんな空気の中、桜庭さんはパンチで相手をKOして一番盛り上がってました。

桜庭　あんまり細かすぎる攻防になるとわかりづらいのかもしれないですね。

——桜庭さんはHGさんの試合を観たことは?

桜庭　動いてるところは観たことないですね。新聞紙上ではしょっちゅう見てるんですけど。

——桜庭さんがプロレスをやっていた頃から考えると、夢のような光景が繰り広げられているわけなんですけど。

桜庭　いいんじゃないですか。学生プロレスをやってたんですよね?

HG　そうでございます。

桜庭　僕、学生プロレスはけっこう観てましたから。おもしろいですよね。大学の文化祭りのときは野外にリングを置いて試合してるのを観てましたよ。

HG　ホントですか?

桜庭　おもしろいですからね。プロレス的な動きもうまいし。（HGの身体をなめまわすように見て唐突に）写真ではわからないんですけど、毛が少ないですよねぇ……。

HG　体毛ですか?（笑）。まあ、少ないようにも見えますけど、あそこの周りはボーボーですよ。ジャングル、フォ～!

桜庭　（マジマジと見ながら）テレビだときれいに見えるから処理してるのかなと思ってたんですけど、近くで見ると生えてますねぇ。

HG　まあ、長くなったらバリカンで刈る程度です。乾燥肌なんでヒザとかヒジにたまにクリームは塗りますけどね（笑）。しかし、そんなところまで観てくれてるんですね。

桜庭　僕はけっこう、毛深いんですけど。

HG　桜庭さんこそテレビで試合を観てるとツルツルのモチ肌なイメージがありますけどね。

桜庭　（太もも前部をさすりながら）このへんがちょっと気になるんですよね。

HG　ああ、なるほど。陰毛への滑走路の部分ですね。

桜庭　スパーリングとかしてると、太もも横は擦れて毛がなくなっちゃうんですけど。

HG　桜庭さんの毛は一本一本が細いからそんなに目立たないでしょう。相方のRGなんかひどいもんですよ。「それチ●毛か?」みたいなのが太ももまで生えてますからね。ヘソの周りは排水溝みたいになってるし。

桜庭　僕も昔、プロレスのショートタイツを穿いていたときはつながってるとモロに見えちゃうんで、剃ったりクリームで脱毛するヤツで処理してました（笑）。いまのスパッツは短パンみたいなかたちだからほったらかしですけど。

HG　オレンジ色のハードゲイ・コスチュームはご自分でつくったんですか?

桜庭　フジテレビの美術の方に作ってもらったんです。HGさんのもフジテレビで作ったんですか?

HG　いつも着てるのはドーベルマンという衣裳のスタッフに作ってもらってるんです。ただ、以前フジテレビの『めちゃイケ』に出たときに、HGの警官コスチュームを作ってもらったんですけど完成度高かったです。桜庭さんの衣裳も完成度高いですねぇ。

桜庭　入場のコスチュームなんでリストバンドとかは外しやすいようにマジックテープにしてもらいました。

HG　そんな細かい部分にまで気を遣ってたんですね（笑）。

——それでアメリカのWWEではHGの存在が知れ渡ってるらしいですが、じつはブラジルにもHGに注目している大物選手がいるらしいんですよ。

HG　そうなんですか?　ゴリゴリの男子ですか?

——もちろんです。あのヴァンダレイ・シウバが『ハッスル・マニア2005』の映像を見て、HGの大ファンになって「フォ～!」と腰を振ってるらしいんです（笑）。

HG　ホンマですか!?　嬉しいけど怖いですねぇ、それは（笑）。

桜庭　またシュートボクセに練習に行くので、シウバに聞いてみますよ。あそこの道場はリングがあるんで、リングに上がって「フォ～!」ってやったら、なんのことだかわかってくれますかね?（笑）。

HG　ブラジルって下ネタに関してはオープンなんですか。

桜庭　かなりオープンですね。HGのことも大好きなんじゃないですか（笑）。ちなみに、ブラジルでOKの合図は、こうやらないほうがいいみたいです。

HG　何か意味があるんですか?

桜庭　これは肛門の意味だから、このポーズで「OK」って言っちゃうと……。

HG　大変なことになってしまうわけですね（笑）。

桜庭　うっかりこのポーズをやってしまう



二人が仲良く出しているこのOKポーズは、ブラジルでは「肛門」を意味してしまう、かなり危険なOKのポーズ。HGには「バッチコーイ！」と同意だが、ブラジルのゴリゴリの男子諸君の前で「オッケ～！」とやるのはあまりにもリスキーかもしれない。

写真ではわからなかったけど、（HGは）毛が本当に少ないですよねぇ——桜庭

桜庭和志×HG





桜庭さん、ぜひ素顔でハッスル軍に入ってください～――HG

イヤ、ああいう場でしゃべるの苦手なんで……――桜庭

と、ニヤニヤしながら「ホントにOKなのか？」って聞いてきますからね（笑）。本気でとらえる人はいないですけどね。ブラジルでOKの合図は親指を立てるのが正しいみたいです。

HG　でも、私がこの格好でそのポーズをやったら、本気でとらえられそうですね。すぐに試合が始まってしまいますよ（笑）。

――いま、HGさんはハッスル軍のエースとして活躍されてるんですが、敵対している髙田モンスター軍のトップに君臨しているのが髙田総統という人なんです。髙田延彦PRIDE統括本部長のご友人なんですが、桜庭さんはお会いしたことは？

桜庭　会ったことはないですね。新聞では見たことありますけど。

HG　本部長とかなり似てますよね。別人で非常に仲がいいらしいですけど、総統の話は聞かないですか？

桜庭　聞かないですねぇ。とはいいながら、僕も総統と一緒にお店は出しているんですけど（笑）。

HG　ジンギスカン専門店『モンゴリアン・チョップ』を二人で出してるんですよね？　言ってみれば、共同経営者じゃないですか!?

桜庭　まあ、打ち合わせとかはあいだに人が立ってるんで、直接話したことはないです。

HG　ちょっと待ってください。あのお店の看板は総統と桜庭さんが一緒に描かれてるじゃないですか？　ということは、桜庭さんはモンスター軍ということですか？

桜庭　いやぁ……僕はモンスターではないので。

――僕はモンスターじゃない（笑）。

HG　たしかにね。モンスターじゃない桜庭さんにはぜひハッスル軍に加入して、いずれは試合をしていただきたいですねぇ。

桜庭　ひょっとしたら、マスクをかぶってハッスルで試合をやってるかもしれないですよ（ニヤリ）。

――「今日のモンスターはなんか強いなぁ」と思ったら桜庭さんだった、なんてことがあったら大ニュースになりますよ（笑）。

HG　そんなこと言わずに素顔のままでハッスル軍に入ってくださいよ（笑）。

桜庭　それは難しいですねぇ（笑）。普通にしゃべるのはいいんですけど、ああいう場所でしゃべるのが苦手なんで。ああいう場に行くと「あれ？　何を言えばいいんだっけ？」ってなっちゃいますから。言うことを覚えなきゃいけないとなるとムリですね。『ジャンクSPORTS』に出演したときも、何を言えばいいのかわからなくなっちゃいましたから。

HG　ああ、バラエティ番組でも「これだけは言ってくださいね」みたいな振りはありますからね。

桜庭　それを必死で覚えてるときに、別の人から別の話題を振られちゃうともう駄目ですね。

――桜庭さんのハッスル軍入りは難しいかもしれないですけど、今日こうして接点ができたので、これがなんらかの形に発展するといいですね。

HG　まあ、試合は無理としても夜の合同練習でマットプレイをお願いしますよ。二つの意味、フォ～！

――シュートボクセに出稽古とかどうですか？

桜庭　シウバも喜ぶんじゃないですかね。


HG　ハードゲイであると同時にハードMでもありますので、パウンドでも踏みつけでも……バッチこ～い！

【06年3月9日／水道橋・後楽園飯店にて収録】


さくらば・かずし　1969年7月17日、秋田県出身。高田道場所属。『PRIDE』戦績26戦19勝7敗。グレイシー一族との激闘など数々の名勝負を繰り広げ、日本格闘技界の寵児に。卓越した技術と精神力、オリジナリティあふれる闘いで世界を魅了。05年は単身ブラジルに渡り、ヴァンダレオ・シウバが所属するシュートボクセで苛酷なトレーニングを敢行した。

えいちじー　1975年12月18日、兵庫県出身。同志社大学で学生プロレスラーとして活躍後、「今宮こどもえびすマンザイ新人コンクール」福笑い大賞受賞。相方の出淵誠（RG）とレイザーラモンとして活動。特技はイラスト。身長185cm、体重85kgという立派な体格の持ち主。05年11月3日『ハッスル・マニア』でプロレスデビューを果たし、さらに世間を巻き込み大活躍中！



グラフィック／JERRY LUV (ANTONIO DESIGN SERVICE)



緊張と弛緩 PRIDEと笑い

特別寄稿／水道橋博士(浅草キッド)

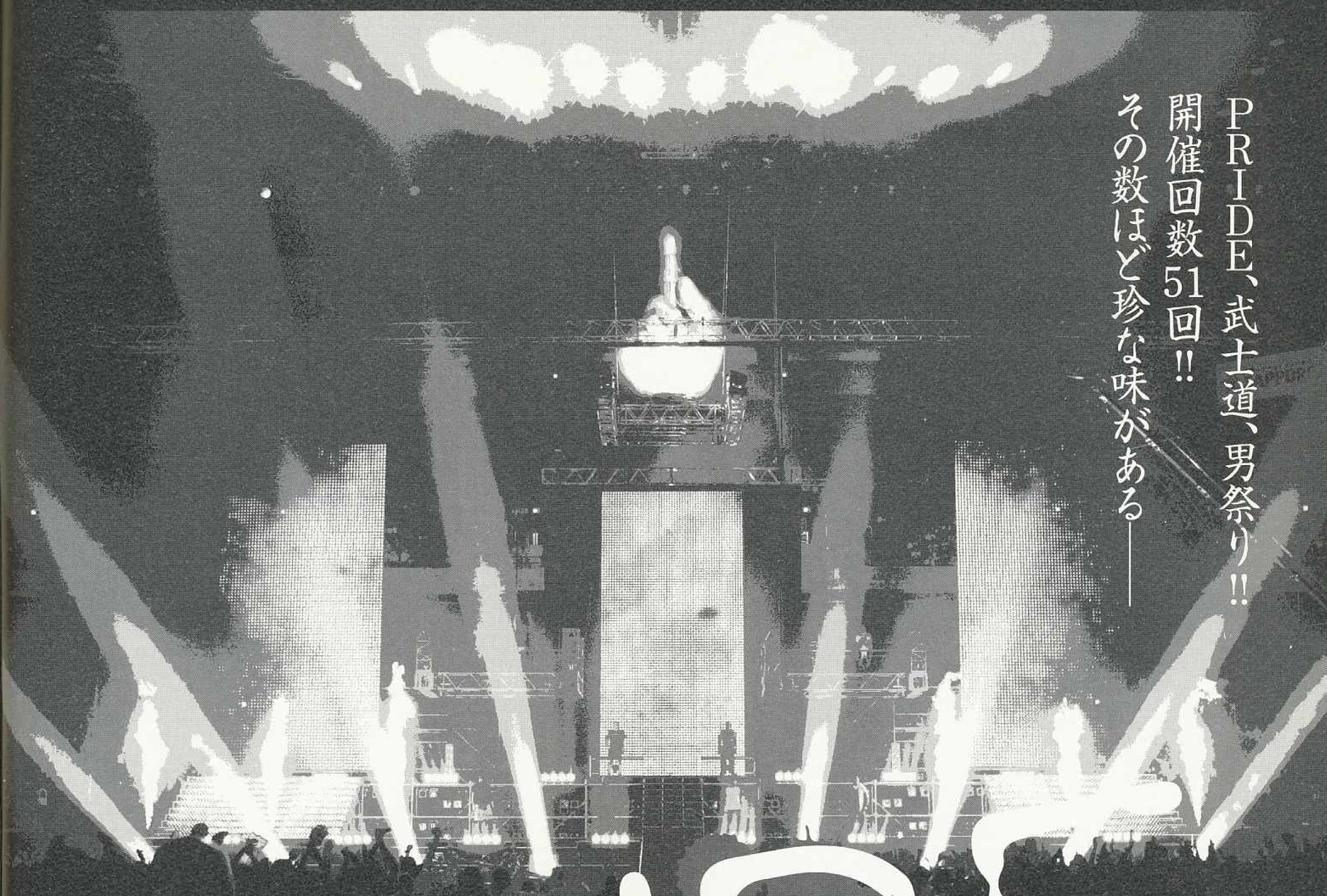
PRIDE――。
其処は世界中から選ばれし最強の男が裸で対峙する、現代の果し合いの場。
しかし、この場所で幾度となく、我々は予期せぬ「笑い」に不意を打たれ、過度に高まり過ぎる興奮を鎮めてきたことか。
「緊張」と「弛緩」。
「笑い」のメカニズムを解析する二つのキーワード。
その定説に拠ればPRIDEの会場こそ、「極度の緊張状態に笑いが生まれやすい」場所であることに説明を待たない。
もともと、笑いと格闘技の親和性は高い。
我々は、お笑いを、まるで〝闘い〟のように気高く見守る性質があるようだ。
例えば――。
80年代、漫才ブームの最中、掟破りの毒舌で世間を挑発、時代を切り開いたビートたけし。
単独ライブで武道館を借り切り、只一人、長い花道を歩いて誰一人共演者のいないステージへ向かい、「笑い」の威力を実証した松本人志。
フジテレビ27時間テレビの恒例企画『恋のカマ騒ぎ』で若手芸人相手にバーリ・トゥードとも言うべきエゲツないシュート試合を仕掛ける明石家さんま。
また文字通りK―1のもじりから生まれたはずでありながら、毎年、規模を拡大させパロディーに止まらない真剣勝負の場を作ったM―1。
その例は枚挙に暇がない。
まさに、そこにある「笑い」の持つ輪郭は、「格闘技」の持つ輪郭にこそ似てはいまいか？
そして今、PRIDEに現出した「笑い」の瞬間を思い返そう。
例えば昨年の大晦日――。
長き恩讐の彼方に実現した平成の巌流島の一戦。
小川直也 vs 吉田秀彦。
この試合が実現するまでの長い道のりと両陣営の睨み合いがもたらした至高の緊迫感のなか、宿敵・小川直也の足を折り、勝者となったのは吉田秀彦。
リングの上で敗者の小川の望んだ、「ハッスル！ ハッスル！」を「格闘家として戦っていきたいので引退したときにやります！」と勝負師としての威厳を持って拒んだ。
劇的な試合の後に突如訪れた、一つのギャグの是非を巡るイデオロギー闘争。
しかし、我々観客は、同時に田村潔司戦の試合後、吉田秀彦が決めた「ゲッツ!!」ポーズを思い返し、ささやかな微笑に包まれる。
それは吉田秀彦の変節を責めているわけではない。
むしろ君子豹変すべし。
整合性の無いトンデモ発言も、我々観客が望む、凡人に在らざる強者の正しい振る舞いなのである。
そして、この吉田秀彦の拒絶は、大晦日の大団円を、予定調和の無い、終わらない大河ドラマに変えせしめた。
思えばPRIDEは、その幕開けと共に、さまざまな、お笑い的記憶を我々、観客の脳裏に刻印している。
PRIDE・1、高田延彦vsヒクソンのメインカードの巨大看板の下にあった、ごった煮のカオス。
あの藤谷美和子が歌い、東京ドームに置かれた巨大恐竜の残像が、今も記憶の引き出しから蘇る。
そしてPRIDEの歴史で誰もが忘れがたいのは、PRIDE GP 2000の東京ドーム、桜庭和志伝説の〝サクマシン〟トレインの入場。
『スピード2』のテーマソングが流れるなか、マスクマンが3人に増殖した時、ドームのドヨメキと共に笑いは増殖され、その後、90分を超える激闘の果て、歴史的勝利の価値をさらに増殖させた。
記憶に新しいのは、今や祝祭の司祭であり、トリックスターの域にもある、高田延彦統括本部長の半裸の褌、暴れ太鼓。
お笑い界のハードゲイブームに遥か先んじて、この姿が「男」祭りに醸すメタファーは、祭りにいきり立つ男衆の興奮の勃起角の角度をさぞや高めたであろう。
以下、思いつくままに。
一連の猪木パフォーマンスの数々、西田操一ファールカップ忘れ事件、何故かGP2000で強豪16選手に選出された大刀光、ハイアンの入場曲に流れた小柳ゆき、山本宜久の魔性のDDT、中村カズvsハイアンの「闘え！」「イヤです」口論事件、ノゲイラ遅刻、オープニングセレモニーは弟が替え玉、ザ・たっち事件。ルーロン・ガードナー参戦挨拶で「カンバンワァ～」、格闘天然系・美濃輪の煽りVTRなどなど……。
脳内海馬に映写される数々の名シーンの記憶に、想い出し笑いを浮かべるとき、格闘技ファンとして幸福な気持ちに包まれる。
笑いは、殺伐とした戦いのリングを異化し、凶暴なる血の匂いを浄化する。
そして、我々の記憶に鮮やかな色合いを与

と闘いの戦慄は表裏一体だ。

える。
　そして、最近で最も印象深かった、PRIDE会場での笑いの異化作用は、西島洋介に尽きるだろう。
　2005年6月26日。
　鳴り物入りの記者会見でPRIDE転向を告げた往年の天才ボクサーは、リングに挨拶に上がったまま、立ち往生。数十秒の長き沈黙後、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべ「……頑張ります」の一言だけ。
　その姿は、時代に取り残された浦島太郎か、記憶をなくしたピアノマンを彷彿させ、その度が過ぎた寡黙振りは、あまりにコミカル過ぎた。
　そして、この日の嬌笑は事あるごとにファンに語り継がれた。
　それから8カ月。
　2006年2月26日、PRIDE・31のさいたまスーパーアリーナ。
　メインは、西島洋介vsマーク・ハント。
　煽りのVTRは、この天才ボクサーの10年の長き空白を語る。
　日本ボクシング史上初の世界に通用するヘビー級の逸材は、丸坊主、地下足袋姿で注目され、ブリーフのCMにまで起用されるほどのブームを現出するが、その過熱報道を嫌うかのように所属ジムを離脱し日本を脱出した。
　アメリカで連勝街道を経て、一度はWBFのチャンピオンには成り上がるも、その後は機会に恵まれず転落。
　日本でのプロライセンスも取り上げられ、妻に支えられた生活を余儀なくされる。そして一度も父の戦った姿を見たことが無い子供達……。
リングネームと同じく、「山」を失い「頂」に登れなかった無念の10年。
　そして、最後に「シンデレラマン」を映画の引用ではなく、それを史実として語ったエピソードは、この日のメインディッシュを賞味するのに実に見事な隠し味となった。
　いざ、迎えた決戦――。
　リングに上がった西島洋介、かつての地下足袋の装飾もない。
　試合開始のゴングと共に、元K-1王者、37キロ差のサモア人に怯むことなく果敢にパンチを当てていくが、ハントのローキック一発で体勢を崩され、ボクサーの弱点を露(あらわ)にさせる。
　寝かせれば体重差から身動きできぬ相手であることを悟ったハントは、その後も笑みを見せるほどの余裕のなかで試合を進める。
　それでも、よもやの一発を恐れハントのセコンドからはローキック、グランドの指示が頻繁に飛ぶ。
　このまま、セコンドの指示通りに試合を組みたてればハントの勝利は揺るぎ無かった。
　しかし、何時まで経っても心の折れない西島に、ハントの顔に驚愕と共に、西島への敬意が滲み出す。
　そして、いつしか、ハントはセコンドからの指示は一切無視を決め込む。
　姑息にローを打つこともなく、自ら顔を突き出し、西島とのど突き合いに敢えて望んでいく。
　それは、ファンにとっても、いつか見た光景、デジャブーでもあった。
　K-1 WORLD GP 2001 in 福岡大会。
　ハントvsセフォー、ノーガードの殴り合いに感極まった両者がリング上でキスを交じわす、あのシーンを彷彿させた。
　リングの上の戦士だけが知る、至高の境地の振る舞い。
　2R終了時ですらも、ハントは西島をコーナーに追い詰めたがフィニッシュブローを打たない。
　「この侍をリングの中央で美しく介錯したい」と言わんばかりに試合を続行するハント。
　ダメージを蓄積し続けながらも倒れない西島。
　そして、3R1分18秒決着。
　西島は敗北のゴングを聞いた。
　シンデレラマンの魔法は解けた。
　されど西島は10年の空白を埋め978秒の中に人生を凝縮させた。
　なにより、リングの上では雄弁であり続けた。
　そして、観客は想いを馳せる。
　あの日の沈黙が「振り」になっていたからこそ、この試合に鳥肌立つような戦慄を感じたに違いないのだ。
　それは「笑い」で言えば「オチ」だ。
　しかも、戦慄を感じるような「オチ」であるだろう。
　そう。笑いと闘いの戦慄は表裏一体だ。
　会場に、時ならぬ旋風のように「笑い」が吹き荒れた時、ゴングが鳴る。
　そして「闘い」は舞い降りる。
　その時、戦慄の予感に、我々、観客は選手と共に戦(おのの)く。

笑いと格闘技の親和性。笑い

笹原DSE広報局局長×佐伯DEEP代表兼DSE広報が語る



PRIDE、武士道、男祭り!!
開催回数51回!!
その数ほど珍な味がある——

PRIDE珍味物語

人それぞれに十人十色の個性があるように、『PRIDE』にだっていろんな味が楽しめる! 『PRIDE』スタートから早9年——『PRIDE.1』から縁の下で支えてきた笹原さんと、体格的にも柱としてピッタリの佐伯さんに、これまでの『PRIDE』で味わえた裏話、事件、珍エピソードを語ってくれたよ!

構成／ジャン斉藤　協力／中村拓己(GBR)

髙田さんはスタッフよりも早く会場入りして、太鼓の練習をしてました

—今日は『PRIDE・1』からイベントに携わっている笹原さんと、『PRIDE』広報も務める佐伯DEEP代表に苦労話や珍事件のお話をうかがおうと思います！

笹原　よろしくお願いします！　まあ、佐伯さんはおもいきり遅刻してますけど（笑）。

—カーナビが壊れたらしくて道に迷ってるみたいですね（笑）。

笹原　そうなんですよ。さっき僕の携帯に電話があって「俺はいまどこにいるの!?　ねえ！（怒）」って怒鳴られちゃいましたから。

—ダハハハハ！　こっちがどこにいるか聞きたいぐらいだという（笑）。

【1時間ほど経過して、やっと佐伯さん登場！】

佐伯　（到着早々大声で）いやあ～、まいった!!　ホントまいったわ！

—お疲れさまです(笑)。だいぶ迷われたみたいで。

佐伯　お台場からここ（表参道）に向かうはずがさ、危なく成田空港に行くところだったよ！

笹原　どうしてそーなるんですか（笑）。

佐伯　（無視してメニューをにらんで）しかし、腹減ったね。……なんか頼んでいいの？（ゴクリ）。

—どうぞどうぞ(笑)。で、テーマにピッタリな出だしになりましたが、『PRIDE』ってここまで大きくなる裏側には言葉では言い尽くせない苦労があったと思うんですけど。

佐伯　（メニューを見ながら）ふんふん。いろいろあるねえ。

—それこそ『PRIDE・1』の最初の記者会見のときなんか、記者陣に「お前ら、何者なんだ？」って詰め寄られたりして。

笹原　最初は大変でしたね。マスコミさんにはまったく相手にされませんでしたから。でも、もし逆の立場だったら、ボクだって相手にしませんよ（笑）。だっていきなり「髙田延彦vsヒクソン・グレイシーを東京ドームでやります！」って発表しても、普通は信用しないでしょう。

佐伯　（メニューを見ながら）はんはん、ここお勧めはなんだろうなあ？

笹原　業界に名前がある団体がやるというのであれば話はべつですけど、まったく知られていない人間ばっかりで。しかも大会の日程自体も3回くらい延期になりましたし。

—8月15日の終戦記念日に行なうプランもあったみたいですね。

笹原　いろいろ変更を重ねて、それでなんとか10月11日開催発表にこぎつけたんですが、それこそ記者会見のやり方すらわからないですし、誰が代表として話をするのかさえ決めてなくて。

佐伯　（メニューを見ながら）こっちは決まった!!　これとこれとこれとこれ！

—わかりました（笑）。

笹原　結局、前後の事情があまり理解できない関係者が壇上で挨拶することになったんです。「『PRIDE』の理念みたいなものを語ってくれればそれでいい」ということだったんですが、当然のごとくマスコミの皆さんから突っ込まれて。

—だから「お前ら、何者なんだ？」という発言が飛び出したんですね。ドタバタは大会当日まで続いたんですか？

笹原　いまだから言えますけど、大会前日まで本当に開催できるの？　って思ってましたから（笑）。あの当時、髙田さんの取材に同行していたのですが、練習が終わっても常にスイッチが入っているような感じで、本当に近寄りがたかったんです。もちろん冗談なんて口にしませんでした。

—そうやって当時を振り返ると、いまの髙田さんって相当飛び抜けてますよね。

笹原　本当に凄いですよね。やっぱり髙田さんは根っこがプロレスラーで何事にも真剣に魅せることを考えてるんだと思います。だから自分がスポークスマンとなって、『PRIDE』の魅力を伝えていかないといけないと思ってるはずです。

—髙田さんのしゃべりも本当におもしろいですからね。さすが髙田総統の古くからの友人だけあって（笑）。

笹原　たとえば、ふんどしの暴れ太鼓やタップダンスは髙田さん本人が自ら乗ってやっていただいてます。太鼓のときなんて、スタッフ並に早く会場入りして練習してましたから。そのくらい真剣に取り組んでいるんですよ。

—一方、当時のヒクソンの雰囲気はどうだったんですか？

笹原　僕も山篭りに同行したんですけど、ヒクソンは男としてのオーラを感じ、本当にカッコいいですよね。

—グレイシーにはワガママなイメージが付きまとってますけど、そのへんで苦労されたことはなかったんですか？

笹原　いや、とくになかったですね。交渉面はヒクソンというよりも、キム夫人が前面に立ってましたけど。

佐伯　俺も『DEEP』の旗揚げ戦でホイラーを出したときにヒクソンを呼んだんだけど、そのときホテルの部屋でヒクソンとキムが試合のことで言い争いしてたよ。

笹原　僕もよく見ました（笑）。

—そんなに頻繁に（笑）。それはどういった理由でケンカするんですか？

佐伯　ウチのときはルールだったね。ルールのことで言い争いを始めて。それで、そのとき俺はただ挨拶しに行っただけなのに「ルールブックはどうなってるんだ？」とか迫られてさ～。そんなもん用意してなかったから怒られたよ、ただ挨拶しに行っただけなのに!!

—いきなり詰められたんですか（笑）。そんなヒクソンを『PRIDE』はよく二回も登場させることができましたよね。

笹原　髙田さんとの再戦話はすぐに了承してもらったんです。で、『PRIDE・2』の開催発表のときにヒクソンを極秘来日させて、その会見の席で入場曲と一緒に登場させたんですよ。そしたらマスコミの皆さんからは「オ～～ッ!!」って歓声が上がって。普通、記者さんは何があっても、歓声は上げないじゃないですか？

—佐伯さんも会見で「ここは驚くところだよ！」とか言ってるときがありますね（笑）。

佐伯　ホントね、リアクションが低いよ!!

笹原　だからあのときは、してやったりという感じでした。だから結果的に『PRIDE・4』をやるために、『PRIDE・2』と『PRIDE・3』をやったみたいなもんでしたからね（笑）。

—『PRIDE・2』の超ロング興行はいま



【ささはら・けいいち】DSE広報局局長。『PRIDE』創立当初からイベント運営に携わる。『ハッスル』では初代ハッスルGM、敏腕エージェントのケイ・ササハラとして大ハッスルしていたが、鈴木浩子に同リングから追放される。お酒が大好き!



【さえき・しげる】全財産を格闘技と食べ物に費やした、格闘イベントDEEP代表、PRIDE広報。『SAEKI祭り』ではプロレスラーとしてデビュー。ルチャ戦士からアマチュア格闘家まで幅広い守備範囲を持つアイデアマン。ライバルは血糖値なのだ。

SHIGERU SAEKI× KEIICHI SASAHARA

計量するたびに体重が増えた選手がいましたね。どんどん増えていく（笑）

でも伝説になってます。あのあとどんなに長い興行を観ても「『PRIDE・2』と比べれば……」って我慢できますから(笑)。

笹原　当時は無制限ラウンドだったこともあって、いま思えばメチャクチャですよね。

——それでやっとメインのマーク・ケアーvsブランコ・シカティック戦が始まったと思ったら、短時間の不完全燃焼反則決着で終わってしまって。

笹原　いやあ、僕の人生では『PRIDE・2』と『ハッスル2』が、ある意味一番印象に残ってますねえ……（しみじみと）。

——ガハハハハ！　会場は同じ横アリで不透明決着、お客の入りもあまり芳しくなかったですし。

佐伯　あの頃の『PRIDE』はチケットを買って観に行っていたけど、正直、採算が取れてるかどうかなんてわからなかったよ。

笹原　いや、実際はとんでもないことになってましたよ（笑）

佐伯　あの頃ってフジテレビさんはついていた？

笹原　まだスカパー！さんだけでした。だから『PRIDE・4』のときは、なんとか番組枠を取っていただこうと、フジテレビ、テレビ朝日、日本テレビの実況席をそれぞれ用意したんですよ。

佐伯　そんなんなってたんだ。いまじゃ考えられんね〜。

——その『PRIDE・4』では、北尾（光覇）さんの引退式もありましたが、あの式はどういう経緯で執り行なわれることになったんですか？

笹原　北尾さんのほうから「引退式をやりたい」ということだったんです。北尾さんはご自身が出場された『PRIDE・1』に凄く思い入れがあったらしくて。

——あの式では真樹日佐夫先生や添野（義三）先生、神取（忍）さんとか、本当に男臭い大物がリングに上がってましたね。

笹原　「武輝の魂」と呼ばれる日本刀を望月（成晃、現ドラゴンゲート）さんに渡す儀式をやりましたね。おそらく、お客さんにはその意味は伝わってなかったと思いますけど(笑)。

——望月さんもいまはドラゲーで武輝スタイルじゃないですし（笑）。『PRIDE・4』はオープニングマッチで、プリンセス・テンコーのイリュージョンショーがあったんだから本当に異空間ですよ！　グッドリッジとボブチャンチンがイリュージョンによって登場するという。

笹原　あ、この前、偶然そのビデオを観たんですけど、バッグンにおもろいですよ(笑)。プリンセス・テンコーのイリュージョンで、戸惑いながら入場するボブチャンチンの表情とか。

——プリンセス・テンコーもそうなんですが、初期『PRIDE』はやけに芸能色が強かったですよね。

笹原　当時は芸能関係の人がイベントに関わっていたこともあったからなんです。だから『PRIDE・1』のポスターは3種類作ったんですけど、そのうちの一つが芸能人の方のコメントだけを載せて、「早く見たいぞ『PRIDE・1』」というコピーで。それこそ明石家さんまさん、ハウンド・ドッグ、吉川晃司さんとか、いろんな方のコメントが載っていましたね。

——『PRIDE・1』には、現在ハッスルで坂田軍団マネジャーの青木裕子さんも来場していましたよね。

笹原　はい。当時から「グラビアはイヤだ。歌をやりたい」と言っていると聞いてました(笑)。

——歌といえば、髙田vsヒクソン戦開始に先立って、元SHOW−YAの寺田恵子による国家斉唱が有名でしょうけど、やっぱりヘビメタバンド「格闘バンドwith MIWAKO」が忘れられないんですよね（笑）。

笹原　藤谷美和子さんのライブですね。

——あと、あの当時『PRIDE』と関係が密接だった小室（哲哉）さんがプロデュースされたRingのライブもあったりして。

笹原　小室さんからはサポーターズソングを作ってもらったこともありました。そういった縁で黒澤（浩樹）選手の入場曲が『スピード2』サントラだったりしましたし。

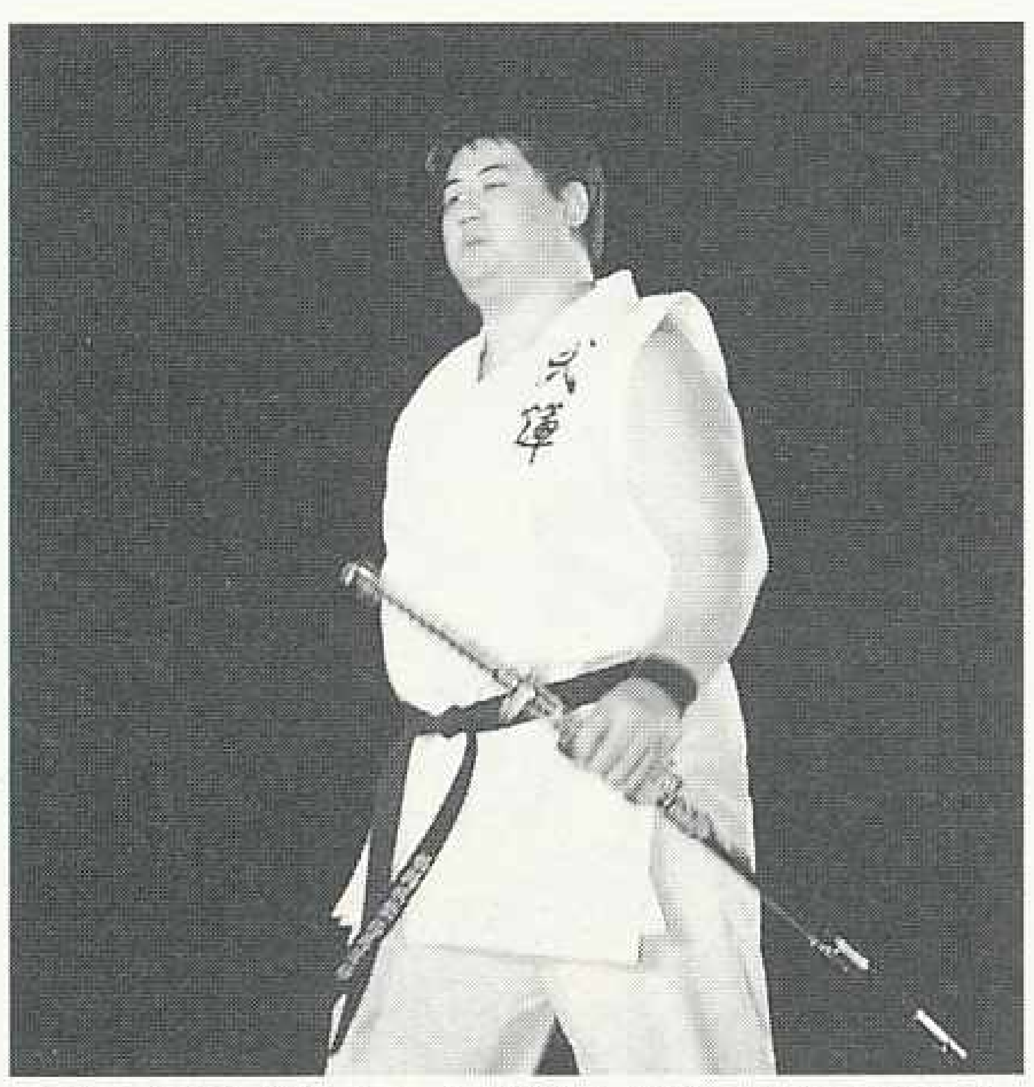
——いまでは桜庭（和志）選手の入場テーマですっかりおなじみですけど。それで『PRIDE・5』から運営がKRSから現在のDSEに移りますが、そのあいだ、半年近く開催の音沙汰がなかったじゃないですか。将来への不安はなかったですか？

笹原　メチャクチャありましたよ。『PRIDE・4』が終わって、年明けくらいに新会社を立ち上げることになったんですけど、『PRIDE・5』は、初の名古屋ということもあって、客入りもそんなによくなかったですからね

——あの名古屋大会には小川（直也）さんが初めて『PRIDE』に来場されて、髙田さんを挑発しました。当初はエキシビジョンマッチに登場したヒクソンに花束贈呈する際、その花を投げつけるつもりだったという話を小川さん自身が語っていましたけど。

笹原　このあとのヒクソンの『PRIDE』参戦の可能性を考えたら、それは絶対にNGですよね？　ヒクソンにそんなハッスルテイストが通じるとは思えません（笑）。

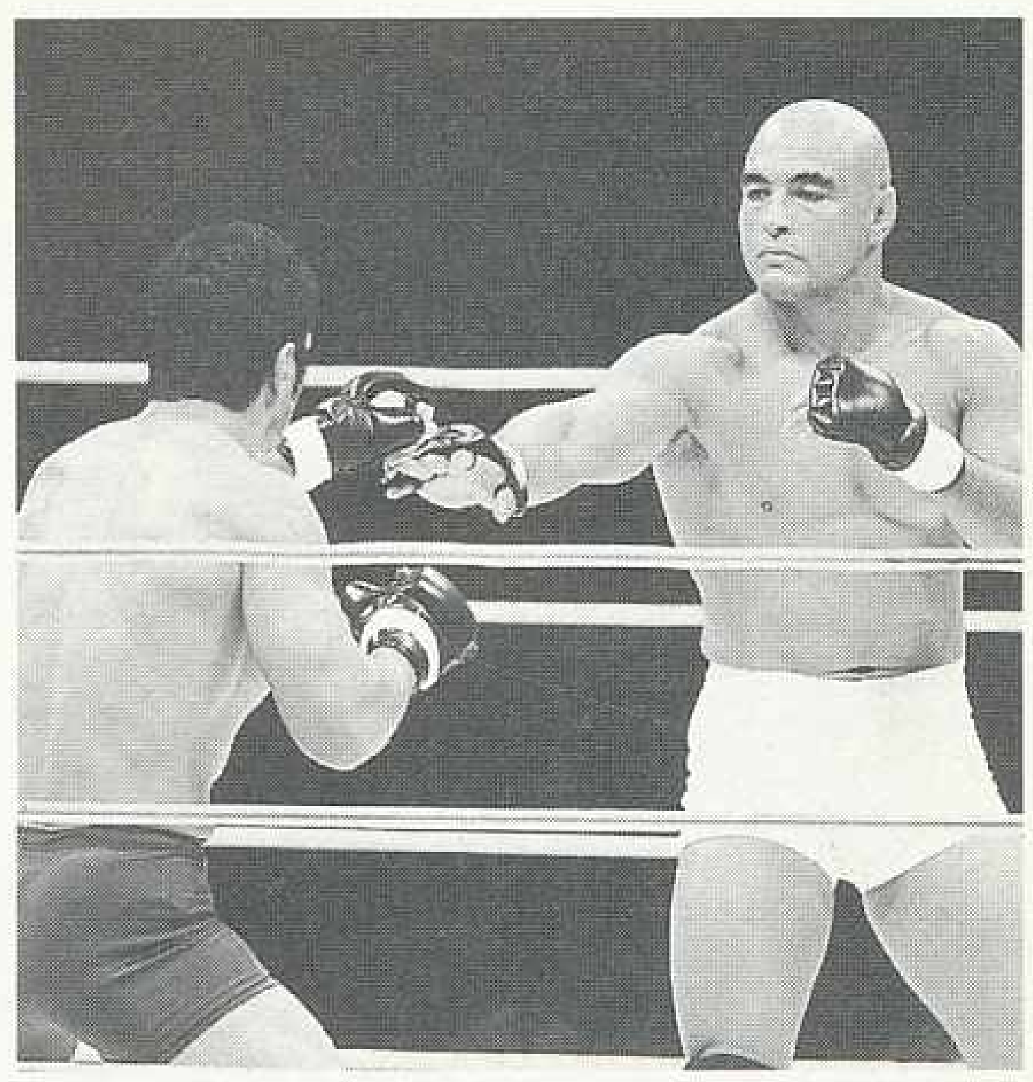
——もしそんなことやっていたら、対戦は絶



『PRIDE.1』のネイサン・ジョーンズ戦の勝利がじつは総合初白星だったこともあり、『PRIDE』に強い思い入れを持つ北尾が引退式を行なうのは納得のいく話!　「武輝の魂」授与式の観客の反応はイマイチだったが、そのセレモニーためにあの真樹先生や添野師範を『PRIDE』のリングに上げた功績は称えるべき!



『PRIDE.1』の北尾vsネイサン・ジョーンズ（現在プロレスラー、俳優としても活躍）戦の直前、入場ステージに突如、現われた『格闘バンドwith MIWAKO』!! NIGHT HAWKSの青木秀一など、錚々たる面子が音を奏でる途中で、北尾とネイサンが入場!　なんて腰を抜かしてくれるイベント構成なんだよ!



最近の活動は日本のバラエティ番組の騎馬戦出場や、アメリカで独自の大会をプロデュースするなど、表舞台復帰の雰囲気をまるで感じないヒクソン先生。いや、彼と本部長から『PRIDE』は始まった!　いまなおほの見える幻想と類い稀なる神秘性をもう一度、『PRIDE』のリングで味わいたいものである。

望的になりますしね（笑）。その『PRIDE・5』では西田（操一）選手のファールカップ付け忘れ事件がありましたけど、競技面はいまほど確立されてなかったんですか？

笹原　いまに比べればそうでしょうね。どんなシステムでも作り上げるのは時間がかかるんですよ。ただ、あれは単に本人が付けていないことに入場の途中で気付いて引き返しただけですから。競技面云々という話じゃないですよね（笑）。

佐伯　それにさ、初めはわからないことばっかだから！　たとえば、ウチは最初の頃はデジタルの体重計を使って計量やってたんだけど。それが当たり前だと思ってたんだよ。

笹原　『PRIDE』の初期は無差別でやってましたから、そもそも体重に対して過敏ではなかったと思いますね。もちろん契約体重のある選手は別ですが。

佐伯　計量といえばさ～、測るたびに体重が増えた選手もいたね。一回目の計量で1キロくらいオーバーだったんだけど、走りに行ってくるって外に出て戻ってきたら体重が増えてんだよ！　それで3回目に測ったらまた増えてるし。どうなってるんかねえ。

――まるでコントですよ、それ（笑）。

佐伯　おそらく水を飲んだんだろうね。あんときは夜中までかかって落とさせたから！

笹原　ルール絡みで言えば、ヒクソンの試合や桜庭vsホイラー・グレイシー戦も大変でしたね。

――レフェリーストップ裁定にグレイシー側が大激怒して。バックステージは大変だったみたいですね。

笹原　そうですねえ。でも、契約書にはレフェリーストップの項目もあるし、ホイラーはちゃんとサインしてたんですけどね。亡くなられたホクソン君（ヒクソンの息子）なんかレフェリーの島田さんにペットボトルを投げつけるし。

――しかし、島田さんはいろんな方々から、しょっちゅう水をかけられてますね（笑）。

笹原　当時のホクソン君はワンパクなお子さんで、ヒクソンのインタビュー中に、部屋の隅っこのほうでマンガ本を読んでてゲラゲラ笑っていたら、ヒクソンに「うるさい！」って怒られたり。いまとなっては、本当にいい思い出というか……（しみじみと）。

――交渉ごとなら同じグレイシーのホイスなんかもかなり厄介なイメージがありますけど。

笹原　う～ん。まあ、ホイスは優等生というか、自分がどう見られているか、どう見せるかを凄く考えていましたね。ホイスって本当は下ネタとか冗談が大好きなんですよ。

――らしいですね。胸の大きな女の子を見て「あの娘はヘルシーだ。なぜなら、あの娘の胸にはミルクがたくさん詰まっているから」という名言を残してるぐらいですし（笑）。

笹原　当時は兄のホリオンが彼をプロデュースしていたから、ホリオンがいる場や人が多く集まる場所では、じっと目をつぶって瞑想してるんです（笑）。でも、ホリオンがいなかった大磯の合宿では、とんでもなく弾けまくってましたよ！

――ガハハハ！　いいエピソードですね。

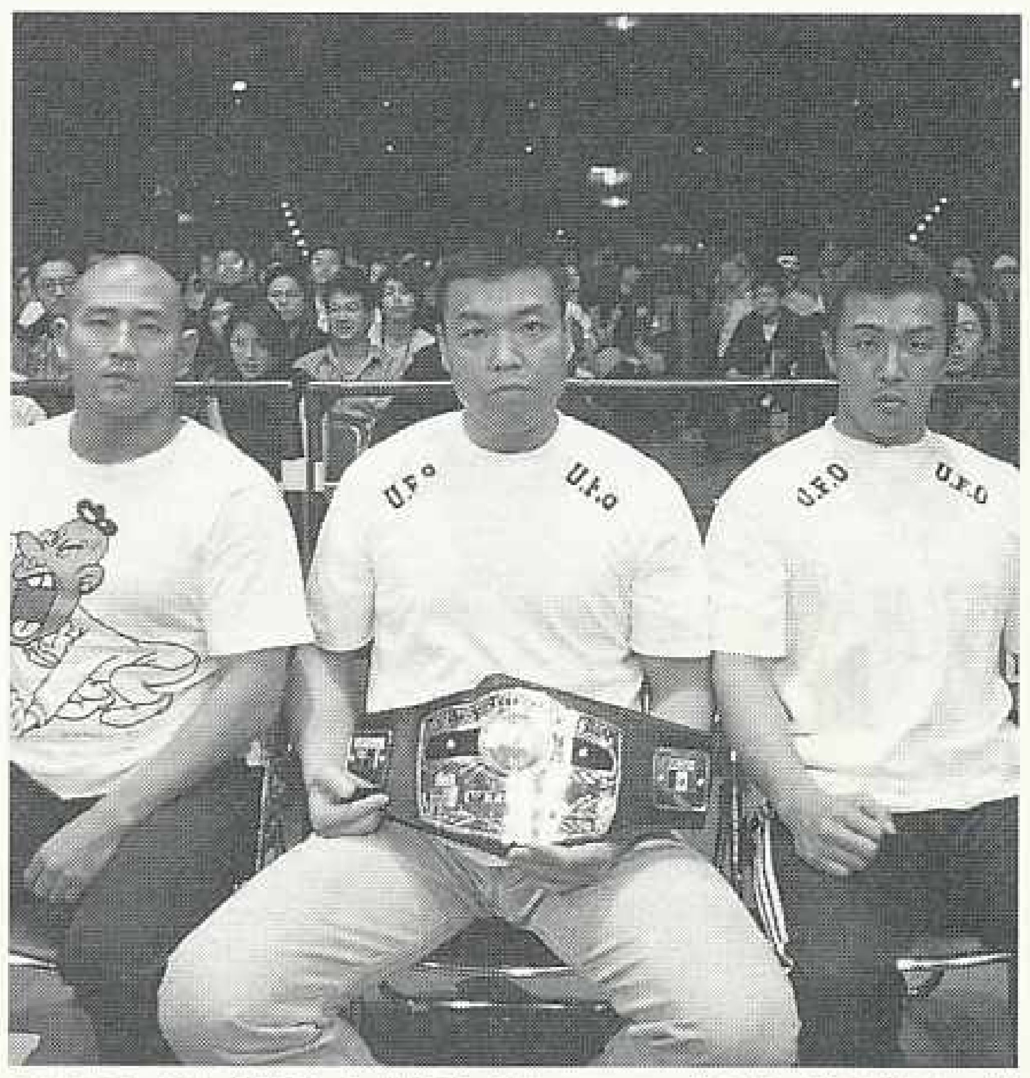
笹原　だから、ホイスはある意味プロフェッショナルですよ。

佐伯　……な～んか、笹原さんばっか、しゃべってんね！　俺にもなんかしゃべてらせてよ!!

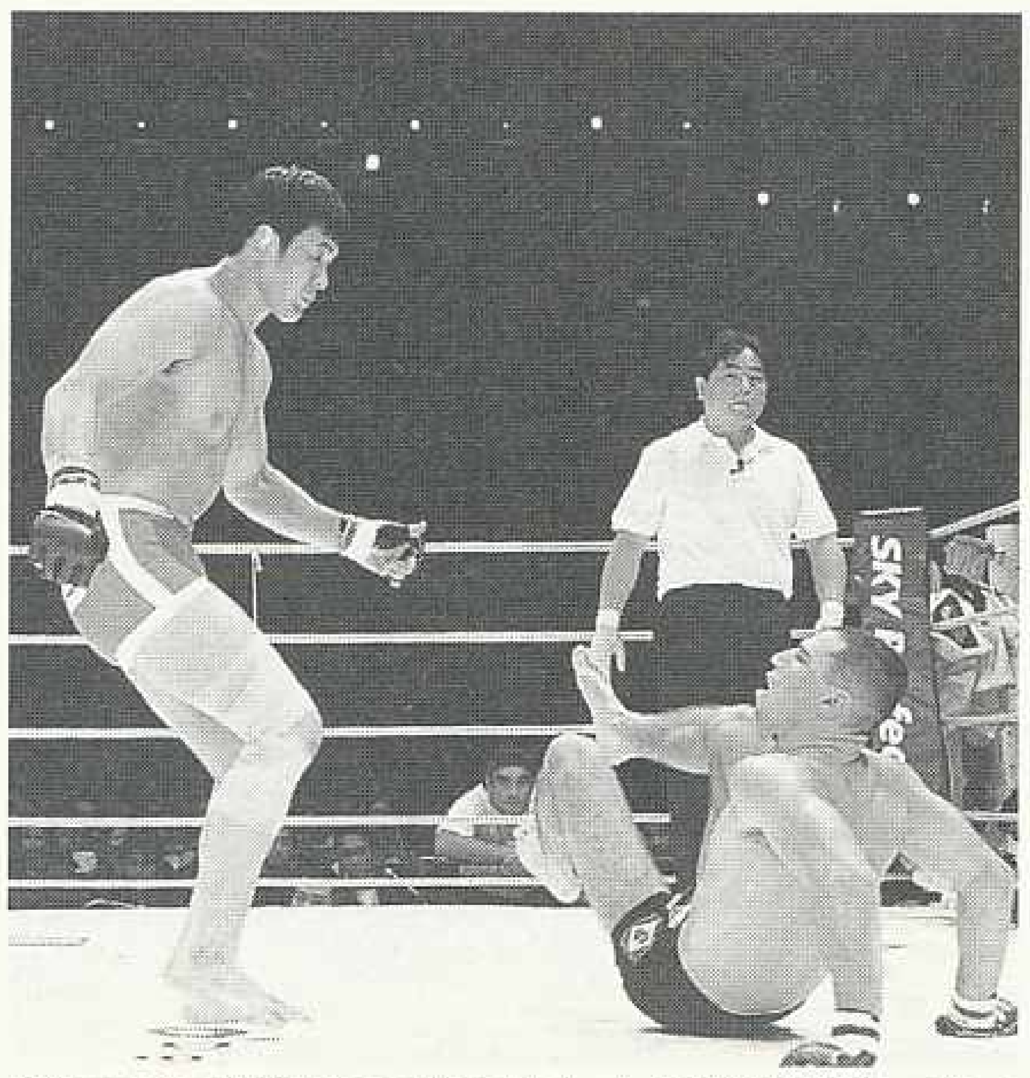
――もちろん（笑）。では、菊田（早苗）vsアレクサンダー大塚戦があれだけ遺恨を残したのは、佐伯さんが犯人だという……。

佐伯　（さえぎって）いやいやいや!!　俺は関係ないよ、あの件は！

――あのときアレクのセコンドにはソラール



NWAのベルトを携え、小川直也が『PRIDE.5』のリングに登場！　村上和成＆アレクサンダー大塚を「デテコ～ヒッ!!」と声を裏返しながら呼び込んだあとは、リングサイドで試合を観戦。もちろんこのまま大人しく黙っているはずもなく、メイン後のリングをジャック。「デテコ～ヒッ!!」と髙田に対戦要求！



初期『PRIDE』を観るうえで欠かせなかったのが"桜庭和志vsグレイシー"という図式である。レフェリーストップ裁定に異議を唱えるヒクソン＆ホイラー、ホイスとの舌戦、そして伝説のマラソンマッチ、リング上だけではなくリング外でも多くの話題を振りまく。歴史に残るとは、この抗争劇をいう。

珍味と凄味!! 独断と偏見で選ぶ PRIDEインパクト 1997·10·13～2006·2·26

PRIDE.1
「格闘バンドwith MIWAKO」熱唱ライブ
PRIDE.2
ヘンゾvs菊田、60分を超えるマラソンマッチ
PRIDE.3
310キロのエマニュエル・ヤーブロー登場
PRIDE.4
プリンセス・テンコーのイリュージョン
PRIDE.5
西田操一ファールカップ忘れ事件
PRIDE.6
小川直也初参戦
PRIDE.7
エンセン井上、PRIDE史上初の組み技マッチ
PRIDE.8
桜庭vsホイラー、レフェリーストップ裁定にグレイシー激怒
PRIDE GP2000開幕戦
ガイ・メッツアー、対桜庭戦を1R終了試合放棄
PRIDE GP2000決勝戦
桜庭、90分の死闘の末にホイスを下す
PRIDE.9
オリベイラ、偶発的な演出事故により入場時に大火傷
PRIDE.10
真夏の西武ドーム、サウナ状態のプレスルーム
PRIDE.11
桑田佳祐、『PRIDEの唄～茅ヶ崎はありがとう～』を熱唱
PRIDE.12
さいたまスーパーアリーナ初進出
PRIDE.13
四点ポジションの打撃解禁
PRIDE.14
UFCからチャック・リデル飛来
PRIDE.15
アントニオ・ホドリコ・ノゲイラ現われる
PRIDE.16
谷津嘉章、壮絶TKO
PRIDE.17
立川談志師匠、ボブvsマリオを特別リングアナ
PRIDE.18
イッキシンテン事件勃発
PRIDE.19
田村潔司初参戦もヴァンダレイに敗れる
PRIDE.20
ミルコvsヴァンダレイ、ドロー決着
PRIDE.21
ヒョードル降臨、シュルトを完封
PRIDE.22
コピィロフおじさん、ちゃっかり参戦
PRIDE.23
髙田延彦引退試合
PRIDE.24
棚橋弘至、女性問題で闘魂ビンタを食らう
PRIDE.25
ヴァンダレイとランペイジがリング上で乱闘騒ぎ
PRIDE.26
REBORN成功!!
PRIDE GP2003開幕戦
吉田秀彦、田村を破ってゲッツポーズ
武士道・其の壱
ハリトーノフ、挑戦試合で日本デビュー
PRIDE GP2003決勝戦
髙田「去る者は追わず」
男祭り2003
小川＆橋本、『ハッスル』PR殴り込み
PRIDE.27
魔性のDDT事件
武士道・其の弐
五味隆典、初見参
PRIDE GP2004 1st ROUND
PRIDEでハッスルポーズ初披露
武士道・其の参
玉海力、「座頭市の唄」で入場
PRIDE GP2004 2nd ROUND
ランペイジのパワーボム炸裂
武士道・其の四
ジャイシルの根棒振り回し事件
PRIDE GP2004 FINAL ROUND
決勝戦無効試合
武士道・其の五
戦闘龍「相撲は強いんだヨ!!」
PRIDE.28
トンプソンがプルプル初上陸
男祭り2004
安生洋二、涙のケジメマッチ
PRIDE.29
桜庭和志、田村に対戦要求
武士道・其の六
美濃輪「スタンディング・リアル・フィスト8回」披露
PRIDE GP2005開幕戦
ユン・ドンシク「少し恥ずかしいです」
武士道・其の七
中・計量級リニューアル
PRIDE GP2005 2nd ROUND
中村カズ道衣脱ぎ捨てKO事件
武士道・其の八
大久保ちゃん奇跡の大逆転勝利
PRIDE GP2005決勝戦
ヒョードルvsミルコ、ついに実現
武士道・其の九
美濃輪、第二回超人五輪ザ・ビッグファイトスタイル
PRIDE.30
ズール親子、見参
男祭り2005
小川vs吉田、金子賢デビュー
PRIDE.31
西島洋介デビュー戦

が付いてましたけど、DEEPで行なわれた鈴木みのるvsソラール戦が反則決着で乱闘になったばかりだから、パンクラスに対してかなり挑発的な行為ですよね（菊田は当時パンクラスGRABAKA）。てっきり佐伯さんルートでソラールを呼んだのかなって思っちゃったんですけど。

佐伯　そもそも誰がソラールを呼んだのかもわからないんだよ。菊田くんサイドからは「試合に集中したいから、そういったことはやめてほしい」って要望があって、実際にアレクのほうにもソラールを呼ぶなって言っていたんだよ、ちゃんと！　で〜も。いつのまにか来ててさ。まいったわ!!

――そのソラールは大晦日『PRIDE男祭り』でジャイアント・シルバのセコンドに付いたこともありましたよね。

佐伯　ああ、あのときは年明けに『ハッスル1』があったでしょ？　ジャイシルはそもそも『ハッスル』に出すために呼んだんだけど、ひょんなことから『男祭り』に出すことになったんだよね。

――いまや毎年20パーセントを超える大晦日視聴率男になってますから、それはナイスジャッジですね（笑）。

佐伯　あの『男祭り』のときは、ソラールもえらいやる気満々だったもんな〜。意味もなくタンクトップ着てやる気満々のオーラを出してさ。

笹原　「俺はいいのか？」って計量までしようとしてましたから（笑）。

――ガハハハ！　なぜそんなにソラールがやる気満々だったかといえば、じつは桜庭さんの対戦候補として挙がっていたからだというじゃないですか。

笹原　そうなんですよ。実際に桜庭さんと対戦したホジェリオを含めて、3人くらい候補が挙がったみたいなんです

――ホジェリオと一緒にソラールが含まれているというのは凄い話ですよね（笑）。それで変わっている外人選手といえば、やっぱりイズマイウの印象が忘れがたいんですけど。

笹原　かなり変わっているとは聞いていたんですね。ウチがイズマイウを呼ぶことになったとき、当時『格闘技通信』の安西（伸一）さんが「絶対にやめたほうがいいよぉ。危険だよぉ」って強く言ってたんですよ。

――グレイシーマニアで知られるアンザイ・グレイシーからそんな忠告が（笑）。

笹原　最初の頃はいたって普通だったから安心したんですが、後半は本領を発揮しちゃいました。

――『PRIDE』が呼んでもないのに自費来日して、会場入りしようとしたけどパスがないからトラブルになったりしてましたね（笑）。

佐伯　来ようと思えば来れるからね。もう何回も日本に来ている選手だったら一人でホテルまで来れるし。ウチなんか空港まで迎えにいかんときもあるもんな！（キッパリ）。

――それは突き放しすぎですよ！（笑）。

佐伯　いや、ホント！　ドスカラスJr.なんてこっちが予約したホテルが気に入らないから勝手にキャンセルして、ホテルを替えちゃったからね（笑）。

――そのドスJr.の総合出陣は最近ご無沙汰ですね。

佐伯　ホントはもっと出したいんだよね。ただ、いまメキシコのCMLLで大人気のルチャドールだから。メキシコの総合練習環境はあまりよくないこともあって、最短でも2ヵ月前にオファーしないと準備ができないって言うんだよ。

――それにマスカラス一族の血を受け継いでますから、本業のルチャをないがしろにするわけにもいかないですよね。

佐伯　でも、新世代のルチャドールだから、考えた方が親父たちとは違うんだよね。だってさ、ミルコ（・クロコップ）戦のときの記者会見で、いきなりでマスクを脱ぐとか言い始めて。聞いてないからビックリしたよ！

笹原　結局、マスカラスから「マスクだけは絶対に脱ぐな！」って言われたそうで、目の付近を大きく割いたマスクを付けることになったんです。

――それぐらいドスもこの勝負に懸けていたってことですね。

佐伯　やっぱりルチャドールは誇りが高いからさ。ドスの敗戦を聞いたマスカラスが「俺がミルコとやる！」って言い出すし（笑）。

――そのシチュエーションの「スカイハイ」はぜひ聴きたいですよ！

佐伯　入場して、そのままリングを通りすぎて退場しても満足するな〜。

――しかし、もうちょっと早く『PRIDE』とDEEPの交流が早かったら、ルチャ戦士が続々と参戦してたかもしれないですね。

佐伯　俺もDEEP立ち上げ当初は「打倒『PRIDE』！」なんて言っていたね〜。

笹原　それこそこっちはDEEPが始まったときは叩き潰すつもりでしたよ！（笑）。

――ダハハハハ！

佐伯　いやあ〜、『PRIDE』の完成度の高さは、もう手が届かないよなあ（しみじみと）。

――イベント進行なんかでその世界観を妨げる選手っていました？　たとえば、吉田（秀彦）さんと闘ったときの田村さんの入場曲はなんだかホワンホワンしたテーマ曲でかなり謎だったんですけど（笑）。

笹原　……あのテーマ曲を田村さん側から持ち込まれたとき、スタッフが田村さんに黙っていつもの曲に変えようとしたらしいんです。でも、ある関係者が「もしテーマ曲を変えたら、田村さんはそのまま帰っちゃうかもしれません」って言われて（笑）。

佐伯　帰る帰る！　間違いないよ!!

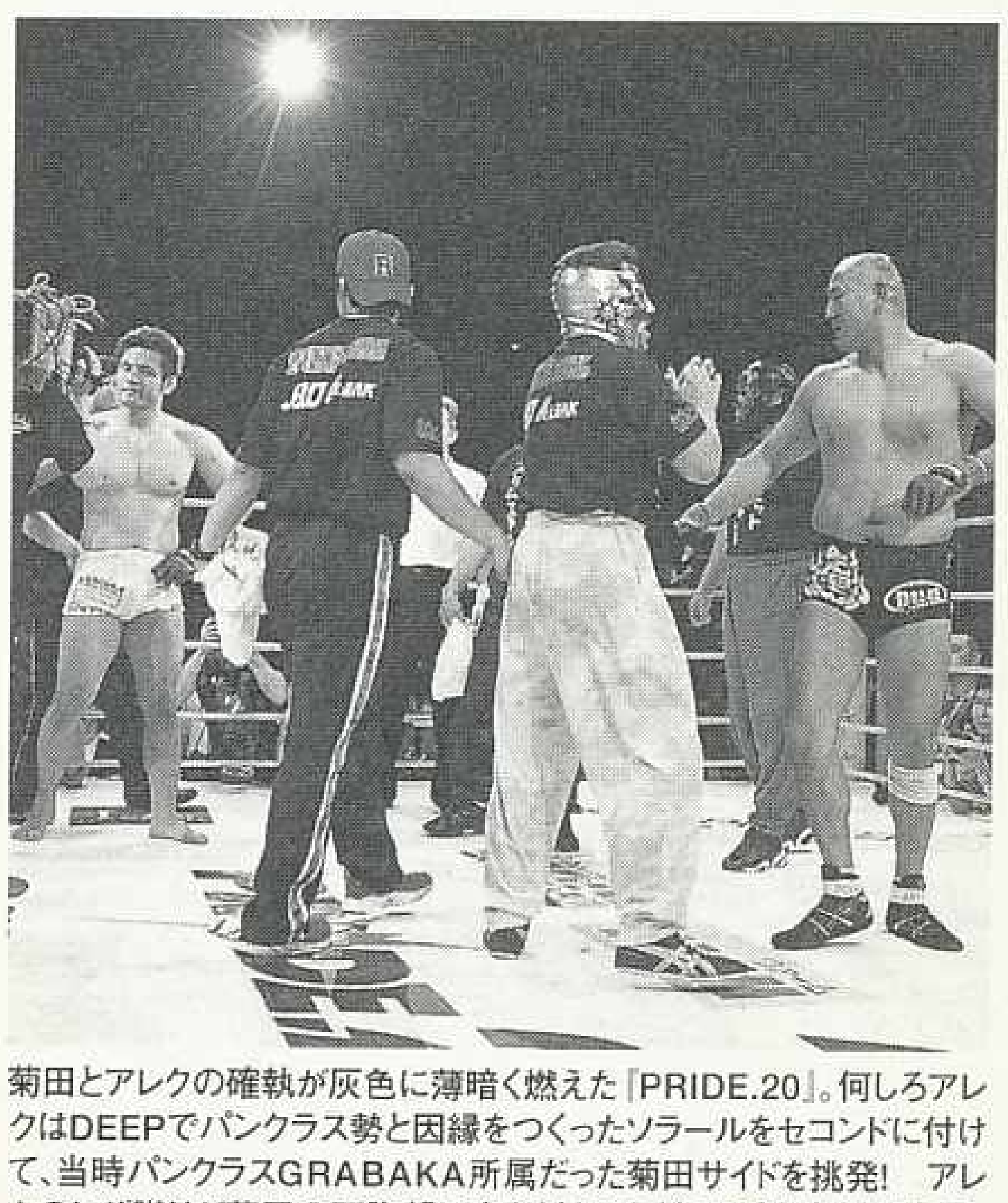
笹原　しかもまったく違う曲になったわけじゃなくて、微妙に変わっている感じだったじ



「Uを背負ってるんですよね（ニヤリ）」秀逸な煽り映像、柔道vsUWFという異次元対決、ばっちりスイングした試合内容――。田村vs吉田の一戦はどこを斬っても刺激的だったと同時に、田村の謎のテーマ曲、勝利に歓喜した吉田の「ゲッツ!!」など、ホンワカと力抜けるが側面も。♪ホワンホワン〜（田村の謎のテーマ曲）。



ミドル級の頂点に向かって難敵を次々にクリアしたランペイジが、王者であるヴァンダレイに対戦を迫ると――ヴァンダレイが早くも着火!! ランペイジを突き飛ばして、あわや乱闘寸前の事態に。この対決に火が点いたばかりか、両者のライバルストーリーがミドル級人気の底上げに一役も二役も買うことになる。



菊田とアレクの確執が灰色に薄暗く燃えた『PRIDE.20』。何しろアレクはDEEPでパンクラス勢と因縁をつくったソラールをセコンドに付けて、当時パンクラスGRABAKA所属だった菊田サイドを挑発！　アレクのヒザ蹴りが菊田の下腹部に突き刺さるなど、不穏な空気が支配。ファンの好みは分かれる剥き出しの人間性の濃さがそこにあった。

変わった人だからこそ、逆にファイターとしての魅力があると思います

ゃないですか？　だからいつかはおなじみのサビが流れるだろうって思って聞いてたんですが……。

——ずっとホワンホワンしたままだったという（笑）。

佐伯　やっぱりそこは田村潔司なんだなあ。独特の世界観を持ってるんだよ。桜庭選手との試合だって、ファンからこ～んなに期待されてるのにやらないでしょ。

——関係者が田村さんの誕生日パーティーを開いてあげたり、いろいろ策を弄してもダメでしたからね（笑）。

佐伯　大変だよ～。でも、変わっている人だからこそ、ファイターとしての魅力があるし、輝くんだと思うんだよね。

——そんな田村さんほどの世界観を持っている選手はほかにいますか？

佐伯　やっぱ、考え方がわからないのは美濃輪（育久）かな。

——あ、納得です（笑）。本能で動かれる方ですから。

佐伯　真面目でいろいろ考えているし、言うこともちゃんと聞いてくれるんだけど、アホな話以外だと会話が続かない（笑）。小川（直也）さんなんかはどうなの？

笹原　いや、小川さんはこだわりが凄くあると思いますけど、難しい人っていうわけじゃないと思いますよ。

佐伯　ふんふん。田村潔司に比べればってこと？

笹原　佐伯さんがそう思ってるんじゃないですか？（笑）。

佐伯　（おもいきり無視して）観たいなあ、桜庭vs田村戦……実現すんのかね？　ねえ？　どうなの!?

——ボ、ボクに聞かれても（笑）。桜庭vs田村戦は03年の『PRIDE男祭り』で、総合ルールのタッグマッチでやるという話もあったみたいですけど。

佐伯　そうそう。田村さんは乗り気と噂で聞いたけど、……やっぱ難しいじゃない。

笹原　そうですね。大晦日の生中継で『PRIDE』の世界観を伝えることを考えると、タッグマッチはどうしてもNGになっちゃいますよね。

——どうしてもプロレスを連想してしまいますし。もし実現したら、批判するファンや関係者は出てきちゃうでしょうね。

佐伯　何やったって批判はあるよ。ジャッジや判定がどうこうとかウチの事務所に電話かけてきて、全然知らないファンと一時間くらいしゃべったこともあったもん！

——ガハハハハ！　熱いなあ。

佐伯　こっちだってさ、プロのジャッジに任せてやっているわけだから、よっぽどのことがない限り、文句のつけようがないでしょ。それに10人いれば10人、判定の付け方は違うんだから。

——それがわかっていても、どうしても憤りみたいなものをぶつけたいんでしょうね。

佐伯　やっぱりお客さんはさ、劇的な決着で「カンカンカン！」とゴングが鳴って、「オ～～～ッ！」って叫びたいんだよね。だから勝ちにこだわって動きのない試合してもしょうがない。その点、ノゲイラは凄いよね。動くし、極めるし、また観たい！　と思うもん！

笹原　西島（洋介）戦のマーク・ハントなんかも当てはまりますよね。

——今度の『PRIDE無差別GP』ではそういう試合が続出してほしいですよね。

佐伯　それにしても大会、多いなあ（ポツリ）。『武士道』は9月に終わって、しばらくなかったでしょ。あの頃は平和だったよお。

笹原　なるほど。DSE批判ですね。いまのはかならず載せてください（笑）。

佐伯　（あわてて）違う違う！　やっぱりさやっぱりさ、俺はずっと中量級をやってきたから、ナンバーシリーズよりも『武士道』に興味があるんだよね。

笹原　要するにナンバーシリーズに興味はない、と。いまの言葉もかならず載せてください（笑）。

佐伯　だって、どうしてもそうなっちゃうでしょ！（逆ギレ）。DEEPもやってリアリズムもやってculb DEEPもやって……。

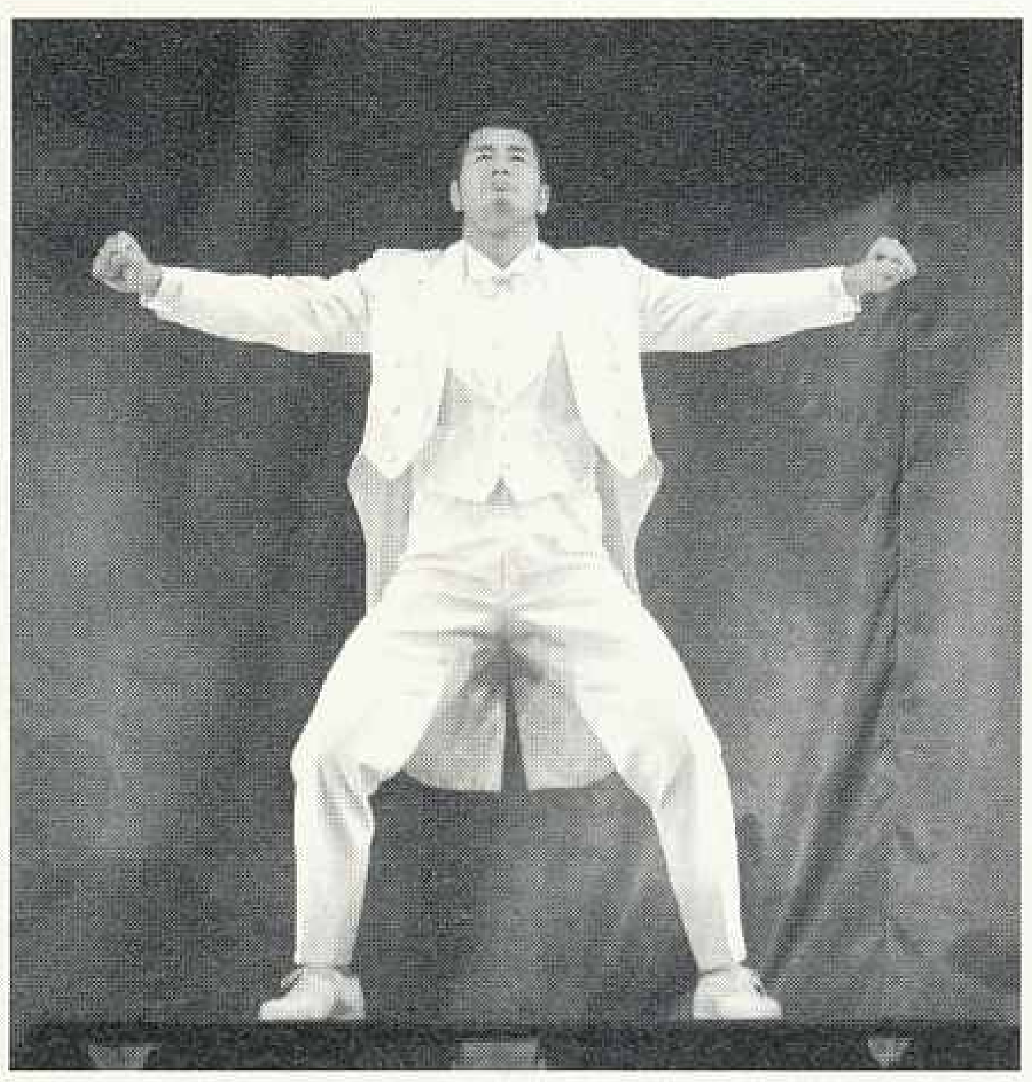
——DEEPオフィシャルサイト掲示板のファンの質問に返答の書き込みもして（笑）。そんな働きマンの佐伯さんにこれからの『PRIDE』に期待することをお願いします！

佐伯　そうだねえ～。やっぱり強くておもしろい日本人が必要だよ！　そのためにはたとえば、DEEPのレベルで勝ちに徹してつまらない試合してちゃ絶対にダメ。『PRIDE』じゃ通用しない。圧勝するくらいの強さを見せないとしょうがないよ。だから『武士道』にとって、DEEPが高い壁になるように頑張りますよ！

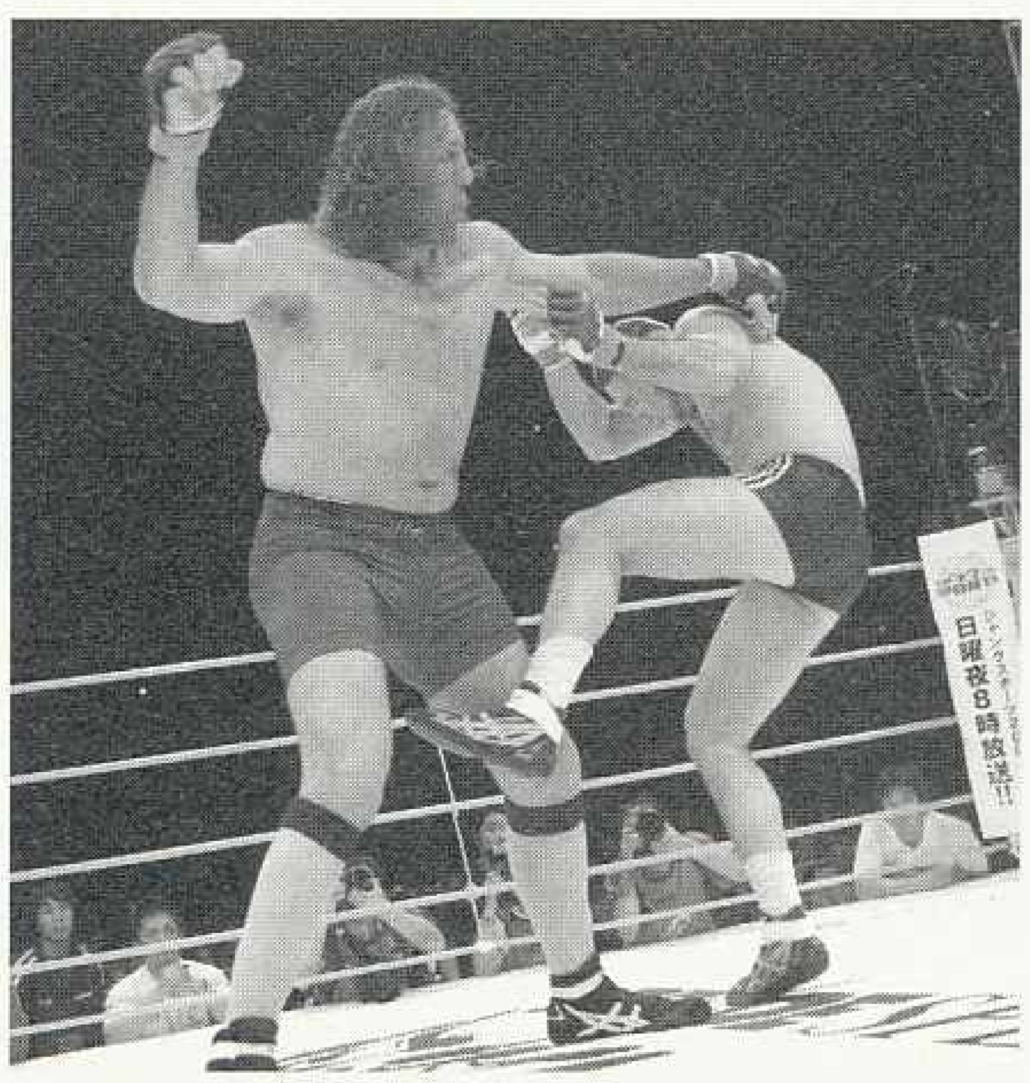
笹原　……DEEPの宣伝、ということですね。よ～くわかりました！

——ガハハハハ！　これからのおもしろい発展を期待しております！

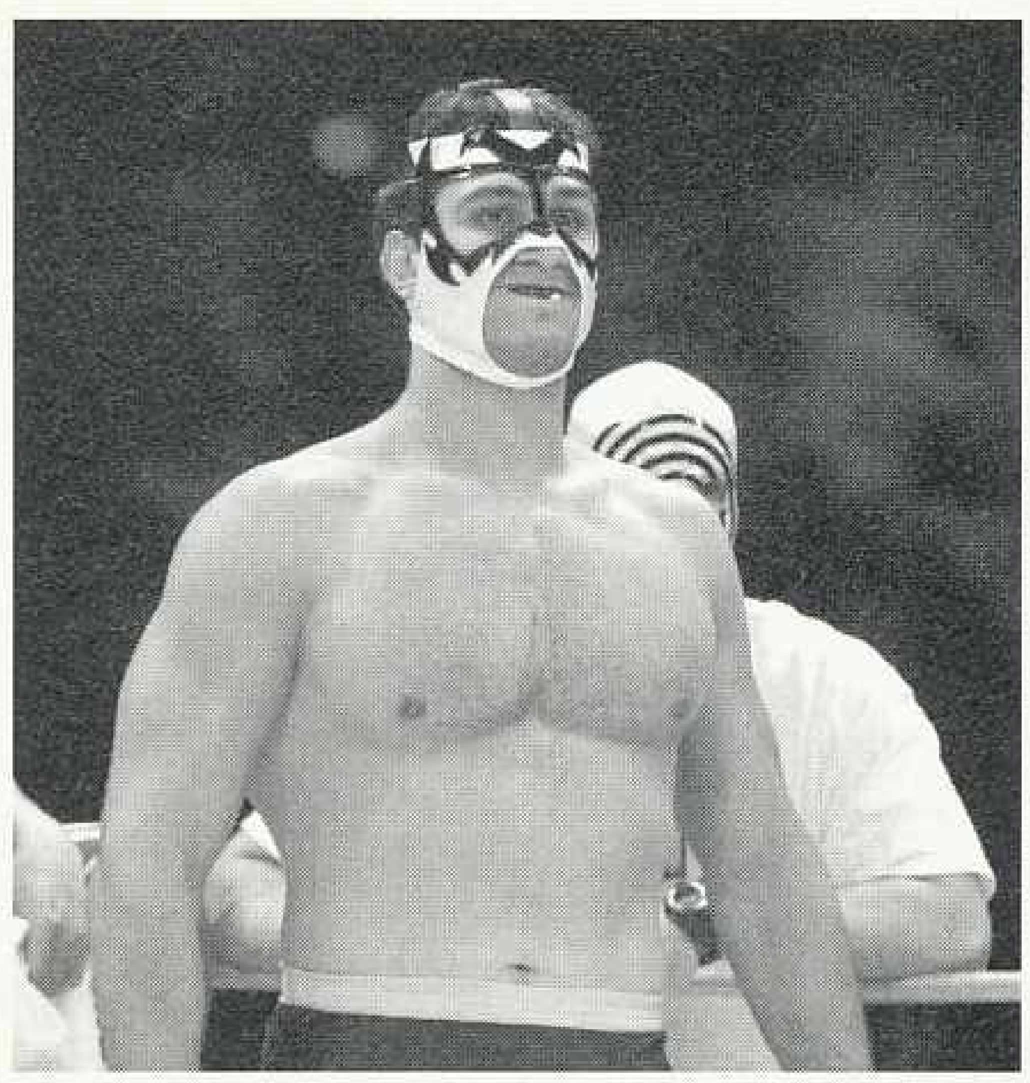
【06年3月10日／表参道にて収録】



『PRIDE.1』でヒクソンに惨敗した髙田統括本部長が、まさかまさか、このようなかたちで『PRIDE』のために身体を張っているとは！　俺たちのできないことを平気でやってのける、まさにDIOマインドな突破者！　今年の大晦日は何をやってくるのか。ぜひ髙田総統の夢露ラップを超える衝撃を♪



大晦日『男祭り』に迷い込んでしまった大巨人は、いまやすっかり"大晦日"に居座る視聴率大男に！　なんてったって3年連続20パーセント越えしているんだから文句はあるまい。デカイ、コワイ、シチョウリツ!!　そんな三拍子揃っていると同時にどこか憎めない力の抜けた方がジャイシルの魅力でなのである。でしょ？



近代総合格闘技史上初、マスクマンがバーリー・トゥードに出撃！　しかもあのルチャの名門マスカラス一族の血を受け継いでいる男が、クロアチアの英雄ミルコと肌を合わせることになるから、プロレスの大河ドラマはいかにも壮大である。それにしてもこのマスク、総合用とはいえ切り込みすぎだよ！

もランキング

集計&文／中村拓巳（GBR）
構成／松下ミワ
協力／堀江ガンツ
岡田イブラヒム

1 PRIDE身長ランキングベスト10



1. ジャイアント・シルバ 230cm
2. セーム・シュルト 211cm
2. ヤン・"ザ・ジャイアント"・ノルキア 211cm
4. LAジャイアント 210cm
5. ガン・マッギー 208cm



6. ヒカルド・モラエス 205cm
7. エマニュエル・ヤーブロー 204cm
8. ビッグ・ジョージ・ランドルフ 205cm
9. ズール/ボブ・サップ/北尾 光覇 200cm

↓ショート編

1. TAISHO 164cm
2. 今成正和 165cm
3. ファビオ・メロ 168cm
ショーン・シャーク
小見川道大
阿部裕幸
杉江アマゾン大輔
8. 170cm
ジャドソン・コスタ
ジェンス・パルヴァー
前田吉朗
佐々木恭介
クリス・ブレナン

解説

最も背が高い選手はやはりジャイアント・シルバで230センチ。2位のセーム・シュルトとヤン・" ザ・ジャイアント" ・ノルキアにさえ、20センチ近い差をつけて圧勝した。対する背が低い選手では、TAISHOと今成正和のバルボーザ柔術の兄弟弟子がワンツーフィニッシュとなった。ジャイシルとTAISHOの身長差はじつに66センチで、実際の試合ではジャイアント・シルバvs戦闘竜の55センチという身長差が最高値。高身長トップ10の中で最も体重が軽いのが、セーム・シュルトで117キロで、逆に低身長トップ10で最も体重が重いのは、クリス・ブレナンの81キロ。ちなみに背の高い選手の中には" ジャイアント" や" ビッグ" というリングネームを持つ選手が4名もおり、どうやら背の小さい選手に比べて、自分の身長を売りにしたいみたいです。

2 PRIDE体重ランキングベスト10



1. エマニュエル・ヤーブロー 310kg
2. ズール 185kg
3. LAジャイアント 181kg
4. アレクサンドル・ルング 175kg
5. ボブ・サップ 170kg



6. ジャイアント・シルバ/北尾光覇 160kg
8. ダン・ボビッシュ 150kg
9. 西田操一 144kg
10. ヤン・ザ・ジャイアント・ノルキア 144kg

次点 安田忠男 140kg

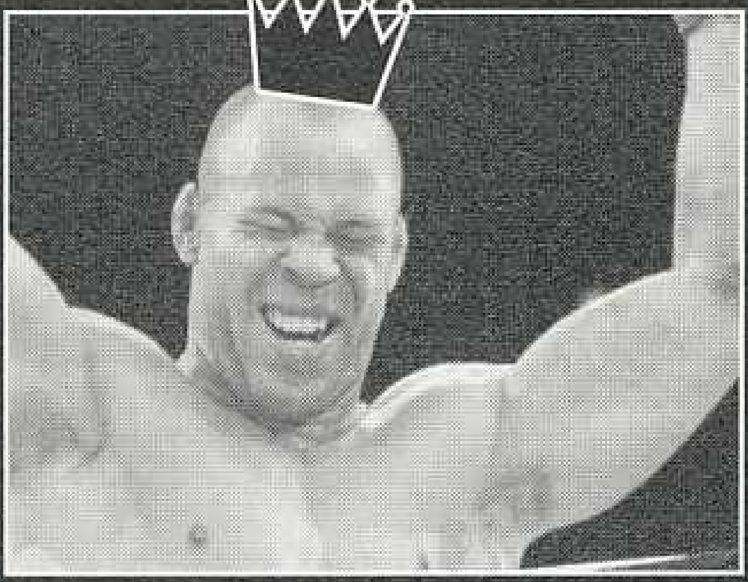
解説

身長のジャイアント・シルバ同様、最も重い選手はもちろんエマニュエル・ヤーブローで、身長204センチに対し、体重310キロというありえない体型の持ち主。しかし最初で最後の『PRIDE』での試合となった高瀬大樹戦では、高瀬の足を使う戦法に大苦戦し、最後はスタミナ切れを起こし、高瀬のパウンドを受けてTKO負けを喫している。このように体重の重い選手と言えば、動きの鈍そうなイメージがあるが、4位にランク入りしたアレクサンドル・ルングはなんと100メートルを12秒台で駆け抜け、さらには股割りまでできるとのこと。ぽっちゃり系でも動ける選手は動けます。ちなみにランキングの中で最も背の低い（177センチ）の西田操一は現在。富山のクラブ・バーバリアンに所属し、バーバリアン西として、総合格闘技のリングで活躍中。

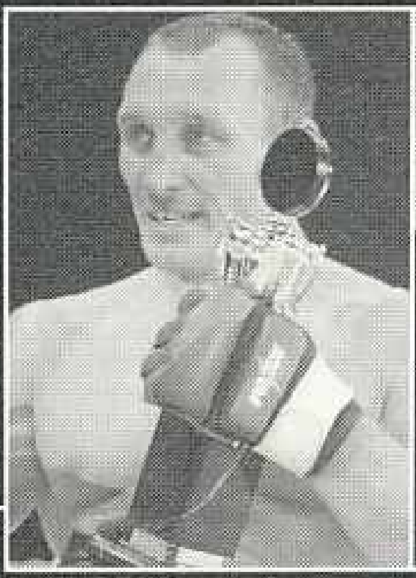
働きすぎのファイターから、ウワサのあの角度まで!!

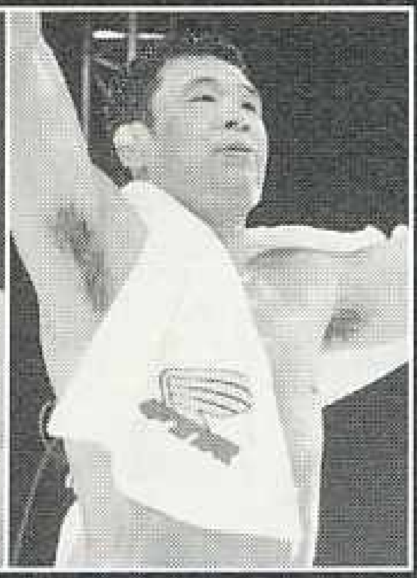
PRIDEなんで

3 勝ち数ランキング



① ヴァンダレイ・シウバ 24試合中 20勝

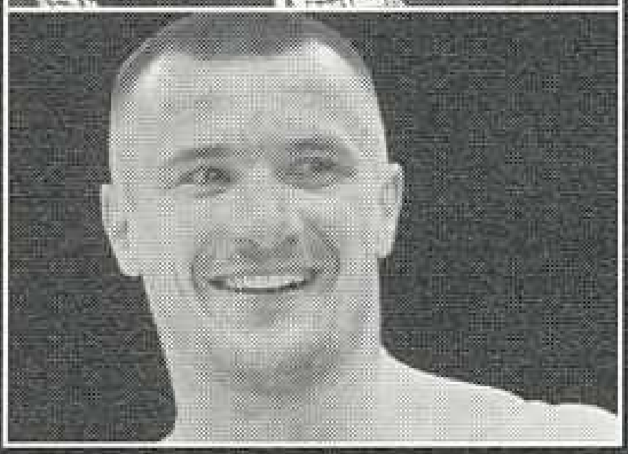




② イゴール・ボブチャンチン 27試合中/桜庭和志 26試合中 18勝



④ アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ 16試合中/ミルコ・クロコップ 19試合中 13勝



⑥ エメリヤーエンコ・ヒョードル 13試合中/ヒース・ヒーリング 17試合中/クイントン・"ランペイジ"・ジャクソン 17試合中 12勝

⑨ ダン・ヘンダーソン 14試合中/五味隆典 10試合中 10勝

解説

エメリヤーエンコ・ヒョードルを押さえてトップに立ったのはヴァンダレイ・シウバ。試合数の差がランキングに影響する形となった。シウバは桜庭和志やイゴール・ボブチャンチンとほぼ同じ試合数をこなしながらも、20勝2敗1分1無効試合と高い勝率を誇っている。アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ同様、15戦以上戦ってこの数字は立派だ。またヒース・ヒーリングやクイントン"ランペイジ"ジャクソンの叩き上げの選手がランクしているのも納得できる。ちなみにウェルター級GPで優勝したダン・ヘンダーソンのウェルター級での試合は2試合のみで、ミドル級で8勝を挙げていることはある意味快挙と言っていいだろう。なお現在も連勝記録を続けているのはエメリヤーエンコ・ヒョードルと五味隆典。二人の記録がどこまで伸びるかも注目だ。

4 負け数ランキング

①	小路晃 22試合中	11敗
②	アレクサンダー大塚 13試合中	10敗
③	ゲーリー・グッドリッジ 18試合中	9敗
④	イゴール・ボブチャンチン 27試合中	8敗
⑤	桜庭和志 26試合中	7敗
⑥	ケビン・ランデルマン/ 10試合中 美濃輪育久/ 12試合中 ギルバート・アイブル/ 8試合中 高田延彦/ 10試合中 ガイ・メッツァー 10試合中	6敗

解説

こちらのランキングでは小路晃とアレクサンダー大塚に代表される、『PRIDE』初期・中期を支えた選手が多くランクインした。いかに『PRIDE』というリングで生き残ることが難しく、出場選手のレベルアップが速いかがわかっていただけるだろう。そんな中で意外に思えるのが6位に入っている美濃輪育久。03年男祭りからの参戦以降、短期間のあいだに多く試合をこなし、毎試合毎試合のインパクトが強すぎるため、改めて数字を見るまでは、6勝6敗という戦績がピンとこない人も多いだろう。リアルプロレスラーは勝ち負けを超越した存在なのかもしれない。ギルバート・アイブルとガイ・メッツァーがランク入りしているのも、ある意味意外な結果である。

5 PRIDEファイター労働時間ランキング







① 桜庭和志 408分27秒(26試合出場)

② イゴール・ボブチャンチン 295分11秒(27試合出場)

③ 小路晃 256分56秒(22試合出場)

④ ヴァンダレイ・シウバ 251分31秒(24試合出場)

⑤ 松井大二郎 231分36秒(13試合出場)

⑥ ヘンゾ・グレイシー 187分6秒(8試合出場)

⑦ アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ 182分3秒(16試合出場)

⑧ ヒース・ヒーリング 178分2秒(17試合出場)

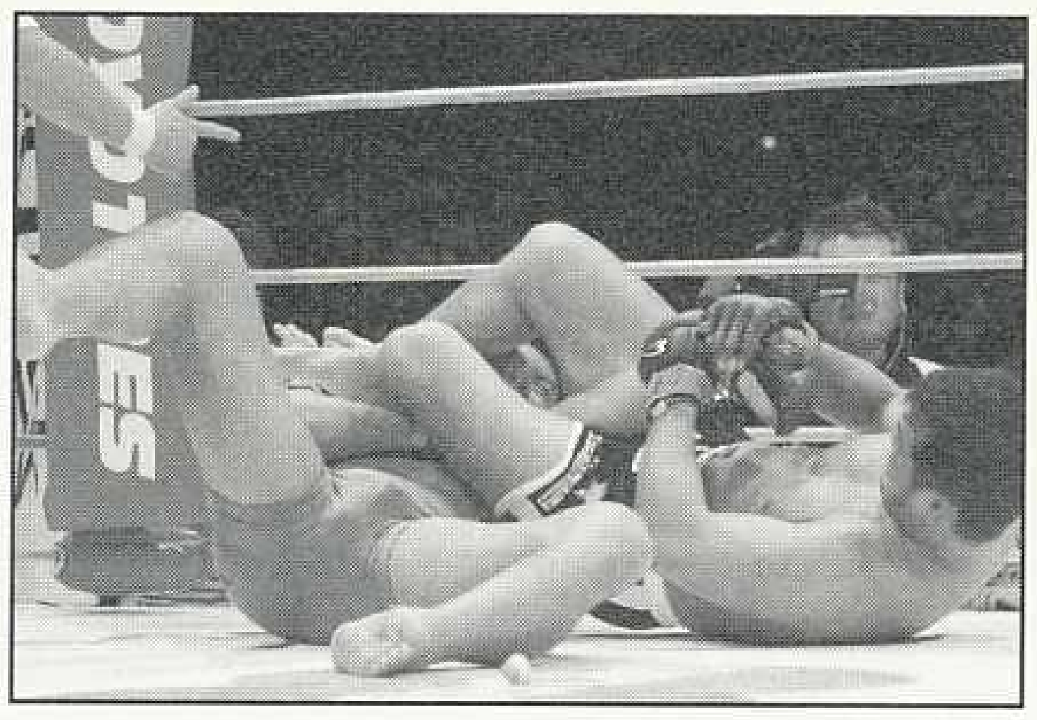
⑨ アレクサンダー大塚 173分33秒(13試合出場)

⑩ 中村和裕 158分47秒(13試合出場)

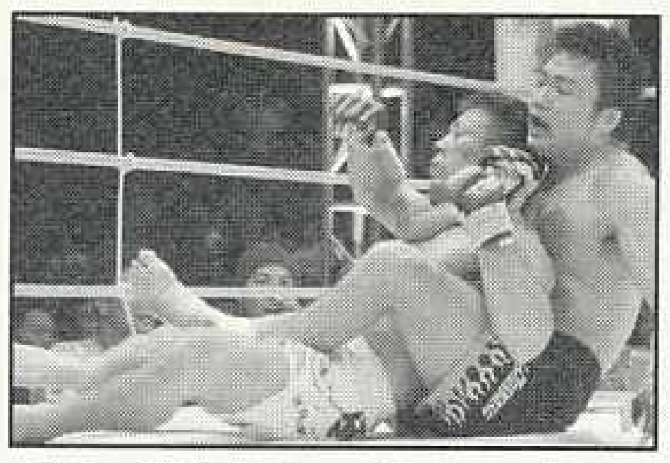
解説

ホイス・グレイシーとの90分間に及んだ、格闘技史に残る一戦を闘った桜庭和志が文句なしの1位に輝いた。桜庭はホイス戦以外にも、バーノン・タイガー・ホワイト戦、ホイラー・グレイシー戦など、初期に行なわれたマラソンマッチを多くこなしており、それが数字の伸びにつながった。桜庭と同じことが言えるのが、松井大二郎とヘンゾ・グレイシー。松井は小路晃、菊田早苗戦で計60分、ヘンゾにいたっては菊田戦のみで60分闘っている。その菊田はランキング入りこそ果たせなかったものの、4試合で130分闘うという離れ業をやってのけている。一本勝ちのイメージが強いアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラは7位にランクイン。やはり打撃によるKOでは秒殺勝利もありうるが、関節技による一本勝ちにはある程度の時間が必要となるようだ。

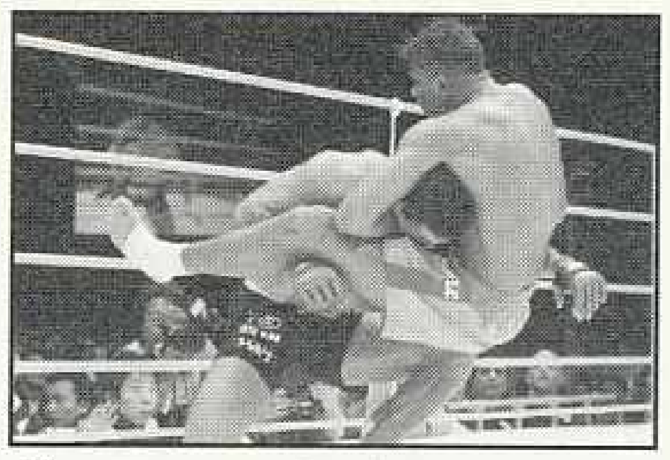
6 PRIDE極め技ランキング



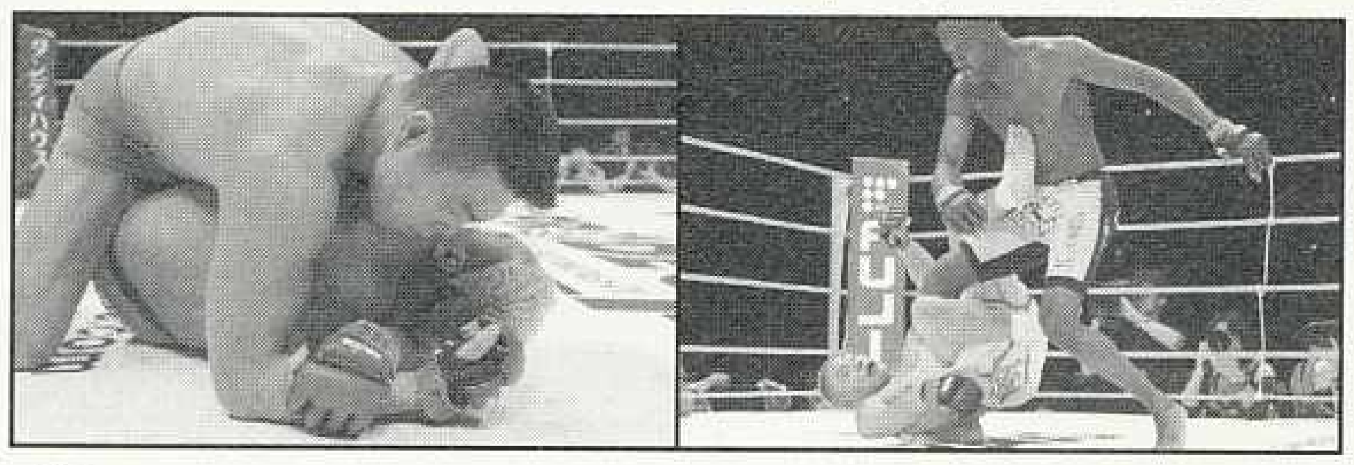
① 腕ひしぎ十字固め 43回



② 裸絞め・チョークスリーパー 22回



③ フロントチョーク・ネックロック 9回



④ 肩固め/ヒールホールド 7回

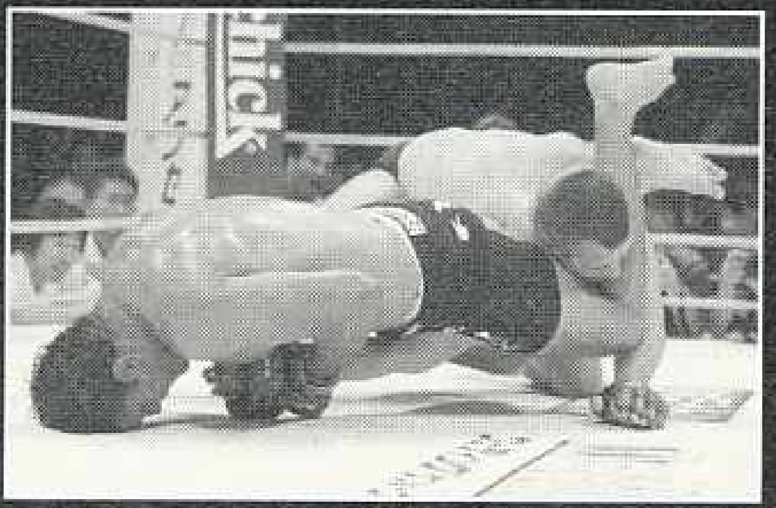
⑥ 三角絞め 5回　⑦ 羽折固め/チキンウィングアームロック/アームロック 3回

解説

シンプル・イズ・ベスト。『PRIDE』で多く極まった関節技は腕ひしぎ十字固めやチョークスリーパーといった、ごくごく基本的な関節技に落ち着いた。逆に珍しい極め技は袈裟固めやダブルアームバー、吉田秀彦が使う道衣技（袖車・片羽絞め）やアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラのスピニングチョークなどがある。またランキングを通じて目についたのは、一般的には極まりにくいとされてきた足関節やフロントチョークが多く決まり手になっていること。イメージだけで物事を考えてはいけないようです…ここで意外なデータをもう一つ。三角絞めを『PRIDE』で初めて極めたのはアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラで、『PRIDE.15』のゲーリー・グッドリッジ戦。それまで約4年間、『PRIDE』では一度も三角絞めが極まったことはなかった。

7 独断と偏見で選ぶ! 鮮やかな勝利ランキング

① ○アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
×ミルコ・クロコップ
[2R 1分45秒 腕ひしぎ十字固め]
『PRIDE GP 2003 決勝戦』

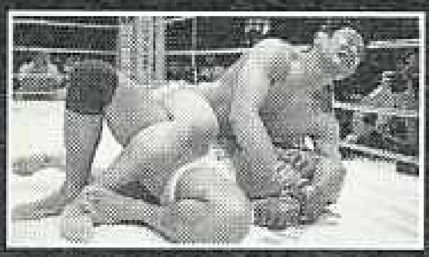




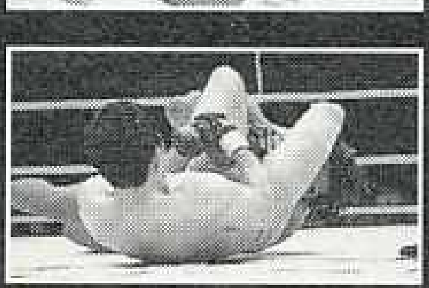
② ○五味隆典
×ルイス・アゼレード
[1R 3分46秒 KO]
『武士道・其の七』

③ ○ミルコ・クロコップ
×イゴール・ボブチャンチン
[1R 1分29秒 KO]『PRIDE GP 2003開幕戦』





④ ○桜庭和志
×ヘンゾ・グレイシー
[2R 9分43秒 チキンウィングアームロック]『PRIDE.10』



⑤ ○桜庭和志
×カーロス・ニュートン
[2R 5分19秒 ひざ十字固め]『PRIDE.3』

⑥ ○ゲーリー・グッドリッジ
×ギルバート・アイブル
[1R 28秒 KO]
『PRIDE.10』

⑦ ○長南亮
×アンデウソン・シウバ
[3R 3分08秒 踵固め]
『PRIDE男祭り2004』

⑧ ○高瀬大樹
×アンデウソン・シウバ
[1R 8分33秒 三角絞め]『PRIDE.26』

⑨ ○アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
×マーク・コールマン
[1R 6分10秒 腕ひしぎ三角固め]『PRIDE.16』

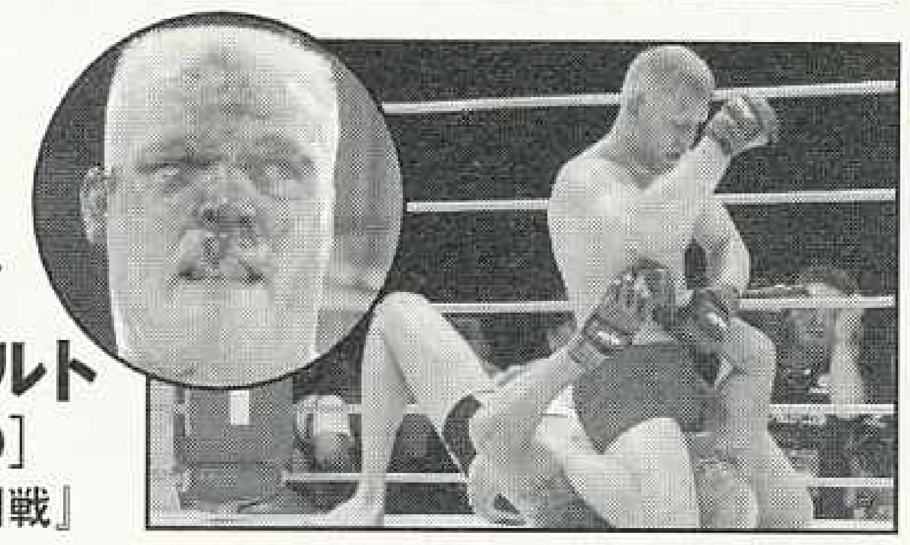
⑩ ○田村潔司
×髙田延彦
[2R 1分 KO]『PRIDE.23』

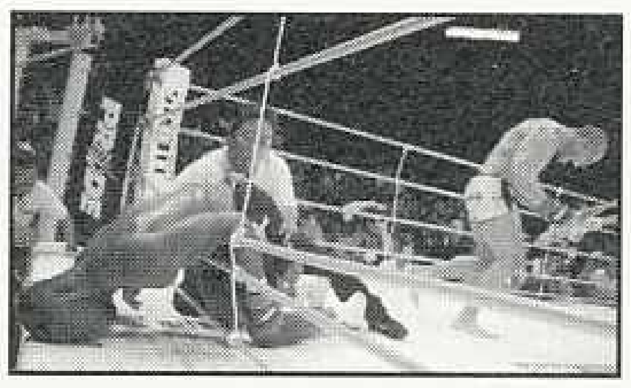
解説

『PRIDE』全試合で最も鮮やかな勝利に輝いたのは、ヘビー級暫定王者決定戦であるノゲイラvsミルコである。ノゲイラがミルコから腕十字を奪うまでの動きと言えば、マウントを奪う→マウントパンチ→ミルコがマウント返し→油断したミルコの右腕をつかみ十字へ、とじつに流れるような動き。まさにノゲイラが"名勝負製造機"っぷりを証明した試合だ。2、3、6、10位にランクインした4試合は、KO一撃の痛快な一戦。とくに五味vsアゼレード、ミルコvsボブチャンチンは、これでもか！　と言わんばかりに、選手紹介映像に使われているシーンなので、記憶に残っている人も多いだろう。また、4、5位を飾った桜庭和志の闘いぶりもまさに鮮やか。"打倒・グレイシー"旋風を巻き起こした桜庭のアイデア満載の闘いは、多くのファンを魅了した。

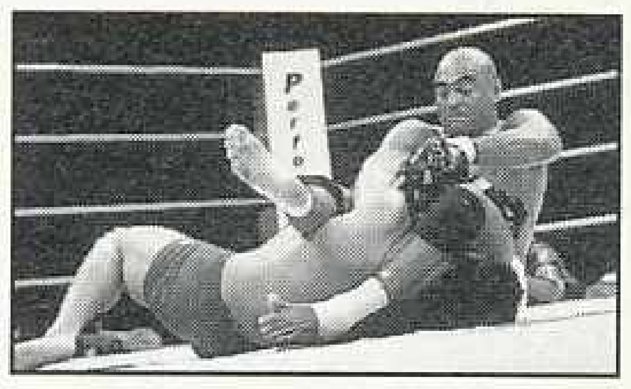
8 独断と偏見で選ぶ! 心に突き刺さった試合ランキング

① ○セルゲイ・ハリトーノフ
×セーム・シュルト
[1R 9分19秒 TKO]
『PRIDE GP 2004 2回戦』





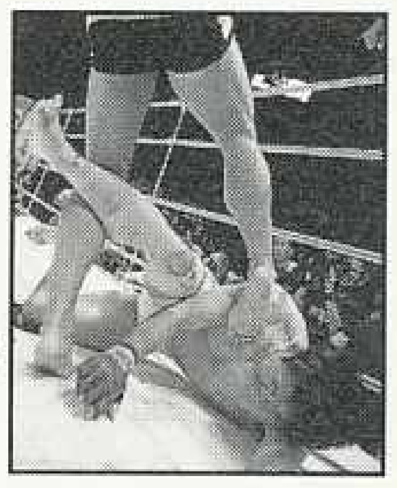
② ○ヴァンダレイ・シウバ
×クイントン"ランペイジ"ジャクソン
[2R 3分26秒 KO]『PRIDE.28』



③ ○ヒクソン・グレイシー
×髙田延彦
[1R 4分47秒 腕ひしぎ十字固め]『PRIDE.1』



④ ○イゴール・ボブチャンチン
×フランシスコ・ブエノ
[1R 1分23秒 KO]『PRIDE.8』



⑤ ○ヴァンダレイ・シウバ
×桜庭和志
[1R 1分38秒 TKO]『PRIDE.13』

⑥ ○マーク・コールマン
×マウリシオ・ショーグン
[1R 49秒 TKO]
『PRIDE.31』

⑦ ○ハイアン・グレイシー
×大山峻護
[1R 1分37秒 腕ひしぎ十字固め]
『PRIDE.22』

⑧ ○ヒカルド・アローナ
×桜庭和志
[2R終了 TKO]『PRIDE GP 2005 2回戦』

⑨ ○マウリシオ・ショーグン
×滑川康仁
[1R 6分02秒 KO]『武士道・其の伍』

⑩ ○エメリヤーエンコ・ヒョードル
×藤田和之
[1R 4分17秒 裸絞め]『PRIDE.26』

解説

なんと言っても、1位は"死神"による巨人刈り。シュルトからマウントを奪ったハリトーノフは「まだ満足できません」とばかりに、ヒザでシュルトの肩を強引に抑える"ハリトーノフポジション"に移動。そこから振り下ろした鉄槌は数知れず!!　シュルトの顔が大写しになったときには、観客もどよめく、というか、一瞬引いてしまったほどである。2位はヴァンダレイが狂犬・ジャクソンを相手に、"戦慄のヒザ小僧"の名をほしいままにした試合。右ストレートをまともに受け、倒れ込むジャクソンにヴァンダレイは容赦なく怒濤のヒザ攻撃!!　ロープにもたれ掛かるジャクソンがいつまでも脳裏に残る試合となった。全体として、ここに名を連ねるのはやはりロシア&ブラジルの面々。彼らの闘いぶりが国全体のイメージにもつながっていることを考えると、いかにいろんな意味で印象的な試合だったかがわかる。

9 観客を呼んだファイター ベスト10

※出場した大会の観客動員数を加算して算出



1. ヴァンダレイ・シウバ **748,455人**（24試合出場）
2. 桜庭和志 **730,140人**（26試合出場）
3. イゴール・ボブチャンチン **613,589人**（27試合出場）
4. ミルコ・クロコップ **600,557人**（19試合出場）
5. アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ **554,733人**（16試合出場）
6. ゲーリー・グッドリッジ **497,509人**（18試合出場）
7. クイントン"ランペイジ"ジャクソン **483,320人**（17試合出場）
8. 小路晃 **422,309人**（19試合出場）
9. ヒース・ヒーリング **421,895人**（17試合出場）
10. ダン・ヘンダーソン **408,646人**（14試合出場）

解説

10選手中8選手が観客動員No.1の『PRIDE GP2003』決勝戦に出場しているなど、試合数よりも出場した大会の規模がランキングに影響する形となった。その影響が最も如実に現われたのが、エメリヤーエンコ・ヒョードルがランキングから漏れたこと。一度しか東京ドーム大会に出場してないヒョードルは、ほかの選手に比べるとどうしても数字が伸び悩んでしまったようだ。ちなみに観客動員数の合計を出場した大会数で割ると、1位アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ、2位ヒョードル、3位ヴァンダレイ・シウバ、4位ミルコ・クロコップ、5位ダン・ヘンダーソンと、まったく違う顔ぶれとなるところは興味深い。それにしてもシウバ、桜庭、ボブチャンチンは必ずどのランキングにも上位に顔を出しており、『PRIDE』を支えてきた中心人物であることがわかる。

10 PRIDE観客動員 ベスト10

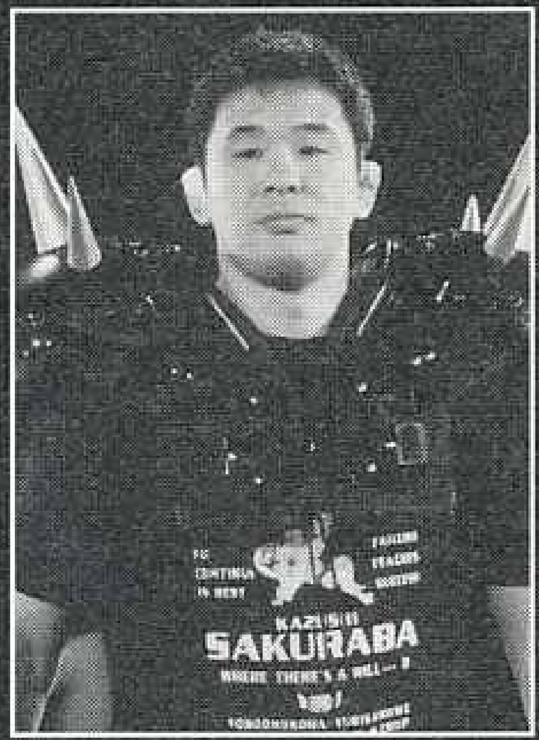
1. **PRIDE GP 2003 決勝戦 67,451人** 〜2003.11.9 東京ドーム〜
   主なカード■ヴァンダレイ・シウバvsクイントン・"ランペイジ"・ジャクソン
2. **PRIDE.17 53,246人** 〜2001.11.3 東京ドーム〜
   主なカード■ヴァンダレイ・シウバvs桜庭和志
3. **PRIDE.23 52,228人** 〜2002.11.24 東京ドーム〜
   主なカード■髙田延彦vs田村潔司
4. **PRIDE男祭り2005 48,801人** 〜2005.12.31 さいたまスーパーアリーナ〜
   主なカード■小川直也vs吉田秀彦
5. **PRIDE男祭り2004 48,398人** 〜2004.12.31 さいたまスーパーアリーナ〜
   主なカード■エメリヤーエンコ・ヒョードルvsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
6. **PRIDEGP2000開幕戦 48,316人** 〜2000.1.30 東京ドーム〜
   主なカード■髙田延彦vsホイス・グレイシー
7. **PRIDEGP2005決勝戦 47,629人** 〜2005.8.28 さいたまスーパーアリーナ〜
   主なカード■エメリヤーエンコ・ヒョードルvsミルコ・クロコップ
   PRIDEGP2004決勝戦 47,629人 〜2004.8.15 さいたまスーパーアリーナ〜
   主なカード■エメリヤーエンコ・ヒョードルvsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
9. **PRIDE.1 46,863人** 〜1997.10.11 東京ドーム〜
   主なカード■髙田延彦vsヒクソン・グレイシー
10. **PRIDEGP2005開幕戦 45,423人** 〜2005.4.23 大阪ドーム〜
    主なカード■ヴァンダレイ・シウバvs吉田秀彦

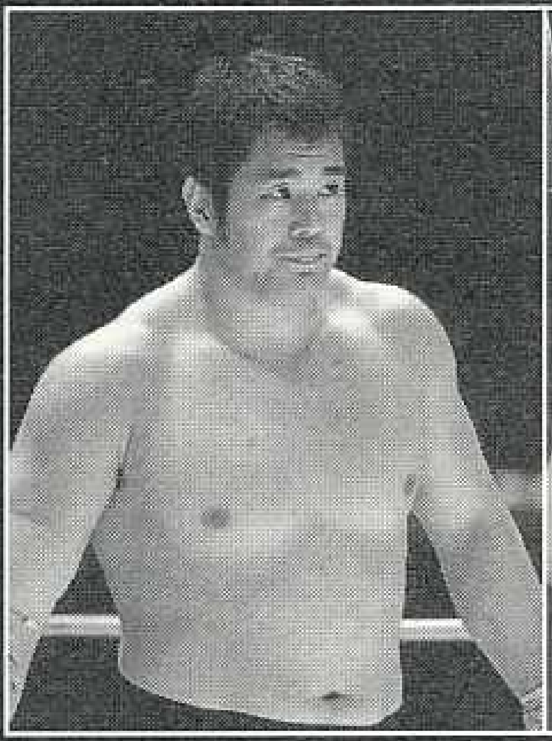
解説

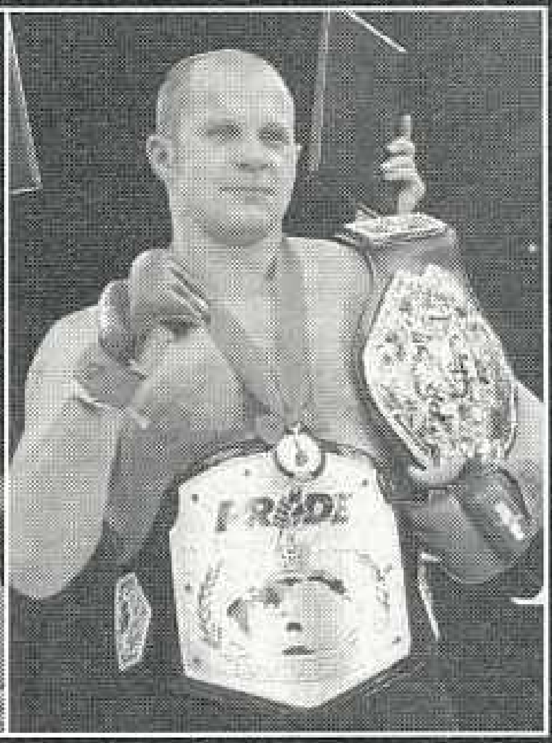
吉田秀彦vsヴァンダレイ・シウバ、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラvsミルコ・クロコップが行なわれた『PRIDE GP2003決勝戦』は、観客動員数を含め伝説的な大会だったと言える。『PRIDE』のホームリングでもあるさいたまスーパーアリーナで、ここ数年コンスタントに5万人近い集客を実現できるイベントは『PRIDE』以外にはないだろう。また記念すべき『PRIDE』の第1回大会がランキングに入っていることも見逃せない。髙田延彦とヒクソン・グレイシーの一戦が、当時どれだけの注目を集めたかがわかる結果である。GPシリーズ、男祭りシリーズが上位を占める中、桜庭和志vsシウバの第2戦や髙田延彦引退試合が上位にランクイン。04年と05年のGP決勝が同じさいたまスーパーアリーナで、まったく同じ観客動員数というのも不思議な結果である。

11 真のメインイベンター ベスト10







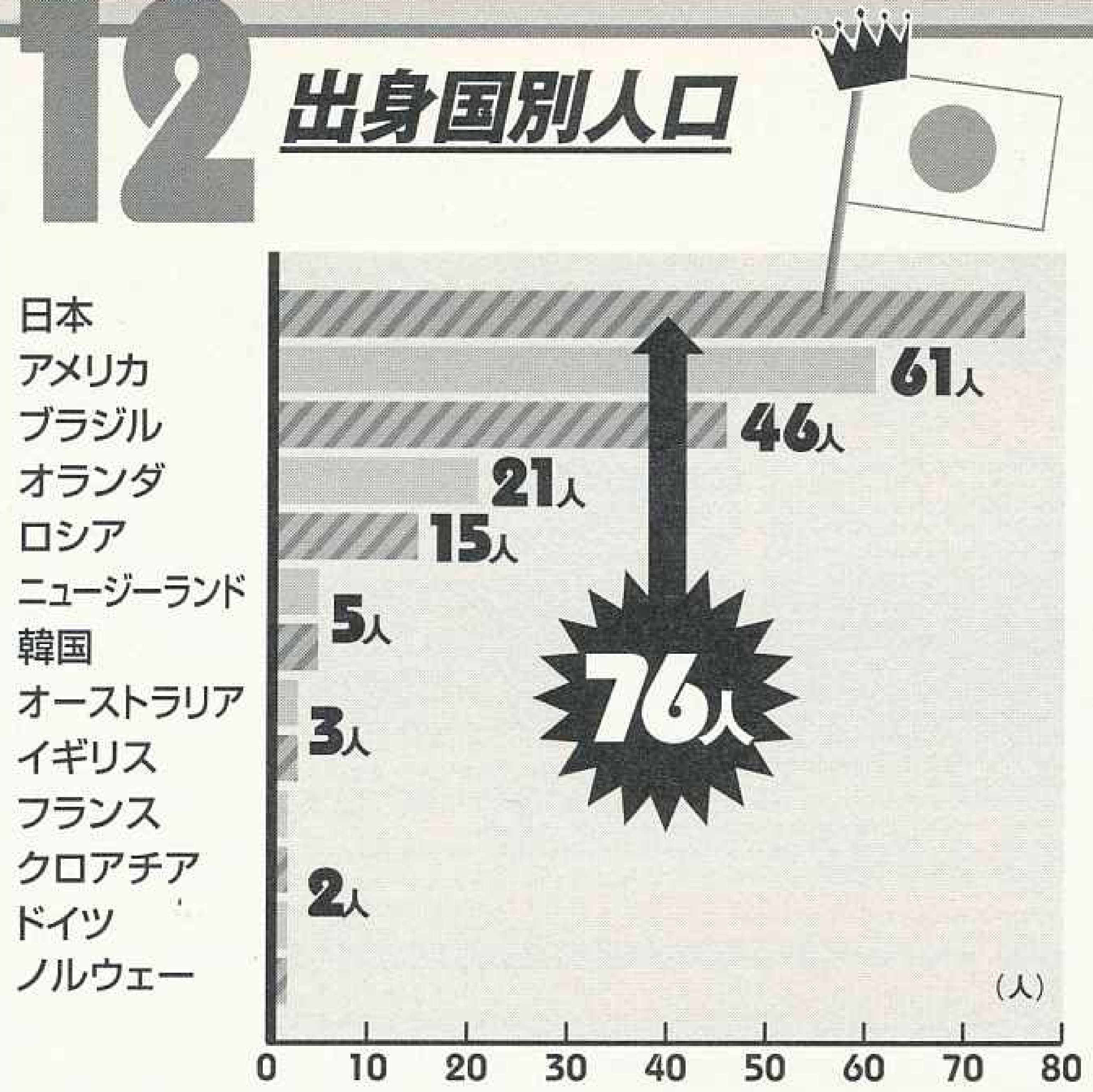


1. ヴァンダレイ・シウバ **10回**
2. 桜庭和志 **9回**
3. 髙田延彦/エメリヤーエンコ・ヒョードル **7回**
4. ミルコ・クロコップ/アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ/マーク・コールマン **5回**
8. ハイアン・グレイシー/五味隆典 **4回**
10. 高山義廣 **3回**

解説

『PRIDE』で名勝負を繰り広げてきたヴァンダレイ・シウバと桜庭和志が1位と2位にランクされた。計3度行なわれた桜庭vsシウバ、そしてエメリヤーエンコ・ヒョードルvsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラは、いずれもメインに組まれており、『PRIDE』の黄金カードである。また3位に食い込んだ高田統括本部長は初期の『PRIDE』ではほぼ毎大会メインを務めていた。ちなみに試合数No.1のイゴール・ボブチャンチンがメインを務めたのは『PRIDE GP2000』の決勝のみというのは意外な結果だ。(逆に一度しかメインに登場しなかった選手が試合数No.1というのもそれはそれで凄い)。そして2回以上『PRIDE』に参戦し、全試合メインで戦ったのはヒクソン・グレイシーと高山義廣の二人だけ。ある意味、プロとしての理想的な姿だ。

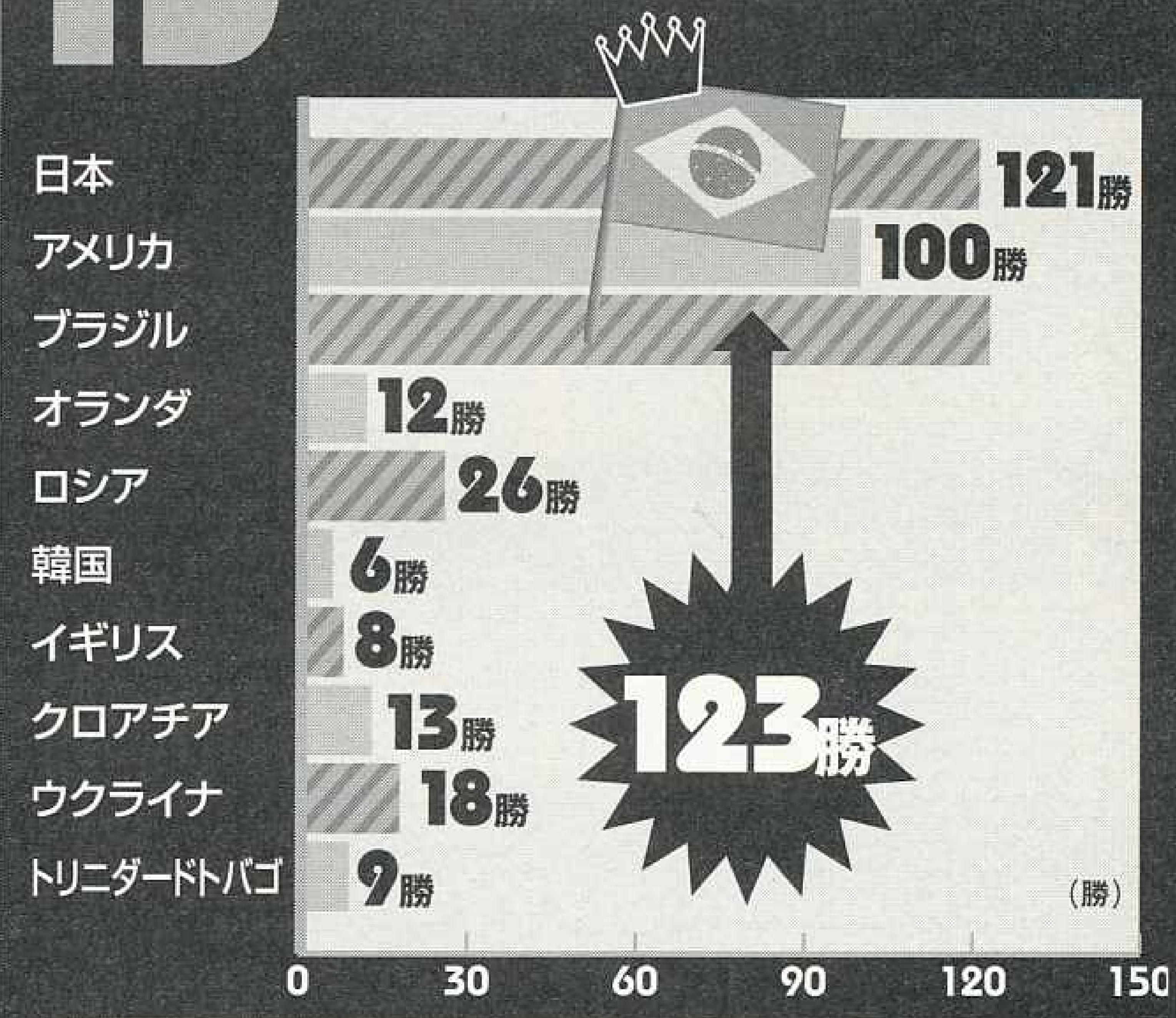
12 出身国別人口



解説

日本発のイベントということもあって、やはり日本人の出場選手が最も多い。2位にはブラジル、オランダ、ロシアといった格闘大国を抑えてアメリカがランクイン。アメリカ、ロシア、オランダ出身の選手は1、2試合しか闘わない選手が多いのが特徴的。逆にブラジル出身の選手は複数試合をこなす選手が多く、総合格闘技の先進国らしくブラジルからは常に有望な人材を輩出されている。上位５カ国と下位５カ国では数にかなり開きがあるが、オセアニア地区からの参戦選手が多いことは意外。韓国人選手５人という数字も見逃せないところだ。珍しい国でいえば、チェチェン共和国、アルメニア、タゲスタン、キューバなどがある。ちなみにアゼルバイジャン出身で、田村潔司と対戦したアリエフ・マックモドは、日本在住で日本語がしゃべれる陽気なおじさんです。

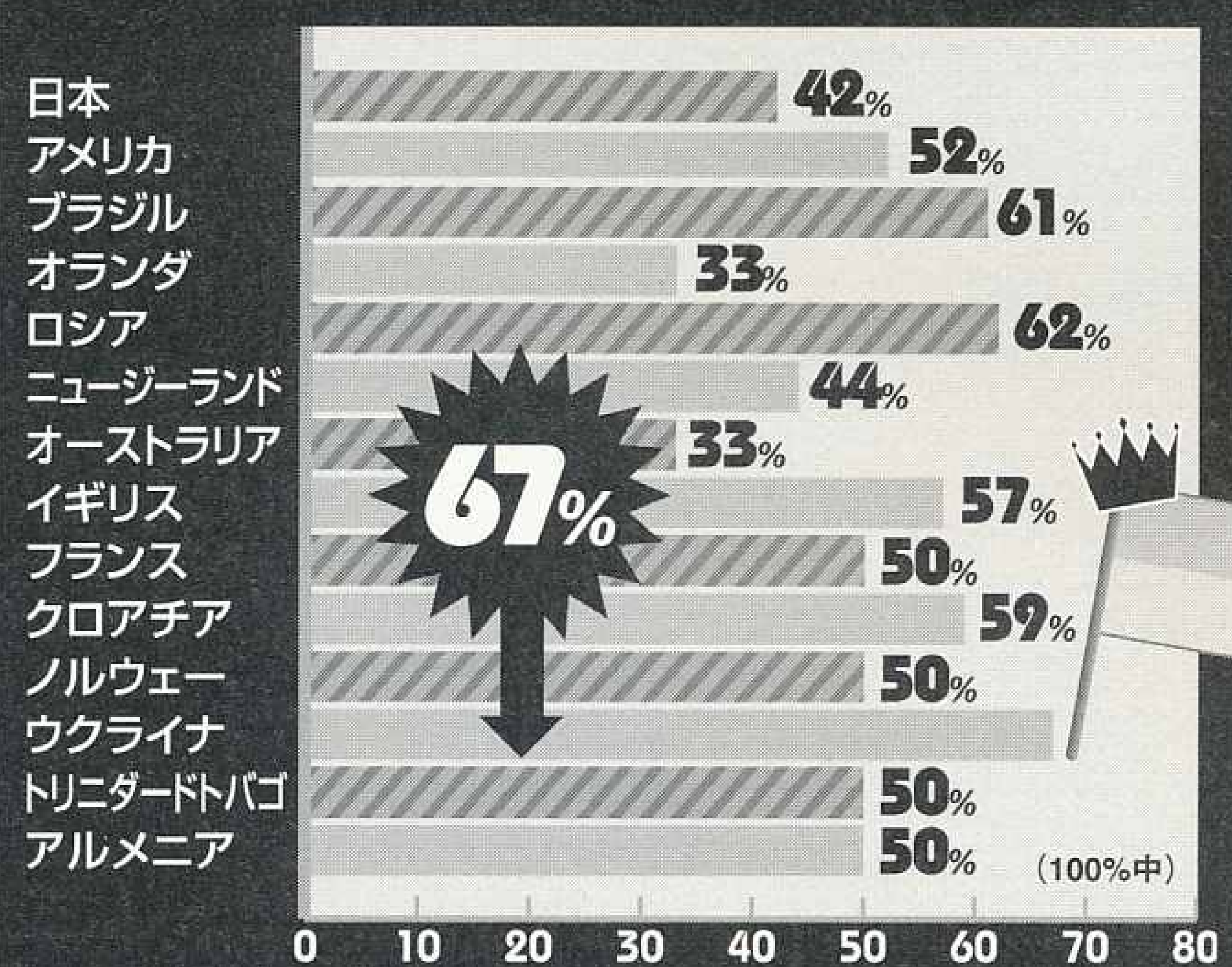
13 出身国別勝ち数



解説

日本よりも30人、アメリカよりも15人少ない出場選手数ながら、最も多い勝ち星を挙げたのはやはりブラジル。シュートボクセ・アカデミーやブラジリアン・トップチームといったチーム勝率の高いチームを抱えていることが1位の要因となった。ブラジルとは対照的に出場選手数に対し、勝利数が少ないのがオランダ。勝ち星が先行している選手がアリスター・オーフレムとセーム・シュルトだけではさすがに数字は伸びなかったようだ。ちなみにウクライナ、トリニダードトバゴ、クロアチアの勝ち数はイゴール・ボブチャンチン、ゲーリー・グッドリッジ、ミルコ・クロコップの個人の勝ち数と同じ。ロシアの場合もヒョードル＆アレキサンダーのエメリヤーエンコ兄弟、セルゲイ・ハリトーノフの個人戦績がほとんどを占めるという結果が出ている。

14 出身国別勝率

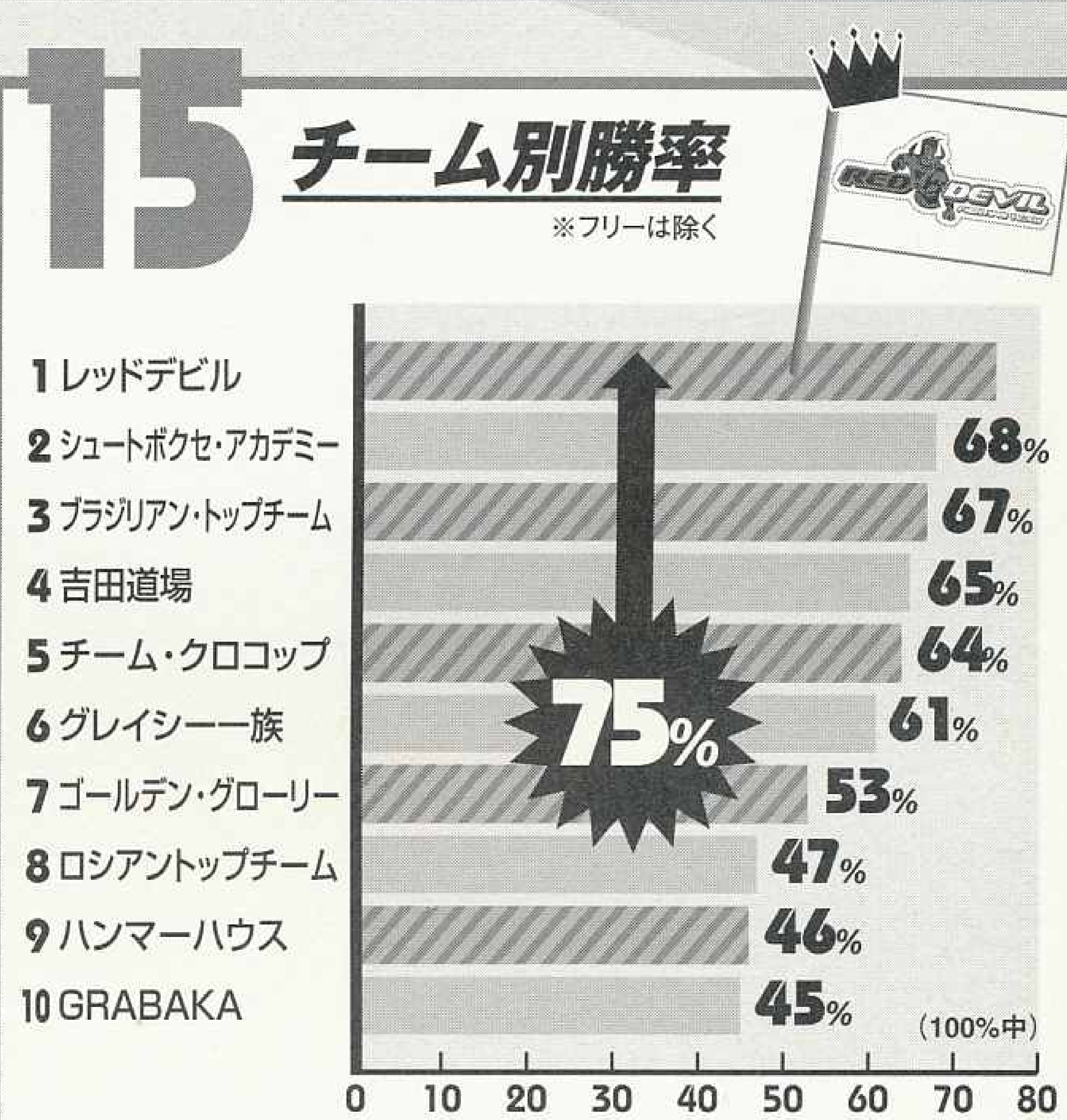


解説

ウクライナの67％はイゴール・ボブチャンチンの個人戦績であるため、実質1位は62％の勝率を誇るロシアだ。勝ち数同様、ヒョードル＆アレキサンダーのエメリヤーエンコ兄弟、セルゲイ・ハリトーノフの存在が大きくランキングに影響した。そのロシアに僅かに及ばなかったブラジルだが、ロシアとの出場選手数の差（ブラジルの方が30人多い）を考えれば、格闘技王国の称号はやはりブラジルということになるだろう。意外なところでは4位のイギリス。選手数が少ない上に、カーロス・ニュートンとジェームス・トンプソンと勝ち星が先行する選手が多かったことが、ランクインの要因となった。対照的に選手数が多く、勝ち星が先行する選手の少ないオランダや、勝った経験のある選手がマーク・ハントのみのニュージーランドは下位に低迷する結果となった。

15 チーム別勝率

※フリーは除く



解説

意外にもレッドデビルがランキング1位。ヒョードル、アレキサンダーのエメリヤーエンコ兄弟が勝ち星を稼ぎまくったことが、この結果につながったといえる。同様にチーム・クロコップもミルコ・クロコップの頑張りでこの位置にランキングされていると言っていいだろう。シュートボクセ・アカデミーやブラジリアン・トップチームは多くの選手を送り込みながら、この高い勝率をキープするのはさすが。チーム全体のレベルの高さをうかがわせる。日本からは吉田道場とGRABAKAがランクイン。高田道場に関しては、桜庭和志とそれ以外の選手の戦績に差が大きく、ランキング入りするまでには至らなかった。勝利6割のグレイシー一族だが、これはヘンゾ一門の積極的に試合をするという姿勢からくるもの。負けを恐れずに試合をする姿勢は評価すべき点である。

16 ヒョードルのパウンドを最も多く受けた人ランキング



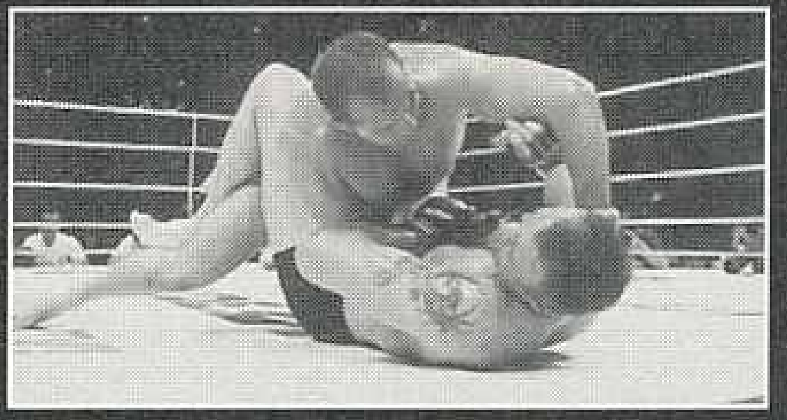
① アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ 149回



② 髙阪剛 132回



③ ミルコ・クロコップ 99回



④ セーム・シュルト 23回

⑤ ヒース・ヒーリング/ゲーリー・グッドリッジ 22回

⑦ 藤田和之/ズール 1回



解説

“人類最強の洗礼”を最も多く受けたのは、やはり、ヒョードル相手に3戦もしているアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラである。その内訳は、一戦目の『PRIDE.25』が108回、2戦目の『PRIDE GP 2004 決勝戦』が17回、3戦目の『PRIDE男祭り2004』が24回。2戦目がバッティングにより1R途中でストップしたことを考慮すると、やはり除々に減っているのは、ノゲイラによるヒョードル徹底研究の成果によるものか。総合数では劣ったものの、1試合1Rで幕を閉じたにも関わらず、132回ものパウンドを受け続けた髙阪剛の数字は凄い!! 写真と数字だけを見ても、その試合で何が行なわれたかは容易に想像できる。4位にランクインしたセーム・シュルトはヒョードルの『PRIDE』初登場の相手。このときからヒョードルによるパウンド劇場は始まっていたのだ！

17 髙田本部長の「出てこいや!!」角度検証

解説

髙田本部長の「出てこいやー！」ポーズのなかで最も反り返り角度が激しかったのは、写真からもわかるように『PRIDE GP 2005 2回戦』が行なわれた大会。約110度である。この日は、ショーグンvsホジェリオや桜庭vsアローナなど、髙田本部長に呼ばれて出てきた男たちは、勝ち負けに関わらず、好試合を連発。さらに、同角度（120度）で2位に入った『PRIDE GP 2004 2回戦』『PRIDE GP 2003 決勝戦』もそれぞれ小川直也のヘビー級4強入りが決まったり、ヴァンダレイがミドル級王者に輝いたりで、観客動員数も43,711人、67,451人など大盛況だった大会である。つまり「出てこいやー！」時の反り具合と大会の盛り上がりは比例する見方もまったく否定できないのだ。次に、髙田本部長が「出てこいやー！」と叫ぶときには、ぜひ大会の盛況ぶりと重ねて見てみることを提案したい。

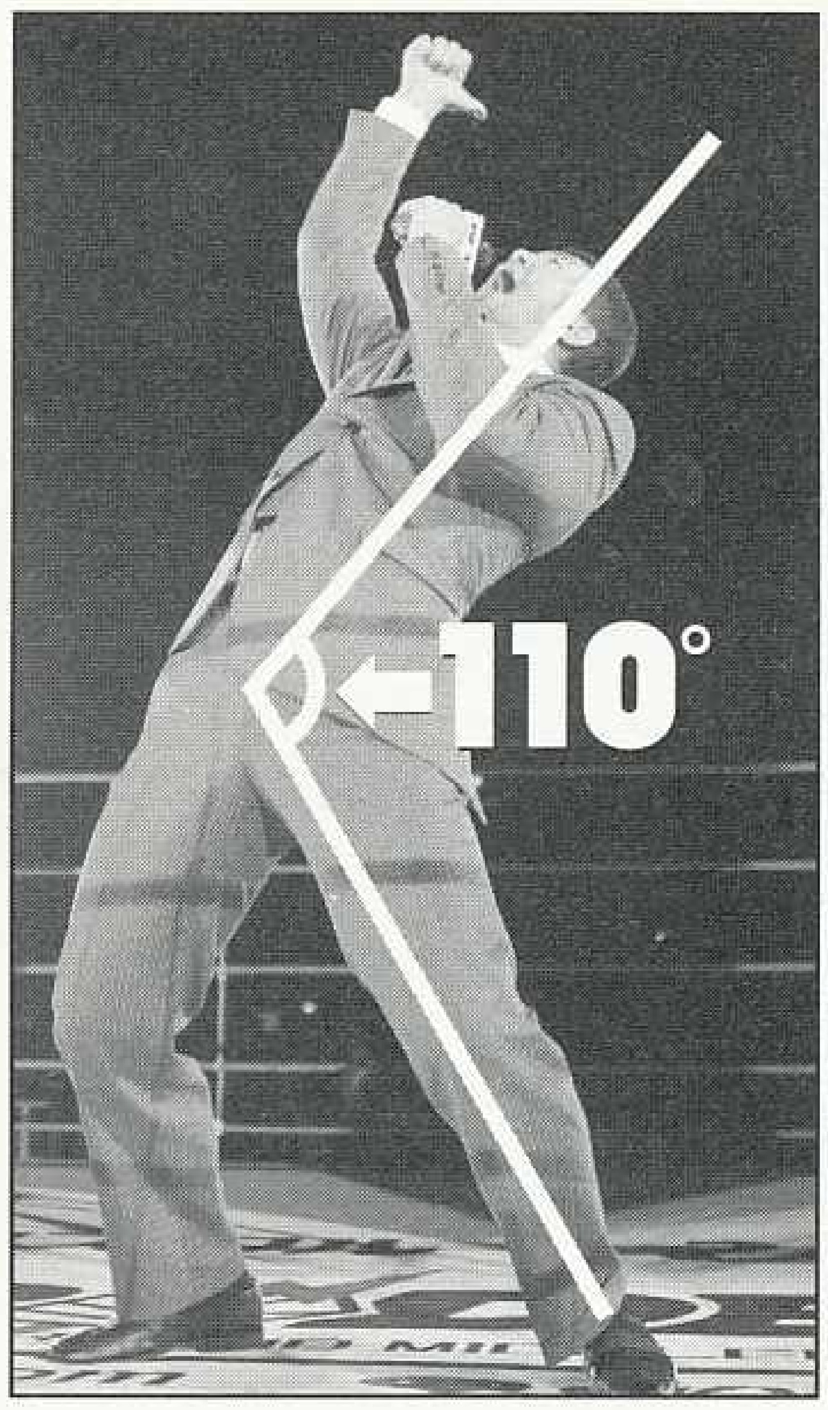
① 『PRIDE GP 2005 2回戦』（2005年6月26日）





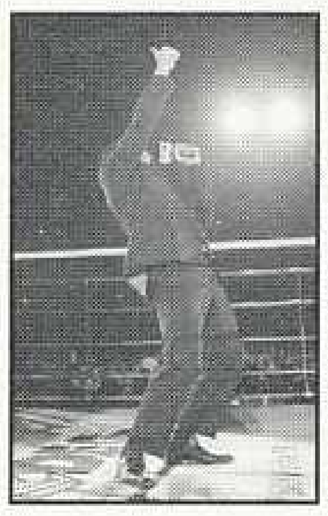






② 『PRIDE GP 2004 2回戦』（2004年6月20日）

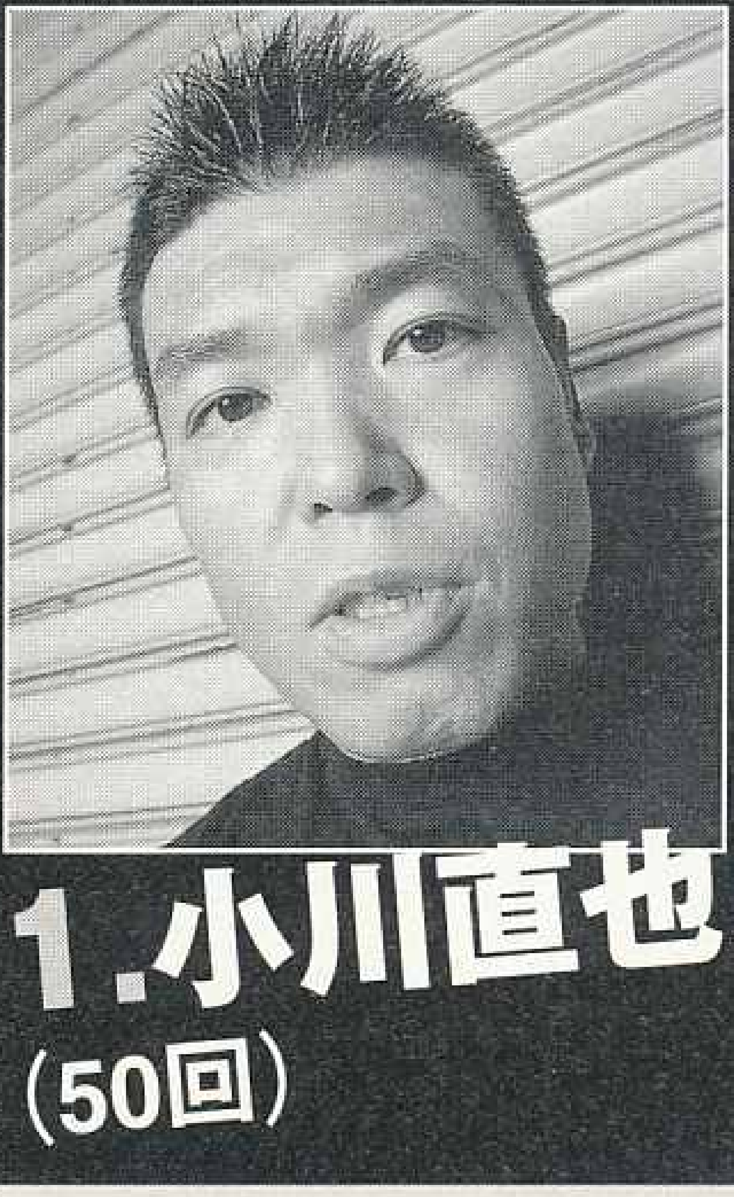
『PRIDE GP 2003 決勝戦』（2003年11月9日）



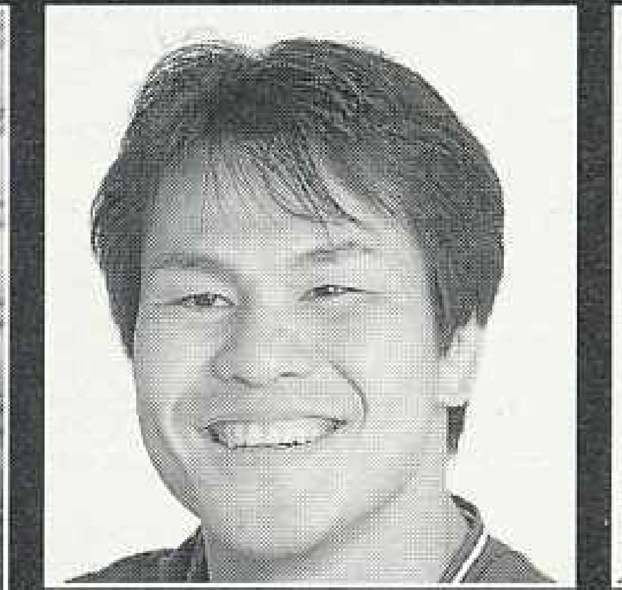


番外編 『紙のプロレス』『kamipro』に最も多く登場したPRIDEファイター

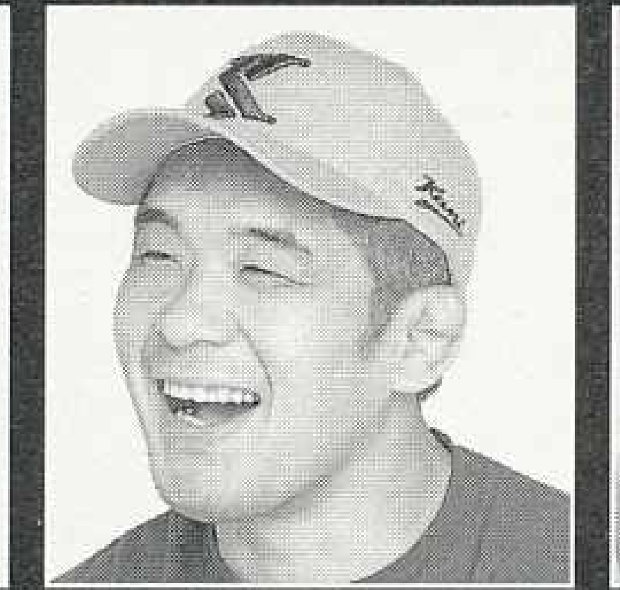
※インタビューに限る ※『kamipro』97号現在



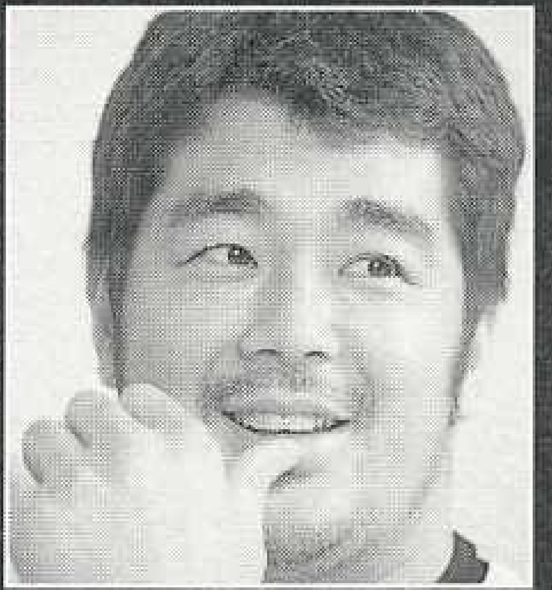
1.小川直也（50回）



2.田村潔司（41回）



3.桜庭和志（38回）



4.髙田延彦（30回）

5. アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ/エメリヤーエンコ・ヒョードル/ミルコ・クロコップ（23回）

8. 金原弘光（22回）

9. アレクサンダー大塚（17回）

10. 高山善廣（16回）

解説

『紙のプロレス』&『kamipro』の登場回数は、『PRIDE.6』ゲーリー・グッドリッジ戦からPRIDEに参戦している小川直也が最多の50回。『ZERO-ONE』参戦時の破壊王との対談や、『ハッスル』についてのみ語ったインタビューもある、……というか、それがほとんどだが、そんな細かい話は聞きたくない！ とにかく「おいーっす！」とばかりにオーちゃんは誰よりも多く本誌のインタビューに応えてくれたのだ。続いて2、3位は僅差で田村潔司、桜庭和志がランクイン。このあたりは『PRIDE』での活躍や期待度が反映された数字。また、5位は“ヘビー級3強”といわれる3人が同数でランクイン。これから誰が抜きん出てくるのかは先の無差別級GPでの活躍次第か。8位の金原弘光は40号から出没するUインター対談シリーズが影響している。

PRIDEわっしょい!! COLUMN

PRIDEと新日本プロレス 最強を巡る攻防

文／金澤克彦

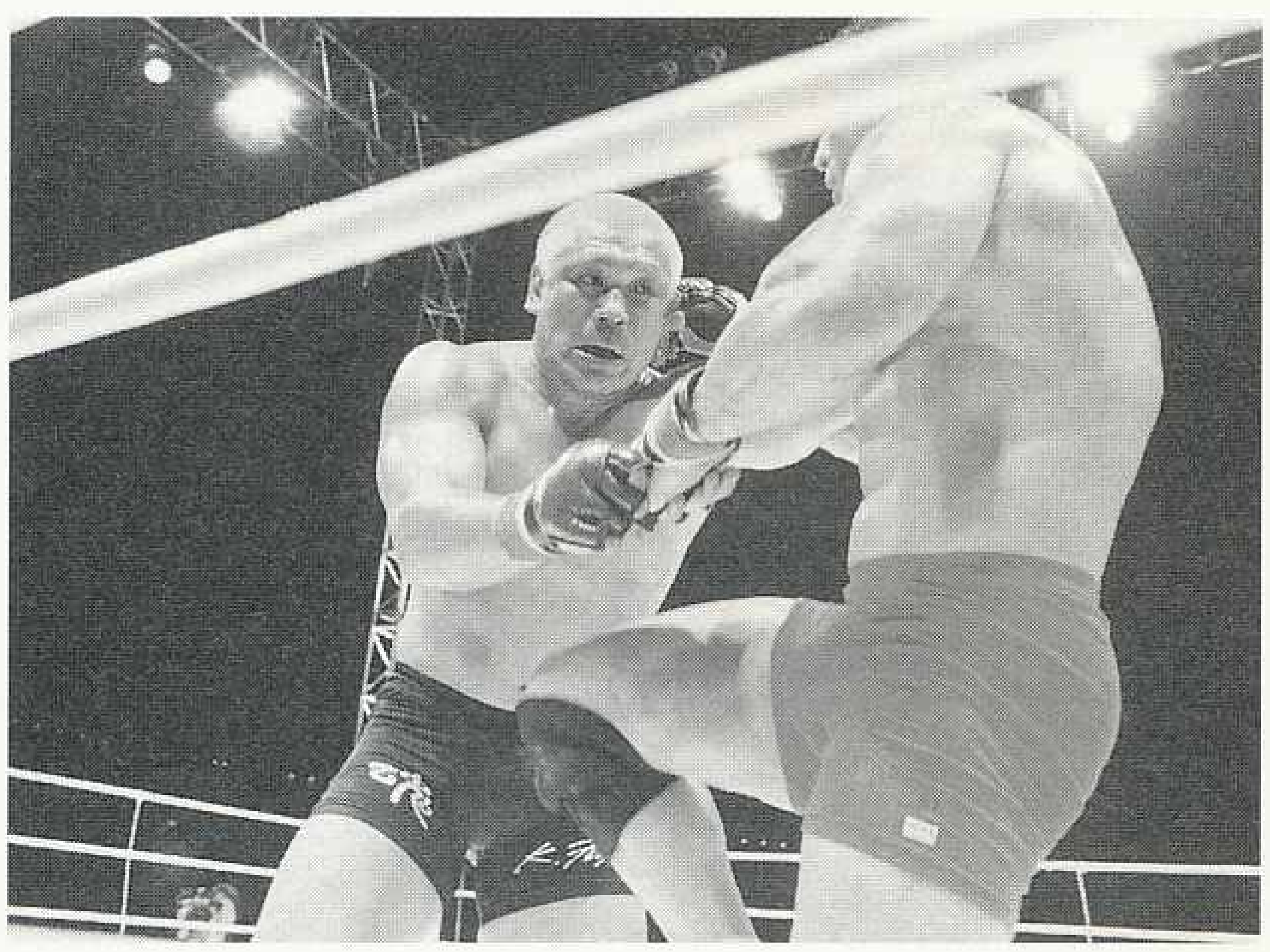
そもそも『PRIDE』のルーツとは髙田延彦VSヒクソン・グレイシーにある。いくら頭の固い格闘技ライター（※例えば元UWF信者のクマクマンボとかね）が、プロレスを否定しようが、格闘技バブルに我が世の春を謳歌しようが、この事実は動かない。『PRIDE』が「プロレスラーありき」から発祥したことを、まず肝に銘じてほしい。いいかい、銘じたかい？　それじゃあ、始めようか！

じつはほんの10年ほど前まで、最強とは新日本プロレスの代名詞だった。髙田がヒクソンに連敗しようとも、船木誠勝が返り討ちに遭おうとも、バンバン・ビガロがキモにひとヒネリされようとも、敗者の戦法を否定しつつ、総合格闘技にはアンタッチャブルを貫くことでなんとか伝説を固守していた。そこに風穴を開けてしまった男が藤田和之。99年12月、プロデビューから3年で〝異端児〟藤田はプロレスに見切りを付けた。ふと上を見てみたら、闘魂三銃士（武藤、蝶野、橋本）、健介、天山、小島、永田、中西……と幹部レスラーがズラリ。「俺にお鉢が回ってくるのは何年後なの？」。極めて正常な思考である。

藤田は単独でリングスと接触。あの前田日明とも直接会談をもった。「いくらだ？」。前田の話はファイトマネーにまで及んだ。これが「いくら（もらってるん）だ？」なのか、「いくら（ほしいん）だ？」なのか判別がつかないため、とりあえず「×××万です！」と藤田が夢のような金額を口にしたという逸話もある。このまま藤田がリングスに入団していれば、その後の新日本の歴史は違ったものになったろう。リングス行きを決心した藤田は師匠のアントニオ猪木に電話を入れた。

開口一番、「オマエは俺を敵に回すのか!?」と猪木。続けて、「とにかくこれから飯でも食おう」。これで藤田の運命は大逆転。猪木イズムと新日本出身の二大看板を引っ提げて『PRIDE』へ電撃参戦。当時、霊長類ヒト科最強と称されたマーク・ケアーに引導を渡し、現役IWGP王者としてプロレスラーの高山善廣と横アリ大会のメインで激突。瞬く間に日本人ヘビー級最強戦士の称号を頂戴した。

PRIDEか、リングスか——。新日本の運命を変えた藤田和之の決断


猪木の元を離れ、現在はフリーの藤田和之。その動向が注目されている。

当初、新日本は藤田をプロレスラーの強さの象徴と祭り上げ、快哉を叫んでいた。ところが、エグゼクティブ・プロデューサーとして『PRIDE』にVIP待遇で迎えられた猪木は、二の矢、三の矢を放ち始める。まずはケンドー・カシンこと石澤常光。元レスリング全日本王者でブラジル遠征時に、カルロス・グレイシーJrのバッハ道場に3ヵ月通ったこともある本格派だ。しかし、新日本を退団しフリーランスに近い藤田と、新日本所属選手である石澤では立場が違った。練習・準備期間は1ヵ月弱。さらに決戦10日前までプロレスの試合を4連戦こなしている。新日本にとっては夏の本場所『G1クライマックス』の最中とあって、やはり人気抜群のカシンは興行に欠かせない存在であったのだ。

8・27西武ドームの『PRIDE.10』。石澤は敗れるべくして敗れた。グレイシーの狂犬、ハイアンの左右ストレート13連打に轟沈。やはり準備不足の感は否めなかった。しかし、屈辱を舐めた石澤は1年後の2001年7月、満を持してハイアンにリベンジ。さらに同年大晦日の『INOKI BOM—BA—YE』にも出陣（対子安慎吾／引き分け）しているが、年明け早々に新日本を退団。猪木と決別し、全日本プロレスへ移籍している。

同時期に『PRIDE』に登場した安田忠夫のモチベーションは借金返済だった。人生を賭けた大博打で佐竹雅昭に辛勝し、2001年の大晦日にはK—1のジェロム・レ・バンナから奇跡の大金星。一夜にして、ダメ親父からニッポン一の感動親父に昇格した。一方、プロレス界の喧嘩番長こと小原道由は、『PRIDE』戦績・2連敗に終わり本来の地力を発揮するに至らなかった。

新日本から様々なレスラーが『PRIDE』に討って出る中、ファンにもっとも衝撃を与えた試合が、2001年大晦日の永田裕志VSミルコ・クロコップ。この一戦に関しては猪木からの圧力云々よりも永田の向上心と野望が生んだチャレンジと位置づけしたい。先にミルコと肌を合わせた藤田も「アイツはビビリ。永田先輩なら行ける！」と断言していたし、藤田戦、髙田戦の2試合だけではミルコの力量を測ろうにも材料不足だった。ところが、新日本のエースは21秒で惨敗。以降、ミルコはプロレスラー・ハンターの名をほしいままにする。

振り返ってみると、新日本から『PRIDE』への橋を渡った藤田の存在は、猪木復権の原動力ともなった。新日本プロレスの価値観そのものにも大きな影響を及ぼしている。元々、藤田にとっては安全パイと見られていたK—1戦士ミルコを、総合の怪物に仕立ててしまったのも藤田である。当人のまったく意図せぬところで、新日本と『PRIDE』の歴史が転がり始めたわけだ。この先もし藤田が無敵のヒョードルを倒すことにでもなれば、結果的に新日本も『PRIDE』も藤田の手の平で転がったことになるのではないか？　やはり藤田和之はとんでもない玉なのかもしれない。

the women WASSYOI

女祭り

PRIDE

PRIDEを支える女たち



アナウンサー
高島 彩



リングアナウンサー
レニー・ハート



DSE USA
神田由紀乃



DSE ロシア
エカテリーナ・コルサコワ



DSE広報
島田真希



私、シウバとデートしたんですよ!!

フジテレビアナウンサー

アヤパンこと 高島彩

実況・解説席でおなじみ!!

女特集第一弾はやっぱりこの方！ LIVE中継や『PRIDE女祭り』など、多方面で『PRIDE』を盛り上げる高島彩アナウンサーです。PRIDEファイターと関わる場面も多い高島さんの目には、『PRIDE』はどのように映っているのか。その全貌をお聞きしました～。

聞き手／松下ミワ　撮影／平工幸雄



毎回、きらびやかな衣裳で『PRIDE』に登場する高島アナと内田アナ。写真は、この日の解説である高田本部長と吉田選手と試合前に談話中の様子。事前にコミュニケーションを図るのもアナウンサーの大事な仕事のひとつだ。

私、ちゃんとした初仕事は『PRIDE』なんです でも最初は「わかんない！」という感じで（笑）

――今日は、『PRIDE』を伝える側でいらっしゃるアナウンサーの方にお話をおうかがいしようということで、トリノ五輪から戻ってきたばかりの高島さんにお越しいただきました！

高島　よろしくお願いします！

――では、さっそくですが、高島さん。そもそも高島さんが『PRIDE』と関わるようになったのはどういう経緯だったのでしょうか？

高島　じつは私、01年に入社したんですけど、ちゃんとした初仕事っていうのは『PRIDE』なんですよね。

――あ、そうだったんですか。

高島　ネット上でのお仕事とかはやってたんですけど、画面で放送される番組の中では『PRIDE』のCS放送で司会をしたのが初めてなんです。

――それはいきなり「高島さんお願いします」という感じで？

高島　そうですよ。だから、一番初めは正直言って「わかんない！」みたいな（笑）。

――じゃあ、それまで『PRIDE』は観たことがなかった、と？

高島　振り返るともう5年も前なのであまり鮮明には覚えてないんですけど、たぶん「PRIDE？　聞いたことあるなあ」ぐらいだったんじゃないかと思います。兄がけっこうプロレスとか好きなので、深夜に放送されてたプロレス番組とかはチラッと観たことはありましたけど。だから、自分が会場に行くなんてとんでもない！　って思ってました。

――もともとアナウンサーになられたときには、どんな仕事を希望してたんですか？

高島　それこそいま担当している『めざましテレビ』みたいな情報番組です。入社したときには『めざまし天気』、いまでいう『めざニュー』という番組を第一希望に書いてたんです。

――じゃあ、とくにスポーツ系を希望してたわけでもない、と。

高島　だから本当に「なんで私ここに呼ばれたんだろう」という感じでしたよ（笑）。でも、なんだかんだ言って『PRIDE』の仕事って、初仕事だったんですよね。そういうこともあって、素直に「嬉しい！　頑張ろう!!」って思えましたよ。

――そこはすぐに切り替えられたんですね。

高島　でも言ってしまえば、男の人が目の前で殴り合うわけじゃないですか。だから「これは私、大丈夫かな」ってけっこうドキドキしたこともありましたね。生理的に受け付けられないものだったら、それを仕事にするのは怖いじゃないですか。

――まるでホラー映画のような扱いですね（笑）。それで、実際観てみた感想は？

高島　（語調を強めて）それはそれはおもしろかったんですよ！

――アハハハ！　おもしろかったですか（笑）。

高島　私ってけっこうハードなものが好きだったんだなって気づかされ

ました（笑）。それこそ私たちはリングサイドで観戦させてもらっているので殴る音も聞こえるし、汗も飛び散るし。なんて言うんだろう、熱気って言うんですか？ それを1メートルぐらいの距離で感じられるわけですよ。

——毎回、特別席で観戦しているわけですからね。

高島 超特別席ですよ！ そんな席で初めて格闘技を観たのでかなり衝撃を受けたのと、あとは「これ、いける」という直感がありました。

——初回でビビッときましたか。具体的に高島さんは『PRIDE』ではどういうお仕事を担当されてるんですか？

高島 ハハハハ。仕事ですか？ "司会・高島彩"って書いてあるので、一応司会なのかなぁ。

——「なのかな〜」っていうのは？（笑）。

高島 メインキャスターとして、（小池）栄子ちゃんが実況席に座ってコメントを述べたりと仕事をしているんですが……。

——で、高島さんと内田さんは？

高島 たびたび思うんですけど、私たちこれが仕事でいいのかなって感じです（笑）。基本的にオープニングにチラッと映るぐらいなので。あ、でも年末の『男祭り』なんかになると、選手の控室からリポートをさせていただいたりしてますね。あとは番組の宣伝かな。



——選手の取材もしてらっしゃるんじゃないですか？

高島 あ、ありますね。そういうときは、それこそ『kamipro』のコピーから何から、（指で5センチぐらいの幅を作り）こんなに資料を渡されるんですよ。でも、自分が好きそうな記事しか読みませんけど。

——そうですか（笑）。しかし、まったく格闘技を知らなかったというのは、お仕事としてはけっこう大変だったんじゃないですか？

高島 最初は私も1年目だったんで、仕事だからキッチリやらなきゃって思ってたんですよ。楽しさとかは二の次だって。だから始めのほうは『PRIDE』のオフィシャルホームページからその日に出場する選手のページをプリントアウトして、ハサミで切ってノートに貼って、自分が観た大会からいろいろ書き加えようと思って、全然わからないくせに「え〜っと、何分何十秒、腕ひしぎ十字」とか書いて（笑）。

——とりあえず書いておけばいいやって感じで（笑）。

高島 そういう意識のもとにやってたんですよ。「素早い動きで、マウントを奪う……と。で、マウントってなんだろう」っていうような感じ。でも、そのメモが役立ったかって言われると、そんなに……。だから最近はもう細かいことは気にせず、楽しもう！ という感じで。

——じゃあ、ルールも実況を聞きながらわかってきた感じなんですね。

高島 そうでしたね。あ！ それと、凄いことがあったんですよ!!

——どうしたんですか!? いきなり。

高島 昔、空手の取材で5日間ぐらいブラジルに行ったんですよね。その時間を有効活用しようということで、あのシュートボクセにも訪問したんです。そこでですね、私、シウバと闘ったんですよ！

——凄いじゃないですか!!

高島 でしょ？ ちゃんとグローブ着けてジャージになって。それで、腕ひしぎ十字でシウバからタップをとったんですよ！

——それって、あのミドル級王者からタップを奪った唯一の人間ということになりますよ！

高島 もう私、それで押していこうと思ってるんです！ でも、全然クローズアップしてくれないんですよ。だから、これだけはぜひ書いておいてください！

——了解しました。プラスしてヴァンダレイの公式記録にも「×vs高島彩」と入れたいところですね。

高島 入れといてくださいよ！ ホント。

——これは公表する価値があるかもしれません!!

高島 なんでこの話になったかとい

うと、ルールがわからない私にシュートボクセの柔術専門の先生が「腕ひしぎ十字はこうやって、こうやるんだよ」っていうのを教えてくれたんです。それで「じゃあ、やってみる？」ということになって。

——それでシウバが来てくれたわけですね。ちなみにブラジリアン・トップチームには行かなかったんですか？

高島　そちらも行きました。でも、それは見てるだけだったんですけどね。トップチームはね、（小声で）空気が重かったというか……。

——アハハハ！

高島　なんか雰囲気が。たぶん真面目にやってただけなんだろうけど、私としては相手にしいてくれなかったんでつまんないな、なんて（笑）。

——でも、ノゲイラなんかは小池栄子さんと凄く仲良くしてるみたいですけどね。

高島　そうそう。でも、栄子ちゃん怒ってましたよ。最近、ノゲイラの好きなタイプの娘のとこに、「佐藤江梨子」って書いてあったみたいで。でも、よく変わるんですよね、選手のタイプの娘って。

——ブラジル人はとくにそういう印象がありますね。

高島　そういえば、私、シウバとデートもしたんですよ。

——本当ですか？

高島　クリチーバの街で。ゲームセンターで遊んだり、「お土産買ったら？」ってシウバが言ってくれたんでショッピングセンターに行ったり。パーカー選んでもらったりしたんですよ。

——あらあら。

高島　で、そのパーカーとシウバが



ＭＣを務める小池栄子、内田アナ、高島アナが、タレントの光浦靖子や東原亜希らを迎え、『PRIDE』を女性の視点でトークする『PRIDE女祭り』。「好きなタイプ」や「彼氏にするなら」という一風変わった内容が主な議題に。

着てたパーカーにサインもしてもらったんですけど、じつは間違って洗濯しちゃったんですよねぇ。

——容赦ないですね（笑）。

高島　ちょっと汗臭かったから（苦笑）。それに油性ペンだから平気かなと思ってたら、洗ったらサインがとれちゃったの！　もうショック。じつは水性ペンだったみたいで、跡形もなく消えちゃって。

——油性と思ってたなら、しょうがないですね。

高島　そんなこともあって、まあ、『ＰＲＩＤＥ』には楽しんでグッと入っていけたんじゃないかなって。それに、ほら、『ＰＲＩＤＥ』ってストレス解消になるんですよ。

シウバにサイン入りパーカーもらったんですけど間違って洗濯しちゃった

——なるほど。アナウンサーの方って華やかに見えてかなり忙しそうですもんね。

高島　月～金曜で『めざましテレビ』を担当して、なかなか外にも出られないこともあるし、土・日も収録があったりしてけっこう休みがないんですよね。『ＰＲＩＤＥ』も仕事で行くんですけど、これが休日って感じなんです。「わー」とか「キャー」とか叫んだりすることで凄くストレス発散してるの。

——ちなみに、高島さんが過去に一番叫んだ試合って、どの試合なんですか？

高島　一番かぁ。さく……、あ！　それよりもドン・フライの試合だ。誰とやったんだっけ？　外国人選手だったんですけど。

——もしかして、ケン・シャムロックですかね？

高島　そうかもしれない！　なんかですね「これは男と男の闘いだ！」と思って涙が出てた記憶があります。たしか二人はライバル関係というか、因縁があるって感じだったんですよね？

——ＵＦＣの大会で対戦するはずだったんですけど、シャムロックがケガで棄権したんですよね。それで、フライが「ヤツは逃げたんだ！」と言い出して。そっからはもう犬猿の仲だったみたいですよ。

高島　私、ぜんぜん知らなかったんですけど、試合前の映像を観て「あ、こういう背景があって闘うんだな」と思うと、拳を交える男の世界が途端に広がって、本当に感動したんですよ。また、最後に二人が握手した場面で「わーっ」と泣いたんです。そしたら、先輩たちに「最初は

おなじみ、実況・解説席の面々！！



内田恭子アナ
１９９９年フジテレビ入社。『PRIDE』では高島アナと一緒に実況の後ろでMCを担当。『すぽると』や『PRIDE女祭り』でもハイテンションでPRIDEを盛り上げる。



竹下陽平アナ
１９９６年フジテレビ入社。『PRIDE.31』ではキュートな髪型で出演。『スクール・ウォーズ』に感動し、中学一年生から熱血ラグビー部に所属していた。



佐野瑞樹アナ
1994年フジテレビ入社。スポーツ中継をはじめ、『めちゃ×2イケてるッ！』など、バラエティ部門でも活躍。アナウンサーの中では最もキム・ミンスに似ている。



長坂哲夫アナ
1990年フジテレビ入社。三宅アナと同じく、実況を担当。『PRIDE』をはじめ、各種スポーツの実況で観客を盛り上げる。ちなみに、少年時代の夢は検察官。



三宅正治アナ
１９８５年フジテレビ入社。『PRIDE』では実況を担当。高島アナをして“（実況しているときは）カッコいい”と言わしめる大御所。絶妙なひと言で視聴者を魅了する。



東原亜紀
格闘情報番組『SRS』の四代目格闘ビジュアルクイーンを務める。『PRIDE女祭り』では、美濃輪育久が選ぶ“最もヘブンな女”の第一位に輝いた。



小池栄子
『PRIDE』のメインキャスターを務める。ノゲイラ兄と大の仲良し。また、高島アナ、内田アナとはよく一緒にお酒を飲みにいく仲だという。

※『クイズ！ヘキサゴン』……出場者は６人。出場者が順番にクイズを出題し、他の回答者の正解・不正解を推測する。「この人は不正解だ」と思った人物に「○○さんにヘキサゴン」と叫び、予想が当たれば、その回答者に×がつく。最終的に×を３つつけられた回答者は脱落。最後まで生き残った物が優勝者となる。ちなみに高島アナは優勝したことがある。

そういうもんだよ」って言われて肩を叩かれたりしましたけどね。
——アハハハ！　先輩方も同じ思いをしてきた、と。
高島　でも、ああいう殴り合いが凄い試合って目を背けたくもなるんですけど、薄目を開けて指のあいだからついつい観ちゃうんですよね。
——怖いもの観たさということでしょうね。じゃあ、けっこう高島さんは男気のあるようなタイプの試合が好きって感じなんでしょうか。
高島　（迷いなく）はい！　鮮やかな一本勝ちとか、スピーディな寝技の展開とかも好きですけどね。それこそ、息を飲む瞬間があるというか。そっちは逆にじっくり観ますね。（身を乗り出して）こうやって。
——（のけぞりながら）じ、実際、高島さんは選手と接する機会もあると思うんですけど、ぶっちゃけ、お気に入りの選手って誰なんですか？
高島　えー、誰だろうなぁ。やっぱり盛り上がるのは美濃輪選手とかですよね。入場のときは「わーい」って一緒にふざけたりしてるんですよ。あとはなんだろうなぁ。それこそ、この前、武士道を初めて見たんですけど、桜井〝マッハ〟速人選手がカッコいいって思いました！



——ライト級&ウェルター級GPが同時開催された『武士道・其の九』でしょうか。
高島　そうだったかな。とにかく、桜井〝マッハ〟速人選手は凄く有名なので、自分の意志で格闘技を観たことがなかった頃から知ってたんですけど、リングサイドで本物を観て「うわ〜、カッコいい〜」って盛り上がちゃって（笑）。
——そうですか。
高島　でも「この選手、前はカッコよかったけど、今日はなんか太ってるなぁ」と思ったりすることもあるんですよね。外国人選手とかとくに。それをパンフレット見ながら、内田さんと「せーの！　今日はどっちがカッコいい？」とかやるんですけど、そういうのが好き。
——なるほど（笑）。そういえば、小池栄子さんと3人で司会をされてる『PRIDE女祭り』という番組もけっこうそういうノリというか、独特の視点でコメントされてますよね。

『PRIDE』ではやっぱり派手な試合を観たいです打撃でも、寝技でも！

高島　あ〜、そうなんです。私、あの番組大好きなんです！　内田さんと栄子ちゃんと仕事するのは凄く楽しいんですよ。栄子ちゃんに突っ込まれるのも楽しいし、内田さんに突っ込めるのも楽しいというか。
——そういう意味では高島さんはちょうど中間的ですよね。どっちの位置も楽しめるというか。
高島　そうなんですよ。居心地のいいポジションなんです。あの女3人は凄く息が合うから、収録が終わってから控室でもずっと3人でしゃべってるし。
——じゃあ、あれはけっこうみなさん素のまんまのテンションなんですか？
高島　スタッフの方が編集してくれてるからいいですけど、本当はもっと言いたい放題ですね。それこそ、どの選手がタイプだとか。
——そういえば2005年のミドル級GP準決勝でヴァンダレイ、ショーグン、アローナ、アリスターの4人が残ったときに、誰がタイプかという話をしてましたよね？　結果、アリスターとは誰も付き合いたくなかったという（笑）。
高島　そうそう！　だって、アリスターっていつもハンマーを持ってくるじゃないですか。たいして盛り上がらないのに（キッパリ）。
——盛り上がってませんか（笑）。
高島　たぶん。でも、懲りずにハンマーを持ってくるところからして「デート中とか、空気読めなそうだよね」とか、そんな勝手な話をしてたんです。そういえば『PRIDE・31』では持ってなかったんですよ。だから「よし！」って思ったんですけど。
——「なんで？」って寂しがる人もいたみたいですけどね（笑）。
高島　あっ、そうなんですか!?
——試合後のインタビューでは単純に「忘れました」って言ってましたけど。
高島　な〜んだ。忘れちゃったんだぁ。あー、でもそういうお茶目なところはかわいいなぁ。なんて、こうやって好き勝手言うのが楽しいんですよ。そうしているうちに、アリスターの特徴もわかるじゃないですか。
——なるほど。そんなプラス思考があったとは（笑）。テレビつながりでいうと高島さんは『クイズ！ヘキサゴン』にも出演されてましたよね？
高島　はい。高田さんと桜庭さん、吉田さん、中村さんがいましたね。
——クイズなんかでは、けっこう選手の素が出る瞬間もあるかと思うんですけど、リング外での選手の素顔という点では高島さんはどんな印象を受けました？
高島　意外と中村選手がダマし上手だなと思いましたね。
——中村選手がですか？　それは意外ですね。
高島　中村選手って、思ってることとかすぐに顔に出そうじゃないですか。でも、全然違うんです。私、すっかりダマされてしまって。これはマズイと思ったので、私はすぐに中村選手を落としました。
——高島さんのほうが、ある意味怖い気もしますけど（笑）。

高島　中村選手がいたら負けちゃうと思ったんですもん。だから意外と心の内を隠すことができるんだなという印象でしたね。対照的に桜庭さんはいっつもポーカーフェイスだけど、それこそまったく小細工をしないというか、面倒くさがりやだなというか（笑）。

—IQレスラーというフレーズは当てはまりませんでしたか。

高島　そうそう、IQレスラーだから頭使ってくるのかと思いきや「面倒くさいことはしません」という感じで、意外とストレートだったんですよね。

—ちなみに、高田本部長はどうでした？

高島　高田さんはあのままでした。

—アハハハハ！　そうですか（笑）。

高島　こんなに好き勝手言ってますけど、本当に『PRIDE』ってあの方たちが作ってる舞台なんですよねぇ。

—そっちが本職ですもんね。今年は無差別級GPもありますし、『PRIDE』はますます盛り上がっていくと思うんですが、高島さんからして『PRIDE』に望むことは何かありますか？

高島　素人考えですけど、やっぱり派手な試合が観たいです。打撃でも寝技でも。寝技なんかは、試合がどんどん流れるような、ノゲイラが二人いて闘うみたいな感じの試合が観たいなあ。

—それはかなりのドリームカードですね！　ホドリコとホジェリオの兄弟対決っていう手もありますけど（笑）。

高島　なんか、息継ぎを忘れてしまうような試合が観たい。でも、やっぱり殴り合いもいいなあ。

—逆に、高島さん、実況とかはしないんですか？

高島　いやいやいや！　とんでもない。仕事でやれって言われたらなんとか頑張りますけど、一観客として観てたいです。だから、いま実況している三宅さんなんかは本当に凄いなと思いますよ。

—見る側からすると、三宅さんって大変なんだろうけど半分趣味みたいになってるなって印象を受けるんですけど。

高島　それはそうだと思います。でもアナウンサーって、その瞬間的に選んだ一語が試合に華を添えたり、みなさんの記憶に残る試合になることもありますし。たとえば、桜庭さんが負けた試合なんですけど「桜散る」なんかは、凄く印象的でしたし。

—それこそ翌日のスポーツ紙の一面になったりもしますからね。



高島　そういう意味で、やはり三宅さんを見てもカッコいいですよ。実況アナウンサーがカッコよく見える瞬間ですね。アナウンス室だと普通のおじさんなんですけどね（笑）。

—普通ですか（笑）。でも、選手が花道を歩いてくるときなんかも、実況を聞いてるだけでかなりボルテージが上がりますからね。

高島　上がる、上がる！　だからこそ『PRIDE』の魅力を伝える側としては、この興奮度を観て聞いて視聴者の方も盛り上がっていただけたらなあと。

—アナウンサー軍団ともども、一緒に盛り上がりましょう！　って感じですか。

高島　そうですね！　って言っても、おめかしするわりにはたいして映らないんですけど（苦笑）。出るとしたら、それこそ『フライデー』なんですよねぇ。

—アハハハ！（笑）。そう言えば、よく撮られてますよね。

高島　でも、頑張ってもっともっと『PRIDE』を盛り上げていきたいと思ってますので！

—わかりました。では、今後とも見応えのある映像を期待しています！　今日は本当にありがとうございました。

【06年3月1日／フジテレビにて収録】

たかしま・あや
1979年2月18日、東京都出身。成蹊大学法学部政治学科を卒業後、2001年フジテレビ入社。愛くるしいルックスと絶妙なツッコミで茶の間の好感度も高く、"アヤパン"の愛称で知られている。意外にも『PRIDE』が初仕事と呼べる仕事。



リングを彩る声の女魔術師

レニー・ハート

PRIDEの会場を訪れたことのある人なら、誰もが覚えている女性アナウンサー。「インザ・レェエェッドコォォオナアァアァ、アンントゥニオウゥ・ホドゥリゴ・ノゲイエルラァァァ――――!!」。一度聞いたら忘れられない、ハイテンションかつ印象的なコール。2000年PRIDE.GPより参加、選手コールで会場に華を添えてきた彼女から見たPRIDE、そして選手コールとは？

構成／ささきぃ　撮影／乾晋也
通訳／上杉どんぐり

『PRIDE』との出会い

—今日は『PRIDE』で活躍する女性達という特集で、PRIDEの会場でもとくに輝いているレニーさんにお話をうかがいたいと思いました！

レニー　あら本当？（可愛らしく）恥ずかしいわぁ。

—レニーさんが『PRIDE』に参加したのは、2000年のGPからですよね？

レニー　Ohhh！　ハヤイネ〜（日本語で）。

—お仕事を始める前は、格闘技に興味はあったんですか？

レニー　全然なし！（キッパリと）。だって仕事を紹介していただいたときに、仲介してくれた人も格闘技のことをわかってなかったんだもの（笑）。「レニー、あさってヒマ？　ボクシングかなんだかわからないけど、東京ドームでなんかあるから、やる？」「やる！」って。

—なるほど（笑）。

レニー　でも、いま思えばそこで仕事をいただけたのはとってもラッキーでしたね。

—最初に観たときの感想はどんな感じだったんですか？

レニー　凄いっていうか「ああ、なるほど、こういう仕事か」って思いました。そのあと、自分の中でちゃんと本当にこの仕事をやりたいのかどうか考えたんですね。で、「あ、ハンサムだわ」って（笑）。

—アハハハハ！　選手たちがハンサムなのが決め手になりましたか（笑）。

レニー　そう、目の保養にいいねって（笑）。最初はね！　でもいまはルールもちゃんとわかってるし、自分の（リングアナの）スタイルも作っているからね。この仕事を大好きなんだな〜ってよく思いますね。

—もうすっかり『PRIDE』の名物になっているレニーさんのコールですが、一番最初に選手コールをするとき、『PRIDE』側からは「こういうふうにしてくれ」というような指示はあったんですか？

レニー　ノー。（私のコールは）完全なオリジナルです。

—では、突然出てきたんですか？

レニー　そうね。（エメリヤーエンコ・）ヒョードルの名前は言いにくいから考えなきゃいけなかったわ。あと、ミルコ（・クロコップ）も。彼の名前の音は短く硬いし、彼のパーソナリティに通じる何かカッコいいイメージを考えてね。彼のテーマソングもクールな感じだったので、怖い低い声で「ミルコ・クロコップ!!」と。ほかの選手はどうしてそうなったかわからないんですけど（笑）。

—ほかの選手はその場で考えた、と。

レニー　だいたいね。あとテーマ曲の印象もあるわね。全然知らない初めての選手もいるけど、誰のコールでも常に全力でいくわよ、もちろん。

—コールを行なううえで、レニーさんが最も気をつけていることはなんですか？

レニー　そうね。ありのままの自分でいることかな。ちょっと改まって言うのは恥ずかしいけど（笑）、コールするときは、私はアーティストなんですよ。だから別の世界に行ったような感覚でね。そしてコールする前に、お客さんの気持ちを感じるようにするんですよね。静かになったりするときもありますしね。で、ときどき人気の高い選手だったりすると、ちょっとプレッシャーを感じたり（笑）。でも、マイクをオンにすると、自分自身もスイッチが入ってナチュラルな状態になるんですよね。

—リングアナのお仕事は、一見そうは見えないかもしれませんけど歌やお芝居と同じ部分が大きいですよね。

レニー　イエス！　私は自分のジャズバンドもあるし、即興もやるし、芝居もあるし、子ども向きの芝居もやっているし、この5月には大人向けのライブもやるんですけど、それらとまったく同じですね。リングアナも、お客さんとのライブなんです。

PRIDEファイターの素顔

—さきほど、大好きな選手という言葉が出てきましたけど、とくに好きな選手を挙げるとしたら誰ですか？

レニー　ヴァンダレイ・シウバ、ミルコ・クロコップ、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラァラァラァラァ（とコール時のように巻き舌で）、ヒカルド・アローナ、タカノリ・ゴミ、カズシ・サクラバ。

—ブラジルの選手が多いですね。以前、『PRIDE』のパンフレット上でマリオ・スペーヒーがセクシーだとおっしゃっていたのを拝見したのですが（笑）。

レニー　イエス！　彼は大人っぽくって、ロマンチックで、ソフィスティケートされた感じよね。入場の音楽もシブい！（うっとりした声で）マァ〜リィオ・スペ〜ヒィ〜！。

—生コールありがとうございます（笑）。

レニー　彼はこのコールを、（スペーヒーの声マネをして低い声で）「サンキュー・ベリー・マッチ。気に入ったよ」って言ってくれたんですよ。

—例えば、ミルコ選手はどういうイメージでコールされてますか？

レニー　そうね。とってもマジメ。ジェントルマン。ヒーロー。タフ。

—エメリヤーエンコ・ヒョードルなんかは？

レニー　（突然、鋭い目つきになって）ん

選手コールは私のオリジナル。マイクをオンにすると私自身もスイッチが入るの

ん？　発音が違いますね。

――え？　す、すいません（笑）。エ、エメリヤーエンコ・ヒョドゥル……？

レニー　まぁまぁね（笑）。（自分の口元を指さしながら）「エメリエンコ・フェドール」ですね。あ、で質問はなんでしたっけ？

一同　ダハハハハ！

――えーと（笑）、ヒョードル選手はどういうイメージがありましたか？

レニー　彼なんかも、マジメね。彼は他の選手に比べると、リラックスしているというか、余裕があってね。自信があるけど傲慢じゃない。人としては優しいし、エレガントでもあって、ベビーフェイス。ナイスガイよ！

――氷の王者はナイスガイ！（笑）。日本人選手では、最近大活躍の美濃輪育久選手がいますよね？

レニー　ミノワワワワワワ（と、コール時の声で）？

――はい。彼のイメージは？

レニー　クリエイティブ。個性的。そして、少しクレイジーな感じ（笑）。たぶん別の世界にいるよね。宇宙人なのかな？

――アハハ。その通りですね（笑）。

レニー　ちょっとクレイジーですけど好きです。やっぱり「クリエイティブ」かな。そして一所懸命。トレーニングも面白いでしょ？　富士山登ったり、海岸で走ったりね。

――好きな選手の中で、五味選手の名前が出ましたけど、この1年、彼の闘いを観ていてどうでしたか？

レニー　凄い！　彼は覚えるのがクイックね！　毎試合10倍ぐらいに成長しているし、ジェントルマン。自分のスタイルをハッキリわかってるね。テーマ音楽も「♪SCARY……」（五味のテーマ曲を歌い出す）。もうピッタリよ！

――アハハ。

レニー　あと、彼はビューティフルな目をしてるわ。こないだ、それを本人に言ったの。そしたら「あ、どうも」って（笑）。

――アハハハハ！

レニー　かわいい～。で、「もう金髪じゃないのね～」と言うと彼は「どっちがいいですか？　コレ？　金髪？」って。「（素直に首を縦に振りながら）ハイ。わかりました」って。ホントにキュートよ。

『PRIDE』を観たことのないファンへ　そして「3回のトライ」

――レニーさんがまだ『PRIDE』を観たことのない人に対し何か言うとしたら、なんと言いますか？

レニー　「バイオレンスなんじゃないの？」という人には、「観ないとわからないんですから、来てみて」って。バイオレンスとは違いますから。もちろん格闘技だからバイオレンスな部分はあるんですけど。でも、バイオレンス（を観るのが）が目的じゃない。「（身振り手振りで大きく動かして）選手のテクニックとテクニックがどういうふうになったら勝つ」とかっていうのがわかればおもしろいわ。なんでもそうだけど、モノゴトを見ないで、堅い意見を言う人は余裕がないわ（笑）。なんでも、自分でやったり食べてみてからでしょ。格闘技を知らない人は、ただの大きい男のストリートファイトだと思っているわけでしょ（笑）。

――まずは1回自分の目で『PRIDE』を観て、意見を言うべきだと。



左から選手コールを行なうケイ・グラント氏、レニー・ハート、そして「○○選手が4点ポジションでの攻撃を……認めたため！」の声でおなじみの太田真一郎さん。まさにPRIDEを声で彩る3人なのだ。

レニー　あ、でもね、本当は3回。それはどんなことでもそうなんだけど。私の人生のポリシーなの、「トライ・エブリシング・スリー・タイムス」っていうのがね。というのは、1回だけだと比べることができない。2回目は最初に好きにならなければ、キライなままかもしれない。でも3回やってみれば、そのあとの意見はたぶん（自分にとって）正しい意見ですね。だから、なんでも3回はトライしなきゃ。セックス以外はね（笑）。セックスは何回でも続けられるわ。

――アハハハ！　それは3回じゃなくてもいいと（笑）。

レニー　スミマセン。あとケーキもいくらでも食べられるわ（笑）。ケーキとセックス！

――えーと（笑）、レニーさんの発音なんですけど、コツはありますか？

レニー　ノー（笑）。それは口笛と同じで、簡単にできる人はできるし、できない人は全然できないのよね。レニーのコールは私にしかできないの！（笑）。

――舌の動き方にポイントがあるんですか？

レニー　はい。私は「ウルルルルッ（と舌を巻きながら）」っとやっても、舌の左側の少し内側だけをこうやって震えさせるの。でも、あんまり教えると私が特別な人ではなくなっちゃうから教えないわ（笑）。

――あ、これ以上は企業秘密だと（笑）。

『PRIDE』のファンに対してメッセージ

――『PRIDE』のファンに対して何かメッセージをお願いします。

レニー　そうね、見続けてってことかな（笑）。『PRIDE』のファンなら、友だちに『PRIDE』を紹介してください。『PRIDE』の会場で生で見たときのすごさを伝えてくださいね。そして私に声援をください（笑）。「レニー!!」と呼んでください。

――ダハハハハ！

レニー　それから、PRIDEファイターのように、何事もあきらめないで一生懸命生きてください。そうすれば、悪いことにはならないはずよ。

――お話しをうかがっていると、レニーさんが非常に選手へ敬意を払っているのがわかりますね。

レニー　そうね。選手はみんな優しいのよ。コールマンもただのキングコングじゃないし、みんな話してみるとナイスガイです。シウバもジェントルマンで、家庭をちゃんと考えているし、グッドファイターですし。リングの中でも、外でもいい選手がほとんどですよ。世の中には、好きだったのに話してみたら鼻が高かったり、バカだったり、ということは多いのよね。『PRIDE』に限ってはなかったわ。みんな紳士的な態度を取ってくれるし。じゃなきゃ、辞めるわ。

――（笑）。

レニー　でも、もしそんなことがあっても辞めないけど（笑）。DSEはステキな舞台を作ってるし、ファンも本当に『PRIDE』を好きだし。あ、これはただのPRじゃないわよ、本気よ（笑）。

――了解です（笑）。ファンの皆さんは、選手、そしてレニーさんに声援を、と。

レニー　そう、私もいつも闘っているからね。レニー・ハートという名前を覚えてくれたら、とっても嬉しいわ。私は、巻き舌と叫ぶだけの人じゃないのよ！

――もちろんです！　今日はありがとうございました。

レニー　ウェルカム！

レニー・ハート
青二プロダクション所属。2000年『PRIDE GP』よりリングアナを務めている。資生堂、トヨタ、ハーゲンダッツCMのナレーションほか、歌や舞台でも活躍。アメリカ出身、誕生日は5月10日、生年は非公開。「私はフォーエバー・ヤング、そしてフォーエバー・クレイジーよ！（レニー）」

女祭り
PRIDEを支える女たち
DSEロシア編



世界の強豪はココからやってくる!

DSE USA 神田由紀乃に聞く 一問一答!! メールインタビュー

日本発の『PRIDE』を世界に発進する「DSE USA」。今回メールインタビューに答えてくれた神田さんは、高田 vs ヒクソン戦の前段階から『PRIDE』に関わり、『PRIDE.4』終了後にはアメリカに渡って「DSE USA」を拠点に着々と『PRIDE』全米進出を図っていた陰の立役者だ。神田さんの話によると、榊原代表がここ最近、毎度のように口にする『PRIDE』USA大会も、いよいよ現実味を帯びてきているようである。

構成／松下ミワ

Q01 まず、神田さんが「DSE USA」のお仕事に関わった経緯を教えてください

私が『PRIDE』に関わるようになったのは、1996年の初秋に榊原（当時、東海テレビ事業）から「**ヒクソン・グレイシーと高田延彦の試合**をぜひ実現したいので、ヒクソンとの交渉に協力してほしい」という依頼を受けたのがきっかけでした。ヒクソンとは1994年の年末に、まったく別のビジネスをしていて、私自身つながりを持っていたんですね。その後、榊原の依頼を受けるうちに、本来の私の仕事とはかけ離れて『PRIDE』の仕事に関わるようになりました。

PRIDEビジネスの米国展開という意味では、1998年の『**PRIDE・4**』**直後**から仕事を始めました。「DSE USA」オフィスを設けて、**本格的に米国進出の業務を開始したのは2000年の1月**から。ちょうどDIRECTVとのPPV（ペイ・パー・ビュー）放送契約が締結できた頃ですね。

Q02 「DSE USA」では、どのような業務が行なわれているのですか?

大きく6つに分けることができます。

❶権利関係の営業と管理
❷選手管理および契約
❸海外向け映像プロダクション
❹アメリカでのマーケティングとパブリシティ
❺MMAに関する法や規制に対するロビー活動と各種ライセンス取得
❻英語版オフィシャルサイトの運営

私の仕事は、これら業務を直接または間接的に管理することです。ほかに北南米に加え、ヨーロッパ、アジアのテレビ放映権、ビデオグラム化権、そのほか周辺権利の営業から契約、選手契約、渉外などを行なっています。

Q03 PPVやビデオ販売の営業についてはどのような活動を行なってきたんですか?

北米におけるPPVの営業活動は『PRIDE・4』が終わってから始めたんですが、いま思えば暗中模索の毎日で、なかなか成果が上がらず苦しい思いをしました。その頃、アメリカではMMA（当時はUFCしかありませんでしたが）が**政治的な圧力によってケーブルTVから締め出されている**、というようなビジネス環境にあり、**一般的にも格闘技はネガティブなイメージがまだ強かった**ので、訪問する会社のほとんどから門前払いされるような状況だったんです。

しかし、それでも2000年5月のGP決勝戦からなんとかDIRECTVとの契約に漕ぎ着け、PPVで放送できるようになったことは本当に涙が出るほど嬉しかったですね。これを機に、もう一つの衛星放送会社DishNetworkと契約を結ぶこともできました。さらに、2003年にはケーブル会社のPPVを取りまとめているiNDEMANDとも契約を締結し、**いまでは全米約4500万世帯へPPVを発信できる**環境が整っています。

Q04 では、以前と比べて最近のPPV件数や販売本数は上昇している、と?

今後はPPVの件数はさらに上昇していくと見込んでいます。**この6年間のPPV回数は40回を超えています**し、おかげさまで、いままで無事故でこの放送実績を数えることになりました。このようなスポーツソフトを定期的にPPV放送に供給している会社は、じつは世界中でも**WWE、UFC、『PRIDE』の3社だけ**なんですよね。

また北米に限っていえば、同じく2000年から始めたビデオ（DVD）の販売数はかなり伸びてきています。とくに、ここ1年は大手のスーパーや家電販売チェーン店でも売られるようになったので、今後はさらに伸びが期待できると見込んでいます。

Q05 PPV販売件数は人気選手が出場するかしないかでもかなり増減すると思うんですが、アメリカのファンにとって目玉になる選手は誰ですか?

アメリカ人は基本的にどんな近代スポーツ競技においても**アメリカ人が負けるのを見るのは精神構造上耐えられない人種**なんです。どうしてもアメリカ人が勝てない競技は、あえて似たようなスポーツを作り出すこともあるんですよ（苦笑）。そういう意味で、UFCではアメリカ人が中心の選手構成になっていますし、アメリカでPPVの数字を伸ばすなら『PRIDE』でもアメリカ人選手にもっと頑張ってもらう必要があるとは思いますね。でも、やっぱり実績があってチャンピオンの座に留まりつづけている**ヴァンダレイ・シウバ**は人気者ですね。あとは、**ミルコ・クロコップ、マーク・ハント**のように破壊力のある選手も人気で、日本人選手の中では**五味選手**の人気は凄いですね。

高田本部長のふんどし姿は視聴者にショックを与えるかもしれないので泣く泣くカットしたんです

Q06 ちなみに、高田本部長のふんどし暴れ太鼓はアメリカ人の方にはどのように見られていますか?

じつのところアメリカでは**ほとんどの人が"ふんどし"を見たことがない**ので、**視聴者にショックを与えるかもしれない**と懸念されているんですね。そういうこともあって、2004年男祭りはアメリカではオープニングを泣く泣くカットしました。ただ、2005年のふんどし姿は、反響を見たかったこともあり、思い切って使ってみました！……ですけど、やはり多くのアメリカ人は"**力強い男のふんどし姿"ではなく"おむつ"と認識**したようです（笑）。

Q07 では次に、選手の契約交渉の話を聞かせてください。神田さんが契約交渉の際に

■「DSE USA」の歴史

1997年	PRIDE誕生
1998年	DSE設立
1999年	DSE USA設立
2000年	アメリカ初 PPV放映開始（DIRECTV、DishNetwork）、DVD発売開始
2001年	ネバダ州へプロモーターライセンス申請
2002年	全米初5カ所での『PRIDE・19』のプレスツアー開催
	ネバダ州プロモーターライセンス取得
	ビデオゲーム発売開始
2003年	ケーブルTVでのPPV放送開始（iNDEMAND）
2005年	アメリカ地上波放送開始（FSN）
2006年	カリフォルニア州プロモーターライセンス取得（予定）

最も苦労する点はどんなことですか？

大物相手の契約交渉は本当に苦労がつきものですね。まず、交渉者は相手から嫌われること、つまり〝悪役〟になることをイヤがっていては務まりません。大抵の場合、大物のファイターにはすでにエージェントやマネージャーがついているので、その人たちと**押したり引いたりの駆け引きをしながら最終合意へ持っていく**のが常です。その中で一番苦戦するのは、やはり家族がマネージャーを務めているケースです。身内になると、他人が評価するより、どうしても選手のことを好評価しがちですからね。なかには数倍高く売り込む人もいるんですよ。

Q08 具体的に、交渉が難航したエピソードってありますか？

昔の話でいうと、やはり『PRIDE・1』**のヒクソンとの契約**には手を焼きましたね。何せ、契約を結ぶまでに半年かかったんですよ。その期間は榊原と何度も渡米し交渉したものです。当時は予算がほとんど出せない状況だったので、飛行機も当然エコノミークラスでしたし、**1泊3日のスケジュールで渡米**したこともありました。私自身、途中で何度も挫折しそうになりましたが、榊原は決して最後まで諦めませんでしたね。おかげで、ようやくサインまで漕ぎ着けることができたんです。契約が成立したのは朝3時頃のことで、場所はヒクソンの自宅だったのを覚えています。そのとき、ヒクソンがとっておきのドンペリを開けて乾杯してくれたんですよねぇ（しみじみ）。

それから、精神的に参ったのは、ホイスが最初に『PRIDE』に参戦したときの契約交渉ですね。そのときの**交渉相手は兄のホリオン**で、彼は考えられる限りの要求を突きつけてきました。いま考えてもホリオンの**〝理不尽大王〟**っぷりは誰にも引けをとりませんね（笑）。

契約まで至らなかったのですが、**超大物プロレスラー**と交渉したこともありました。これにも苦労させられっぱなしで、私、胃潰瘍にまでなったんですよ！　**出血多量のため救急医療室に運ばれ、2日間意識不明**の状態でした。

Q09 「DSE USA」に選手が売り込みに来ることはありますか？

毎日のように、ビデオテープやDVDが送られてきます。電話の売り込みも多いですし。選手が直接連絡してくる場合があったり、マネージャーやエージェント、ときにはイベントのプロモーターから電話がかかってくるなど、様々ですね。映像だと、**選手のカッコいい部分だけを編集して送ってくる場合が多い**です。たまに試合映像ではなく、キックミットを蹴るだけのビデオやスパーリングの様子を送ってくる人もいますが、正直言って、それはあまり参考になりません（笑）。

Q10 「DSE USA」ではオーディションで有望な選手を獲得するケースもあるそうですが、オーディションはこれまでどれくらい開催されたんですか？

一度、2004年11月にUCLAキャンパス内の体育館でオーディションを行なったことがありましたね。そのときは事前に集まった**約250名**の応募の中から**書類選考で残った150名**に来ていただきました。体重別にウェルター級、ミドル級、ヘビー級と3クラスに分けて、実技テストとパーソナリティを見るための面談を行ないます。7名の審査員による協議の結果、後日**4名の合格者を選出しました**。実技の審査員は、榊原や高田本部長を始め、マット・ヒューム、バス・ルッテンにお願いして審査していただきました。インタビューの審査は私が担当させていただきました。UFCや『キング・オブ・ザ・ケージ』でもお馴染みの選手も参加していましたが、最終選考に残ったのは日本ではほぼ無名の選手ばかりでしたね。

Q11 たとえば、桜井〝マッハ〟速人選手のように日本人選手がアメリカで修行する場合は、「DSE USA」は選手のケアや取り次ぎをすることはあるのでしょうか？

以下のようなことをサポートします。

❶トレーニング先の選定
❷トレーニング先へのコンタクト
❸トレーニング内容、スケジュール、トレーナーの確認
❹宿泊、空港での送迎の手配
❺選手滞在中の確認（不自由はないか、トレーニング内容に満足しているか）などを行ないます。❺に関しては、トレーニング開始後1〜2週間くらいはモニターするようにしていますね。

Q12 「DSE USA」としては、日本人選手が海外修行を行なうことをどのように見ていますか？

修行をする選手にも修行先の選手にもプラスになるので、もっと盛んにやるべきだと思いますね。日本ではまだまだ先輩、後輩といった**年功序列の慣習**があるので、後輩が先輩に対して100％力を出したり、アドバイスをすることがなかなか難しいと思うのですが、海外では**お互いイーブンなトレーニングパートナーとして練習できる**んじゃないかと思います。

MMAはどんどん進化しているので、新しいトレーニング方法や技を吸収するには海外修行はもってこいだと思います。修行先の選手たちも大抵の場合は大歓迎をしてくれますので、お互いにとってマイナスに働くことは何もないと思いますよ。

あ！　ただ、ごく稀に**お財布をピザ屋で落とした選手や、寂しくて数週間で数十万円もの電話代を使ってしまった選手など**、思いがけないマイナス部分が出る選手もいます（笑）。

Q13 『PRIDE』大会のたびに帰国されていると聞きますが、日本とアメリカを行き来する神田さんから見て、アメリカと日本の格闘技に対する意識の違いは何か感じますか？

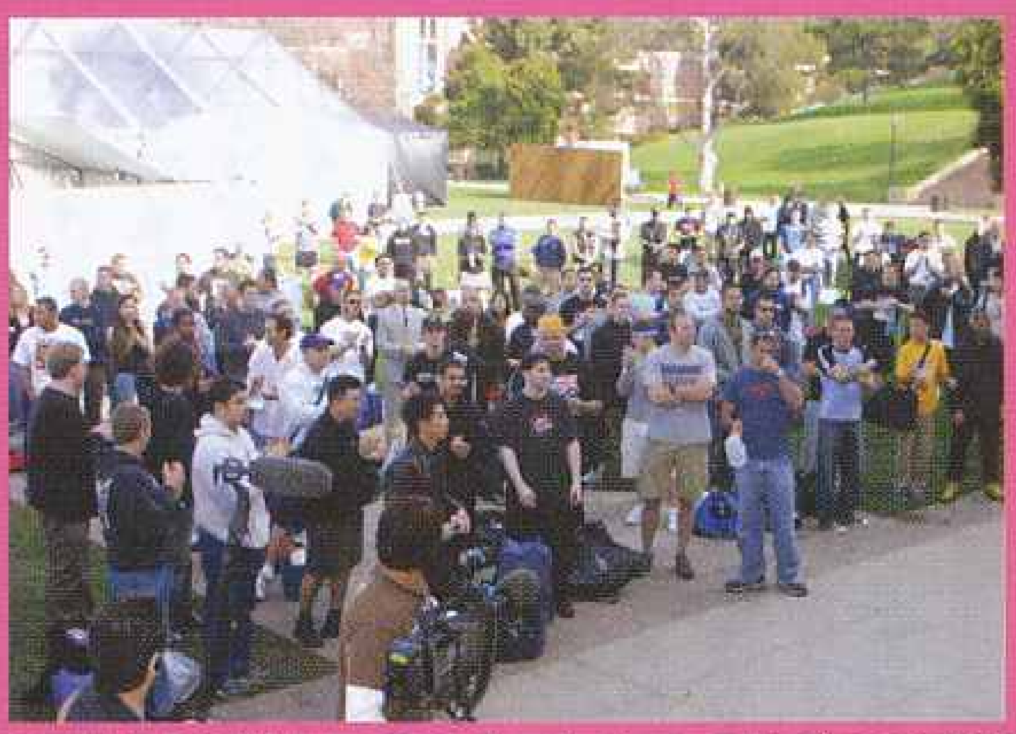
アメリカでは一般的に格闘技はストリートファイトやクラブやバーでの**ケンカの延長**だと考える人が多いです。とにかく、誰かを派手にぶちのめすところを、**ビール片手に大声で叫びながら観戦するのが好き**みたいですね。そういうこともあって、アメリカでは格闘技は規制の対象になり、いまでも多くの州で合法的にイベントを開催することができないんです。日本では、格闘技は確立された一つのスポーツだと思われていますよね。ほかのプロスポーツ選手と同じように尊敬の念を持たれている日本とは、かなり感覚が違うかもしれません。

Q14 神田さんは、アメリカでの格闘技はどのように位置づけられてると感じますか？

1年前までは本当にマイナーでアンダーグラウンドな捉えられ方をされていましたが、UFCがSpikeTVで、『PRIDE』がFOX SPORTS NET（FSN）で**日曜日の夜に放送**されるようになってからは、かなり地位は向上したと思います。と言っても、NBAやNFLとはまだまだ比較できるレベルではありませんが（笑）。同じ格闘技である**ボクシングの人気度を超えるのは、まだ半年くらいあとになるかも**しれませんね。

Q15 「DSE USA」創設以降、アメリカでの『PRIDE』認知度はどのように推移したんでしょうか？

やはり、ここ1年くらいで急速に高まってきていることは事実ですね。ですので、その勢いに乗じて一刻も早くまたアメリカでライブイベントを開催して、一気に盛り上げたいですね。また、その認知度が上がったことで、いままで見向きもしなかった企業がコンタクトをとってくることは多くなりました。ですから、ビジネスは以前よりもやりやすくなりましたね。



アメリカで行なわれたPRIDEオーディションでは、約250名が応募。そのうち書類選考で認められた約150名は榊原代表やPRIDE常連ファイターの前で打撃、寝技、ライトスパーリングなどの技術を披露した。

Q16 ここ数年、日本でも『PRIDE』アメリカ大会の話がたびたび話題になりますが、ズバリ実現の可能性は？

榊原の念願でもありますし、私自身の目標でもありますので、**今秋ぜひ開催したい**と思います！　マーケットが熟してきたので、ビジネスリスクが以前よりもだいぶ少ない状態で開催できると思うんですけどね。ただ、日本企業が米国社会で現場を持つというのは、**ビジネスリスク、政治的なリスクが無限にあります**し、いろいろな妨害が入ることが予測されますので、これらを一つ一つクリアして、確実に開催したいですね。

Q17 では最後に。「DSE USA」にいらっしゃる神田さんから見て、アメリカでの『PRIDE』の可能性をどのように考えていらっしゃいますか？

それこそ競合であるUFC**と建設的な切磋琢磨ができれば**、2001年あるいは2002年当時のWWEが持っていた市場の過半数シェアを得られると信じてます！

『PRIDE』オーディション当日の神田さんのタイムスケジュール



6:00	起床 (6:00)
	UCLAへ向けて出発 (7:00)
7:00	会場へ到着 (7:20)すでに何人かの応募者を会場前に見かける
	会場の管理者と最終打ち合わせ (7:50)各スタッフ到着（UCLA学生スタッフ15人、DSEUSAスタッフ、DSE東京スタッフなど）
	スタッフTシャツ、インカムなどの配布およびスタッフへのブリーフィング (8:00)
8:00	会場の最終設営確認、各スタッフへ指示 (8:10)
	[受付開始]審査員の方々到着 (8:30)プレス、ゲスト対応
	MCとの最終ブリーフィング (9:15)
9:00	オープニング、榊原社長、高田本部長の挨拶、オーディションの流れの説明 (9:30)
	バス・ルッテン、マット・ヒュームによる実技説明 (10:00)
10:00	オーディション開始 (10:10)16:00まではインタビューによる審査を担当
	↓
	審査集計 (16:00)オーディション合格者以外のベストグラップリング、ベストストライキング、ベストパフォーマンス、ベストルッキングなど
16:00	[閉会式]審査集計発表、閉会の挨拶 (16:30)
17:00	後片付け (17:00)会場を翌日のハッスルオーディション用へレイアウト変更
18:00	打ち上げ兼榊原社長お誕生日会会場（ビバリーヒルズの韓国焼肉レストラン）へ移動 (18:00)注文していた榊原社長のバースデーケーキの確認、最終人数および料理の確認
19:00	[打ち上げ兼榊原社長お誕生日会開始]
	↓
22:00	オフィスへ戻る (22:30)ハッスルオーディションの最終参加リストの作成
	↓
翌0:00	退社 (翌0:00)
	帰宅 (翌0:30)
1:00	就寝 (翌1:30)





PRIDE王者と日本の橋渡し役

DSEロシア（サンクトペテルブルグ支部）エカテリーナ・コルサコワ

お次はこの方。ロシアはサンクトペテルブルグ支部で仕事するエカテリーナ・コルサコワ（通称カーチャ）さん。サンクトペテルブルグと言えば、そう！　PRIDEヘビー級王者・エメリヤーエンコ・ヒョードルが所属するレッドデビルの本拠地なのだ。PRIDE王者と日本側の橋渡し役という重要な役割を担い、ときには通訳としても活躍するカーチャさん。そんな彼女に現地での仕事ぶりを語ってもらった。

聞き手／橋本宗洋　構成／松下ミワ　撮影／乾晋也

―そもそも、カーチャさんが『PRIDE』の仕事に関わることになったきっかけはなんだったんですか？

カーチャ　大学で日本語を勉強して、卒業したあと、領事館で働いていました。サンクトペテルブルグの日本領事館ですね。その領事館の副領事の仲村さんが格闘技が大好きで、いろいろ教えてもらったんですよ。サンクトペテルブルグにはレッドデビルがありますね。

―そうですね、ええ。

カーチャ　なのでヒョードル選手もよく来ますし、ヒョードル選手がビザを受け取るのもサンクトペテルブルグなんですね。それで仲村さんがヒョードルに会いたくてレッドデビルに連絡を取りまして。

―とんだ副領事ですね（笑）。そこでお付き合いが始まったと。

カーチャ　そうですね。そして、領事館との契約が14カ月だったんですけど、そのあとにDSEの仕事をするようになったんですね。それまでもDSEの方がこちらに来たときは、通訳のお手伝いをしていましたので。

―日本語の勉強はロシアでされたんですか？

カーチャ　教育大学に通っていて、第二外国語として勉強しました。こちらの大学は5年間あって、5年目は日本の関西外語大にも留学したんですよ。やっぱり日本で生活しないと、本当の日本語は身につかないですね。

―あ、じゃあ大阪にいたんですね。

カーチャ　でも京都に近い感じですね。京阪電車で20分くらい。

―ああ、京阪電車で（笑）。日本語を勉強しようと思ったのはどうしてなんですか？

カーチャ　日本の文化に、とても興味があったんですね。サンクトペテルブルグでは『日本の春』というイベントが行なわれていて、いろいろな日本の文化が紹介されています。日本舞踊とか、空手、柔道。凄くキレイだなと思いました。ロシアはいま、凄い日本ブームなんです。北野武監督の映画はとても有名ですし。

ヒョードルという人は二人いるんじゃないかと思うときがありますね

―へぇ〜。

カーチャ　日本人で誰を知っているかロシア人に聞いたら、たぶん1位は北野監督ですね。スシの次にキタノタケシ、という感じです。

―じゃあ日本のテレビでたけしさんを観たときは驚いたんじゃないですか（笑）。

カーチャ　面白い人だと思いました。でも北野監督とビートたけしが同じ人だとはわからなかったです。

―空手や柔道は日本古来の文化という面もありますけど、『PRIDE』のような格闘技はそれまで見たことがありました？

カーチャ　レッドデビルの大会を1、2回見たことはありました。『M−1』（レッドデビル主催大会）はとても大きな会場で行なわれるので、こんな凄いショーがあるのかと思って感動しましたね。パンチしたりするときは、ちょっと怖いですけど。

―ま、そのパンチが一番凄いのがヒョードル選手なんですけどね（笑）。

カーチャ　そうですね。でもヒョードル選手は、ほかの選手とはちょと違いますね。

―どんなところが違いますか？

カーチャ　他の選手は、どうでしょう、ゲームのように試合をしている感じですね。

―スポーツとして勝ち負けを競っているというか。

カーチャ　でもヒョードル選手は、もっと精神的に闘っているような気がしますね。練習を見ていても、それは伝わってきます。

―精神性を感じさせるというか。

カーチャ　ヒョードルという人は、二人いるんじゃないかと思うときがありますね。

―それはどういった部分で？

カーチャ　リングに上がっているときと、普段と全然違うんですね。試合ではとても激しいことをやっているんですけど、普段はとても穏やかな人ですから。

―『PRIDE』という大会はいかがですか。世界最大のプロ格闘技イベントなんですが。

カーチャ　ホントに素晴らしいですね。とくに去年の大晦日の大会は面白かったです。髙田さんの太鼓とかですね。

―そこに惹かれましたか（笑）。

カーチャ　ロシアでもやってくれたら、ワタシも大ファンになると思いますよ。髙田さんは大人気になりました。

―まさか、あのふんどし太鼓でロシアにファンができたとは髙田本部長も思ってないでしょうね（笑）。

カーチャ　ロシアでは、日本はテクノロジーが進んだ国というイメージがありま

最初に覚えた専門用語は“ネワザ”と“タチワザ”です（笑）



すね。SONYとかキャノンとか。だから伝統的な文化を見ると、とても新鮮な驚きがあります。

―カーチャさんの普段の仕事の内容はどういったものなんですか？

カーチャ　いろいろあるんですね。まずは通訳ですね。DSEのスタッフの方がサンクトペテルブルグに来たときとか。

―あるいは今回の僕たちのように、取材が来たときとかですね。

カーチャ　そうですね。

―なんか、最初は日本のDSEから「日本から取材が行くから通訳を手配してほしい」と頼まれたとか。

カーチャ　それはワタシができますから大丈夫ですね。

―ねえ（笑）。他にも、やっぱりレッドデビル関連の仕事になるわけですか。

カーチャ　そうですね。レッドデビル関連の仕事が多いですね。日本から送られてきたメッセージを翻訳してレッドデビルのワジム会長に伝えたり、こちらからの要望を日本に伝えたり。それが中心になりますね。

―となると、かなり重要な役割になりますね。

カーチャ　やっぱりヒョードル選手がいますから。『PRIDE』のチャンピオンですから、レッドデビルにとってもDSEにとっても大事な選手ですね。それにレッドデビルも、『PRIDE』と提携していろいろなことをやりたいと思っているので。

―ワジム会長はDSEと組んでロシアで大会を開きたいみたいですからね。

カーチャ　そうですね。それから『PRIDE』をロシアのテレビで放送したりとか。

―カーチャさんが『PRIDE』の仕事をしていると聞いて、お友だちの反応はいかがですか？





大学時代に関西外語大学に留学したカーチャさん。日本語弁論大会などにも積極的に出場するなど、かなり日本語が堪能なのだ。ちなみに、このインタビューももちろん日本語です!!

カーチャ　ロシアの友だちは格闘技のことに詳しくないので『日本に関係した仕事ができてよかったね』と言いますね。

―日本人の友だちはどうですか？『PRIDE』のことを知っている人も多い？

カーチャ　知ってますね。普通の女の子も知っているので、『PRIDE』がこんなに人気があるのかと思って驚きました（笑）。

―この仕事をやっていて、楽しいのはどんなところですか？

カーチャ　楽しいのは、ロシアではまだ誰もやっていないことができることですね。ロシアではこういうプロフェッショナルの格闘技のことを知らない人が多いですので、これから発展していきますね。それに関われるのが嬉しいと思います。

―逆に難しいところはありますか？

カーチャ　そうですね。やっぱりロシアと日本では文化の相違点がたくさんありますから。

―はいはい。

カーチャ　言葉もそうですけど、考え方も違う部分は多いんですね。そういったことで、ときどき行き違いというか、勘違いになることもあります。そこは気を付けないといけないですね。ワタシも、ロシア人の考え方だけでは気付けなかったことが多いです。

―言葉を直訳しただけでは真意が伝わらないこともありますよね。日本人には当たり前のことでも、ロシアでは常識的じゃなかったり。

カーチャ　それは多いですね。日本では常識のことでも、ロシアでは『それはしないほうがいい』ということはありますね。そういう溝を、ワタシができるだけ埋めていきたいと思っています。

―それは例えばどういったときに感じるんですか？

カーチャ　どうでしょう、例えば日本人は、規則を正しく守りますね。でもロシア人は、必ず守るというわけではないですね。

―その場その場でフレキシブルに対応していくという。

カーチャ　そうですね。ですからすべてのことを、ロシアと日本の違いを考えながらやっていかないとダメですね。

―あと、格闘技っていろいろ専門用語があるじゃないですか。

カーチャ　それは勉強中です。

―難しいですよねぇ（笑）。

カーチャ　でも新しいことを学ぶのは、とても面白いですね。

―どんな言葉を覚えました？

カーチャ　まず最初に覚えたのは“ネワザ”と“タチワザ”ですね。

―まあ、日常会話で使う言葉じゃないですからね（笑）。

カーチャ　だから雑誌を読んだり、試合を見て人に聞くのは大事ですね。それも仕事です。あと英語も普通とはちょっと違いますよね。

―違いますね。タックルからテイクダウンしてパスガードとか（笑）。

カーチャ　最初に覚えたのは“サブミッション”ですね。

―あぁ～、はいはい。

カーチャ　普通の英語では“服従させる”ということですけど、格闘技ではちょっと違いますね。そういったことも勉強中です。

―この仕事を始めてから、格闘技、格闘家のイメージは変わりました？

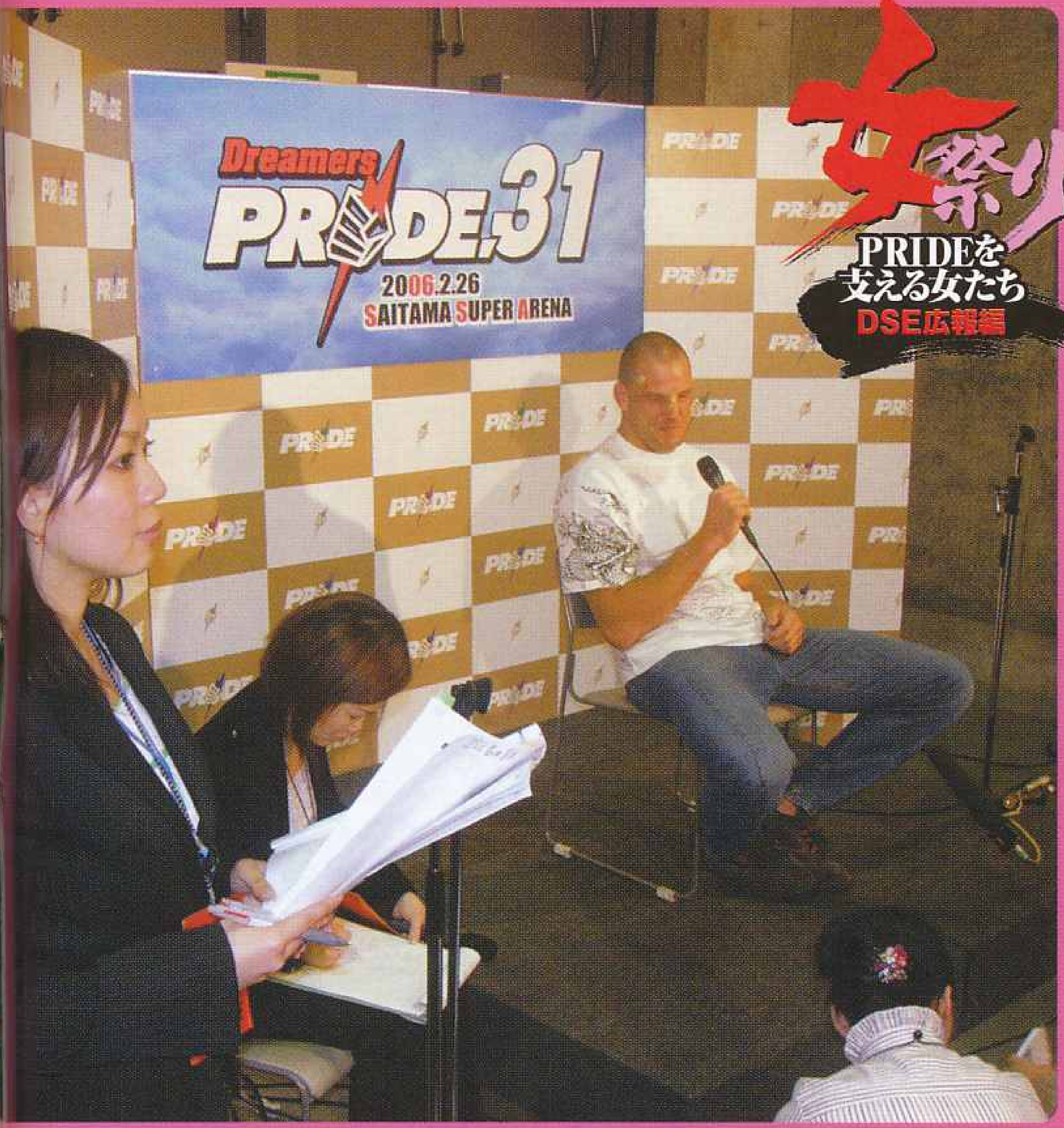
カーチャ　ファイターは、強くてあまりしゃべらない人だと思っていたんですけど、話をすると違いますね。家族のこととか、普段の生活の話をするときは普通の人と一緒ですね。

―それでは最後に、この仕事での目標を教えてください。

カーチャ　ロシアのファイターに『PRIDE』で活躍してもらうことですね。それからロシアでを広めていきたいです。世界中に広まっている文化として、『PRIDE』、総合格闘技をロシアの人たちに紹介して、発展させていけたら嬉しいですね。

【PRIDE OFFICAL BOOK 2005より再録】





『PRIDE』の舞台ウラを駆け巡る DSE広報に完全密着!!

島田さん

『PRIDE』の舞台ウラは大変なことになっていた！　みんなが“のほほん”と試合観戦を楽しんでるあいだに、画面に映らないところでドタバタと会場を駆け巡る大会関係者たち。その代表として、今回はプレス陣を取り仕切るDSE広報島田さんに密着取材を敢行した!!　忙しそうってことは想像できるけど、何をしているのかはまったくわからない。そんな疑問は全部ここで解消だ。さあ～、密着取材スタート!!

密着取材／松下ミワ



プロフィール　スポーツイベントの仕事を希望し、（株）ドリームステージエンタテインメントに入社。広報・宣伝部に所属し、会見の開催、プレスリリースの作成、取材対応、写真貸出等の仕事を行なっている。現在、入社2年目。

スタート

7:52 会場に到着





朝8時前。『PRIDE.31』が開催されるさいたまスーパーアリーナに颯爽と姿を現わした島田さん。「おはようございます！」と笑顔で挨拶し、まだ観客のいない閑散とした会場へとテクテクテク。

8:02 朝イチのミーティング



「島田ぁ、今日の役割分担ちゃんとわかってるか～」と、その日の仕事を確認しあうDSE広報チーム。この日、島田さんの担当はインタビュースペースへの選手の誘導＆インタビューの司会だ。

8:40 プレスルームの案内板を貼る



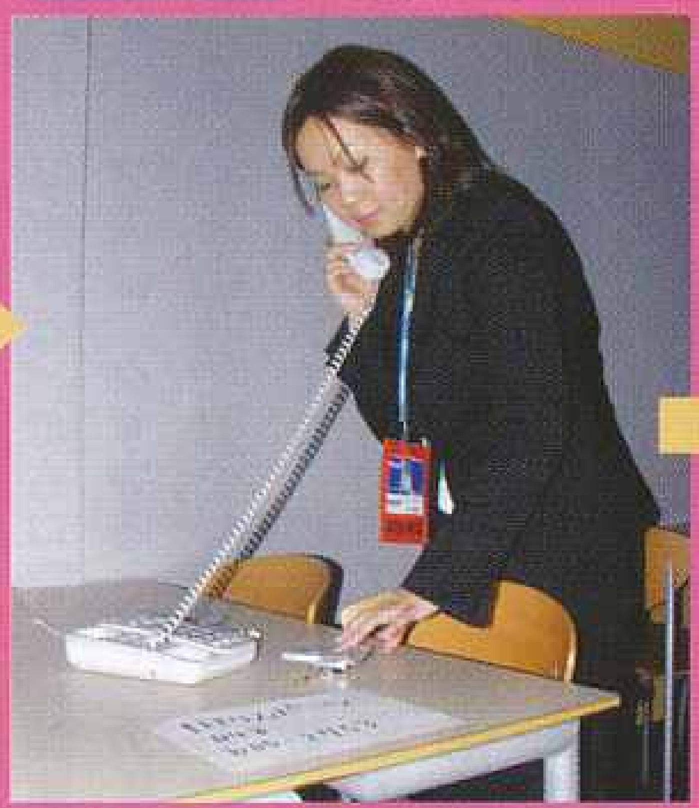
プレスルームの案内版を貼る島田さん。1F、2Fと、会場をグルッと一周し、二人で約40枚の案内版を貼る。「私も最初は迷子になりそうになったことがあるので」とプレス記者に対する優しさをチラリ。

9:17 場内の記者席を設営



会場内の記者席を確保する島田さん。シートからリング上までに、障害となるものがないかどうかをひと席ずつ入念にチェックする。

9:53 プレスルーム設営



お次はプレスルームへ。記者やカメラマンが座る座席の設置はもちろん、会場から本社へ原稿をメールできるように電話回線の設置も同時に行なう。写真は、回線がつながったかどうか確認しているところ。

10:34 インタビュースペース設営





インタビュースペースは試合を終えた選手が記者たちのインタビューに答える場所。マイクや照明などの設備、それから選手が使うタオルやミネラルウォーターなども抜かりなく準備する。

12:00 昼食





だいたい準備ができたところで、待ってました！　昼ごはん。「あっ！　今日はサバじゃない!!」と叫ぶ島田さん。ハンバーグ＆焼肉といういちランク上のメニューに大満足。モグモグモグ。



関係者やプレスの入り口は一般受付とは別になっている。島田さんをはじめ、DSE広報の方々はここで待機。迷えるプレス陣を親切に案内してくれるのだ。

14:20 プレス受付開始





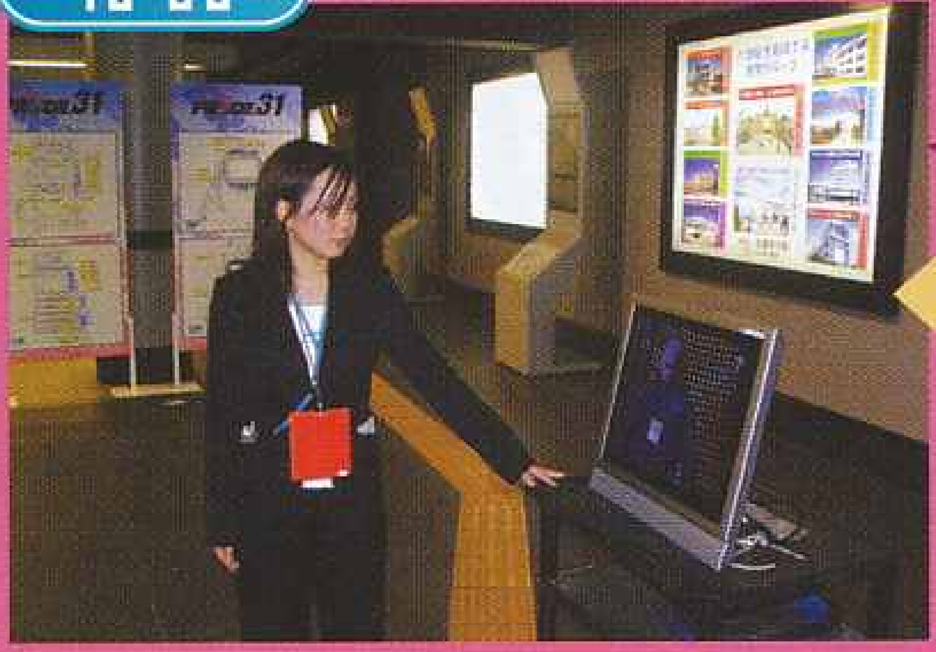
さあ、いよいよ受付開始。この日、外は雨。寒空の下で待つのはつらかろうと、予定より10分早く開場。いい席を確保しようとするカメラマンを制御しつつ、「こちらへどうぞ～」とバスガイドのように笑顔で案内。

『PRIDE』当日の島田さんのタイムスケジュール

島田さんの仕事		大会の進行
起床(5:30)	5:00	
	6:00	
	7:00	
会場入り(8:00) 会議(8:15) 設営開始(8:30)	8:00	
	9:00	
	10:00	
	11:00	
昼食(12:00)	12:00	
	13:00	
受付開始(14:20)	14:00	開場(14:20)
	15:00	
	16:00	大会開始(16:00) 試合開始(16:30)
コメントルームへの選手の誘導(17:15)	17:00	ローマン・ゼンツォフ vs ペドロ・ヒーゾ/ユン・ドンシク vs クイントン・"ランペイジ"・ジャクソン/ファブリシオ・ヴェウドゥム vs ユノラフ・エイネモ/高阪剛 vs マリオ・スペイヒー/アリスター・オーフレイム vs セルゲイ・ハリトーノフ
	18:00	休憩(18:39) 第5試合開始(18:55)
	19:00	ジョシュ・バーネット vs 中村和裕/アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ vs 田村潔司/マーク・コールマン vs マウリシオ・ショーグン/マーク・ハント vs 西島洋介
	20:00	
	21:00	全試合終了(21:32) 榊原代表コメント(21:50)
会場の片付け(22:20) 夜食(22:45) 会場をあとに(23:45)	22:00	
	23:00	
帰社(翌0:30)	翌0:00	
退社(翌1:45)	1:00	
帰宅(翌2:00)	2:00	
就寝(翌3:00)	3:00	

大会当日、島田さんの起床時間はなんと朝の5時半！ その後、開場の準備にアクセクし、観客をはじめ関係者やプレス記者らが入場したと思いきや、試合はほとんど観られず、試合時間はインタビュースペースで進行管理。全試合終了後も、各方面を走り回る島田さんは、昼食をとった12時から会場の片付けが終わるまで約11時間立ちっぱなしなのであった！ さらに、大会が終わってからも会社へと戻り、翌日行なわれる選手インタビューのスケジュール管理。この日、布団に入ったのは結局翌3時。ちなみに、次の日は選手の翌日インタビューでまたまた早起きだったそうです。お疲れさま!!

16:06 大会開始



「ダン、ダン、ダダン!!」と、どこからともなくあの聞き慣れた音楽が。「始まった!!」と気持ちを高ぶらせる島田さん。近くのモニターに近寄り、オープニングを真剣に見つめる。

14:42 受付でトラブル発生！



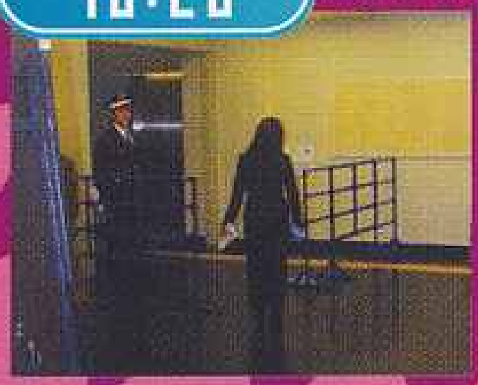
おっと、これは取材申請されてない記者が出現!! どうする、島田さん!? と思いきや安全面を考慮して「やはり、申請されてない方は……」と的確な判断。さすがです。

16:13 あっ、電話だ!!



オープニングに見入るのもつかの間、場内のスタッフから着信が。「え!? いや、それはダメですね。すぐに行きます!!」と、何やら慌てた様子。もしや、異常事態発生か!?

16:20 ちょっと行ってきます！



電話を切ると、すぐさまダッシュでいなくなってしまった島田さん。ああっ、置いていかないで!! あとで聞くと、リングサイドの客席で写真を撮ってたプレスに注意しに行ったのだとか。

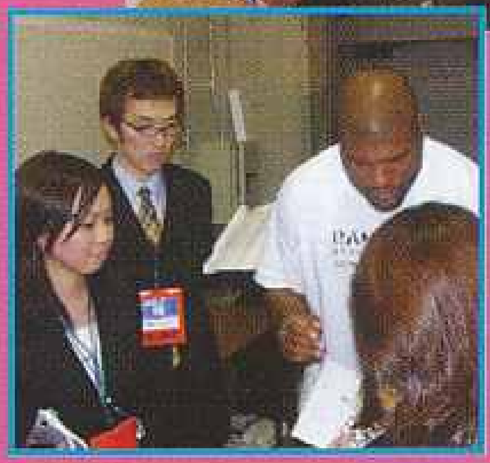
17:15 選手のインタビュー順を説明



お次はここ！ この日、島田さんの仕事の中で一番の肝となるインタビュースペースへの選手の誘導。その前に、ひと言記者に説明を。「もう間もなく、ジャクソン選手のインタビューを行ないます」。

17:57 ランペイジのインタビュー開始





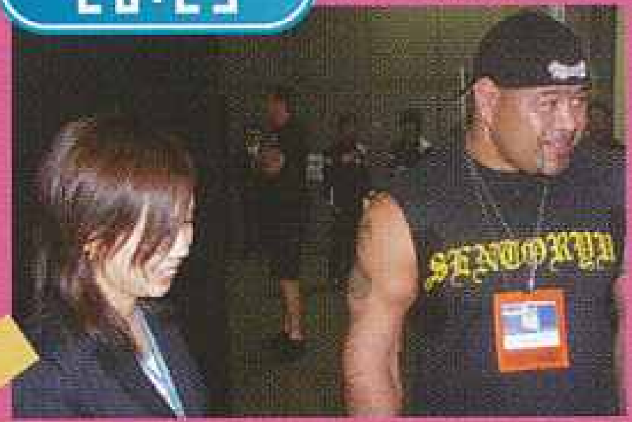
島田さんに誘導されてインタビュースペースへ姿を現わしたランペイジ。勝利も手伝って、おしゃべりが止まらない!! このように試合後すぐにインタビューを受けてくれる選手はいいが、なかには1時間、2時間後にようやく姿を現わす選手もいるのだ。う〜ん、大変！

18:39 会場は休憩時間。だけど……

会場が休憩時間のときは、逆にインタビュースペースが最も忙しくなる時間。「このあとどの選手がインタビュー受けられるんだっけ？」と他のスタッフと綿密にスケジュールを確認。



20:23 あ、戦闘竜選手だ!!



インタビュースペースをウロウロしていると、なんと！ 試合観戦に訪れていた戦闘竜選手を発見!!「あ、お久しぶりです〜」と気さくに声をかける。二人とも笑顔だ！

21:10 会場にて観戦



ただいまメインの試合中。ちょっと余裕ができた島田さんは、インタビュースペースから会場につながる通路を経て場内に潜入。「盛り上がってるね〜」と観戦する島田さん。このまま観ていたいという気持ちが表情にチラリ。

22:20 外国人記者と談話



全選手のインタビューを終えて、息を抜く島田さん。と、そこに外国人記者スコットが気さくに話しかけてきた。「いや〜、凄かったね、今日の試合は」と英語で話すスコット。「I think so.」と島田さんもニッコリ。

22:25 あと片付け



「お疲れさまでした！」と周りに声をかけつつ、サクサク片付け始める島田さん。終止、笑顔でいたものの、やっぱりこれだけ働けば疲れます。延長コードを見つめる目が若干うつろに。

22:40 スタバのコーヒー飲めず



「余分に買っておいたスタバのコーヒー、結局飲めませんでした（ガッカリ）」と肩を落とす島田さん。そう！ この日は昼食を食べて以降、何も食べ物を口にしていないのだ!!

23:01 広報チームで円陣を組む



片付けにメドがつくと、広報チームはプレスルームへと集合する。「みんな、お疲れ!!」と互いにねぎらう仲間たち。最後は円陣を組んで、「っしゃおらぁ!!」といった具合に吠えたのだった。

23:45 会場をあとに



日付が変わるギリギリにようやく会場をあとに。しかし！ 島田さんの向かう先は自宅ではなかった!! 「あ、いまから会社に戻ります」と平然と言ってのける島田さん。働き過ぎです。

0:40 翌日インタビューのスケジュール確認

会社に戻ると、さっそくパソコンを開いてカチャカチャ。翌日に行なわれる外国人選手のインタビューのスケジュールを確認しているところ。これが終わったら、ようやくお仕事終了なのだ。





PRIDE わっしょい!! COLUMN

ニホン大好き！ 闘いの隙間に流れる オバチャンチン劇場

文／川崎“ブッカーK”浩市

『PRIDE』を支える女性と聞いて、私が真っ先に頭に思い浮かぶのは、イゴール・ボブチャンチンのマネージャーにして、名通訳でおなじみのオバチャンチンことユージェニアになります。

ボブチャンチンが98年の『PRIDE・4』に初来日して以来、リング内外でサポートし続けてきたオバチャンチン。「ボブチャンチンはニホンが大好きと言っておりマ～ス!!」

――快勝後のこんなマイクアピールで、たびたび観客を和ませていた彼女はいったい何者なのだろう？　と不思議がっていたファンの方も多いでしょう。オバチャンチンはただの通訳ではありません！　じつはボクシングWBCのウクライナ・インターナショナルの役員。そしてボクシングのみならず、ウクライナ格闘技界の海外ビジネスも担当する重鎮も重鎮なのです。

ボブチャンチンはウクライナのキックボクシング連盟に所属していたので、オバチャンチンは昔から彼と接する機会がありました。ウクライナの大物格闘家といえば、ボクシングのクリチコ兄弟がつとに有名ですが、兄である元WBCヘビー級王者のビタリ・クリチコが全日本キックで柳澤龍志と対戦したときも、彼女は少なからず関わっておりました。

このように『PRIDE』がスタートする前から、オバチャンチンは世界中を飛び回り格闘技のビジネスに従事していたのです。そういった仕事柄か語学も堪能で、英語、フランス語、ロシア語……日本語に関しては、前の旦那さんが日本語の先生をしていたため、それで習得したとのこと。ちなみに、大きな声では言えませんが、オバチャンチンはなんと4回も結婚しています。恋多き女性ですね（笑）。

観光に行った新宿御苑で花粉症に。セコンドにいても自分の顔を氷で冷やすので精一杯でした

そんなオバチャンチンが日本語をしゃべれるということに加え、ロシア系の選手がボブチャチン一人だったこともあり、以前の『PRIDE』はロシア語の通訳を用意していませんでした。マネージャー業の傍ら、オバチャンチンがこなしていたんです。

しかし、いまではヒョードルやハリトーノフなど多くのロシア系ファイターが『PRIDE』に登場するため、正規の通訳が存在します。こうしてオバチャンチンは通訳の業務に忙殺されることがなくなったわけですが……その空いた時間を利用して、日本名所の観光旅行へいそしむようになりました。

ところが、彼女は試合前、たとえば、ルールミーティングとインタビューの日に出かけようとします（笑）。いや、オバチャンチンがいなくても支障はないんですけども……。『PRIDEミドル級GP2005決勝戦』中村戦のときもリザーブマッチは2ラウンドだったのですが、彼女は3ラウンドあると思っていたくらいですから。しかも観光に行った新宿御苑で、なんと花粉症になり、セコンドにいても自分の顔を氷で冷やすので精一杯でした、トホホ。

「明日は天気がいいのでフジサンに行きマ～ス」

「オバチャンチン、せめてルールミーティングの翌日にしたら？」

「……その日はテンキが悪いと聞いてマ～ス!!　だから明日行きマ～ス」

富士山や日光東照宮、京都など、自分でスケジュールを立てて、一人で観光を楽しむオバチャンチンでした（笑）。

そういえば、大活躍中のボブチャンチンが『PRIDE』におそるおそるご褒美のリクエストをしたことがありました。『PRIDE』サイドがご褒美の内容を確認すると――

「『PRIDE・GP』に私は出られるんでしょうか？」というもの。

逆に『PRIDE』がお願いしたいぐらいで、その謙虚でおごらない姿勢に関係者はビックリ。

そしてもう一つ、お願いしたことはという と――

「日光の紅葉が見たい」

ファイトマネーや待遇面でムチャな要求をする選手が多い中、このボブチャンチンのリクエストは美談として報道されましたが……いま振り返ってみれば、おそらくこれはオバチャンチンの願望も込められると思うんですよね（笑）。

でも、ボブチャンチンは「ディズニーランドへ行きたい」とは言っていました。

いたってマイペースなオバチャンチンですが、だからこそ胃が痛くなるような緊張感が支配する『PRIDE』のリングを緩和する役割をこなせたんではないでしょうか。

「ボブチャンチンはニホンが大好きと言っておりマ～ス!!」

久しく〝オバチャンチン劇場〟を目にしていませんが、また近いうちにその名通訳ぶりで『PRIDE』の会場を温めてほしいものです。

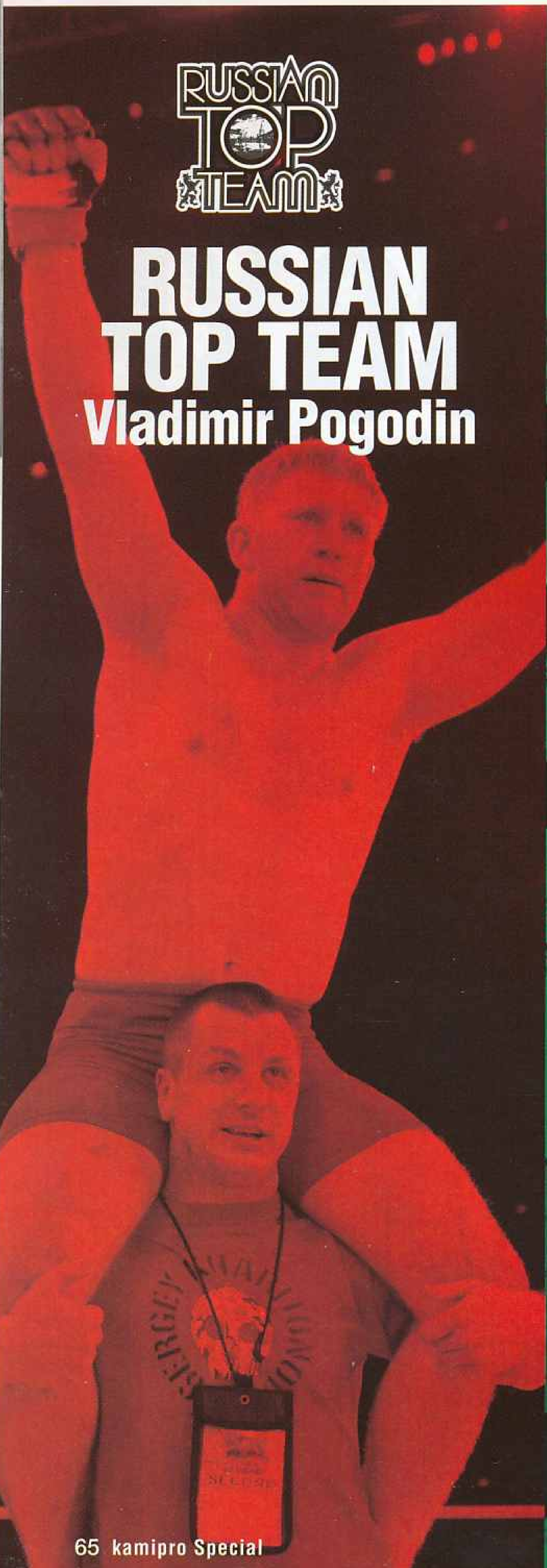


仕事も恋も、おまけに日本観光まで、桁違いに活動的なオバチャンチン。じつは、この粋なサングラス姿でボブチャンチンとともに『紙のプロレスRADICAL』34号にも登場していマース！

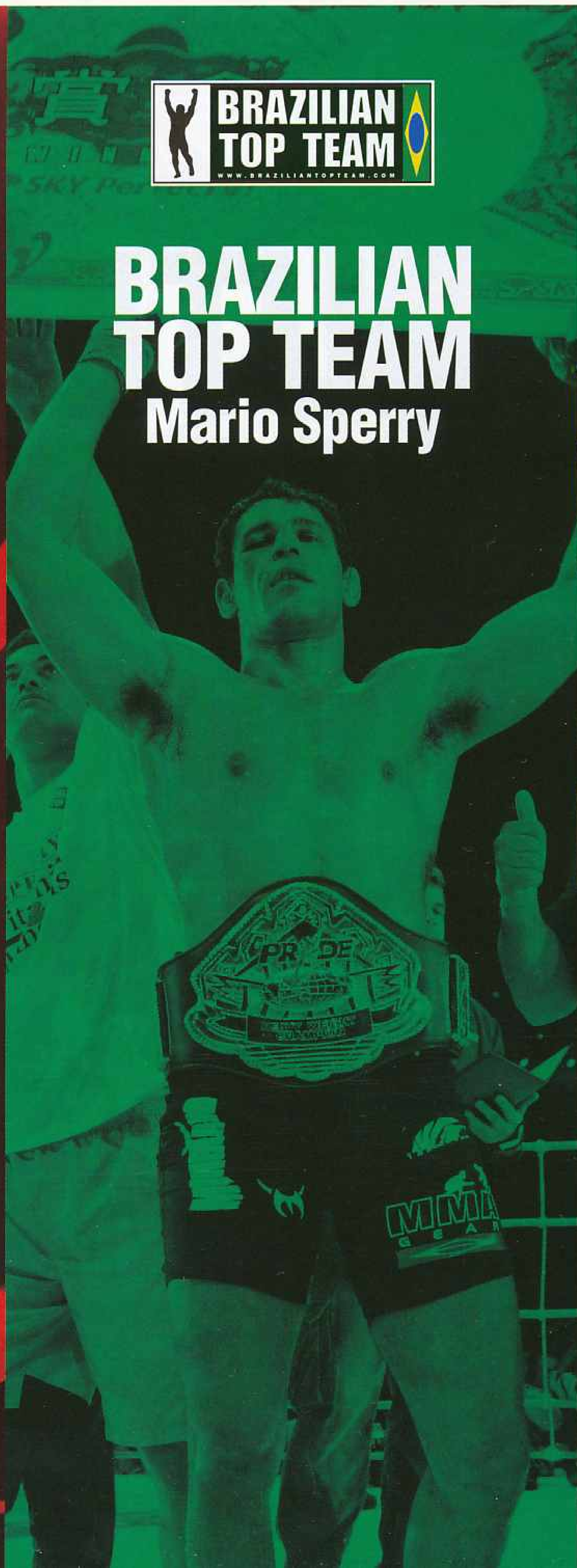
PRIDE
3大チーム創世記

ファイターに歴史があり、PRIDEというイベントに歴史があると同様、所属するチームにも歴史がある。
PRIDEを代表する名門3大チームはいかにして生まれ、ここまで成長したのか。
各チームの代表にその歴史を紐解いてもらった。

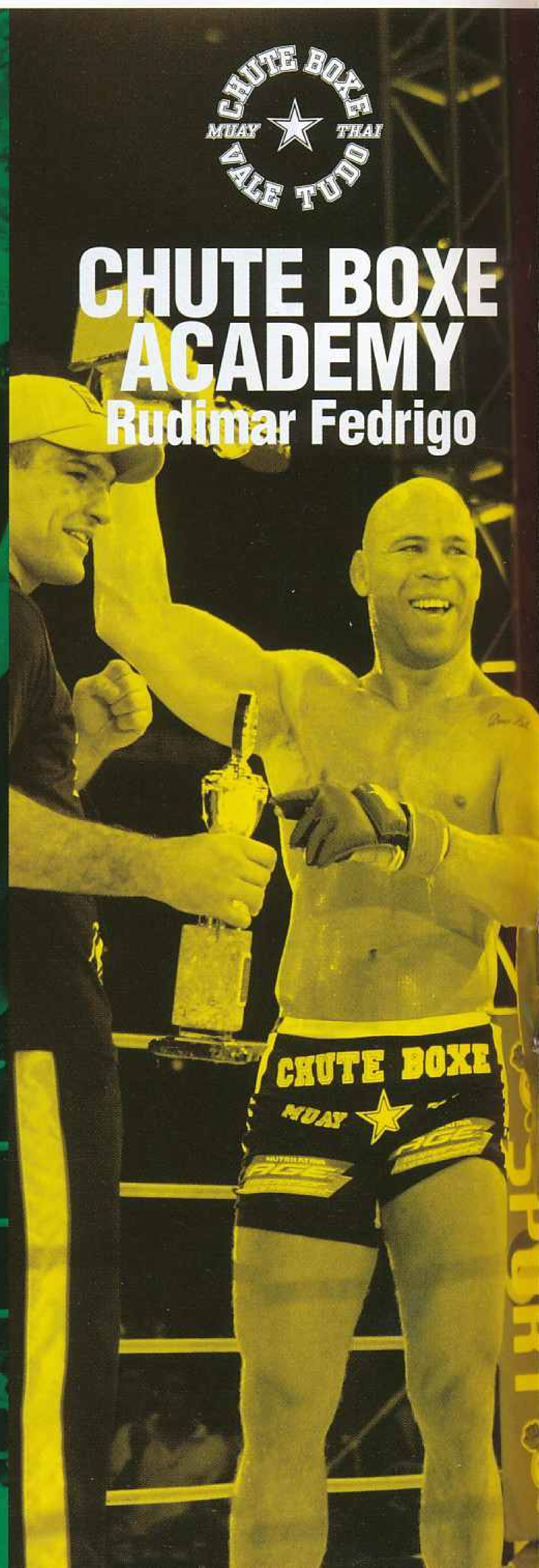
RUSSIAN TOP TEAM
Vladimir Pogodin

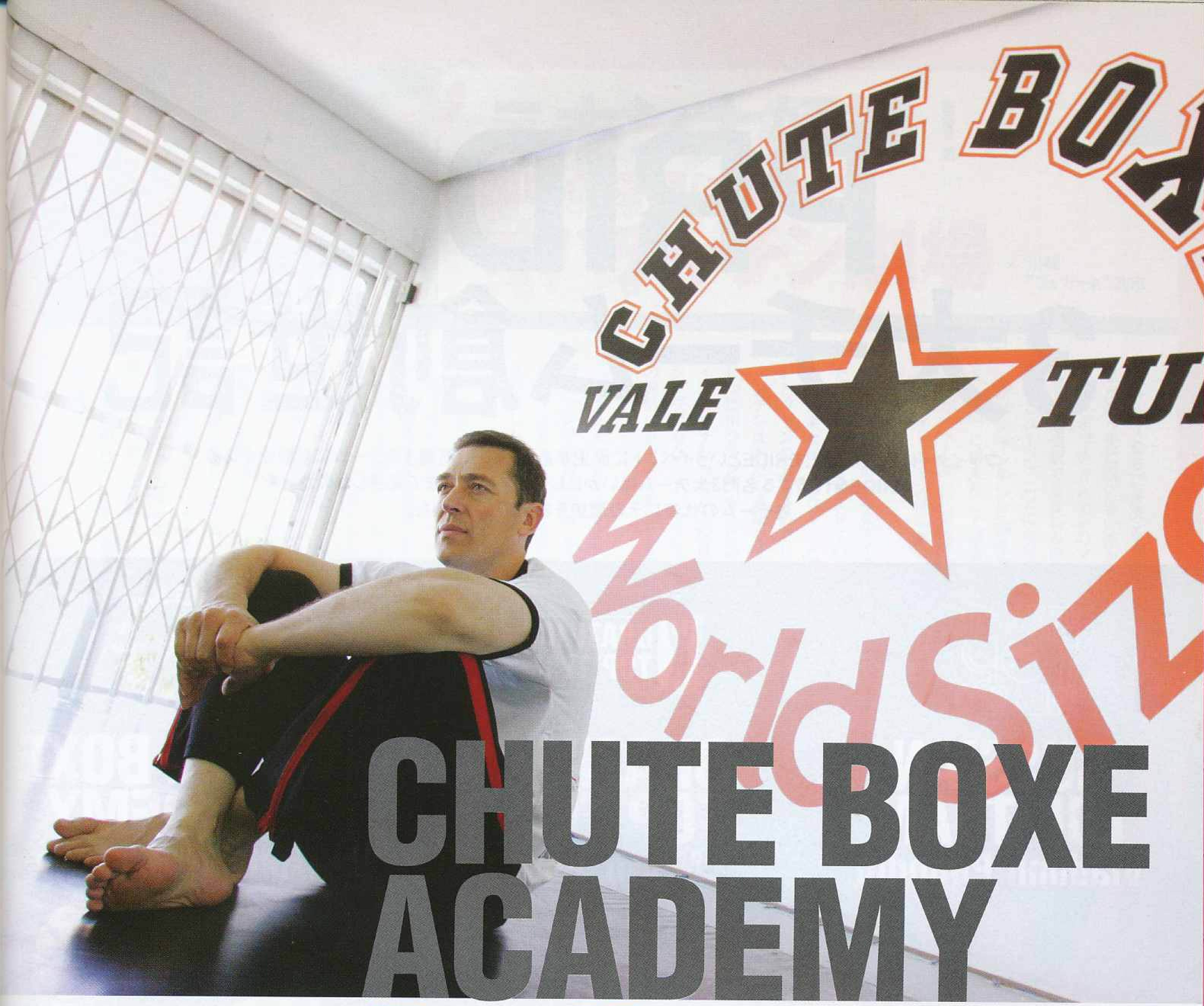


BRAZILIAN TOP TEAM
Mario Sperry



CHUTE BOXE ACADEMY
Rudimar Fedrigo





CHUTE BOXE ACADEMY

PRIDE
3大チーム
創世記
[シュートボクセ・アカデミー]

Rudimar Fedrigo

青空道場から生まれた最強軍団

フジマール・フェデリゴ

いまやヴァンダレイ・シウバ、マウリシオ・ショーグンという
ミドル級2大王者を擁し世界でも1、2を争うチームとなったシュートボクセ。
柔術全盛時代が長らく続いたブラジルで、クリチーバという地方都市の
ムエタイジムにすぎなかったシュートボクセはいかにして、こんにちの繁栄を築いたのか。
一代で最強軍団を作り上げたフジマール会長に話を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也







本邦初公開。ここが昨年末、クリチーバ郊外にオープンしたシュートボクセの最新道場。全面ガラス張りのモダンな造りで、広々としたこういったジムを作るのがフジマール会長の長年の夢だったという。

最初は道場がなかったから、公園や空き地に生徒を集めてムエタイを教えていたんだ

――今日は「シュートボクセはじめて物語」といった感じでお話を聞いていきたいと思います！

フジマール　ＯＫ。

――そもそも、どういったきっかけでこのアカデミーはできたんですか？

フジマール　シュートボクセを始めるそもそものきっかけは、私が12歳のとき、自転車で転んで足を骨折したことだね（笑）。

――骨折がきっかけですか？

フジマール　そう。骨折して運動が全然できなくなり、足が凄く細くなってしまったんだ。その頃ムエタイの先生と出会って、最初はリハビリの一環としてムエタイを始めた。この私とムエタイの出会いがそもそもの始まりだね。そして練習するうちに、どんどんよくなってきて、17歳のときにアカデミーをオープンしたんだよ。

――わずか17歳でアカデミーをオープンですか！

フジマール　そう。まだその頃は痩せっぽちだったけど、もうすでに17歳で私は先生だったんだよ。

――それはフジマールさんが習っていた先生のジムから独立した形なんですか？

フジマール　そうだね。その頃ブラジルにムエタイのジムというのはほとんどなかったから、ムエタイという競技を広める意味でもアカデミーを増やす必要があったんだよ。ただ、その頃はまだジムはなかったけどね。

――ジムがなかったというと、〝青空道場〟だったってことですか？

フジマール　その通り。その頃はお金もなかったから、公園や空き地に生徒を集めてムエタイを教えていたんだよ。でも、幸運なことにスタートした時点から生徒数だけは多かったんだ。始めてすぐに70人ぐらいになったからね。

――公園で70人指導ですか。それも凄いですね（笑）。

フジマール　公園中が私の生徒みたいな感じになって、ちょっと他の人が近づきにくくなっていたかな（笑）。それで、ちゃんとジムを持たなきゃダメだと思ったんだ。

――では、シュートボクセが道場の建物を持ったのはいつからだったんですか？

フジマール　１９７９年、私がたしか18歳のときだね。

――もう18歳で道場を持ちましたか。ちなみにお金はどうしたんですか？

フジマール　生徒からのお金だけだよ。でもべつに最初から立派な建物があったわけじゃなくて、トレーニング機材なんかもほとんどなかった。最初は雨風が凌げればいいぐらいのものから、少しずつ少しずつ設備を整えていったんだ。それがいまやブラジルだけでなく、日本やヨーロッパにも立派な道場を出せるようになったのだから、それは私にとって誇りだね。

――当時から名前は「シュートボクセ・アカデミー」だったんですか？

フジマール　そうだよ。もともと「シュートボクセ」というのは、「キックボクシング」をポルトガル語にしたものだから、本当は凄くシンプルな名前なんだ。

――ああ、日本語で言えば単なる「キックボクシング教室」みたいな感じなわけですね。

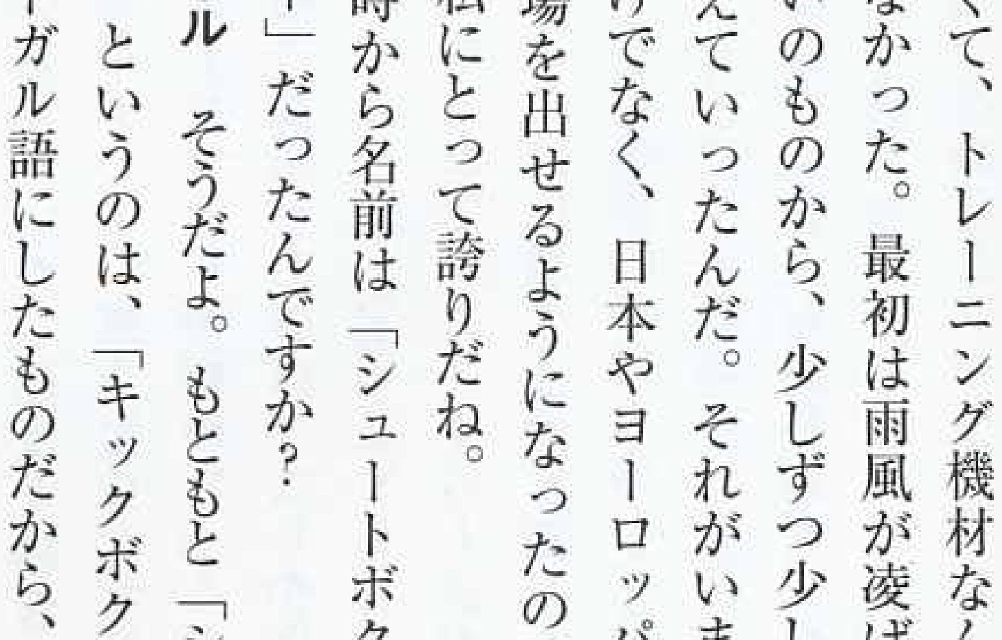
フジマール　そしてこのシンボルマークも当時からあったものなんだ。真ん中に☆マークがあるよね？　これは長い人生を意味しているんだよ。

――アカデミーがスタートした当時は、フジマールさんは選手兼先生だったんですか？

フジマール　ノー。当時のブラジルにはムエタイの試合というのはなかったんだよ。だから〝試合〟といえば、〝路上の実戦〟だったな（笑）。

――路上の実戦！　それはもちろんストリートファイトというやつですね（笑）。

フジマール　そう（笑）。私は見ての通り大男でもないし、当時は本当に痩せっぽちだったから、よく悪いヤツに絡まれたんだよ。そういうヤツらに負けないために編み出したのが、そもそものフジマール流シュートボクセだ（笑）。



こちらはおなじみシュートボクセアカデミー。じつはクリチーバにはほかに支部が５つあり、ここは主にプロ選手が集まるシュートボクセの総本山的な役割をはたしている。

――シュートボクセのそもそもの技術は路上から生まれたものでしたか（笑）。

フジマール　当時はいまよりもっと厳しい社会状況だったから、男は強くなくては生きていけなかったんだ。だから私は強くなるためにムエタイを身につけた。そうしなければ、こんな痩せっぽちの男は、いじめられっぱなしか、誰かの子分になるしかなかったんだよ。

――じゃあ、シュートボクセというのは、そもそもケンカが強いフジマールさんがケンカの勝ち方を教えていた、ということですか？

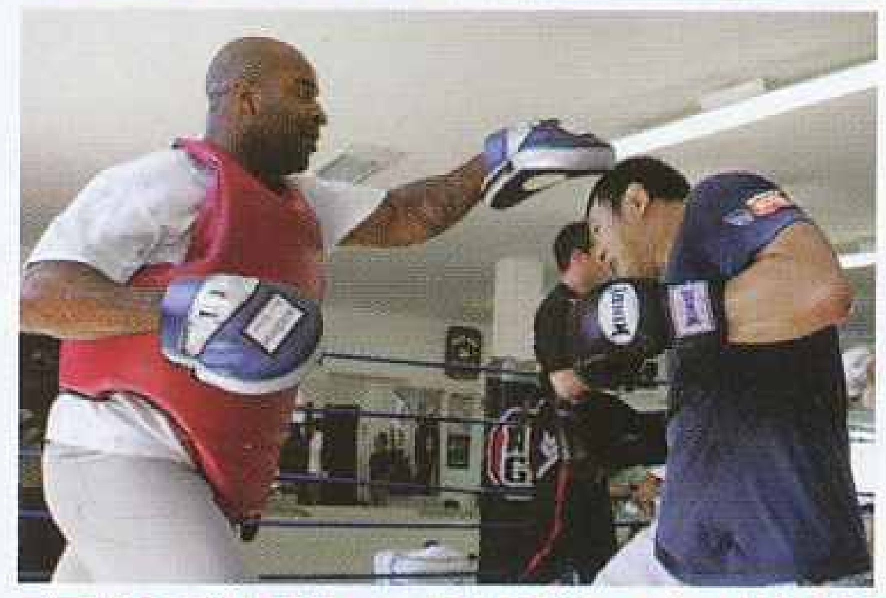
フジマール　その通り！　当時はいまのように、メディアによって道場が紹介されるようなことはあり得なかったので、「フジマールは強いらしいぞ」「フジマールは○○をしばいたらしいぞ」といった噂で私の下に集まってきたんだ。あとは、私にケンカで負けたヤツが軍門に下ったりね（笑）。

――ということは、アカデミーの先生というと聞こえがいいですけど、半分は町の〝ケンカ番長〟みたいな感じだったわけですね（笑）。

フジマール　ハハハハ、じつをいうとそうなんだよ（笑）。

私の大きな目標というのは、フリーウェイトで世界で一番強い選手を育てることなんだ





プロ選手に対しては、いまでもフジマール会長自ら率先してミットを持って、マンツーマンで指導に当たっている。下は会長の右腕であるハファエル・ヘッドコーチ。

——なんか日本で言う『空手バカ一代』の世界ですね。〝ブラジル版・芦原英幸〟というか（笑）。フジマールさんは若い頃にズール（親父）とも闘ったことがあると聞いたんですけど、ホントですか？

フジマール　ああ、あるよ。でも、それもまみたいなプロの試合というわけじゃなくて、道場でやった試合だね。当時、ズールは強い男を求めて町から町へと渡り歩くような生活をしていて、とてつもない強い怪物として有名だったんだよ。

——当時はヒクソンと闘う前だから、それこそ〝ブラジル最強〟の名をほしいままにしていた時期ですよね。そんな魔人ズールとなぜ闘うことになったんですか？

フジマール　ある日、ズールがクリチーバに来たとき、地元の新聞を通じて「誰か挑戦者はいないか」という声明を出したんだよ。そしたら、私の弟子たちが「クリチーバにはフジマールがいる！」「フジマールがズールを倒す！」って盛り上がってしまって、闘わざるを得なくなったんだよ（苦笑）。

——町のケンカ自慢としては引くに引けなくなってしまった、と（笑）。

フジマール　あの頃のズールは100キロをゆうに超す巨体で、対する私は60キロ台しかなかった。それでも逃げずに真っ向勝負で闘ったことで、私はズールに勝つことはできなかったけれど、生徒たちの尊敬を得ることができたんだ。

——その試合はファイトマネーが発生するものだったんですか？

フジマール　いや、お金は発生してないよ。その試合は道場で、しかも表向きは〝練習〟として行なったものだからね。

——いまだったら闘いといえば、お客さんの前でお金をもらって闘うのが当たり前ですけど、昔はそうやって自分のプライドだけを賭けて闘うことがたびたびあったんですか？

フジマール　というか、いまでこそファイトマネーが発生するのが当たり前だが、ほんの10年前までは、「強い」という人間がいたら、道場の中でどちらが本当に強いか他流試合をするというのが普通だったんだよ。それで負けたほうの道場は生徒が辞めていき、勝ったほうはより「強い」という噂が広まり生徒が増えていく。そういう時代だったんだよ。

——まさに道場の運命を背負って闘っていたわけですね。

フジマール　他の道場よりウチの道場のほうが強いということを証明する方法はそれしかなかったんだ。いまはもう、闘いというのはちゃんとリング上でルールに則って、ファイトマネーをもらってやるというのが当たり前だから、そういうことはなくなったけどね。だからいまの選手は幸せだなと思うよ。昔はどんな強いヤツと闘ってもお金はもらえないし、もし負けたりしたら、自分の名声は地に落ちて、道場生が減るだけだったんだからね（苦笑）。

——柔術家やグレイシーと闘ったこともあるんですか？

フジマール　ノー。グレイシーとは闘ったことはないね。彼らとは敵対するというより、どちらかと言えばいい友だちだったよ。

——ヴァンダレイがシュートボクセに入ってきたのはいつ頃なんですか？

フジマール　正確なことは覚えてないが、89～90年ぐらいだったと思う。

——ヴァンダレイが入ってきたとき、チャンピオンになれるような素質があると思いましたか？

フジマール　正直に言うと、まったく思わなかったね（笑）。

——まったく才能なしだと思った（笑）。

フジマール　ヴァンダレイは技術的な物覚えが早いわけではないし、強くなるには時間がかかったよ。ただ、ヴァンダレイは誰よりも努力家だった。黙々と練習を続け、コツコツと少しずつ強くなったんだ。そんなヴァンダレイを私が初めて「この男はモノになる」と思ったのは、たしか彼がまだ10代半ばぐらいのころだったと思う。リオ・デ・ジャネイロでムエタイの大会があったんだが、そこに出場するはずだったシュートボクセの選手が出場できなくなり、急遽、ヴァンダレイに出てもらうことにした。すると彼は急な試合にも関わらず二つ返事でOKして、試合でも見事なKO勝ちを収めたんだよ。このとき、ヴァンダレイは将来凄い選手になるんじゃないかと初めて感じたね。

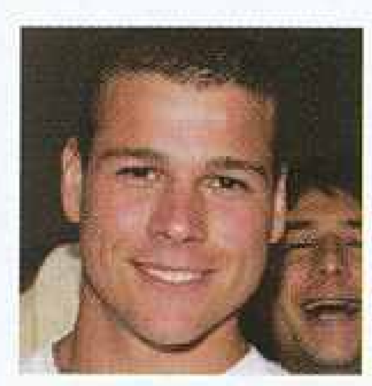
——では、そんなヴァンダレイが世界チャンピオンになれた要因はなんだと思いますか？

フジマール　要因の一つは彼はハートが強かったということ。たとえ技術が荒削りだったとしても、決して相手に対してビビらずに、逆に気持ちで飲んでかかることができる。それが彼の強さの源だと思う。それと同時にヴァンダレイは誰とでも闘う、相手を選ばない。そうやって誰とでも闘うことで道を切り開いてきたんだ。

——普通はチャンピオンになったらそこで満足してしまうものですけど、ヴァンダレイだけは、チャンピオンになってからも何年も努力を続けられるのはなぜだと思いますか？

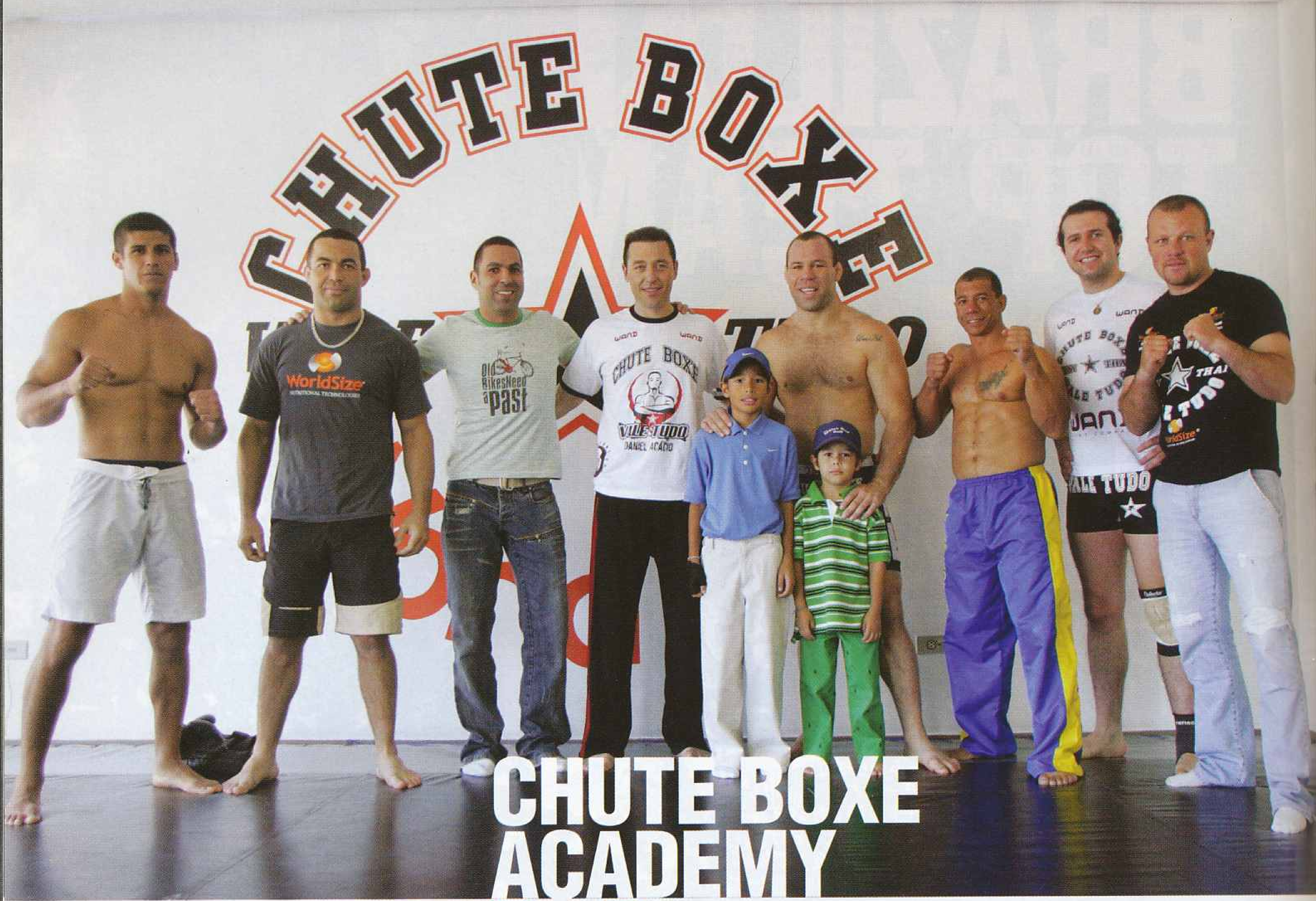
フジマール　彼は本当に真面目な人間なんだ。チャンピオンになってもおごることはないし、試合が決まれば土曜も日曜も休まず練習する。そういった日々のトレーニングの積み重ねがヴァンダレイの強さなんだよ。彼が『PRIDE』のリングに上がるようになって5～6年経つが、そのあいだ、ほとんど気持ちも身体も休まることはなかったと思う。でも、彼はそれがチャンピオ

[シュートボクセ] 注目のファイター



シューリン
SHORIN

ムリーロ・ニンジャ、マウリシオ・ショーグン兄弟の実弟。「忍者」「将軍」と来たら、次はサムライ、ブシ、ダイミョー、アクダイカン、コーモンサマか何かになるかと思われたが、日本から中国に飛び「少林」となった。なぜこの名前になったかは不明。すでに総合のトレーニングは積んでいるが、フジマール会長によると『PRIDE』参戦にはもう少し時間がかかるとのこと。日本での3兄弟揃い踏みに期待しよう！



CHUTE BOXE ACADEMY
Rudimar Fedrigo

ンの務めだと思ってやっているんだ。

——日本では大晦日にビッグマッチがありますけど、ブラジルは12月はクリスマスシーズンですし、それが終わったらカーニバルの季節ですから、そんな中でトレーニングを続けるのは、なかなか大変なんでしょうね。

フジマール　そう。年末から2月にかけて、国中が浮かれたような感じで、そういう季節になるんだけど、ヴァンダレイにとってはいまはトレーニングをする〝季節〟なんですよ。人生はいいときも悪いときもある。いまはいいときだけど、いつ悪いときが来るかわからない、だからこそいま練習に打ち込む必要がある。ヴァンダレイはそう考えているんだよ。

——今年の『PRIDE・GP』で見事優勝を果たしたマウリシオ・ショーグンはこれからどんなふうに成長していってほしいですか？

フジマール　ショーグンは凄いスピードで成長して、ヴァンダレイより若くしてチャンピオンになった。彼に対して私が望みたいのは、チャンピオンになっても常に謙虚でいてほしいということなんだ。「俺はチャンピオンなんだ、俺は偉いんだ」とは決して思ってほしくない。そういう気持ちがもし芽生えてしまったら、それが彼の成長を邪魔すると思う。

——ショーグンが近い将来、ヘビー級に転向するのではないかという噂がありますけど、その可能性はありましたか？

フジマール　少し時間がかかると思うけれど、そうなっていくんじゃないかと思う。ただ、来年ヘビー級で闘うかと言われたら、それはまだわからないね。

——シュートボクセはこれまでヴァンダレイ、ショーグンという二人の世界チャンピオンを生み出していますけど、これからの目標というのはなんですか？

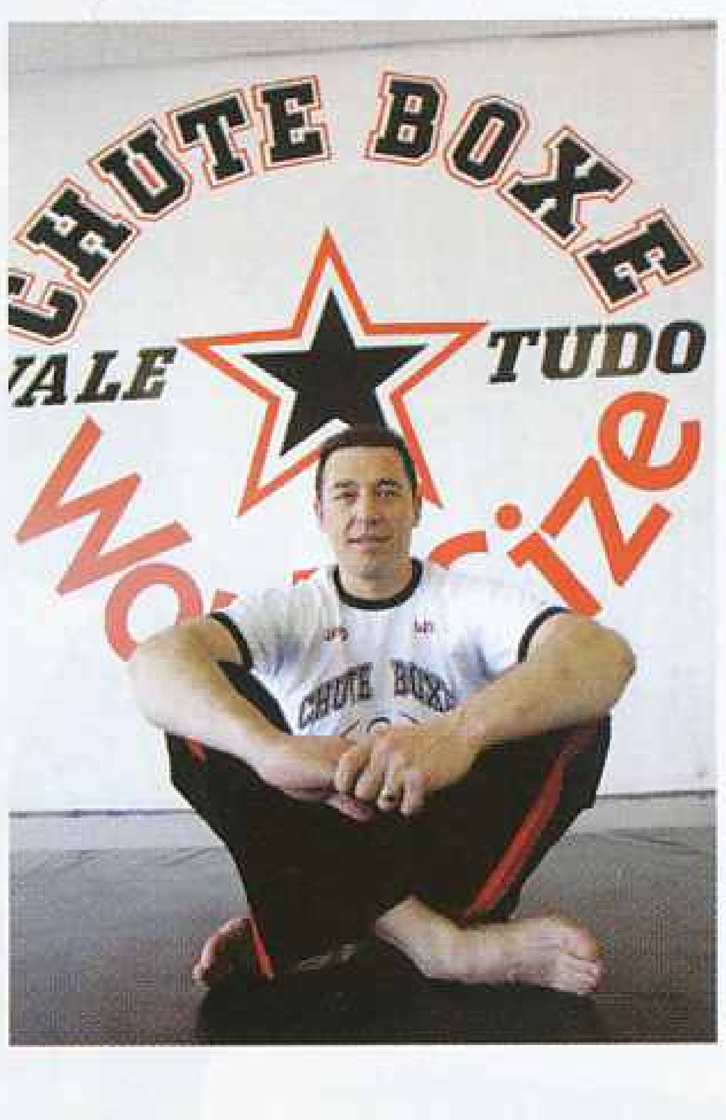
フジマール　とりあえず、いままで同様、新しい選手を育てて、『PRIDE』に送り込みたいね。ブラジル人ファイターは誰しもが日本に行くことを夢見ているんだ。その夢を叶えてあげたい。あと私の大きな目標というのは、ヘビー級のチャンピオンを作るということなんだ。ヴァンダレイもショーグンも本当に偉大なチャンピオンだと思う。でも、もう一つの頂点として、フリーウェイトで世界で一番強い選手を育てたい。世界で一番強い選手になりたいというのは、誰もが持つ夢だからね。

——現PRIDEヘビー級チャンピオンのヒョードルより強い男を作る、と。

フジマール　彼はいまミノタウロもミルコ・クロコップも倒して、まさに無敵と言える状態だろう？　その男を倒す、次のチャンピオンを作ってみたい。それがヘビー級に転向したあとのショーグンになるのか、違う選手になるのかはわからないけど、ヘビー級チャンピオンを育てることが私の目標であることは確かだよ。

——わかりました。来年も期待してます！

【05年11月26日（現地時間）／ブラジル・クリチーバ、シュートボクセ・アカデミーにて収録】



シュートボクセ・アカデミーを78年に設立し会長を務める。昨年の『PRIDE・30』では桜庭和志のセコンドを務めたり、吉田道場の打撃コーチを手配するなど幅広い活動を行なっている。



BRAZILIAN TOP TEAM
Mario Sperry

エリート軍団が作り上げたブラジル最大勢力
マリオ・スペーヒー

かつての名門カーウソン・グレイシー・チームから独立し、
2000年に設立されたブラジリアン・トップチーム。
その名の通り、ブラジルナンバー1のエリート集団であるBTTは、
いまも国中から有望選手の入団希望が相次ぎ、拡大を続けている。
このBTTの首領であり、自身も柔術、MMAのトップ選手である
マリオ・スペーヒーにカーウソン・チーム時代からの歴史を語ってもらった。

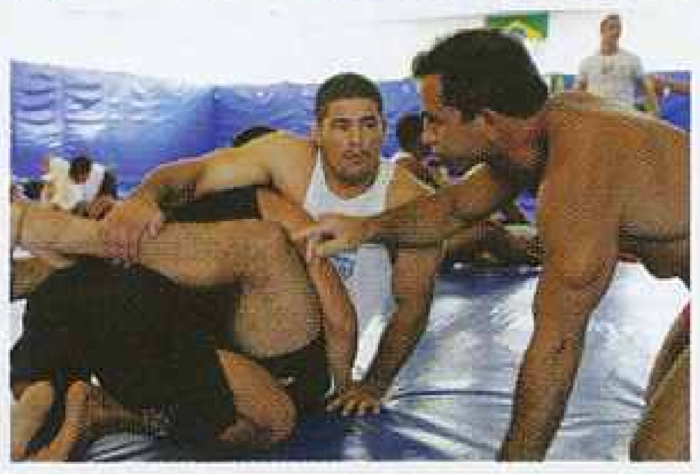
聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

BRAZILIAN TOP TEAM

PRIDE
3大チーム
創世記
［ブラジリアン・トップチーム］







BTTはリオ・デ・ジャネイロの一等地にある、ブラジル銀行の福利厚生施設内にジムを構えている。周囲はプールやテニスコート、レストランなどもあり立地条件は抜群だ。ジム内ではマリオとブスタマンチを中心に、大勢の選手がハイレベルな練習を行なっている。

BTTの前身であるカーウソン・チームは90年代ブラジル最強だったと断言できるよ

——今日は、ブラジリアン・トップチーム（以下BTT）とマリオさん自身の歴史を振り返ってもらいたいんですけど、もともとマリオさんが柔術を始めるきっかけというのはなんだったんですか？

マリオ　私が柔術を始めたのは6歳のときなんだけれども、小さい頃、私はけっこうきかん坊で落ち着きがない子だったんだよ。それで両親が先生や医者に相談をしたら何かスポーツをやらせたほうがいいんじゃないかってアドバイスがあって、それでカーウソン・グレイシーの道場に入ったんだ。

——なんで他のスポーツじゃなくて柔術だったんですか？

マリオ　最初から柔術だけをやっていたわけじゃなくて、水泳やサッカーなど、いろんなスポーツを実際にやってみたんだけど、私はあんまり才能がなかったんだ（苦笑）。でも、柔術だけは自分にとても合っていて、あと「強くなる」っていうのは男の子なら誰も持つ願望だからね。一番エネルギーを消耗するスポーツでもあるし、そういった意味で格闘技に力を注いだんだ。ただ、小さい頃っていうのは、やっぱり遊びたいから、辞めたり戻ったりを繰り返していたんだけど、私が15歳のときに本格的に柔術をやろうと思ったんだ。

——その15歳の頃から、カーウソン道場には、いまのBTTにいる選手もいたりしたんですか？

マリオ　BTT創立メンバーはだいたい揃ってたよ。ムリーロ・ブスタマンチ、あとはヴァリッジ・イズマイウとかね。

——カーウソン・チームというと、〝名門〟のイメージがありますけど、その頃から強い道場だったんですか？

マリオ　もちろん。80年代後半から90年代においてブラジルでナンバー1のチームだったと断言できるね。当時の柔術選手権ではほぼ全階級で上位を我々のチームが独占していたんだ。

——日本のファンの中では、エリオ派のグレイシー一族が柔術の中ではもっとも有名ですけど、彼らはそれほどいい成績を挙げてなかったんですか？

マリオ　彼らの中でいい成績を挙げていたのはホイラーぐらいだよ。ヒクソンはもうずいぶん早い時期から柔術の大会には出なくなっていたからね。

——では、その90年代当時マリオさんが考える最強の柔術家は誰だと思いますか？

マリオ　そうだなぁ、90年代だったら……アマウリ・ビテッチかな。

——アマウリ・ビテッチですか⁉ それはちょっと意外ですね。

マリオ　アマウリはバーリ・トゥード（以下VT）では、あまりいい結果を出せなかったので、日本のファンにとっては意外かもしれないが、かつての彼を知っているブラジル人なら、みんな納得してくれると思うよ。

——実力的にはヒクソン・グレイシーより上ですか？

マリオ　さっきも言ったようにヒクソンは若い頃に活躍したあと、すぐにアメリカへ行ってしまったから、もちろん有名ではあるけれども、競技的な実績はそんなに残っていなくて伝説的な強さなんだ。それに対して、アマウリを含めた我々の世代はブラジルで切磋琢磨しながら結果を出してきたからね。比較は難しいが、私はアマウリのほうが上だと思うよ。

——なるほど。そしてカーウソン・チームは柔術だけでなく、VTでも早くからトップクラスだったわけですよね？

マリオ　そうだね。91年に柔術vsルタリーブリというVTの全面対抗戦があって柔術が全勝したんだが、柔術側の代表はほとんど我々のチームからだったからね。

——そんなカーウソン・チームの人たちは、93年にUFCがスタートして、一躍VTや柔術が注目されて、「ホイス・グレイシーこそ世界最強」みたいな風潮になったことを、どう思っていたんですか？

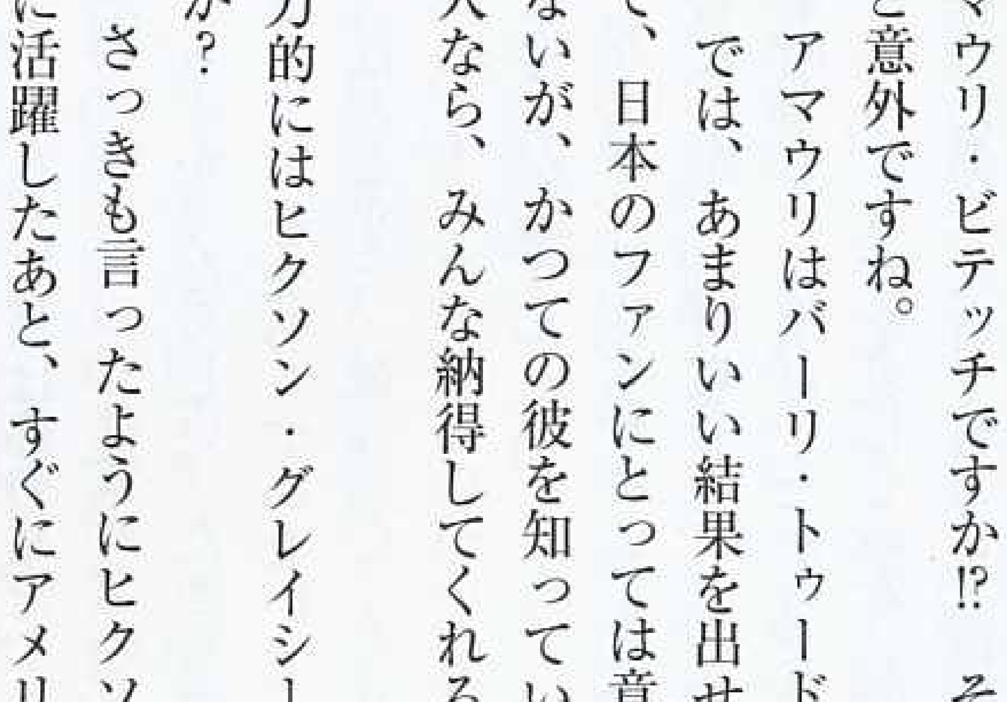
マリオ　我々が取り組んでいた柔術が一気に世界に広まったことは、正直に嬉しかったし、それはホイスやホリオンの大きな功績だと思う。それまでは格闘技ではお金が稼げなかったし、私自身はイギリスの大学でエコノミックサイエンスの学位を取得して、パイロットの資格も持っていたので自分の進路についていろんな選択肢があったんだけど、UFCが誕生したおかげで幸運にも格闘技でお金が稼げる環境ができて、私も自分が一番好きな格闘技の道に進むことになったわけだからね。ただ、ホイスが〝最強〟と言われると「ちょっとな……」というのはあったよ（笑）。

——当時のブラジルではホイスはどんな評価だったんですか？

マリオ　みんな名前は知っていたよ。ヒクソンの弟だからね。でも、若いうちからアメリカに渡っていたので、ブラジル柔術界ではなんの実績もないから、柔術家として評価のしようがないよね。

——マリオさんが黒帯を取ったのはいつ頃なんですか？

マリオ　94年だったかな。カーウソンが黒帯を渡すときっていうのは大きなトーナメントに優勝した選手に渡したりするんだけど、私の場合はトーナメントに出る前に



BTTのメンバーは道場での練習のほか、ファベーラの中にあるボクシングジム『ノーブレ・アルト』で、ブラジルでの総合格闘技用ボクシング技術の第一人者であるクラウジオ・コエーリョのコーチを受けている。

私もムリーロもイズマイウだけはどうしても BTTに入れたくなかった。なぜなら……

「もうお前が絶対優勝するのはわかってるから、黒帯をプレゼントする。その代わり相手をケチョンケチョンにやっつけろ」と言われたんだ（笑）。

——ダハハハ！　それでちゃんと優勝したんですか？

マリオ　もちろん優勝したさ（笑）。

——凄いなぁ。それはなんというトーナメントなんですか？

マリオ　94年と95年はブラジル柔術選手権。それから96年から98年はブラジリアン柔術世界選手権に優勝したよ。

——うわ～、94年から98年まで5年連続でメジャータイトル制覇ですか！

マリオ　それから98年は『アブダビ』でもチャンピオンになった。99キロ以下級と無差別級の両方でね。

——本当に凄いですね。そんなマリオさんたちが、そのあとカーウソンから独立してBTTを設立したのは、どんな理由からだったんですか？





BTT入団後、その才能を開花させたノゲイラは、2000年にリングス『KOK』トーナメントをブッチギリの強さで優勝。その後、戦場を『PRIDE』に移し、名実共に世界トップのファイターとなった。

マリオ　いろいろあるけれど、まず我々と師匠とのあいだに、ファイティング・スタイルへの考え方の溝が大きくなってしまったことが第一の原因。当時は『PRIDE』などが出てきて、MMAで勝つためには打撃やレスリングの導入が不可欠だったにも関わらず、カーウソンは頑なに柔術以外はやらせようとしなかった。それから、99年にカーウソンがアメリカに行ってしまったのが、引き金になったと思う。彼がブラジルを離れてから、我々は生徒たちを指導しながら自分たちの練習もして総合の試合に出なければならなかったんだが、我々が試合に出るとファイトマネーからかなりのパーセンテージを取られたりとか……要は試合も指導もマネージメントもすべて我々がやっていたにも関わらず、ブラジルにはいない彼にお金を取られるっていうことが問題だったね。それで自分たちだけのチームを作るということを決心したんだ。

——でも、当時は「師匠を裏切るのか⁉」みたいな感じでイズマイウあたりにかなり批判されたりとかもしてますよね。

マリオ　なぜ彼がそう言ったかというと、要は自分だけ誘われなかったヒガミだね。

——ダハハハ！　イズだけが師匠に忠誠を尽くしたわけじゃなくて、ただ誘われなかっただけ（笑）。

マリオ　その通り。私もムリーロもベベオ（マリオらと共にBTTを設立した共同創立者＝現コーチ）も、ヴァリッジだけは絶対入れたくなかった。なぜかというと、それぞれ理由はたくさんあるが、彼こそ自分だけがよければ仲間を平気で裏切る男だからなんだ。

——BTTを批判したイズ自身が一番の裏切り者ですか（笑）。

マリオ　たとえば98年にヴァリッジがホイスと柔術の試合をしたことがあったろう？　あれは本当は私がホイスと試合をするはずだったんだ。

——そうなんですか⁉

マリオ　それを例のごとくヴァリッジが裏からいろんな手を尽くして、自分がホイスとやるというふうに仕組んだんだ。98年といえば、私はブラジリアン柔術世界選手権と『アブダビ』で優勝して、グラップリングでは世界でトップの成績を挙げていた。その私とUFCで名を挙げたホイスが闘うからこそ意味があるマッチメイクだった。それに対してヴァリッジは柔術でも負け、『PRIDE』でも負けていたから、本来ならお呼びでないはずなのに、「ホイスに勝った」という勲章がどうしてもほしくて、私から対戦カードを奪い取る策略をしたわけだよ。

——とんでもない男ですね（笑）。

マリオ　その動きに感づいた私はヴァリッジに「君がもしこの試合を私から横取りするなら、もう友人関係は終わりだ」って言ったんだが、彼にとっては我々との友情などどうでもよかったらしい。だからそれ以来、一度も言葉を交わしていないよ。

——イズはともかく、最近お亡くなりになった師匠のカーウソンさんについてはどのような気持ちがありますか？

マリオ　カーウソンは柔術にしてもMMAにしてもとにかく素晴らしいファイターだったし素晴らしい先生だったから、それについては本当に敬意を表している。彼がMMAを作った第一人者であることは間違いないし、彼なくして我々のいまはなかったと、BTTみんなが思っているよ。

——わかりました。では、カーウソン・チームから独立したBTTですけど、これは会社組織になっているんでか？

マリオ　有限会社だね。今年はムリーロが社長をやっている。

——「今年は」ってことは、前は違ったんですか？

マリオ　じつは毎年変わるんだよ（笑）。BTTは一人で作った会社じゃないから、来年は私、再来年はベベオみたいな感じで回っていくわけさ。

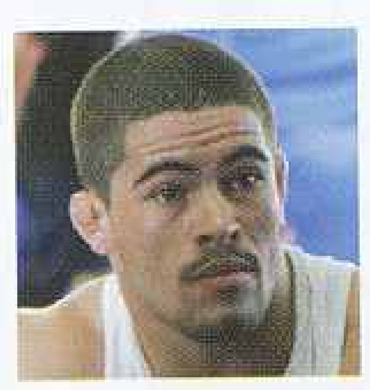
——それぞれ担当みたいなのはあるんですか？

マリオ　一応簡単には分かれている。たとえば私はコーチ業の統括と選手のマネージメント。ベベオはマーチャンダイズや細々した仕事、そしてムリーロはファイナンスを担当している。でも、重要な決定事項は3人で決めているよ。

——ホドリゴ・ノゲイラがBTTに参加するようになったのは、どんなきっかけがあったんですか？

マリオ　99年にアメリカのワシントンで私のセミナーがあったんだが、そこにたまた

[ブラジリアン・トップチーム] 注目のファイター



ホジマー
ROSIMAR

本邦初公開となるブラジリアン・トップチームの秘密兵器、それがこのホジマーだ（フルネーム聞き忘れました）。身長は173cmと低いが、全盛期の阿修羅・原やマサ斎藤を思わせる筋肉の鎧を身にまとった肉体は迫力充分。ブラジルでは88kgで闘っているようだが、日本では83kgに落とし、ウェルター級で闘わせたい意向があるようだ。今年ウェルター級GPが開催されれば、台風の目になること間違いなし！



BRAZILIAN TOP TEAM
Mario Sperry

まミノタウロが来ていて、それが最初の出会いだね。当時、ミノタウロは21～22歳で一番実力が伸びるときなのに、フロリダに住んでいたために技術を教えてくれる人がいなかったんだ。それで私は「君は凄い才能を持ってるのに教えてくれる人がいない。プロでやっていくつもりなら、ブラジルに帰ってきてBTTに入らないか?」と誘ったんだよ。

――やっぱりノゲイラはブラジルに来てみたらどんどん実力が上がってきましたか。

マリオ　逆に私があなたに聞きたい、どう思いますか?（笑）

――言うまでもなく、ぐんぐん強くなったと思います（笑）。

マリオ　彼はもともと才能があったんだけれど、BTTに入って揉まれることで、実力が開花したんだと思うよ。

――では、最後にBTTおすすめの有望選手を何人か教えていただけますか?

マリオ　有望な若手はたくさんいるから、階級別に言うとヘビー級だとドラゴという108キロある選手がいる。あと93キロ以下のミドル級ならアレッシャンドリ・カカレコとファビアーノ・カポアニ。そしてもっともオススメしたいBTTの秘密兵器は83キロ以下級のホジマーだね。

――ホジマーはどんな選手なんですか?

マリオ　身長は173センチで小さいのだけど、身体がガッチリしていて、グラウンドがミノタウロレベルなんだよ。ミノタウロが一緒にスパーリングして、その寝技の力強さとスタミナに呆れるぐらいだからね。しかも、ホジマーはリオに来る前は本当に山奥に住んでいて、すべて野生の中で鍛えられた身体だからね。

――アローナとどっちが野生児ですか?

マリオ　比べ物にならないくらいホジマーのほうが野生児だよ（笑）。だって彼は初めて練習でリオに来たとき、ショッピングセンターのエスカレーターに驚いていたぐらいだからね（笑）。

――そこまで田舎者ですか（笑）。

マリオ　ホジマーは身体に大きな傷があるんだけど、それは地元で闘牛の牛と闘ったときに負った傷らしい。しかも、そのときは牛の角を持ってテイクダウンして勝ったらしいからね。

――〝牛殺し〟の逸話までありますか（笑）。

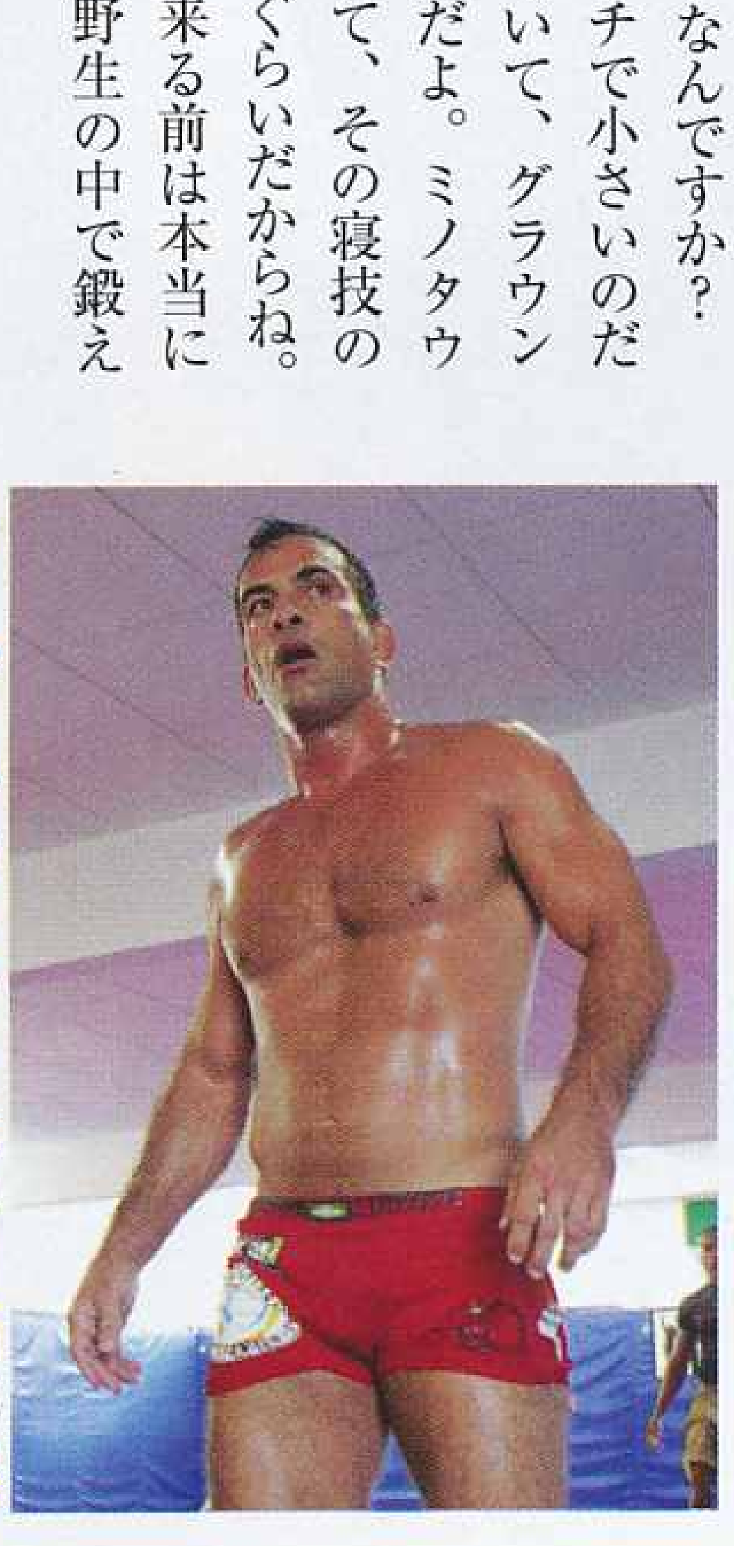
マリオ　本当にケタ外れの男だよ。いままでMMAで7勝しているんだけど、全部サブミッションで極めているし、あとは『PRIDE』からチャンスをもらうだけさ。今年ウェルター級のGPがあるのなら、ぜひ出場させたいね。

――いやぁ、それは観てみたいですねぇ。

マリオ　あと今年のBTTはミノタウロに無差別級GPを取らせるという大きな目標があるから、チーム一丸となって頑張るつもりだよ。

――わかりました。では、これからのBTTに期待してます!

【06年2月24日／都内某ホテルにて収録】



1966年9月28日、ブラジル・リオデジャネイロ出身。柔術世界選手権3連覇や98年『アブダビ』2階級制覇など輝かしい実績を持つ。PRIDE戦績7戦4勝3敗。180センチ、105キロ。



RUSSIAN TOP TEAM

PRIDE 3大チーム創世記
[ロシアン・トップチーム]

RUSSIAN TOP TEAM Vladimir Pagodin

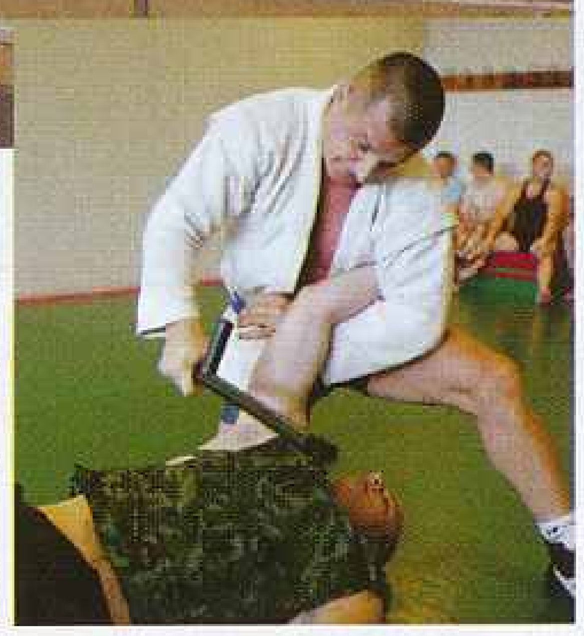
すべてはヴォルク・ハンから始まったウラジミール・パコージン

ロシアン・トップチームの前身、リングス・ロシアが誕生したのは1990年。
また、ソ連邦が解体される前だった。そのため、旧ソ連選手たちの
プロ転向には国家を通したプロジェクトだったという背景がある。
そんな元共産圏の選手たちが、いかにして最高のプロ格闘家集団となっていったか。
ソ連・スポーツ省のエリート官僚でもあったRTT総監督パコージン氏に語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也







RTTの母体はロシア・スポーツ省の管轄であるロシア・サンボ連盟（写真・上）。RTTは自前のジムは持たずモスクワやミーシャの地元トゥーラのサンボ場で主に練習を積んでいる（左）。警棒を使っての練習など、コマンドサンボをベースにしてRTTならではの練習も行なわれている（右）。

かつて私は格闘技学校の校長だったんだ 卒業生にはサルマン・ハシミコフがいる

――今日はリングス・ロシア誕生から現在のロシアン・トップチームになるまでの歴史についてうかがいたいんですよ。

パコージン　おお、いいテーマだ。すべての事象は歴史の上に成り立っているのだからね。

――それからパコージンさんが何者なのかということにも興味があるので、この機会にぜひお話してもらいたいな、と（笑）。

パコージン　べつに怪しい者じゃないよ（笑）。では、私自身の経歴からお話ししよう。私自身、じつは若い頃からサンボとレスリングの選手として活躍しており、大学卒業後、23歳の頃から国有鉄道のサンボ及び柔道の主任トレーナーとして6年間働いていたんだ。そのあとモスクワにある当時ソ連各地から優秀な選手が集まる格闘技の学校の校長として4年間務めていた。

――パコージンさんは校長先生だったんですか。なんという学校なんですか？

パコージン　「ロシア上級スポーツ技術学校」という名前の学校だね。ここは格闘技を始めたばかりの生徒が集まるのではなく、優秀な選手だけが集まる学校で、自分の技術をさらに磨いて完璧なものにするためにある学校。格闘技のエリートが集まる学校と言っていいでしょう。

――じゃあ、オリンピック代表選手なんかも多数排出しているわけですか？

パコージン　もちろん。とくに柔道、レスリング、サンボについて世界チャンピオンクラスの選手を多数排出しているよ。名前を出しても日本人はわからないかもしれないが、サルマン・ハシミコフもこの学校の卒業生だよ。

――あ、あの新日本プロレスに来ていたハシミコフが！

パコージン　そのあと、ソ連時代にあったスポーツ省で仕事をするように依頼を受け、スポーツ省格闘技部門の副委員長というポストに就いた。こういった機関では、オリンピックで金メダルを獲るように推奨していたので、グレコローマン、フリースタイル・レスリング、柔道、ボクシング、重量挙げ、フェンシング、そういった我々の計画の下で実行してきた選手たちなのだが、たとえばオリンピックでソ連が50個のメダルを獲ったとしたら、そのうちの半分は我々が管轄する競技が獲っていた、それぐらいの高い確立で選手を育成していたんだよ。

――当時のソ連はスポーツ選手育成に凄く力を注いでいたんですよね？

パコージン　その通り。当時は国からスポーツへの支援金がたくさんあったんだ。だから、優秀なスポーツマンは、それだけで一生安泰だったんだよ。そして私は、スポーツ省の中でサンボ、柔道、ボクシング、この3部門の責任者として仕事をしていたんだよ。

――要は旧ソ連のスポーツ官僚だったってことですよね。昔から偉い人だったんですね（笑）。

パコージン　そんなに特別偉かったわけではないが、責任を負うような仕事を多く任されていたので、結果的にそうなったという感じかな。そして90年代からはスポーツ省の中でもとくにサンボを専門として働くようになったんだ。

――そんなパコージンさんが、日本のリングスとビジネスをスタートさせるきっかけはなんだったんですか？

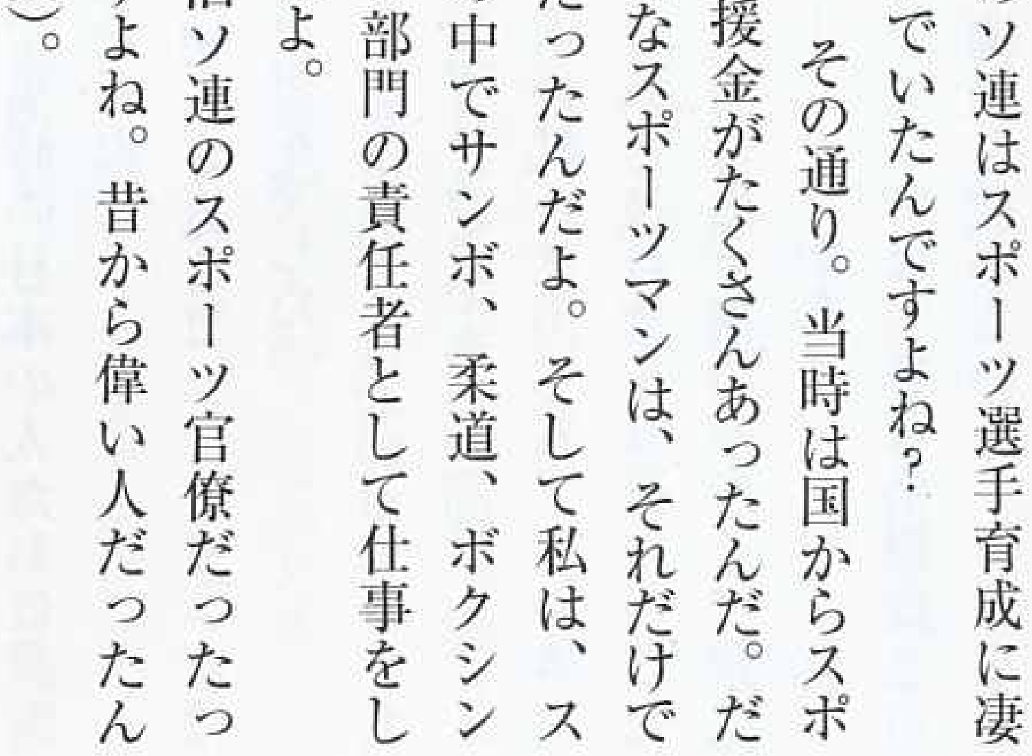
パコージン　我々が日本の格闘技界との関係をスタートさせるきっかけとなったのは、私の20年来の友人であるトモユキ・ホリマイ（堀米奉文氏）という世界アマチュア・サンボ連盟の理事がいて、この人物の影響が大変大きい。

――リングスで審議委員長を務められていた堀米奉文さんですね。

パコージン　そう。彼は非常にプロフェッショナルで、かつ心の優しい尊敬すべき人物だ。彼と初めて会ったのは84年ぐらいだったと思う。当時彼は日本サンボ連盟の代表だったので、その関係でソ連にもよく訪れており、私たちと力を合わせてサンボの普及、発展に尽力してきた同志でもある。そのミスター・ホリマイが90年にマエダ（前田日明）を連れてモスクワにやってきて、「我々が行なう新しいビジネスに協力してほしい」と持ちかけてきたんだ。そのときの提案が「リングス」だった。だから、彼は我々をこのプロ格闘技の世界に導いてくれた恩人であり、我々ロシアン・トップチーム全体にとって〝父〟のような存在だと思っているんだよ。

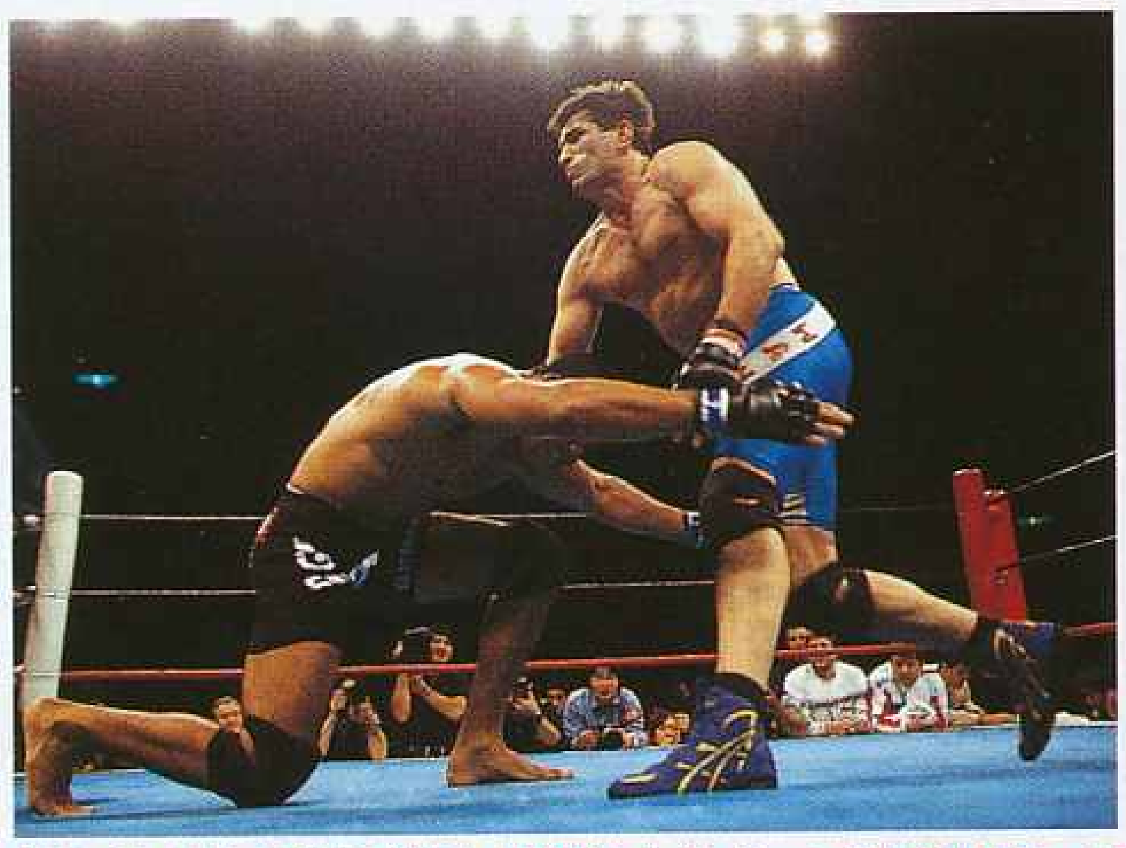
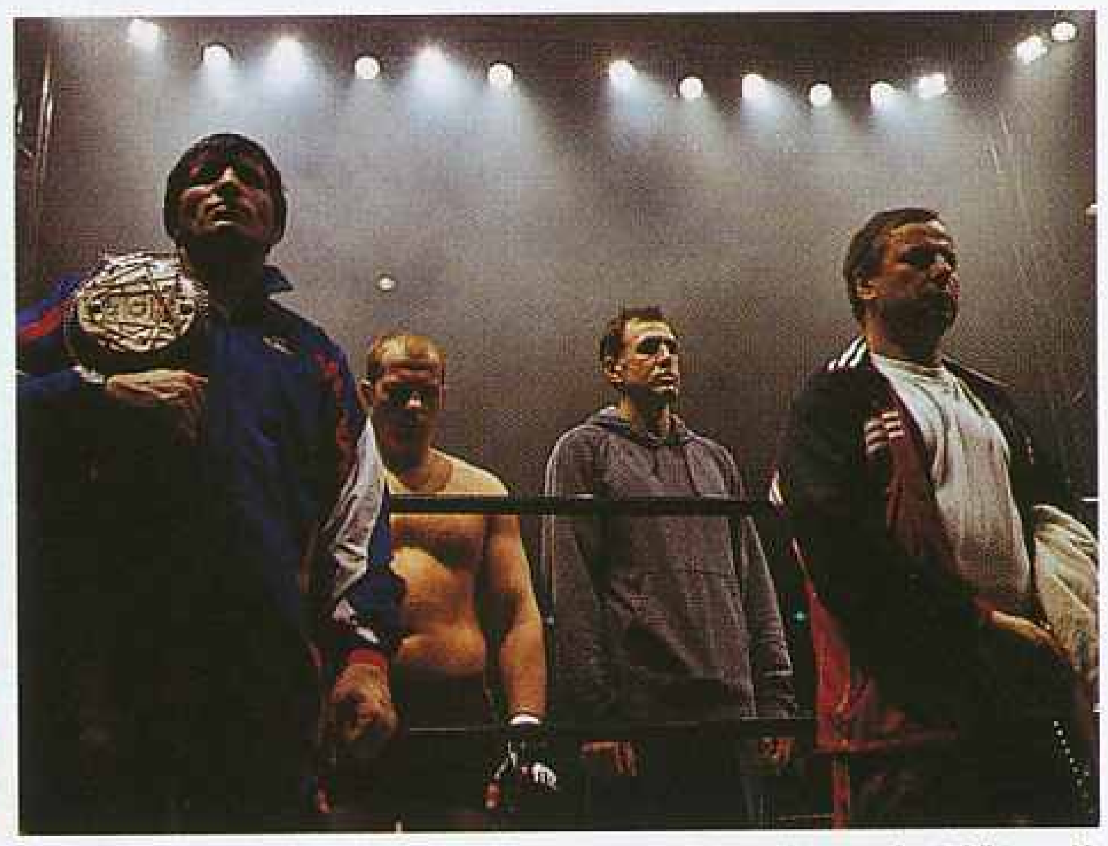
――古くからロシアスポーツ界とつながりが深い堀米氏の紹介があったからこそ、日本のプロスポーツ界との交流が実現した、と。

パコージン　その通り。そして当時の私はスポーツ省格闘技部門の副委員長として、12のスポーツを担当していて、サンボだけでなく、レスリング、柔道など、あらゆるスポーツマンに精通していたので、私がプロへの窓口を受け持つことになった



これが元リングス・ロシアの中心選手、N・ズーエフが個人所有する複合スポーツ施設「エカテリングルグ・リングスセンター」。ここから、ハリトーノフに続く選手が現われるのを期待したい。

もし10年前にPRIDEが存在していたら ハン、コピィロフらは大活躍していただろう

「リングスが生んだ最高傑作」と呼ばれた"レジェンド"ヴォルク・ハン。コマンドサンボをベースにした複雑怪奇な関節技で人気を博し、後年は39歳にしてMMAに初挑戦。第2回「KOK」で飛ぶ鳥を落とす勢いのノゲイラと激闘を展開し、リングを降りた。また、総合格闘技集団「ヴォルク・ハン格闘術」を立ち上げ、ヒョードル、アターエフをスカウトするなど、選手育成面でも定評があり、まさに今日のRTTの礎を作ったのがこのハンなのだ。

んだよ。

——当時はソ連からロシアに変わる直前でしたから、国家も絡んだ話だったわけですか？

パコージン　もちろん。窓口がスポーツ省なのだからね。だから最初は、モスクワ五輪のときに作られたオリンピック村に70人ぐらいの候補選手を集めて、ホリマイやマエダが審査員となってオーディションのようなことを行なったんだ。

——堀米さんと前田さんが直々に選考したんですか。そのとき、リングスとはどんなものだと説明したんですか？

パコージン　いや、特別にどういったものかという説明はなかったんだ。単純に「あなたたちは日本でプロの試合に参加する可能性がありますよ。参加すればスポーツでお金を稼ぐことができますよ」と説明しただけだった。

——それだけですか（笑）。

パコージン　当時、ソ連は体制が変わり、スポーツへの資金援助がほとんどなくなってしまい、スポーツ選手たちが食うに食えないような状態で困っていたんだよ。だから、スポーツでお金を稼げるというこの話に多くのスポーツマンが飛びついたんだ。

——じゃあ、渡りに船のような話だったわけですね。

パコージン　だから、マエダ自身、「こんなに希望者がいるなんて……」と驚かれたようだ。そして希望者があまりにも多かったので選抜を行なったんだが、多くのスポーツマンが集まった中でも、とくにプロ向きだと選ばれたのが、サンボの選手たちだった。

——たしかにリングスとの相性が最もいい格闘技はサンボでしたね。

パコージン　そこから、皆さんご存知のヴォルク・ハン、コピィロフ、ズーエフ、ミーシャ、アレクサンドル・ヒョードロフといった偉大な選手たちが日本で活躍するようになったんだよ。

——最初にリングスが始まったときは、それこそ柔道、サンボ、レスリングの世界チャンピオンクラスの旧ソ連選手がたくさん集まったと思うんですけど、その中でヴォルク・ハン選手はそれほどアマチュアでの成績は良くなかったと思うんですよ。そのハン選手がなぜ日本のトップである前田さんの最初の相手に選ばれたんですか？

パコージン　これは大変おもしろいテーマなので、また別の時間を設けて話したいくらいなのだが、ハンというのはスポーツサンボの選手でもあったが、専門は軍隊で使われていた戦闘用のサンボ、コマンドサンボのほうだったということが大きな理由と言えるだろう。このコマンドサンボはスポーツ競技とは認められておらず、ソ連の軍内部で秘密裏に行なわれていたものなので、世界的にもまったく知らされておらず、当時の日本の人たちは誰も知らなかったんだ。

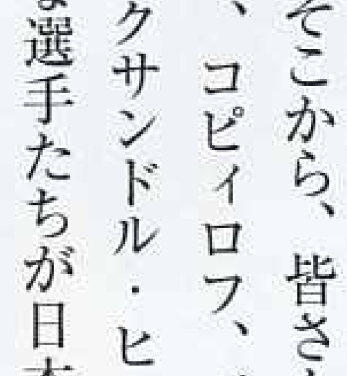
——確かに初めて見るコマンドサンボはセンセーショナルでした。

パコージン　そしてハンはそのコマンドサンボのスペシャリストであったのだが、スポーツサンボの試合に出ても、彼が本当に得意としている技は禁止されていたため、本当の実力を出す機会がなく、常にフラストレーションがたまっていたんだ。ところがリングスでは、総合格闘技ということで、関節を極めるのも、打撃を入れるのも許されるということで、ハンがこれまで磨いてきた技をついに出すチャンスが巡ってきたんだ。それでハンはオーディションでコマンドサンボの技を次々と披露したのだが、マエダをはじめとする日本からのスタッフたちが、その初めて見る技術に驚き、ハンを気に入ってくれて、マエダの対戦相手に選ばれたんだよ。

——なるほど。そこで柔道やレスリングの「〜選手権優勝」といった肩書きではなく、未知なるコマンド・サンボの達人を選んだことがリングス成功の秘密だったような気がしますね。

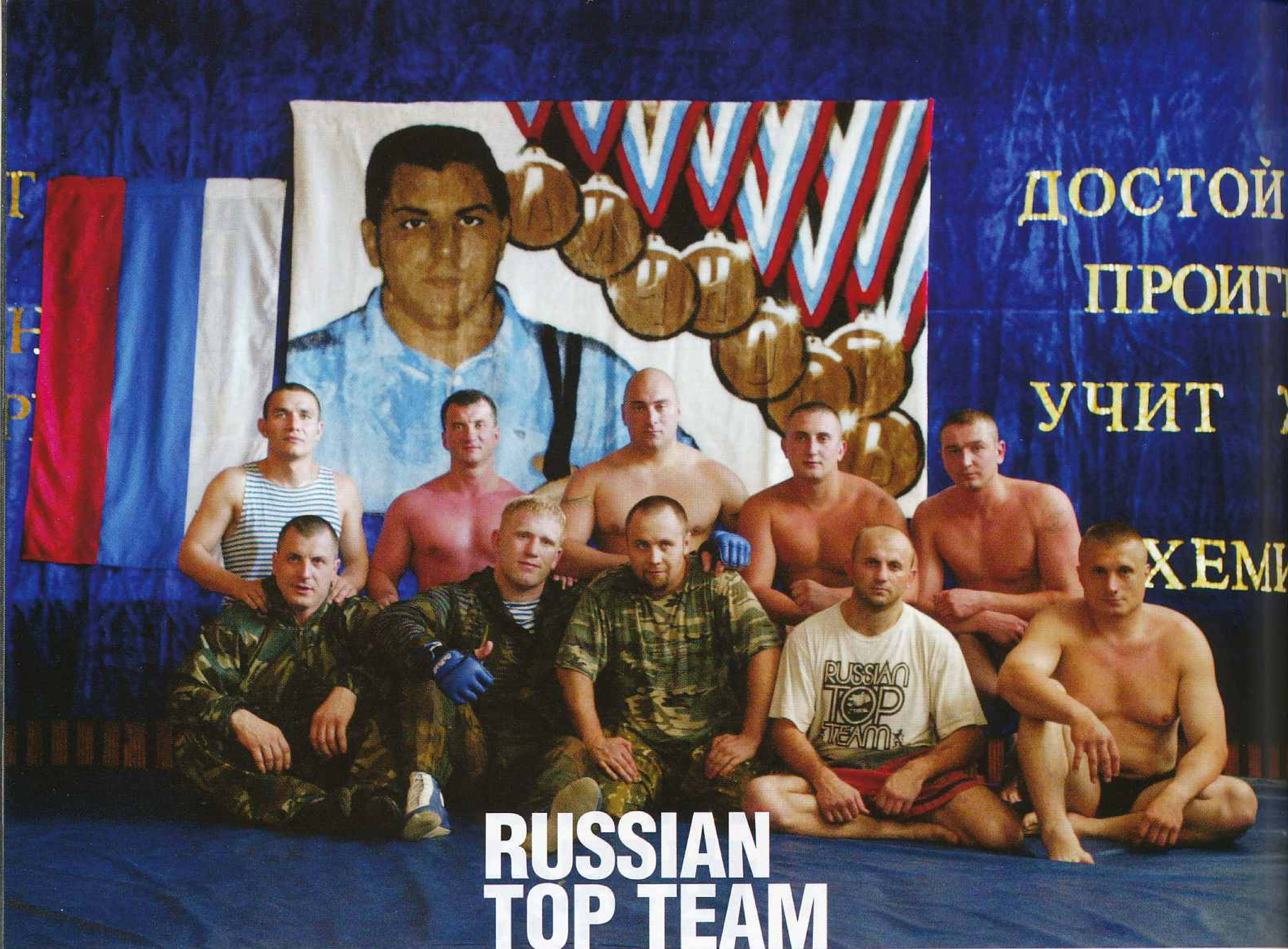
パコージン　100パーセントそのように言えるだろうね。いまでこそ歳を取ってしまったが、90年代前半にハンを超えるプロの選手はいなかっただろう。彼はどんなタイプの格闘家が相手でも自分の実力を出すことができたし、非常に高度な技を持ち、対戦相手や観客を驚かす策略も得意としていた。だからもし10年前にこの『PRIDE』という舞台があったならば、ハン、コピィロフ、ズーエフは間違いなく世界のトップとして、素晴らしい試合を展開していたことだろうね。

[ロシアン・トップチーム] 注目のファイター



ヴォルク・アターエフ
VOLK ATAEV

ヴォルク・ハンから唯一「ヴォルク（＝狼）」の名を受け継ぐことが許された"最強の弟子"アターエフ。リングス時代は散打仕込みの強烈すぎる打撃で、KOの山を築いていたが、02年12月に『PRIDE』初参戦ではアリスターにまさかのKO負け、それ以後、総合のリングからは遠ざかっていたが、昨年8月待望の復活。散打の現役世界チャンピオンであり、北京オリンピックでは金メダルが確実視されるこの男の『PRIDE』再登場に期待したい！



RUSSIAN TOP TEAM
Vladimir Pagodin

——ロシア第一世代のグラウンドの実力は、あのヒョードルも舌を巻くほどですからね。

パコージン　それはそうだろう。たしか99年だったと思う。ヒョードルはヴォルク・ハンとピチコフ、バラチンコフ（ともにコーチ）が発掘した選手だ。当時、我々としてはヒョードルはチームにどうしてもほしい選手ではなかったが、彼がどうしても入りたいということで、ハンのチームに入り訓練を積んでリングスでデビューしたんだ。そのあと、ヒョードルは3年間、我々とともにトレーニングをしてきたが、残念ながらいまは離れてしまった。確かにヒョードルは勤勉で努力家のいい選手だ。ただ、91年のリングス・ロシア誕生、そしてロシア第一世代の活躍がなければ、ロシアン・トップチームは存在しえなかっただろうし、いまのヒョードルやセルゲイ（ハリトーノフ）もいなかっただろう。

——それはそうでしょうね。いまパコージンさんはロシアではどんなお仕事をしているんですか？

パコージン　いまはロシアサンボ連盟の第一次長、国際サンボ連盟の役員として、サンボの発展に力を尽くしているよ。

——これからのRTTにどんな新しい選手が出てくるかに興味があるんですけど。

パコージン　ここで日本に行く可能性がある選手の名前を挙げてもいいのだけれども、『PRIDE』が招待してくれるかわからかないので、ここでは名前を挙げることは控えたいと思う。ただ、一人挙げるとするならヴォルク・アターエフはいまもミーシャやハリトーノフと練習しているし、先日も散打の世界選手権で優勝、しかも4回目の優勝を果たしたんだ。そういった選手がいることを申し上げるだけに留めておきたいと思う。

——アターエフはぜひ、また『PRIDE』に参戦してほしいですね。

パコージン　アターエフ以外にも『PRIDE』に行きたい選手はいまでもたくさんいる。ロシアには連盟に登録しているだけで1万4000人のサンビストがいるから、その中には『PRIDE』にピッタリの選手もいるだろう。でも、『PRIDE』に出場したい選手はロシアだけでなく世界中にいて、みんな順番待ちなんだ。だから我々がやるべきことは、いつでも『PRIDE』のリクエストに応えられるよう、選手を準備しておくということだね。たとえばエカテリンブルグに「リングスセンター」というニコライ・ズーエフ所有のスポーツ施設があるが、我々はその「リングスセンター」という名前が明日にでも「PRIDEセンター」に変わりかねないほど、『PRIDE』に出場させたい選手を日々、鍛えているからね（笑）。

【06年2月25日／都内・某ホテルにて収録】


ロシアン・トップチーム総監督。若い頃はレスリングの強豪選手として活躍。旧ソ連体制下においては共産党の若いエリート官僚であり現在もロシアサンボ協会の副会長を務める。

チーム別 PRIDE 世界分布図

日本で始まったPRIDEは、いまや世界中に浸透し、これまで世界26カ国から約250名の選手が参戦するワールドワイドなイベントなった。世界地図とともにどの国のどんなジムから選手が来ているのかを紹介していこう。

構成／中村拓己（GBR）

U.S.A.

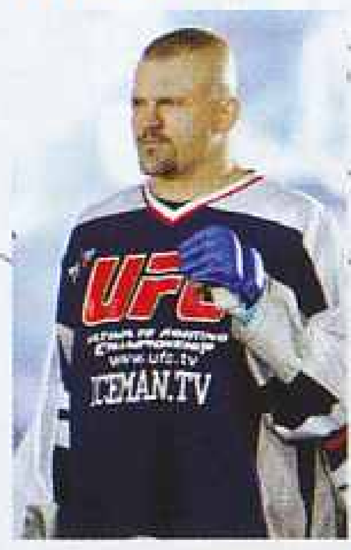
チーム・エクストリーム
Team Extreme



モンテ・コックスがマネージメントを務めるチーム。ATTと同じくアメリカを活動の拠点としているため、日本に馴染みのある選手は少ないが、UFCなどで結果を残している選手を多く抱えており、今後の日本マット参戦に期待がかかる。とくに70kg～80kgの選手の参戦は粒揃い。武士道において起爆剤になりそうだ。

ジェンス・パルヴァー
ジェレミー・ホーン

ピットファイトチーム
Pit Fight Team



現UFC王者のチャック・リデルを擁するチーム。PRIDEミドル級GPでこそ、準決勝で敗れたリデルだが、その後はUFCで連勝を重ねベルトを巻いており、ぜひもう一度PRIDEのミドル級戦線でその勇姿を見たいものである。ちなみに同門でヘビー級GPに参戦したこともあるガン・マッギーは現在、長期欠場中。

チャック・リデル
ガン・マッギー

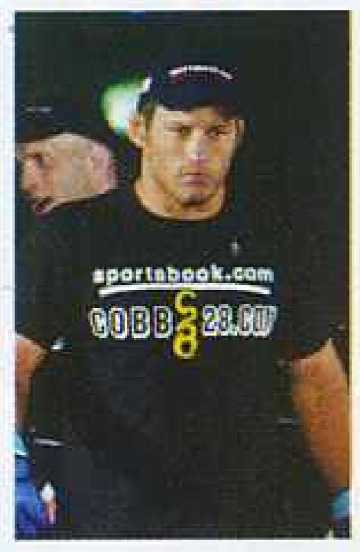
アメリカントップチーム
American Top Team



BTTの創設メンバーであるヒカルド・リボーリオが設立したアメリカ版のBTT。豊富な資金力をバックに設備の整った巨大なジムを構え、多くのプロ選手が在籍しており、アメリカ総合格闘技界において一大勢力となりつつある。まだ日本で闘う選手が少ないものの、いずれは日本にもその勢いがやってくる日も近い?

マーカス・アウレリオ
アーロン・ライリー

チーム・クエスト
Team Quest



ハンマーハウス同様、アマレスがベースのチームではあるが、早くからキックボクシングや柔術のトレーニングを取り入れており、タックル一辺倒でないのが特徴的。アメリカのいろいろな地域にジムが存在しているが、ダンヘンのジムは出稽古に訪れる選手が多い。クイントン・“ランペイジ”・ジャクソンや長南亮もその一人だ。

ダン・ヘンダーソン
ルーロン・ガードナー

ハンマーハウス
Hammer House



マーク・コールマンが代表を務める、アマレスラーが中心のチーム。所属選手のほとんどがマッチョ系で、グラウンド＆パウンドが武器。下からの関節技に弱いというのも共通項である。一時期の勢いはなくなったが、ランデルマン×ミルコ戦などときに番狂わせを起こすポテンシャルを秘めている。チーム復権の鍵は寝技対策か。

マーク・コールマン
ケビン・ランデルマン
フィル・バローニ

New Zealand

オシアナスーパーファイタージム
Oceania Super Fighter Gym



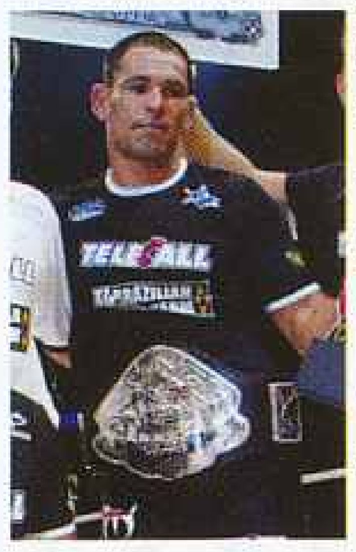
“サモアの怪人”マーク・ハントの所属するジム。基本的にはキックボクシングのジムであり、ハントは自らレスリングや柔術のコーチを招いて、総合の練習を続けている。決して恵まれている環境とは言えないが、今年初めユノラフ・エイネモがハントとともに練習するなど、徐々にではあるが練習環境が整いつつあるのが現状。

マーク・ハント

Brazil

ブラジリアン・トップチーム
Brazilian Top Team

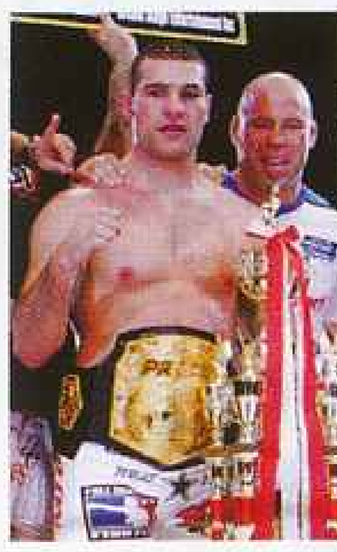
カーウソン・グレイシーから独立した選手たちが中心となって立ち上げられた。柔術をベースにしながらも、ボクシングやムエタイにも力を入れており、総合的にレベルの高い選手が多く揃う世界有数のチーム。しかしここ数年は総合格闘技の打撃偏重の波に押され、タイトルから見放されており、巻き返しに期待がかかる。



マリオ・スペーヒー
ムリーロ・ブスタマンチ
アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
アントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ
ヒカルド・アローナ
パウロ・フィリオ
ルイス・ブスカペ
ファビオ・メロ
ミルトン・ヴィエイラ

シュートボクセ・アカデミー
Chute Boxe Academy

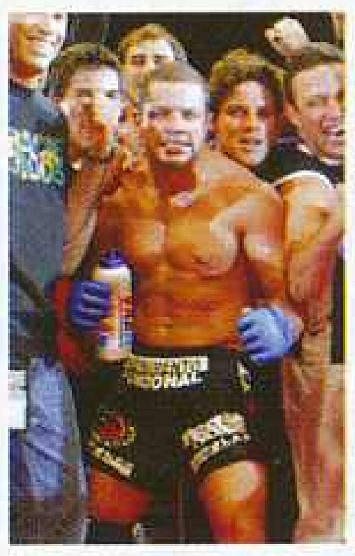
BTTと並ぶ世界でもトップのアカデミー。ムエタイをベースに全局面打撃が基本スタイル。一時は寝技が弱点とされていたが、柔術家のコーチや選手も多く在籍し、より完成された総合格闘技アカデミーへと変貌を遂げている。アカデミーの結束は固く、それゆえにBTTをはじめ他のチームと因縁を生むこともしばしば。



ヴァンダレイ・シウバ
ムリーロ・ニンジャ
マウリシオ・ショーグン
ダニエル・アカーシオ
ルイス・アゼレード
ニーノ・“エルビス”・シェンブリ
ジーン・シウバ
ジャドソン・コスタ
ジョルジ・パチーユ・マカコ

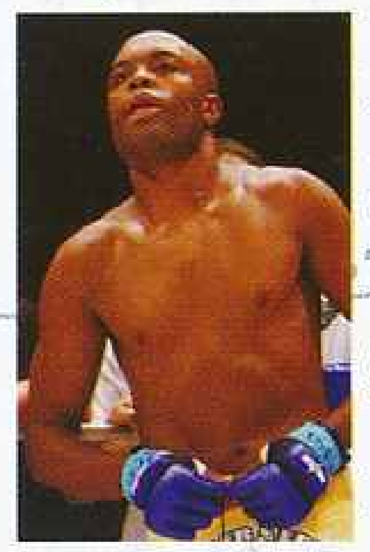
グレイシー一族
Gracie Famiry

PRIDEに参戦しているグレイシー一族は、エリオではなくカーロスの血を引く選手が主。柔術だけでなくレスリングやボクシングなど、総合的にレベルの高い選手が多く、積極的に試合をこなし、長らく日本人選手の壁として立ちはだかった。今後は組技競技で活躍するホジャーをはじめ、新世代グレイシーの登場に期待したい。



ハイアン・グレイシー
ハウフ・グレイシー
ダニエル・グレイシー
クラウスレイ・グレイシー
ヘンゾ・グレイシー

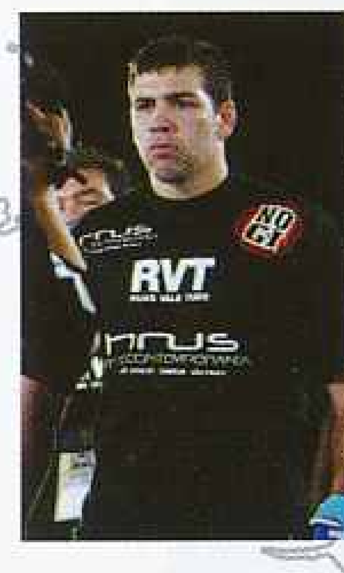
ムエタイ・ドリームチーム
Muay Thai Dream Team



シュートボクセを離脱したアンデウソンが結成したチーム。ノゲイラらとともに練習を積むなど、BTT勢と交流を持っている。所属選手こそ少ないものの、ブラジルではムエタイと総合ルールの大会をプロモートしており、今後どんな選手を送り組んでくるか楽しみな存在である。なおアンデウソンは海外マットを中心に活躍中。

アンデウソン・シウバ
アスエリオ・シウバ

ファス・バーリ・トゥード
Ruas Vale Tudo



VT創世記に“路上の王”として恐れられたマルコ・ファスが代表を務めるジムで、ルタ・リーブレが技術ベースとなる。ペドロ・ヒーゾを筆頭にストライカーが多く在籍しているのが特徴。ノヴァ・ウニオンとはジム経営においてパートナーシップを組んでおり、練習もする間柄。日本からは中村和裕が武者修行に訪れている。

マルコ・ファス
ペドロ・ヒーゾ

Norway

Russia

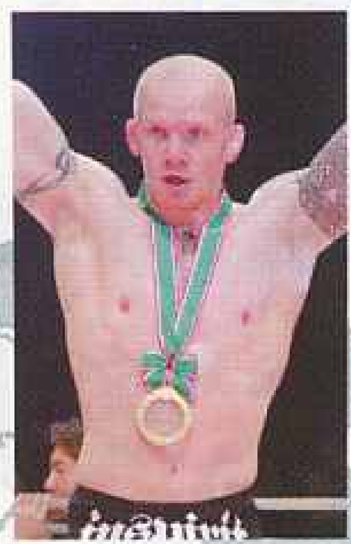
Netherlands

Croatia

Korea

Japan

フロントライン・アカデミー
Frontline Academy



ノルウェーに点在する格闘技ジムが一致団結して結成した新しいチーム。過去に五味に勝利したハンセンや、最近PRIDEデビューを果たしたエイネモが中心メンバーとなる。北欧のチームらしく、手足の長さや体の強さなど身体的特徴を活かし、独自に築き上げた技術体系を持つ。ブラジル、ロシア、オランダに続く新興勢力地。

ヨアキム・ハンセン
ユノラフ・エイネモ

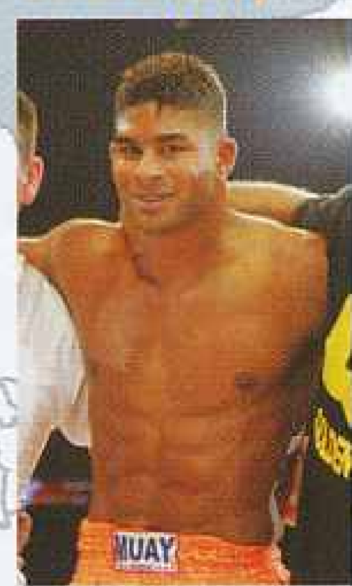
KPW・CMA-KOREA
KPW•CMA-KOREA



日本の影響を受けて、総合格闘技ブームが起こっている韓国。PRIDEに選手を送り込むKPW、デニス・カーンの所属するスピリットMCなど、多くの格闘技団体・イベントが存在している。世界レベルで活躍する選手を輩出するには至っていないが、柔道やレスリングからの転向選手も増えており、数年後が楽しみである。

キム・ジン・オー
キム・インソク

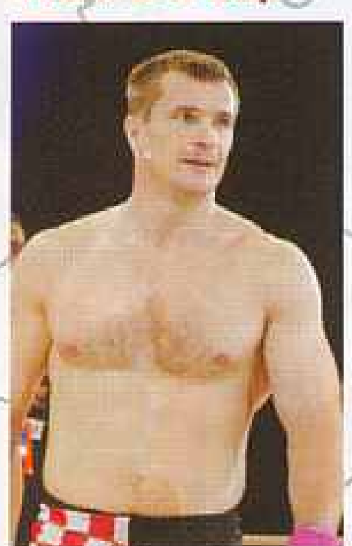
ゴールデン・グローリー
Golden Glory



オランダの一大勢力となるチームであり、ドイツやチェチェン共和国など、バラエティに富んだメンバーが多く在籍する。とくにアリスターにイチから打撃を指導したルシアン・カルビンや、アリスターのグラウンドテクニックの成長を支えるマルタイン・デ・ヨングなど名伯楽も多い。今後アリスターに続く新鋭が出てくる予感。

アリスター・オーフレイム
ヴァレンタイン・オーフレイム
ムラッド・チュンカエフ

チーム・クロコップ
Team Cro Cop



あのミルコが自らのために結成したチームで、コーチや選手たちはミルコの自宅にたびたび寝泊りし、練習を続けている。メンバーにはボクシング、レスリング、柔術など、各分野のエキスパートが揃い、まさにミルコを強くするために作られたチームである。ヴェウドゥムをはじめ、今後どんな選手が送り込まれてくるのか、注目が集まる。

ミルコ・クロコップ
ファブリシオ・ヴェウドゥム

Team another world distribution chart of PRIDE

ロシアン・トップチーム
Russian Top Team

かつてはヒョードルが在籍、現在ではハリトーノフがエース的な存在。コピィロフやミーシャなど古くから日本にゆかりのある選手が多く在籍しているのだが、ベテランが多くハリトーノフに続く若手の選手がいないという現状に直面している。そのためここ最近はロシア勢として、若干レッドデビルに押され気味の印象がある。



セルゲイ・ハリトーノフ
イリューヒン・ミーシャ
ヴォルク・アターエフ
コーチキン・ユーリー

レッドデビル
Red Devil

世界最強の称号を持つエメリヤーエンコ・ヒョードルや弟のアレキサンダーが所属するレッドデビルは、メンバーがそれぞれの地域でトレーニングしており、時折合同練習を行なうという形態をとっている。ロシアではM-1という金網格闘技イベントも行ない、選手の育成にも力を入れており、着実に勢力を拡大している。



エメリヤーエンコ・ヒョードル
エメリヤーエンコ・アレキサンダー
アマール・スロエフ
ローマン・ゼンツォフ
アンドレイ・シモノフ
イブラヒム・マゴメドフ

髙田道場
Takada Dojo



現PRIDE統括本部長・髙田延彦が代表を務める道場。PRIDEの顔、桜庭和志もこの道場の所属だ。昨年、桜庭がシュートボクセに武者修行し、韓国のユン・ドンシクやポーランドのパウエル・ナツラが所属するなど、国際色豊かな道場となっている。多くの格闘家が出稽古に訪れ、PRIDEにおいて中心的な道場である。

桜庭和志／松井大二郎／西島洋介
ユン・ドンシク／パウエル・ナツラ

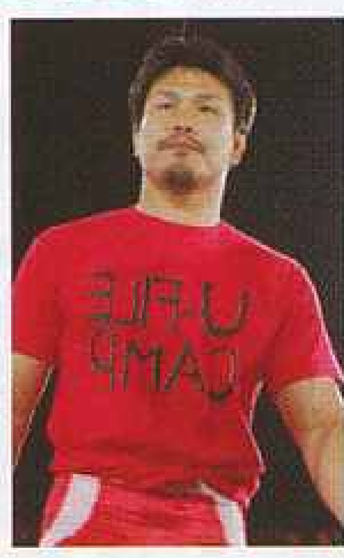
木口道場レスリング教室
Koguchi Dojo Wrestling School



かつて佐藤ルミナや桜井マッハ速人も所属した道場。道場に伝わる通称"木口トレーニング"はプロ選手も根をあげるほど厳しいことで有名。あくまでレスリングの道場ではあるが、五味を筆頭に帯谷信弘など総合部門はチーム・ラスカルとしても活動している。軽量級においては日本だけでなく世界でもトップクラスの道場だ。

五味隆典
帯谷信弘

U-FILE CAMP
U-FILE CAMP



孤高の天才・田村潔司が代表を務めるジムで、プロフェッショナルレスリングをベースとし、所属選手はU-STYLEとの掛け持ちをする場合が多い。また田村同様、グラウンドにおける回転体の動きが特徴である。昨年、田村が吉田道場との対抗戦を呼びかけたものの、1試合行なわれたのみでその後は休戦状態となっている。

田村潔司／上山龍紀／佐々木恭介
大久保一樹／中村大介

吉田道場
Yoshida Dojo



金メダリスト吉田秀彦が道場長を務め、世界レベルの柔道家が揃う道場。柔道家揃いということで組技のレベルは天下一品。昨年からは元シュートボクセのセルジオ・クーニャをコーチとして招聘し、選手の打撃レベルが飛躍的に伸びている。ちなみに関東圏に4つの道場が存在し、そこでは所属選手が柔道の指導も行なっている。

吉田秀彦／中村和裕／瀧本誠
小見川道大／村田龍一

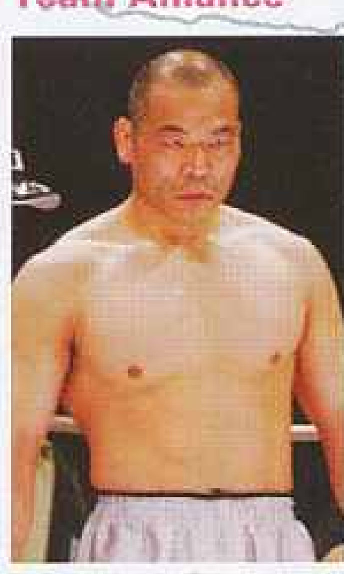
Team MAD
Team MAD



長南亮、滑川康仁が中心となって結成したチーム。特定の道場を持つわけではなく、それぞれが練習場所を持ち、チームとしての活動を行なっており、吉田道場、A-スクエア、髙田道場など、様々な道場と交流関係を持つ。長南、滑川ともに、PRIDEだけでなく、DEEPでも活躍している。その他所属選手は白井祐矢。

長南亮
滑川康仁

チーム・アライアンス
Team Alliance



"世界のTK"こと高阪剛が率いるチーム。チームとしての活動もさることながら、高阪が代表のジム、A-スクエアには、吉田秀彦を筆頭に、数多くのトップファイターが訪れ、団体や所属の垣根を越えた豪華なメンバーが集まり、日々汗を流している。その様子はまさにジャパニーズ・トップチームと言ってもいいだろう。

高阪剛
横井宏考

GRABAKA
GRABAKA



昨年パンクラスから独立した、菊田早苗率いる総合格闘技ジム。所属選手は10年以上も行動をともにしており、メンバーの結束は固い。寝技のイメージが強いジムだが、郷野を筆頭にストライカーとしても通用する選手も在籍する。所属選手は80～90kgの選手が多く、ウェルター級戦線においては人材の宝庫である。

菊田早苗／郷野聡寛
佐々木有生／三崎和雄

PRIDEわっしょい!! COLUMN

韓国格闘界に広がる

Road to PRIDEの熱

文／大川"隊長"義之

韓国における格闘技は90年代末ごろから、インターネットで不法にアップロードされる動画などを観たマニアたちがそのおもしろさを口コミで伝えてゆき、アンダーグラウンドで『PRIDE』の人気は広がっていった。00年以降になると、ネット上の格闘技関係のコミュニティやポータルサイトなどが非常に高いアクセス数を上げ、訴求力のあるコンテンツとして注目されるようになった。

このような国内的背景や、日本で盛り上がる格闘技ブームに注目した韓国のテレビ局は、03年からK－1やUFC、そして『PRIDE』などを一斉に放送し始めた。同時期に韓国政府が敷いたケーブルテレビを通じてほとんどの国民の目に触れることになった格闘技コンテンツは、徐々に視聴率を上げてゆき、何度もリピート放送されるほどになる。

日本の『PRIDE』が有料衛星放送のキラーコンテンツとしてスタートしたように、03年には韓国でもSkyLifeという衛星放送の目玉コンテンツとして豊富な資金を得て、初めての国内総合格闘技大会スピリットMCが開催された。このスピリットMCに出場するチーム・タックルのコーチをしていたのが、ご存知チェ・ムベその人であった。

04年2月の『PRIDE武士道・其の弐』に初登場して以来チェ・ムベは、4連勝の快進撃を続け、試合後のフィーバーポーズとともに大きな話題を呼んだ。このようなチェ・ムベの活躍によって『PRIDE』は新聞などでも大きく報道され、一般層にも広く認知されるようになった。『PRIDE』人気を牽引したチェ・ムベのあとを受け継いだのが、柔道界のトップスターであったユン・ドンシクである。初戦の桜庭和志戦こそ打撃への準備不足もあったが、現在は柔道着にこだわらず、『PRIDE』のリングで勝ち上がるために必要なものを着実に身につけている。

ユン・ドンシクが活躍し始めた頃から、韓国では一般のケーブルテレビを通して『PRIDE』の全試合が完全生中継されることになった。これにより、多くの人が簡単に『PRIDE』をリアルタイムで見られるようになり、韓国人とは国籍の関係のないミルコvsヒョードルの一戦も大きな注目を集め、視聴率6パーセント、占拠率40パーセントを超えた。これはサッカーなどの国民的スポーツ以外では異例の数字である。

眩しいほどの演出、そして世界最強の男たちが集う夢の舞台。……少し前までは韓国人にとって『PRIDE』での闘いとはテレビの中で起こる別世界のものであった。しかしここ数年、先駆者のチェ・ムベの活躍、デニス・カーン、そして国民的な認知度を持つユン・ドンシクの活躍によって多くのスポーツ選手が憧れる最高のステージとして注目を浴びるようになった。

そんな夢の舞台を目指して、最近、韓国人のスター選手不足に悩むスピリットMCが、『PRIDE』生中継をするXTMというケーブルテレビ局と協力し、『GO！スーパーコリアン！』というリアリティドキュメンタリー番組をスタートさせて好評を博している。番組自体は、アメリカで放送されている『The Ultimate Fighter』（以下TUF）からヒントを得たものだが、TUFと違う点は、純血韓国人スターを作り出し、スピリットMCで経験を積ませながら、『PRIDE』へ送り出すことを目標にしている点。『PRIDE』参戦がとりあえずのゴール地点になっているところに、韓国における『PRIDE』人気の高さが現われている。

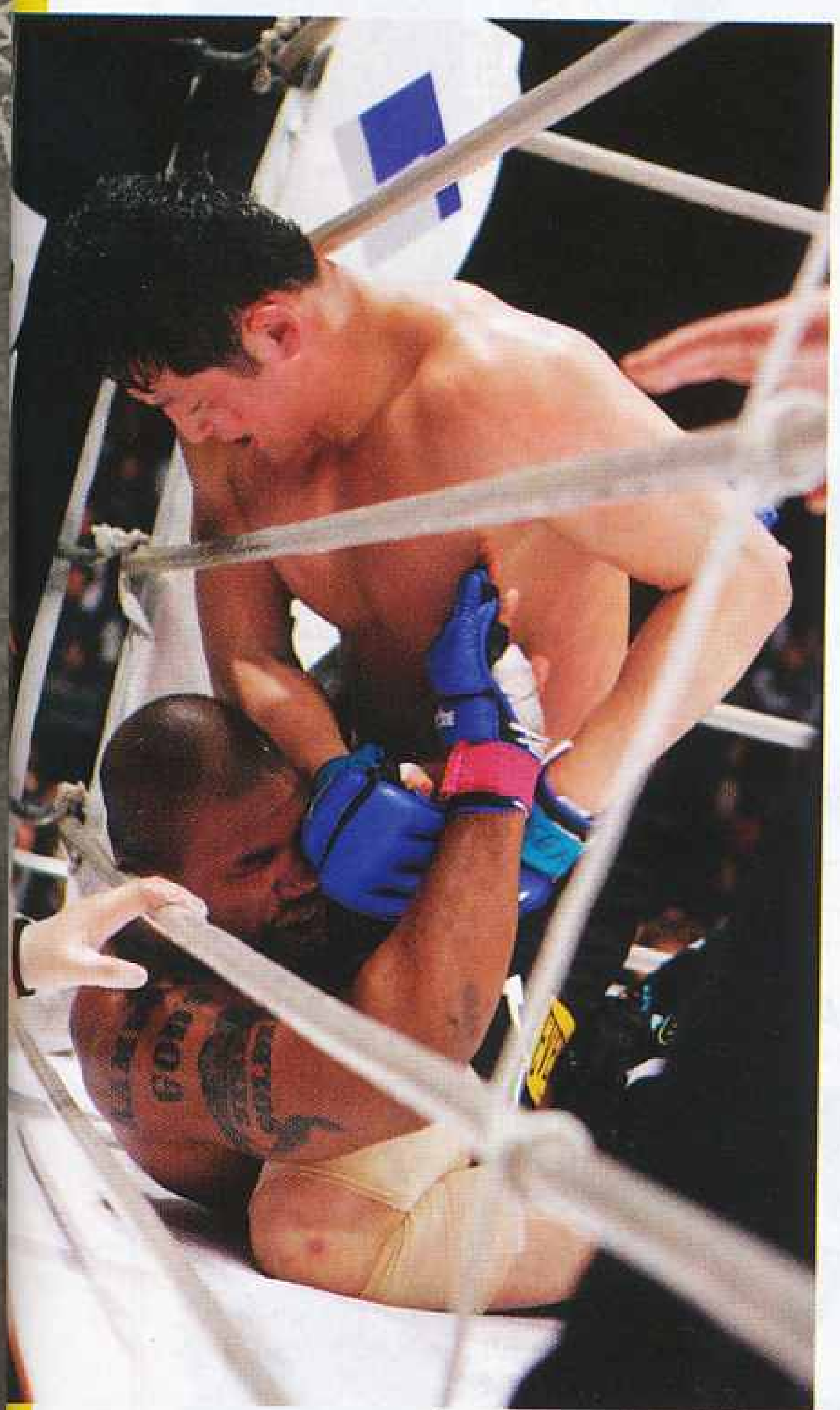
この『GO！～』には、スピリットMCのミドル級GPでベスト4になったイム・チェソク、チェ・ヨン、イ・チェソン、ペク・チョングォンがスター候補生として選ばれている。番組では、韓国の最新技術を生かした科学トレーニングを実施したり、トップアスリート並の基礎体力をつける練習に取り組んだり、BJペンのアカデミーに行ってトレーニングしたりと、様々な企画を通して選手の技術育成に努めている。この中でも、とくにスピリットMCのミドル級GPで優勝したイム・ジェソクは、日本の格闘技界でも活躍できる可能性を持つ逸材である。

彼ら以外にも、韓国と古くから深い関係を持つCMA諸岡会長ルートでDEEP系列に参戦する正進ジムの選手たちも、実績を積みながら『武士道』参戦を虎視眈々と狙っている。この正進ジムの選手は、中尾受太郎と引き分け、池本誠知と大激戦を繰り広げたオ・ウォンジンを筆頭に、タッグマッチで三島☆ド根性ノ助をKOしたパン・スンファン、山宮恵一郎に勝っているキム・デウォンなど、実力派が揃っている。

韓国国内では、今年の2月に行なわれたスピリットMCのインターリーグで新設されたウェルター級の選手たちが技術の高さを披露して注目を浴びた。これまでは韓国人選手というと、「体力面や精神力は良くても、技術はまだまだ」といった評価があったが、現在では中軽量級の選手を中心に、日進月歩の勢いで成長しており、楽しみな選手が増えている。

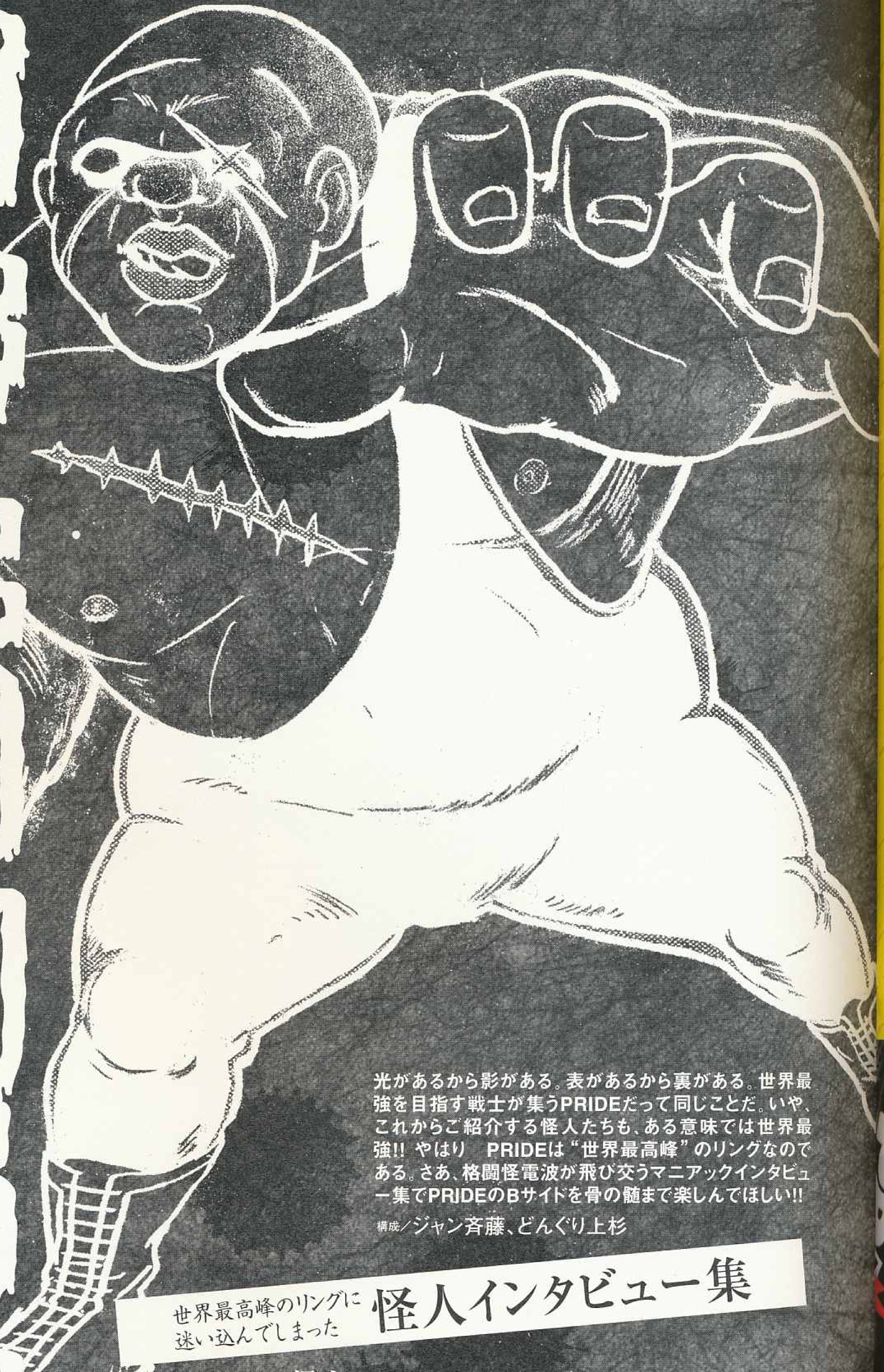
これまでの認識を一掃する選手が韓国から必ず現われる

近い将来、韓国からこれまでの認識を一掃するような選手が現われ、その力を無視できなくなる日が必ずやって来るだろう。地道な下積み生活を積んできたコリアンファイターの登場に期待してほしい。



韓国格闘技界にとって華の舞台である『PRIDE』。今後、第二、第三のユン・ドンシクがリングに上がる日も近い。

あなたの知らないPRIDEの世界



光があるから影がある。表があるから裏がある。世界最強を目指す戦士が集うPRIDEだって同じことだ。いや、これからご紹介する怪人たちも、ある意味では世界最強!! やはり　PRIDEは“世界最高峰”のリングなのである。さあ、格闘怪電波が飛び交うマニアックインタビュー集でPRIDEのBサイドを骨の髄まで楽しんでほしい!!

構成／ジャン斉藤、どんぐり上杉

世界最高峰のリングに迷い込んでしまった　怪人インタビュー集



エンタの怪人
ジョー・サン



地下プロレスの帝王
シャノン“ザ・キャノン”リッチ



闘魂ストーカー
ヴァリッジ・イズマイウ

上記の選手インタビューは、『kamipro』(旧・紙のプロレスRADICAL)誌上で掲載されたインタビューを再構成したものです。

エンタの怪人

ジョー・サン



【ジョー・サン】1970年11月22日生まれ。韓国出身。ロサンゼルス在住。初期UFCで怪人・キモのマネージャーとして登場。その強烈なキャラクターでマット界だけでなく、映画界までも席捲。エンターテイナーを自称するが、その歌、踊りともかなり変態的。バーリ・トゥーダーとして、THE BESTに参戦、またプロレスラーとしても橋本真也と対戦するなど日本のファンには馴染み深い。

PRIDE 超異人列伝 PART 1

キモのマネージャーとして、初期UFCでは強烈なインパクトを残していたジョー・サン。2002年2月22日、7年ぶりに来日。当時『PRIDE』の登龍門的大会として行なわれた『THE BEST』第2回大会のメインイベントにミステリアスなアイシャドウに加え、VT史上初のTバックを穿いて登場し、観る者をアッと言わせた。しかもなんとジョー・サンは、金的を守るために着用が義務付けられているファウルカップをしていなかったことをレフェリーに指摘され、花道を逆行し控室に戻らされるというオマケつき。しかし、その試合はアッサリ33秒で終了。インタビューは大会の翌日、失意の中、行なわれた。しかし、その心の中にあったものは、プロとは何か？　という彼なりの哲学（？）。胡散臭さを絵に描いたような男が明かす意外な過去、そしてその夢。ジョー・サンの心の叫びをいまこそ読み返せ！

サン　（パンツ一丁姿でいきなり）スーパースターの部屋へようこそ！

――今日もパンツ一丁なんですね（笑）。それにしても昨日の試合はいろんな意味で素晴らしかったです！

サン　（悲しそうな顔で）なぐさめはよしてくれ……。俺が負けたことはたしかなんだ……でも！（突然明るい顔になって）昨日の大会で俺より観客を楽しませた奴はいないだろ？　俺はエンターテイナーだから勝てなくても魅せることはできる！　コスチューム（『PRIDE』の文字入りTバック）だって特注なんだ！　これがプロじゃないか？

――見上げたプロ根性です（笑）。ちなみに昨日のコスチュームのテーマはなんだったんですか？

サン　（真面目な顔して）俺は日本人じゃないけど、日本のサムライ魂を持っているからそれを表現したかったんだ。ドーモアリガトウゴジャイマス、バンザイッ！

――豹柄Tバックと侍はなんの関係が？（笑）。

サン　俺は小さい頃はスモーレスラーになりたかったんだよ。昨日のパンツはスモーのマワシだと思ってほしい。

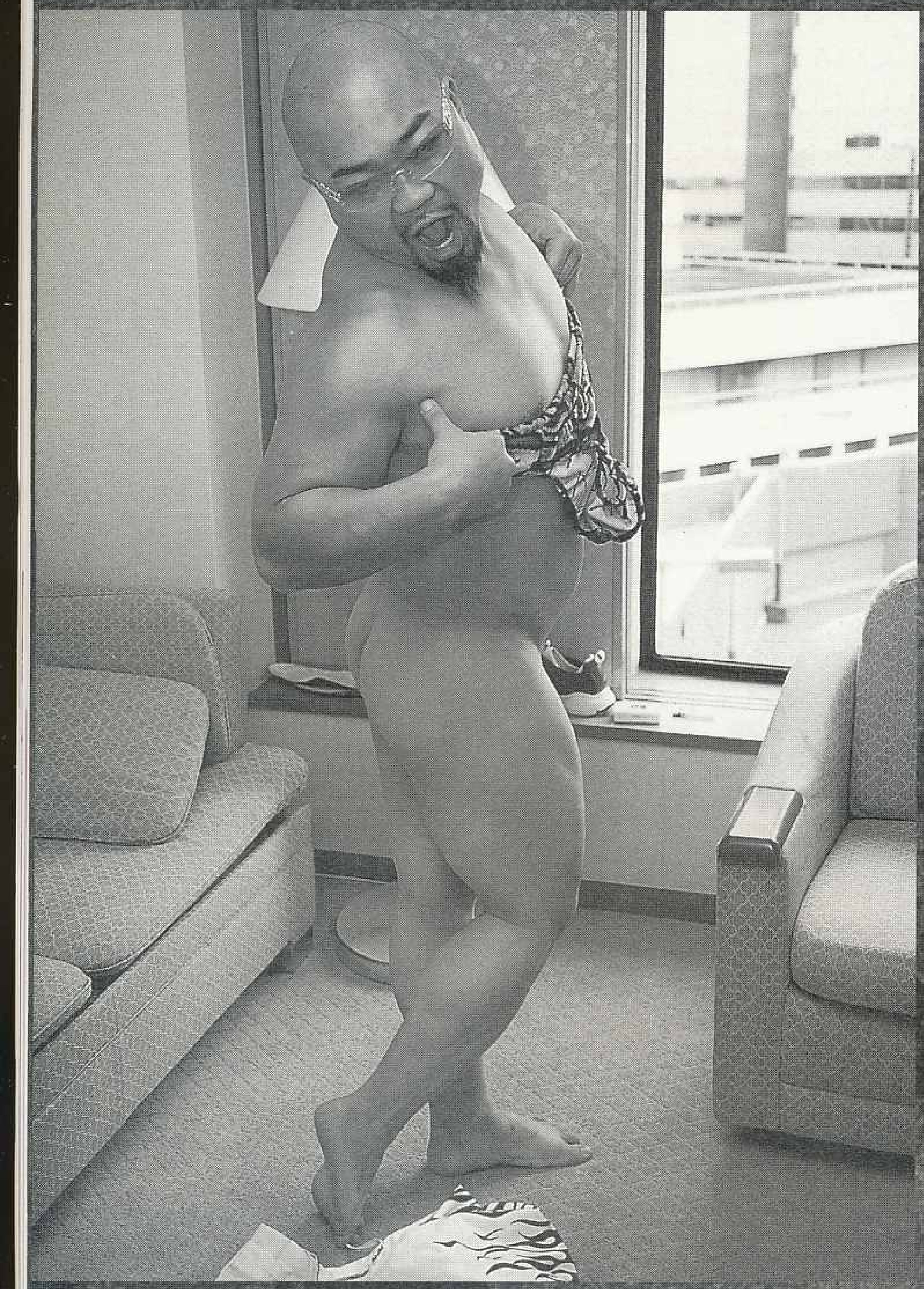
――あ、Tバックはマワシでしたか！　それは気付きませんでした（笑）。

サン　今回日本に来たのは、ファイトするだけじゃなくて、自分が日本に対してどういった気持ちを持っているかを日本の人々に伝えたかったんだ。だからこうしてインタビューに来てくれて嬉しいよ。今日は俺のパーソナリティのすべてを伝えたい。

俺はエンターテイナーだから勝てなくても魅せる!!

JOE SON





――それで今回はジョー・サンとは何か？を日本人にたっぷり伝えたいと思います！　まず真面目な話をすると、格闘技はいつから始めたんですか？

サン　5歳の頃、テコンドーを始めたよ。それから世界中のさまざまな格闘技を修得した。でも、いまはほとんど忘れちゃった（かわいらしく）。

――あらら（笑）。これは長年の謎だったんですけど、ジョー・サン選手が創始したという『ジョー・サン・ドー』とはどんな格闘技なんですか？

サン　これはベースボールから生まれたものなんだ。

――なんと野球から!!（笑）。

サン　すべての動きはカウンター攻撃。ボールが来たら打つというふうに、来たものに向かってパンチやキックを叩き込むんだ。このタイミングとインパクトを大切にしたもので、これは格闘技というよりも「タイミングが大事」という人生訓と考えてほしい。

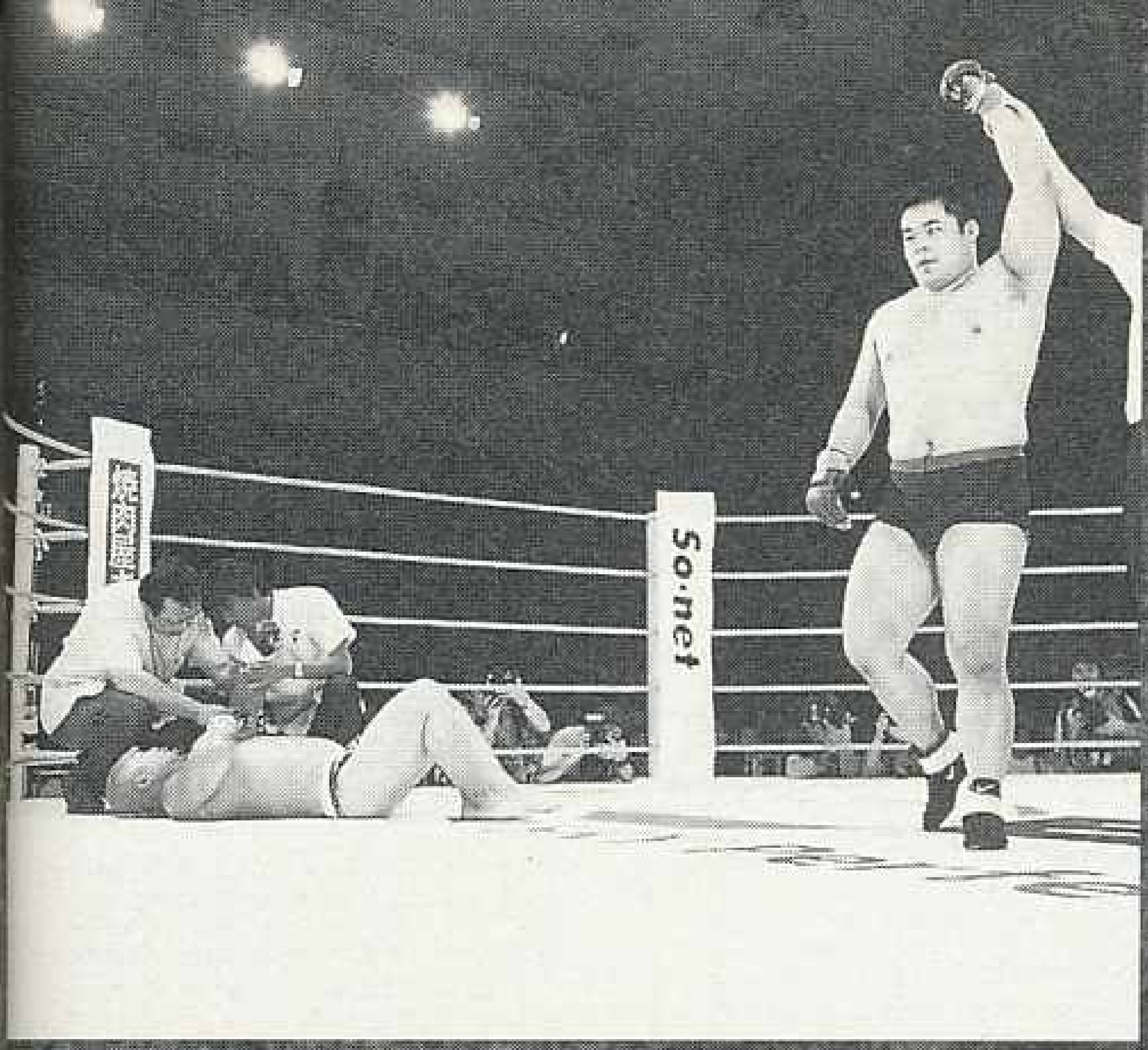
――『ジョー・サン・ドー』は人生訓でしたか！（笑）。その『ジョー・サン・ドー』の使い手はジョー・サン選手以外にも誰かいるのでしょうか？

サン　キモだ。彼を初めて見たとき、非常に潜在能力を見いだしたので、彼にジョー・サン・ドーを授けたんだよ。もう、彼以外に伝授する気はないね……。

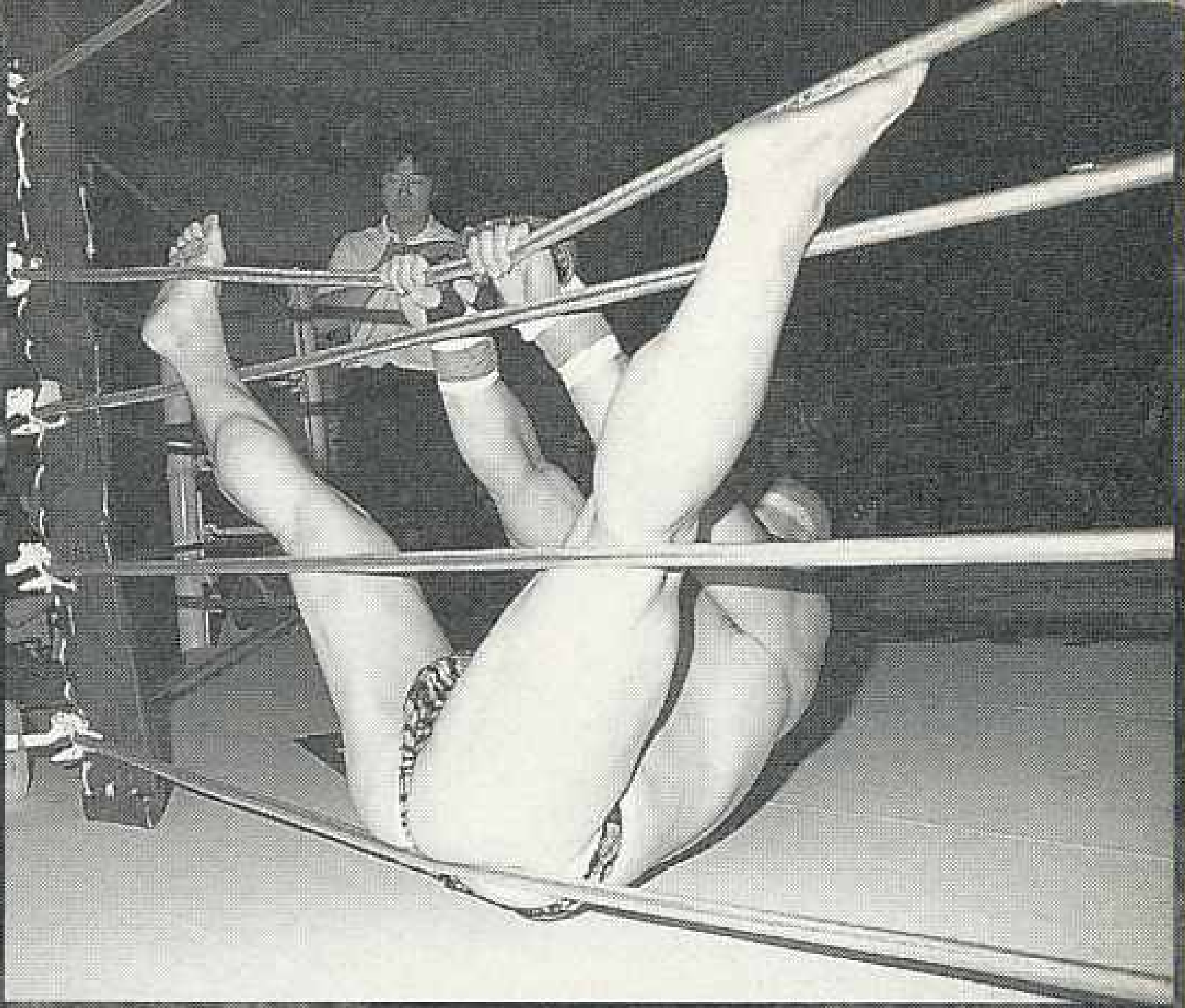
――もともとキモ選手とはどんな出会いだったんですか？



2002年2月22日、『THE BEST』。なんとVT史上初、WWEのディーバ・スティシーに優るとも劣らぬセクシーなTバックで登場したジョー・サン。ファールカップがハミ出しまくってます。







結局、肝心の試合はわずか33秒で今村が勝利!! あっという間の出来事だった。ジョー・サンは左肩を負傷。

総合でよく見られるコーナーでの差し合いのシーン。ところがなんとジョー・サンはこれだけで前代未聞のタップアウト。

リングインしたジョー・サンはストレッチというか、ストリップを披露。V字開脚で観客を洗脳……できるわけはない。

サン　街で俺のほうから「有名人になりたくないか?」と声をかけたのが最初だよ。

――悪徳スカウトマンみたいですね（笑）。

サン　キモはタトゥーから、話す言葉、イメージまで、すべて俺がプロデュースしたものだよ。もちろんあの十字架もだ。

――やはりあれはジョー・サンによるものでしたか!　それでキモとジョー・サンがUFCに登場することになったのはどんな経緯があるんですか?

サン　初めてUFCを観たとき、俺とキモの心に血が流れたんだ!　それで「これはコイツをUFCに出さなければ」と思い、すぐに電話をして「ぜ〜ひキモをグレイシーと闘わせたい」と売り込んだんだ。そうしたらホリオン・グレイシーが凄くいい人で、ホイスと闘うチャンスを与えてくれたんだ。

――いい人というか、カモだと思われたというか……（笑）。そのキモ選手と別れたのは考え方の違いからなんでしょうか?

サン　（寂しそうに）いや、マネーだよ。彼とはフィフティ・フィフティで取り分を決めていたんだが、途中からキモが納得しなくなった。自分はさまざまな経費も含めての金額だったのだが、キモは「それなら一人でやっていく」と出ていってしまった。彼はビジネスパートナーであり友人だったから、俺はその両方を同時に失なってしまった……。そして彼自身もマネージメントができる人間ではないので、仕事を失なってしまった。（突然ここで静かに歌い出す）♪このとき俺は学んだのさぁ〜、一方的な愛なんてないってことを〜〜♪　あのときキモを追いかければ彼は戻ってきたかもしれない〜〜♪　でもそれはホントの友情関係じゃないのさぁ〜〜♪　（素に戻り）気持ちを歌で表現させていただきました。

――ガハハハ!　新しい手法ですね（笑）。

サン　（突然タバコに火をつけ）あ、タバコを吸うんで……ぜひ写真を撮ってくれ!

――撮ってくれ!?「タバコ吸うところは撮らないでくれ」とはよく言われますけど、「撮ってくれ」というのは初めてですね（笑）。

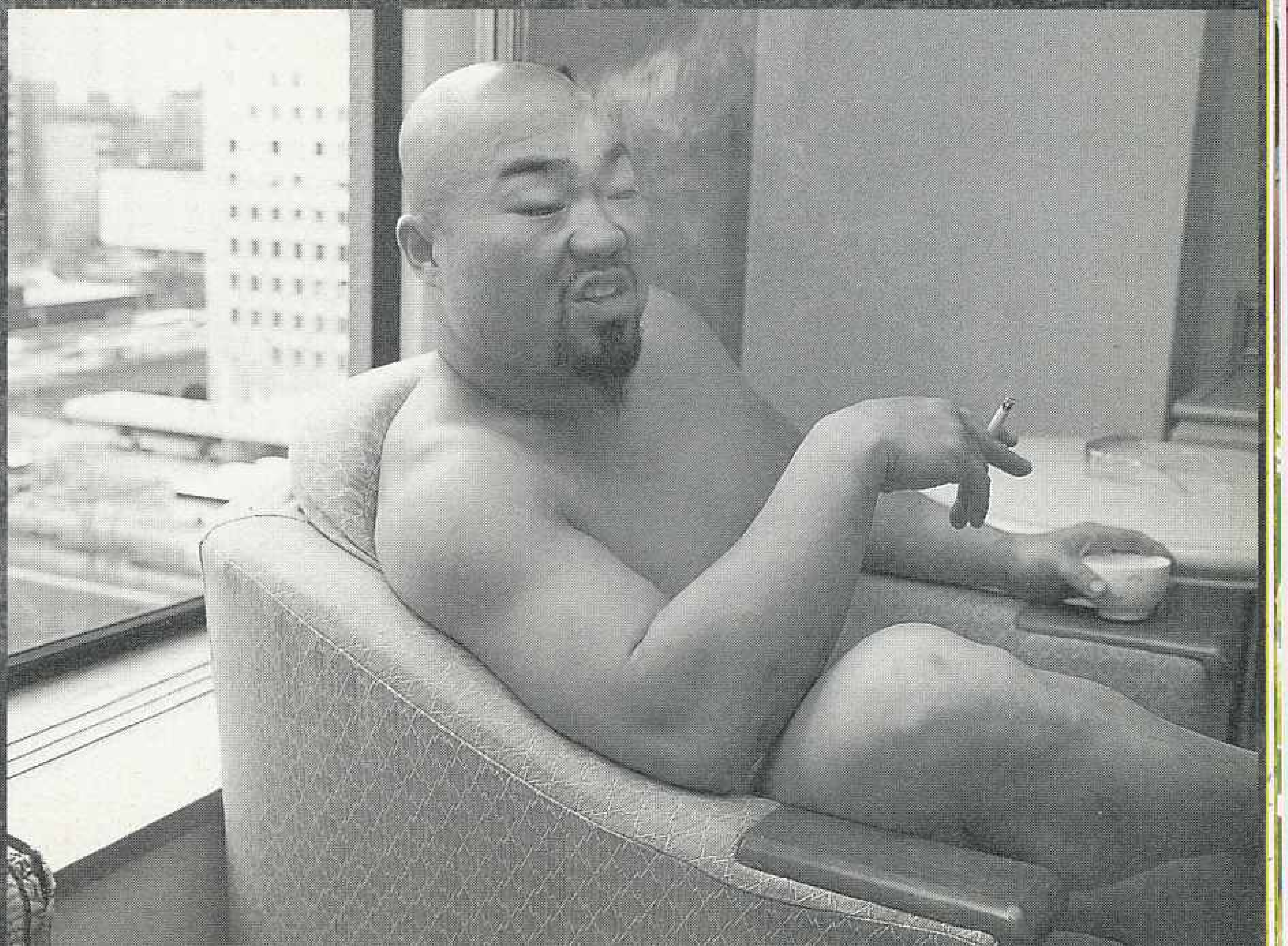
サン　やっぱり自分がどういう人間か、ありのままの姿を知ってほしいんだ。（また突然歌い出し）♪誰も〜自分のことを〜わかろうとしてくれないよぉぉぉ〜〜♪　俺のことを〜1から10まで〜みんなに知らせたいよぉぉ〜〜〜♪

――はいはい、知らせますから（笑）。ジョー・サンはUFCに上がる前に『フューチャーファイト』というPPVイベントに出場していたと聞いたんですけど、その話を詳しく聞かせていただけませんか?

サン　ああ、『フューチャーファイト』か。ユーはよく知っているな。ああ、出ていたよ。スーパースターになりたかったからね。スーパースターになれるチャンスがあるところだったら、俺はどこへでも出ていくよ。じつはポルノビデオにも出たことがあるんだ。2回ね。

JOE SON

小さい頃はスモーレスラーになりたかった。昨日のTバックはマワシだと思ってほしい



じつはポルノビデオに出たこともあるんだ!!

PRIDE 超異人列伝 PART 1

——ガハハハハ！　ポルノビデオまで!!

サン　それもすべてはスーパースターになる少ないチャンスを逃さないためなんだ。だから『フューチャー・ファイト』も一緒さ。街でケンカするなら、テレビでショーとして闘いを見せたほうが全然いいだろ？

——ショーとしての闘いですか？

サン　ああ、早く言えばプロレスみたいな結果が決まった格闘ショーだよ。

——プロレスみたいな……ま、いいか（笑）。なんか「アエロ・スモー」とかいう、へんなリングネームだったみたいですね？

サン　アエロ・スモー？　いや違う。エロー・スモウだ。

——エロ相撲？

サン　エロじゃなく、エローだ！（弓を引くポーズをする）。

——ああ！　アロー（矢）ですか！

サン　スモーレスラーのように太っていながら矢のように動きが速いという意味だよ。

——どんな意味だ（笑）。キモも『フューチャー・ファイト』に出ていたんですか？

サン　ノー。キモは出てない。俺の兄貴（アンドルー・サン）は出ていたけどね。それにしてもユーはいろいろ詳しいな。あ～、そういえば7年前にK—1で来日したときにユーの取材を受けたのを思い出したよ。久しぶりだな（と握手を求める）。

——あの……7年前はまだこの仕事はしてなくて、ジョー・サンvs角田信朗は客席で観ていたんですけど。

サン　ん？　人違いか。今日の午前中に取材を受けた男（『格通』の安西次長）のことはよく覚えていたんだけどな。彼は俺と兄弟みたいにソックリだ。身長も身体つきも一緒だし、彼が頭を丸めてヒゲを生やせばジョー・サンになれるだろう。

——ガハハハ！　ジョー・サンになれますか！（笑）。そういえば、UFCでセコンドについていた、お兄さんのアンドルーはいま何をしているんですか？

サン　アンドルーはいま格闘技を辞めてエンジニアとなり、ビッグハウスに住んでいるよ。でも、ジョー・サンは借家でコリアンハウス（「小さい家」を意味するアメリカの俗語）に住んでるんだ……。（再び突然歌い出す）♪アンドル～～はでかい家に住んでるのに～～～、ジョー・サンはコリアンハ～ウスゥ～～～♪　でもでもそれでいいのさぁ～～、俺には幸運はないけれど～～、天命を信じているのさぁぁぁ～～～～～♪（素に戻り）いまのはマイケル・ジャクソンの歌だよ。

——ウソつけ！（笑）。

サン　（無視して）俺はマイケル・ジャクソンのように、とにかくスーパースターになりたい。でも、みんなが俺のことをホモとかゲイとか言う。もしかしたら俺はそれに向いているのかも……？（突然でかい声で）ビューティフォォオオオオ!!　♪びゅーていふぉぉぉ～～～、俺はびゅーていふぉぉぉ～～～、イエェエ～～イ。（素に戻り）サンキュー。

——そろそろいいですか？（笑）。ジョー・サンはプロレスラーになろうとしたことはなかったんですか？

サン　あったさ！　いまでもプロレスラー



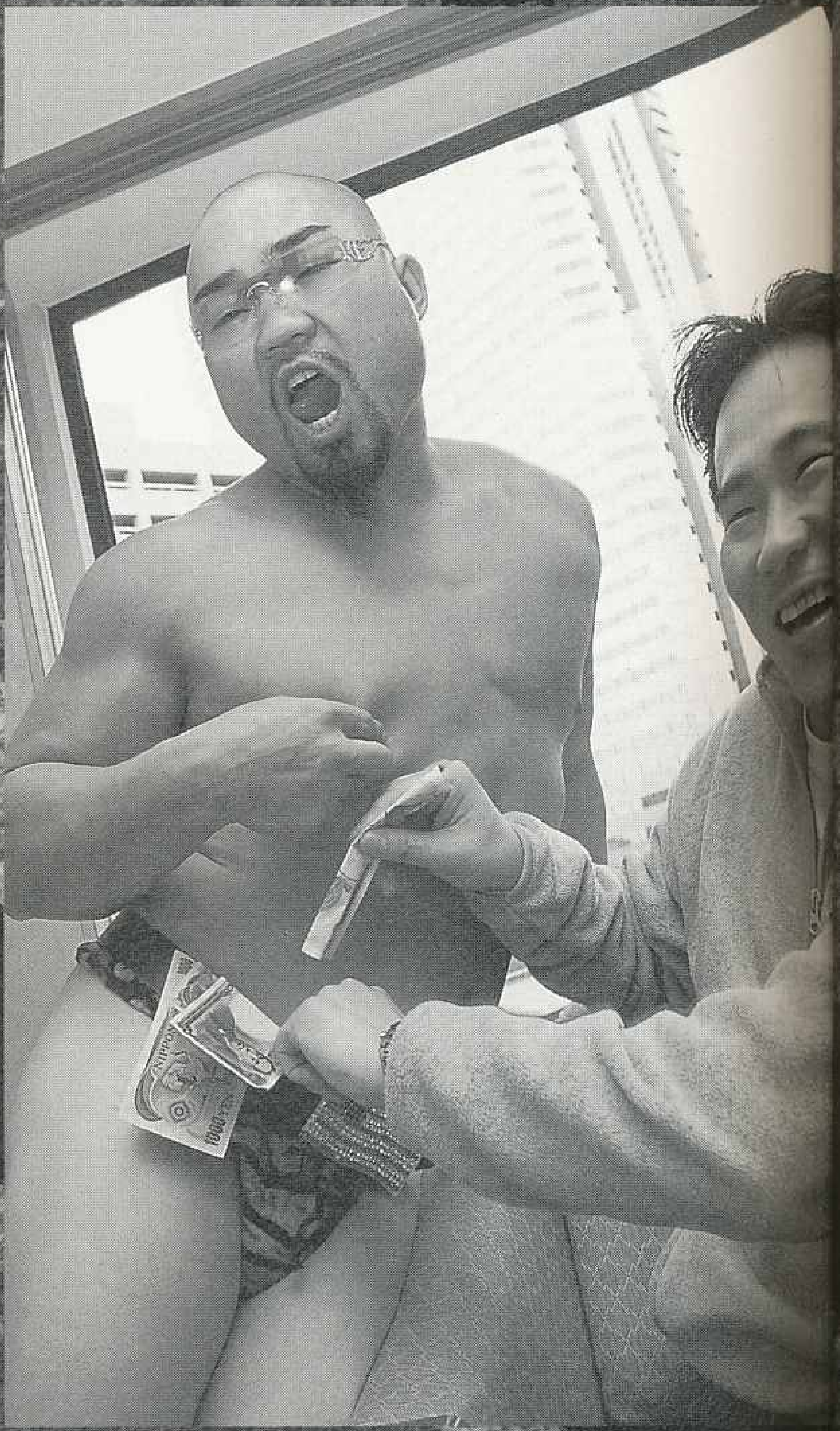












ブッカーKに、『THE BEST』のファイトマネーをパンツに入れてもらうジョー・サン。見よ！　この恍惚の表情。秒殺された翌日の顔とは思えない。

♪俺は学んだのさぁ〜、一方的な愛なんてないことを〜〜♪
♪あのとき追いかければ〜、キモは戻ってきたかもしれない〜〜♪



になりたいんだ！　WWFは俺を使うべきだ。ザ・ロックより俺のほうがエンターテイナーなんだから！

——UFCで名前が売れたときにプロレス団体からオファーは来なかったんですか？

サン　あったよ。でも、そのときは断ってしまったんだ。当時はもっとお金を稼げることがあったからね。じつを言うと俺は6ヵ月前に破産宣告をされたんだ。（ジョー・サンが言うことなので真偽は不明）

——え！　破産宣告ですか？

サン　以前はビジネスも成功していたんだけど、全部失なってしまった。だから逆にいまはチャンスなんだ。お金がないから、いま何が残っているかと言えば、自分の気持ちなんだ。俺は日本でプロレスがやりたいよ。まず日本で自分のショーを観てもらって、そこで成功して、俺の人生はそれからだよ。

——あ、そういえば、キモがホイスと闘ったあと、95年1月の東京ドーム大会でアントニオ猪木さんとの試合が噂されたんですけど、（結局猪木はゴルドー、スティングと『格闘技トーナメント』を行なった）実際オファーはあったんですか？

サン　ああ、オファーがあったのはたしかだよ。俺は小さい頃、韓国に住んでいたから、イノキがレジェンドだということを知っていたので、そのオファーが来たとき非常に嬉しかったし、キモにも「やれ、やれ」と言ってその話を進めていったんだ。しかしキモはイノキについてまったく知らなかったから全然やる気がなかった。それで話が流れてしまったんだ。（結局キモは94年末にK—1のリングでパトリック・スミスとアルティメット・ルールで闘った）。

——そうだったんですね。では、最後の質問ですけど、いま闘ってみたい相手はいますか？

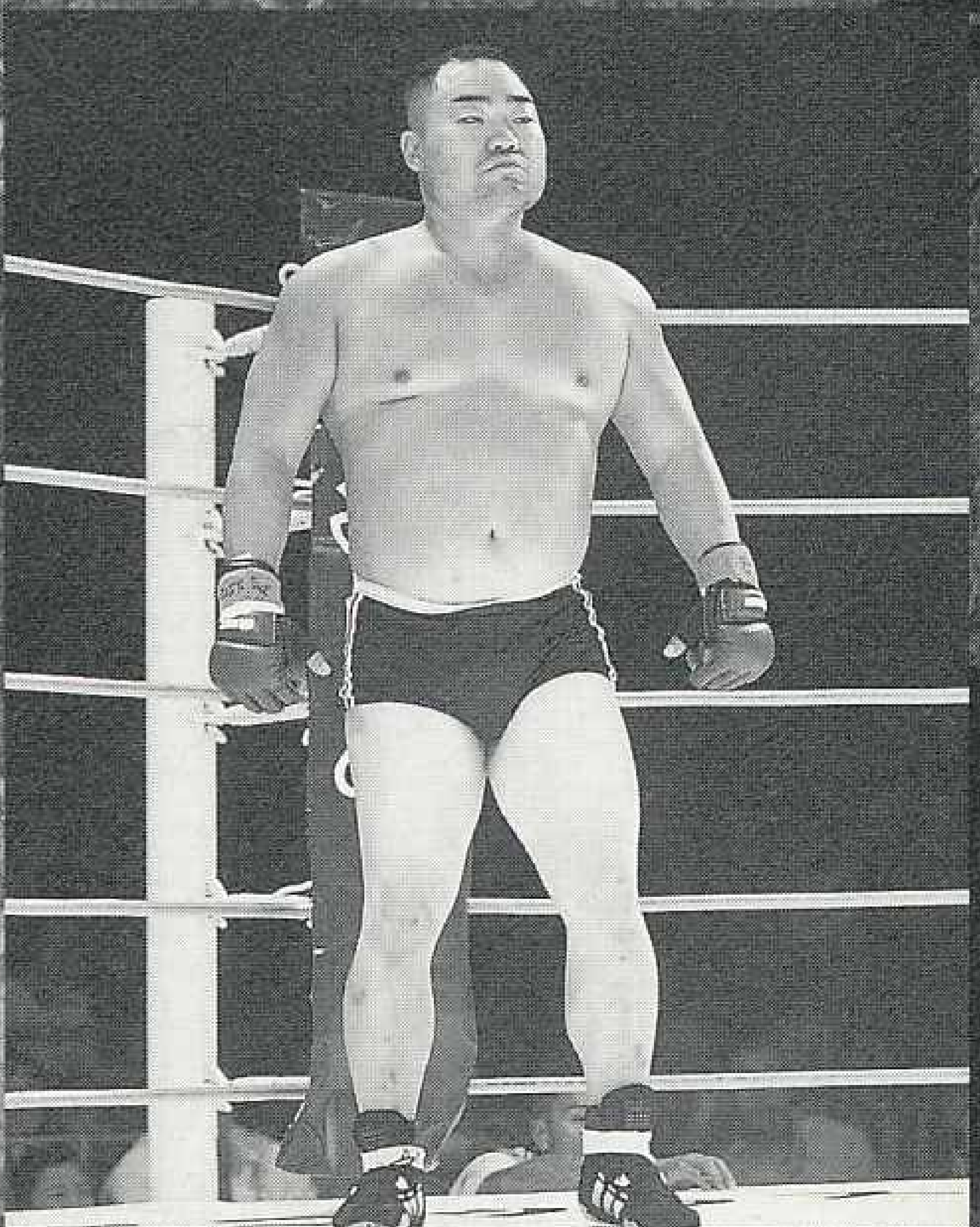
サン　（即座に）ヴァンダレイ・シウバだ！

——シ、シウバですか！

サン　ああ。今回、試合に備えて凄く減量したんだけれど、これはシウバ戦を見据えての減量なんだよ。たしかに彼は素晴らしいパンチを持っているが、俺には彼を上回るスピードがある。試合というのは、強い者同士が闘うだけじゃなく、強い者と弱い者が闘うのも面白いと思うし、だからこそ自分もヴァンダレイ戦をやる資格があると思う。

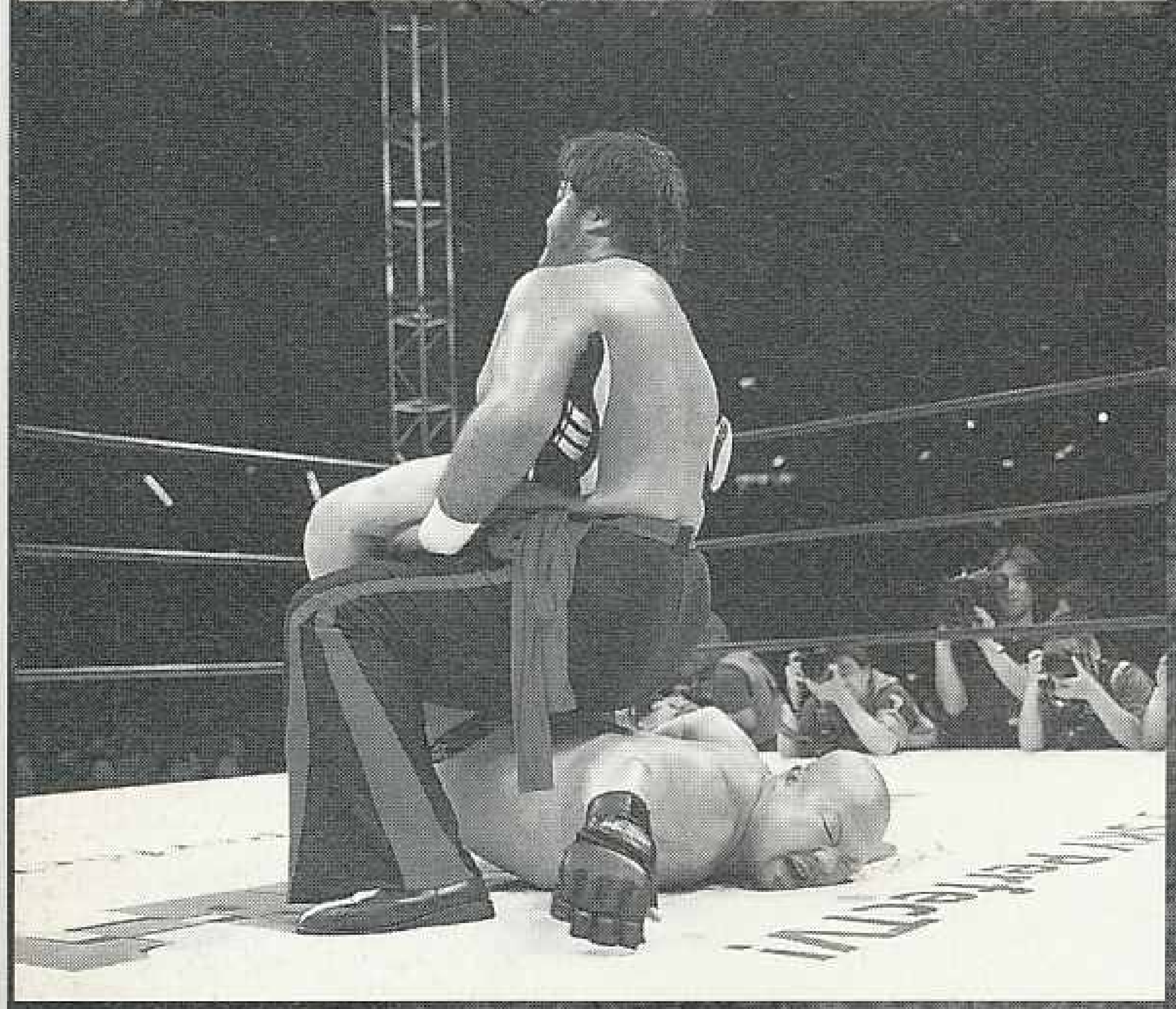
——す、凄い論理だ……（笑）。

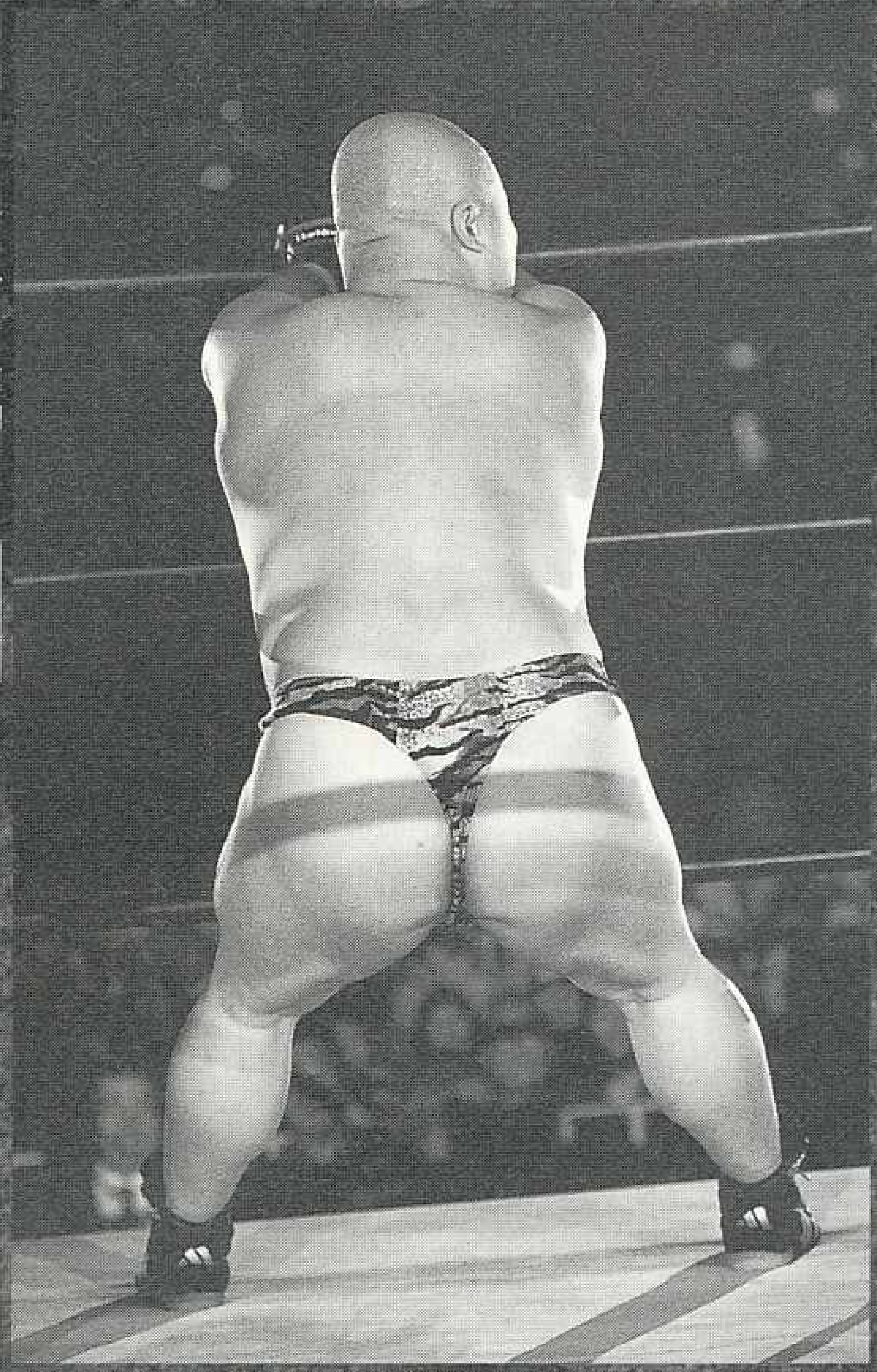
サン　じつはすでに俺は打倒シウバのためにコネクションを作り始めているんだ。ア



『THE BEST vol.2』では前回とは打って変わって、アイシャドウもつけず、Tバックも履かず、真剣に試合に臨んだジョー・サン。が、結果はまたしても左肩負傷による負け。よほど悔しかったのか、リングサイドで悔し涙を流した。そんなジョー・サンも好きだ〜!!







このインタビューで答えていた通りプロレスラーになりたいという念願が叶って『WRESTLE-1』にもTバックで出場したジョー・サン。橋本真也とシングルマッチで闘った。試合は、橋本が逆エビ固めで勝利。しかしジョー・サンは観客にトラウマを植えつけるような強烈な個性で大会ナンバー1のインパクトを与えた。

PRIDE 超異人列伝 PART 1

ジョー・サンの見事な日本での全戦績
『K-1 LEGEND ～翔～』 1995年7月16日 名古屋市総合体育館レインボーホール ○ 角田信朗 vs ジョー・サン × [1R 1:40 KO] ※左フック
『THE BEST』 2002年2月22日 後楽園ホール ○ 今村雄介 vs ジョー・サン × [1R 0:33 サバ折り]
『THE BEST』 2002年7月20日 ディファ有明 ○ 柔圭 vs ジョー・サン × [1R 0:54 レフェリーストップ] ※左肩の負傷
『WRESTLE-1』 2003年1月19日 東京・東京ドーム ○ 橋本真也 vs ジョー・サン × [5:34 逆エビ固め]



JOE SON

メリカでファビアノ・イハとティト・オーティズ、この二人に電話番号を渡しておいた。

——連絡は来たんですか？

サン ティトからは来なかった。

——やっぱり（笑）。

サン しかし、ファビアノからは電話がかかってきたんだ！ 人それぞれということさ、だから俺はこれから自分の課題としてパワーとスタミナをつけようと思う。

——シウバ戦がもし実現した場合、勝算はどのぐらいだと思いますか？

サン 勝負は時の運だ、それはわからない。ただ、これだけは言える。どんなに強いプロのファイターであろうと、俺をノックアウトすることはできない！ いや、ノックアウトどころか、俺の顔に傷をつけることすらできない！ なぜなら……俺はその前にタップするからだ！（自信満々に）

——ガハハハハハハ！ おあとがよろしいようで（笑）。

【02年2月23日／都内某ホテル「スーパースターの部屋」にて収録】

インタビュー中も常にTバック1枚。歌や踊りを交えながら感情をおおいに表現したジョー・サンは、この後、7月に行なわれた『THE BEST vol.2』に出場。一切のエンターテインメント色を排除した闘いを繰り広げた。結果的には、左肩の負傷により、敗れてしまったものの、その観客のウラを突く意外な行動は、やはりある意味エンターテイナー。見事に観客の心をつかんだと言える。さらに後には、伝説のプロレスイベント『WRESTLE-1』に出場。なんと破壊王・橋本真也とシングルマッチで対戦。また初期の『ハッスル』にもTバックで登場し、わいせつ感溢れるダンスなどで観客を魅了。そのスーパースターっぷりを見せつけていた。笹原GM（当時）のジャケットを勝手に拝借して白々しく挨拶を始めるなど、参戦に向けてアピールしまくったがいまだ実らず。しかし神出鬼没なジョー・サンだけに、お目にかかれる日はそう遠くないかも。

ジョー・サン、カムバック!!



『ハッスル・ハウス vol.3』に突如乱入し、GMジャケットを着込んで、しれっと挨拶を始めたジョーサン。しかし笹原GM（当時）に「何をしてるんだ、アンタ！」とジャケットを脱がされ、いつも通りのTバック一丁にされてしまった。

地下プロレスの帝王

見参!?

シャノン"ザ・キャノン"リッチ



【しゃのん・ざ・きゃのん・りっち】1970年9月27日生まれ。アメリカ出身。キックの経験に加え、自らイベントを主催しながらハイペースで試合をこなした結果、130試合以上のキャリアを誇ることに。その反面、戦績は芳しくなく、日本では勝ち星に恵まれてない。じつはアジアン・マーシャル・アーツ哲学で修士号を持つインテリ。いつも強気のコメントを崩さないが、素顔は礼儀の正しい青年だったりする。

PRIDE 超異人列伝 PART 2



2000年10月31日、その実力がベールに包まれたまま『PRIDE・11』のメインイベントで負傷明けの桜庭和志と対戦したものの、アキレス腱固めでアッサリ秒殺負けを喫したリッチ。その後も、ちょくちょく日本へ来るたびに総合、プロレスを問わず敗れるリッチ。出場した『PRIDE』のロゴマークも含めて、来るたびに増えるタトゥーが気になるリッチ。聞くところによると、自らMMAイベントを開催し、通算成績130戦。……いったい、シャノン"ザ・キャノン"リッチとは何者なのか!? その真実に迫るべく、2004年6月のパンクラス後楽園大会で、ライトヘビー級王者・近藤有己との対戦に向けて来日したリッチをキャッチした。

――日本のファンのあいだでブレイクの兆しが見えるリッチさんの所属は「チーム・キャノン」ってなってますけど、「チーム・キャノン」は何人ぐらいいて、どういった活動をしてるんですか。もしかしてリッチさん一人とか?(笑)。

リッチ オレ一人じゃないさ(笑)。6人ぐらいでトレーニングをしてるんだ。『X―1』(※)に出たブライアン・パドゥーやボビー・サウスワーズとかもそうだよ。

――そういえば、『X―1』ではセコンドに付いてましたけど、選手よりも目立ってましたね(笑)。

リッチ 自分ではセコンドに徹してたつもりだったんだけどな(笑)。

――もう二度と開かれることはないでしょうけど、『X―1』はいかがでした? 金網が壊れたり話題満載でしたが(笑)。

リッチ グッドショーだったと思うよ。

――あ、グッドショーでしたか(笑)。

リッチ 金網を使ったバーリ・トゥードはUFC以外、日本でやったことないんだからしょうがないだろう。基本的には良かったと思うよ。それにブライアン・ジョンストンとマサ・サイトーがやってたから、協力したいと思ってたしね。

『PRIDE.11』の桜庭和志戦で、"猪木の刺客"として初来日したリッチ。セコンドには、リッチがオーガナイズした地下バーリ・トゥード大会に出場した"サイトウ"こと藤田和之の姿が。

SHANNON  "THE CANNON" RITCH

25日間で5試合なんてやるのはもうまっぴらだね!!

――二人とは、どういった関係で?

リッチ どっかのイベントでドン・フライと同じアリゾナってことで知り合って、その縁からブライアンに会ったんだ。

――リッチさんはフライの弟子だったって聞いたことありますけど、フライとは古い付き合いなんですか?

リッチ 最初にフライがUFCに出た頃ぐらいからだから、モノ凄く前からの付き合いだよ。藤田がマーク・ケアー戦の前に出た試合もオレがプロモーターの大会だったんだ。

――リッチさんが日本で有名になったのが、『東スポ』の1面になった"藤田が地下プロレスでデビューしてた"っていう記事で。そのプロモーターをやってたのがリッチさんで、そこから猪木さんと知り合って、『PRIDE』に"猪木の刺客"っていうことで日本デビューしたんですよね。

リッチ そうなんだ。藤田は"サイトウ"って名前で2試合したんだよ。

――どうしてその名前だったんですか?

リッチ マーク・ケアーに知られたくないからサイトウにしたってだけの話だよ(笑)。

――ケアー戦前の予行練習みたいなもんだったんですかね(笑)。

リッチ そんな感じだね。あの大会はテキサス州のフォトワースにあるバーでやったんだけど、700人ぐらい入ったよ。

――700人も入るバーって凄いですね(笑)。その大会はプロレスではなくて、リアルファイトのイベントだったんですか?

リッチ もちろん! イーブス・エドワーズみたいなUFCで名前もある選手にも出てもらったし、ほかにもバス・ルッテンとかも……。

――ルッテンも出てたんですか?

リッチ いや、ルッテンは客として来てただけだよ(笑)。

――そうですか(笑)。いまはプロモーターはやられてないんですか?

リッチ それで有名になったのは事実だよ。でも、いまはプロモーターはやっていない。ファイトマネーで暮らしているよ。でも1カ月で5試合なんてやるのは、もうまっぴらだね。明日の近藤戦を含めると25日間で5試合やることになるんだけど、そういう無謀なことは、もう打ち止めにしようと思ってるんだ。

――まっぴらだっていうことですけど、これまで好き好んでたくさん試合をしてき

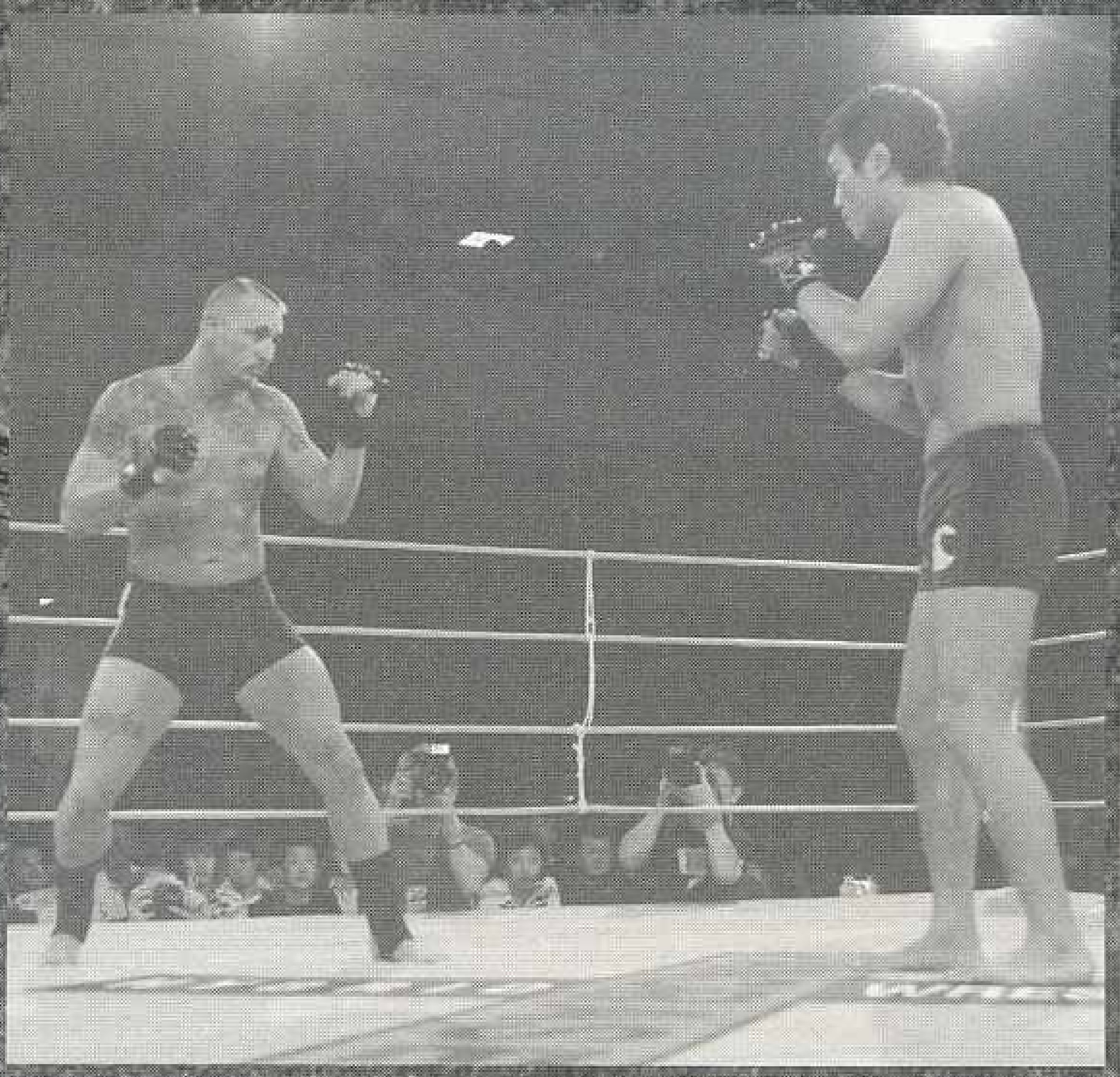


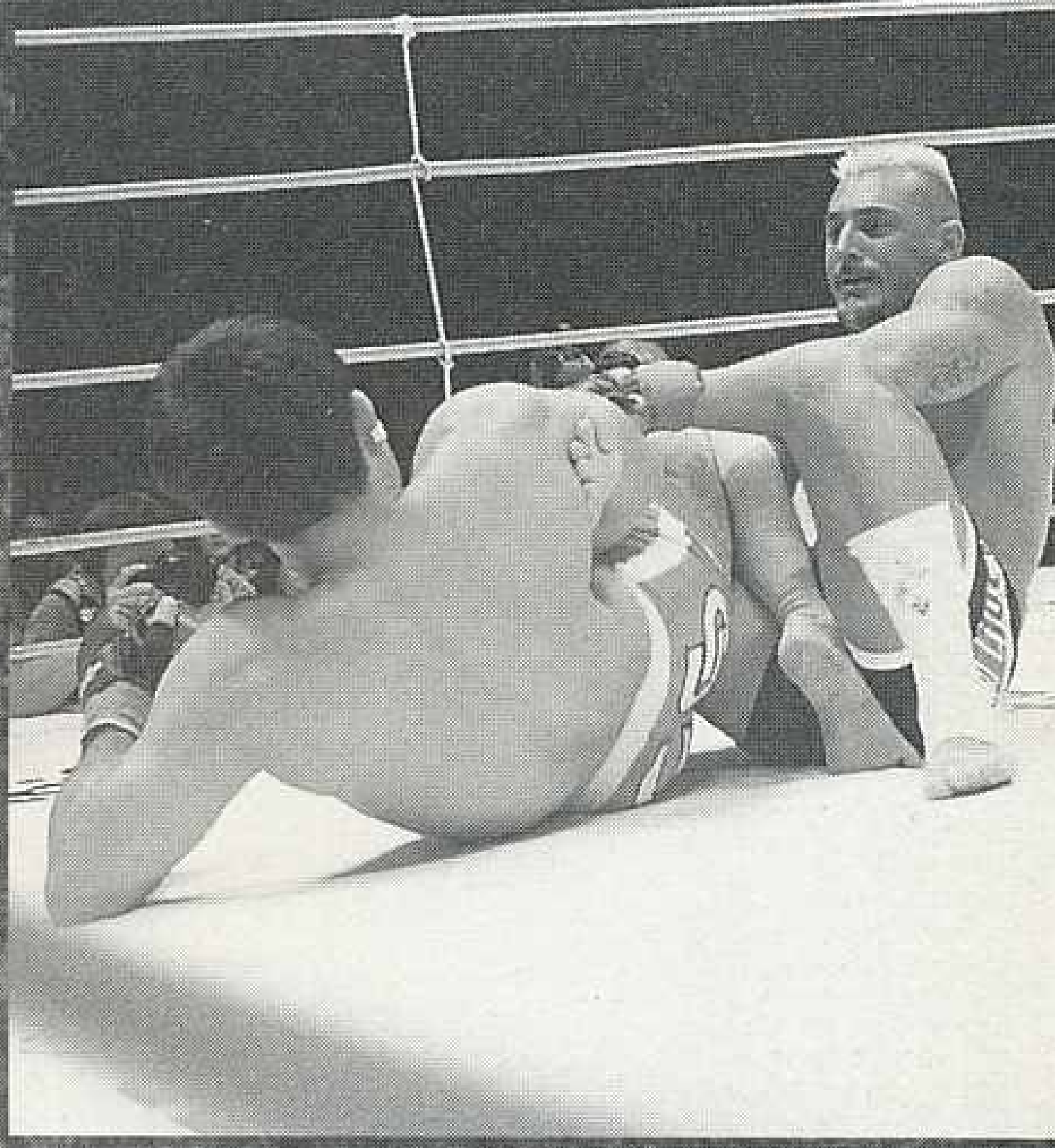
02年7月に行なわれた『THE BEST vol.2』ではアントンマスクに闘魂タオル姿で登場するも会場の反応は冷ややか。この試合がプロデビュー戦となる中村大介に敗れた。

たわけじゃないと？
リッチ そりゃそうさ（苦笑）。もっとメディアがちゃんと注目している大会に出たいんだよ。ビデオも撮ってないような大会に出るよりは、しっかりとした大会に出たいっていうのは当然の話だよ。
——まあ、そうでしょうね。先日の公開練習で、尊敬している人として猪木さんの名前を出してましたけど、いまだに猪木さんとのつながりはあるんですか？
リッチ 基本的にはオレはサイモン猪木とコンタクトを取ってるんだ。そのつながりからLA道場でプロレスの試合もやったし、そういう関係で、サイモン猪木とは、ずっとコンタクトを取っているよ。もちろん、ミスター猪木も尊敬してるけどね桜庭戦で初来日したときは〝猪木軍の刺客〟として登場して、『THE BEST』での中村戦では猪木マスクを被って入場してましたよね。
リッチ 猪木マスクはアメリカでの試合でも被って入場したこともあるよ。ミスター猪木から、いいチャンスをもらったんで、それからはマスクを被ったりしてるんだ。
——好きでやってたんですね（笑）。
リッチ もちろん！ オレは新日本プロレスにもZERO—ONEにも出たいと思ってるんだ。シュートファイトだけじゃなくてプロレスもやりたいから、そういうのを被ってアピールしてるってわけさ。
——バトラーツで松井さんとプロレスルールでやったりしてますけど、これからも声がかかれば出る意志はある、と。

リッチ オレは自分自身のことをエンターテイナーだと思ってるからね。MMAだろうとプロレスだろうとファンのためにやるんであって、コスチュームにも気を遣うし、ただ闘うためだけにやってるんじゃないんだから。
——リッチさんは、バトラーツでの試合の何カ月か前にはラスベガスでフランク・シャムロックとK—1ルールで闘ってるんですよね。残念ながら負けてしまいましたけど。
リッチ じつは、その試合の2週間前にケガをしてしまったんだ。ロンドンでマーク・ウィアっていうのと闘ったときにやられて、腕はギプスで固定されていたんだよ。そんなときに「フランク・シャムロックとやるか？」ってオファーされたんだ。
——フランクはビッグネームだし、断れると思うかい？
断れないでしょうね。
リッチ そんなチャンスはめったにないからね。それで自分でギプスを割って腕から外して出たんだ。
——ダハハハ！ 映画のワンシーンみたいですよ！
リッチ 「腕が使えない」なんて言ったら仕事がもらえないと思ったから黙って試合をしたんだけど、ちょうどそこにフランクの蹴りが当たって負けてしまったのさ。
——今後は、いままでのようなペースで試合はしないってことですが、これまで130戦近く闘ってるのは事実なんですよね。ヒクソンの400戦以上無敗とは違いますか？
リッチ ヒクソンとは違ってオレの記録はすべてリアルだよ（笑）。メキシコでは100ドルでも試合をしていたし、間違いなくオレは130試合近く闘っているよ。
——それは凄いですよね。
リッチ 91～92年頃はまだインターネットがそれほど普及してなかったから記録が残ってないだけで、実際にたくさん試合をこなしてきたよ。
——最近話題になってるのが、今度、全

オレの記録はすべてリアル。130試合闘っているんだ!!





『PRIDE』、パンクラスという日本が世界に誇る格闘技イベントにおいて、メインを張ったリッチ。『PRIDE』では負傷明けの“エース”サクを鋭いキックとパンチで攻め立てるも、サクにあっさりとテイクダウンされる。開始からわずか68秒、VTでは珍しいアキレス健固めで瞬殺されるが、一気にその名を轟かせた。04年6月の近藤戦でもあっさりとヒザ十字でギブアップを奪われたが、メインで両エースと闘った経歴にウソ偽りはない。

日本キックと対抗戦をやることになった、ミャンマーのラウェイっていう、素手でのバーリ・トゥードみたいな大会にリッチさんは出場してたんですよね。
リッチ 2000年ぐらいだったかな？ ミャンマーでも闘ってるよ。
——残念ながら1ラウンドKO負けをしてるってことですけど、どんな試合だったんですか？
リッチ それは間違いで、オレは30秒ぐらいで相手を完全にノックアウトして、レフェリーもいったんオレの手を上げたりしたんだけど、「いや、まだ試合は終わってない」とか言われて、それから急所を蹴られてうずくまったら向こうのヤツが勝ちだっていうことになったんだよ。でも結局、オレはベルトをもらったから、オレの勝ちだと思ってるよ。
——タイトルマッチだったってことですか？
リッチ そうさ。オフィシャルではオレの負けになってるみたいだけど、自分のレコードではオレの勝ちになってるよ（笑）。だってベルトもらって帰ってるんだからオレの勝ちでいいだろう、文句あるかい？
——ベルトをもらったならリッチさんの勝ちでいいと思います（笑）。（※ちなみに、その試合をビデオで観た人によると、リッチは1ラウンドでKOされてるとのこと……）
リッチ まあ、そういう国で闘うときは毎回そんなことがあるんだよ。
——右脚に『PRIDE』のロゴマークのタトゥーが入ってますけど、それはいつ頃入れたんですか？
リッチ 桜庭と闘ったあとにアメリカで入れたんだ。
——やっぱり、「オレは『PRIDE』に上がったんだぜ！」っていうアピールなんで

すかね（笑）。

けど（笑）。

『PRIDE』でオレは

すかね（笑）。

リッチ　その通りだ。来週帰ったら、反対側の足にパンクラスのロゴマークを入れるつもりだよ。

—ダハハハ！

リッチ「オレはパンクラスにも上がったんだ」っていうアピールのためにね（笑）。

—それは近藤さんに勝っても負けても入れるってことですか？

リッチ　もちろんだよ。パンクラスや『PRIDE』っていうのは世界のトップイベントだからね。オレは『PRIDE』にもパンクラスにも上がったんだぜ！　とアピールして何が悪い？

—いや、何も問題はないです（笑）。

リッチ　それに『PRIDE』でオレはメインイベンターだったんだからな！

—たしかに桜庭さんとの試合はメインでしたからね（笑）。

リッチ　明日の近藤との試合だってメインじゃないか？

—たしかにパンクラスでもメインイベンターですね（笑）。

リッチ　そこをわかってくれよ。だからタトゥーぐらい入れてもおかしくないだろ。当然の話だよ！

—当然ですね（笑）。桜庭戦は結果だけ見ると秒殺でしたけど、インパクトはかなり残しましたよね。

リッチ　そうだろ？　たしかに試合時間は短かったけどテイクダウンも取ったしね。だいたい、あのときの桜庭は一番調子が良かった頃で、当時は誰もテイクダウンは奪ってなかったじゃないか？　そんな選手からテイクダウンを取っただけでも凄いと思ってくれなきゃ困るよ（笑）。

—あれ!?　テイクダウンって取りましたっけ？　逆に取られた印象はあるんですけど（笑）。

リッチ　もう一回ビデオを見直してみろよ（キッパリ）。

—確認してみます（笑）。正直、桜庭戦の勝算はあったんですか？

リッチ　プランとしては、テイクダウンしてKOしてやろうと思ってたんだ。試合を急ぎすぎたっていうか焦りすぎてしまったのが敗因だよ。

—ただ他の試合でも、中村戦だったり、プロレスルールでの松井戦とか、日本のファンの前ではいい結果が出せてないわけですが、正直、明日の近藤戦の自信はあるんですか？

リッチ　いままでの試合の結果はしょうがないっていうか、運がなかったと思ってくれよ。闘ってる相手はトップのヤツばっかりなんだし、負けてるからってべつに悪い試合だったとは思ってないよ。たまたまそうなったんだからしょうがないよ。

—まあ、しょうがないですね。

リッチ　だいたいオレはトップファイター相手にオファーを受けて、これまで一回も断ったりしたことはないんだ。そこを見てくれよ。

—それは凄いことだと思います。

リッチ　だから、こんな試合数になってしまったんだろうな（笑）。

—そうでしょうね（笑）。正直、日本のファンは「リッチは近藤に勝てないだろう」っていう見方が大半を占めてるんですけど、それに対してインターネット上とかで、ご自身で反論してましたよね？　フィリス・リー女史（※※）アンタは、まだそんなことやってるの？

リッチ　……は、はい。

フィリス・リー女史　もうインターネットのファンは相手にしちゃダメよ！　あ



SHANNON "THE CANNON" RITCH

『PRIDE』でオレはメインイベンターだったんだ！

の人たちは素人の集まりなんだから。これから書き込み禁止！

リッチ　わ、わかりました。これからはもう書き込んだりしません。

—アハハハハ！　でも、つい先ほどホテルのロビーでインターネットかなんかやってたみたいですけど。

リッチ　いや、あれはEメールだよ。Eメールだと電話代払わなくていいからね（笑）。書き込みはもうやめるけど、メールと情報収集はこれからもやっていくよ。

—会見でも言ってましたけど、リッチさんの予定では明日の近藤戦に勝って、次はタイトルマッチでもう一回、近藤さんに勝って、そのあとにチャンピオンとしてヴァンダレイ・シウバとやりたいって考えてるんですよね。

リッチ　もし明日勝ったら、シウバというよりも近藤との再戦になるだろうから、その試合をタイトルマッチにしてもらって、それも勝ったらオレとシウバでダブル・タイトルマッチをやれればと思ってるよ（笑）。

—近藤戦をクリアして、シウバ戦が実現したら勝つ自信はあると？

リッチ　これはあんまり言いたくないけど、これまでシウバと闘ったヤツは間違ったファイトをしてると思うんだ。オレは違う闘い方を知っているんだ（ニヤリ）。

—いまはまだ言えないと？（笑）。

リッチ　そういうことだ。

—あと、一説によるとリッチさんはマフィア関係の裏の顔を持ってるんじゃないかって噂もあるんですけど、それは事実なんでしょうか？

リッチ　勘弁してくれよ―（苦笑）。オレは怪しい人間なんかじゃないよ。このタトゥーを見て、そんなことを言われることもあるけど、オレはグッドガイだよ（笑）。

—失礼しました（笑）。明日のメインの近藤戦、頑張ってください！

リッチ　もちろんさ。とにかく明日の試合を見てくれ！

—期待してます！　あとパンクラスのタトゥーを入れての再来日を楽しみに待ってます!!


※X　経営危機が囁かれたWJが起死回生を狙って開催した金網格闘技イベント。佐々木健介、中嶋勝彦、ダン・ボビッシュらが参戦。試合中に金網が崩壊するなど、のちのWJの先行きを予感させる事件が勃発し伝説化した。

※※フィリス・リー女史　パンクラスUSA顧問。日米の懸け橋的な存在としてさまざまな選手をブッキング。また格闘技だけでなく、プロレス界にも精通しており、95年の8月2日のIWA川崎大会でダン・スバーンのマネージャーとして初来日。

インタビュー直後に行なわれた近藤有己との対戦ではヒザ十字で、やはり秒殺負けを喫したリッチ。アメリカに帰ったあとは、本当に左足太ももにパンクラスのロゴを入れていたリッチ。ミャンマーでの闘いは完全にノックアウトされた上、「残念賞」のベルトをもらって帰っていたことが後に発覚したリッチ。一時期、イラクで民間警備会社の仕事に携わっていたが無事帰国したと言われるリッチ。注意されても、まだまだインターネットの掲示板で書き込みが確認されているリッチ。また日本で彼の試合が観られる日は来るのだろうか？

闘魂ストーカー

ヴァリッジ・イズマイウ



【う゛ぁりっじ・いずまいう】1968年2月23日生まれ。ブラジル出身。相手に突っ込んでいくファイトスタイルは、ニックネーム通りまさに狂犬。ログセは「俺はグレイシーを4人倒した」!!「K-1で4回王者になった」と叫ぶホーストと違う点は、イズマイウの場合、マスコミがまったく拾ってくれないところに尽きる。

PRIDE 超異人列伝 PART 3

カーウソン柔術軍団四天王の猛者、グレイシー一族を4回倒した男、日本では大山峻護、村上和成、滑川康仁に勝利……。実績は確かだが、それ以上に呼ばれてないのに会見場にいたり、闘ってないのに試合後の記念撮影でチャッカリとド真ん中をキープするなどマット界一の出しゃばりとして注目を浴びた男。それがイズマイウだ。2003年8月、ブラジルで開催を発表した『ジャングル・ファイト』記者会見のために来日したイズマイウに独占インタビューを試みた『紙プロ』（当時）は普段はあんなに目立つのに、いざ探すとなると難しいイズマイウを求めて東京中のホテルを捜索。ついに取材班は見事、捕獲に成功した。アントニオ猪木のいるところにはいつ何時でも現われる闘魂ストーカー、ヴァリッジ・イズマイウの自己主張をたっぷり聞いてみた。

——イズマイウさん！　あなたを探すために東京中のホテルを駆けずり回りましたよ！

イズ　（怖いくらい満面の笑みで）それはご苦労だったなあ。

——『ジャングル・ファイト』（03年9月13日／ブラジル開催）の開催準備のために来日しているって聞いていたんですが、どこに連絡しても「ウチは呼んでない」という返事ばかりで（笑）。ウチの読者はイズマイウさんのことは凄く尊敬してますから、ぜひとも取材しないといけないと思ったんです。

イズ　ほう～、俺様の偉大さをわかっているなんて、素晴らしい読者だな！

——昨日の『PRIDEミドル級GP』（03年8月10日）でも、イズマイウさんが「リングサイドにいた！」ってことでファンは大騒ぎしてるんですよ！

イズ　そうかそうか（笑）。俺様は日本のファンが大好きだが、ますま～す好きになったぞ！　日本という国もますま～す大好きになった！

——度々来日してることもあって、日本のことは詳しいんですか？

イズ　（唐突に）赤穂浪士！

——は？　忠臣蔵がどうかしましたか（笑）。

イズ　日本といえば、なんてったって忠臣蔵だろ！　俺様は日本に来るたびに彼らの墓参りをするほどの赤穂浪士マニアでな。俺様も47名のサムライと一緒に討ち入りしたかったよ（しみじみと）。



『PRIDE.26』に強引に侵入。（関係者入り口でトラブル有り）！　パスもないのにリングサイドまで辿り着き、記念撮影では堂々とグッドポジションをゲットだ!!

磁石にたとえると、俺様はS極！ ミスターイノキはN極！ だからいつ何時でも、くっつくんだ!!

WALLID ISMIL



——いやあ、イズマイウさんが吉良邸で縦横無尽に暴れ回る姿を想像しちゃいますね（笑）。

イズ　赤穂浪士は本当のファイターだよな。彼らは主君の名誉を守ったんだろ。俺様もミスター・イノキの名誉を守るために動いているんだよ。

——いよいよ『ジャングル・ファイト』が迫ってますけど、イズマイウさんは猪木さんの片腕として働いてるんですよね。

イズ　まぁな！　これは自慢でもなんでもないが、『ジャングル・ファイト』は俺様がミスター・イノキと出会ったから、俺様がアマゾン州知事と知り合いだったから、俺様が環境問題に関心があったから、俺様はブラジルで顔が利くから、このイベントがスタートすることになったんだぞぉ！

——とにかくイズマイウさんあっての『ジャングル・ファイト』なんですね！

イズ　いやいや、俺様が鍵を握っているのは間違いないが、ボスはミスター・イノキだよ。彼のために自分は尽くしているってわけさ……（怖いくらい恍惚の表情で）。

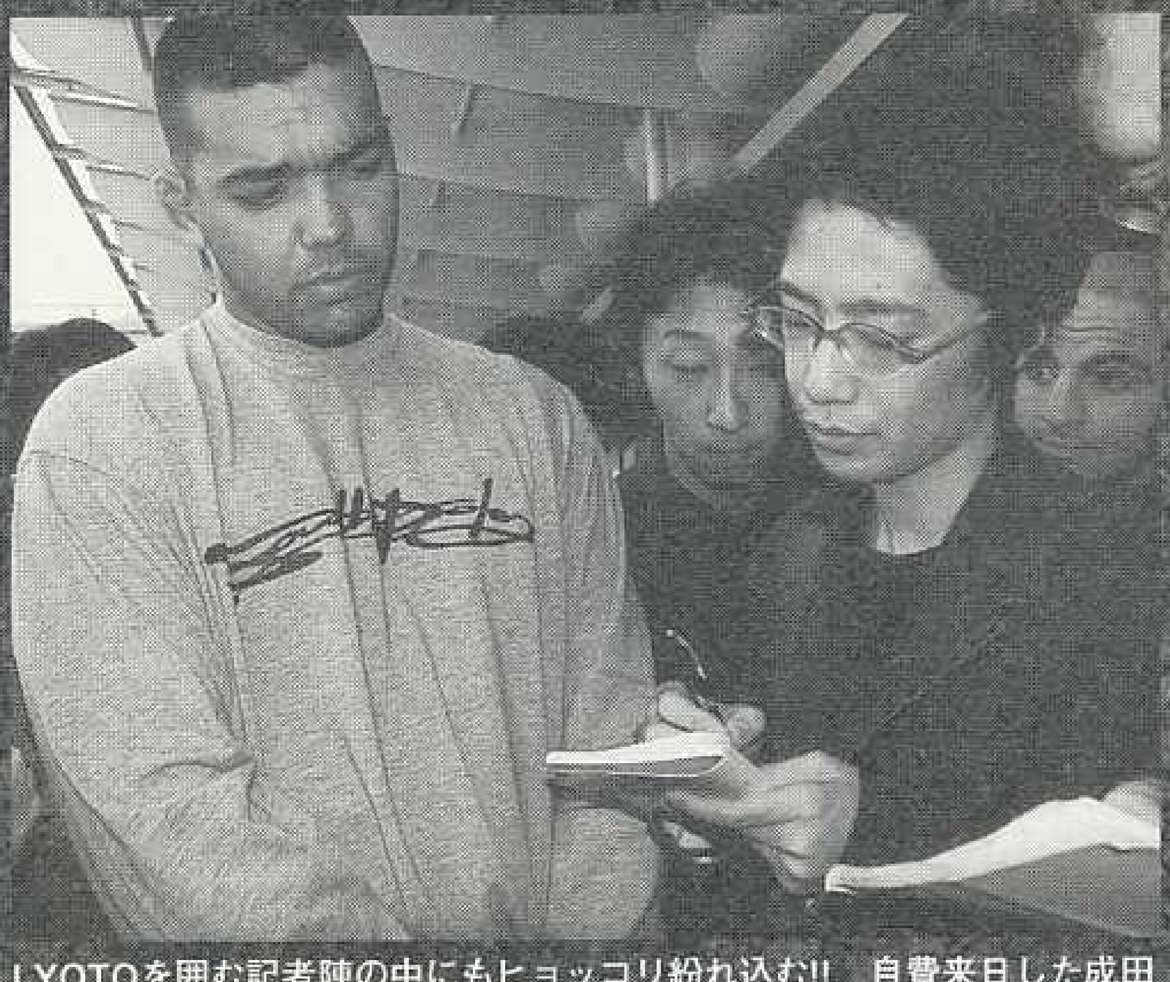
——イズマイウさんは猪木さんが現われるところにかならず出没することから〝闘魂ストーカー〟の異名で呼ばれてますけど、それほど猪木さんが大好きなんですか？

イズ　大好きだ！　磁石にたとえると、俺様はS極！　ミスター・イノキはN極！　だからいつ何時でも、くっついてしまうんだよなぁ。

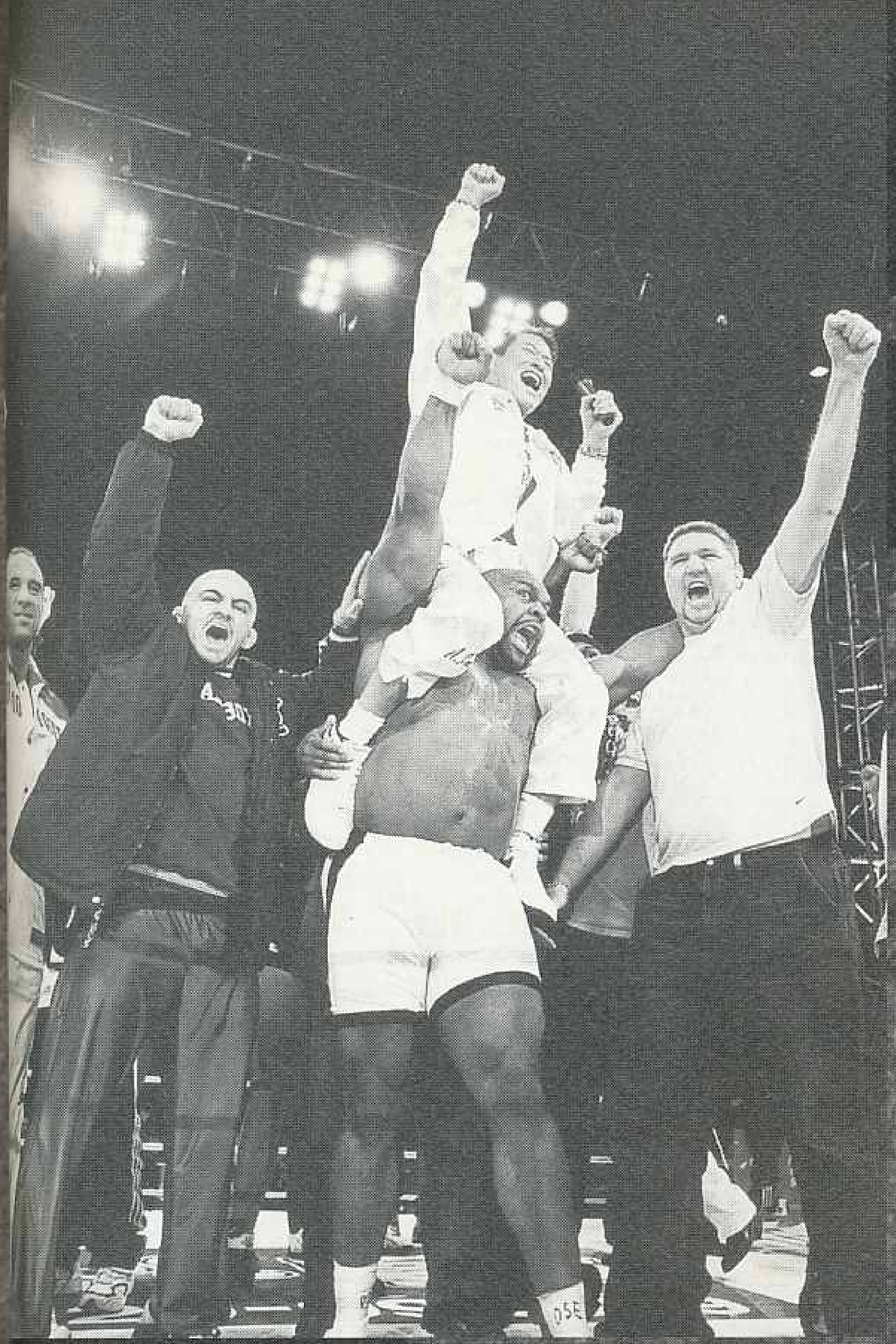
——とくにS極から異常な磁力を感じますよ（笑）。

イズ　ミスター・イノキのパワーもスンゴイぞ！　彼と話していると、なんだか俺様まで気分が良くなる！　不思議なパワーを感じるんだよ。よく説明できないんだけど、彼と握手して、少しお話しをするだけで、何か良いことをしなければって教えを受けた気になる。俺様が思うに、世の中の善＝ミスター・イノキなんだよ！

——世の中の善＝猪木さん（笑）。そんな仰天ロジックをぶち上げたイズマイウさん



LYOTOを囲む記者陣の中にもヒョッコリ紛れ込む!!　自費来日した成田空港でのイズマイウ!!　闘魂の愛弟子の成長ぶりに喜びを隠せない。



2002年の『猪木祭り』。滑川に判定勝ちしたとはいえ、一番身体を張った高山を差し置いて、アントン＆サップの隣を独占するのだから図々しいにも程があるイズマイウ。さすが、闘魂ストーカー！　ダァーッ　!!

は、猪木さんが情熱を注いでいる永久電機のことはご存知ですか？

イズ　永久電機には関わってないが、ミスター・イノキのことは100パーセント、サポートする！　だって彼は、大衆のために良い発明を研究してるんだろ？

――動けばの話ですけど、「水力」「火力」「原子力」を使わないで電気を発生させるんですから大発明ですね！

イズ　そんな世紀の発明にチャレンジするんだから、日本国民は彼のことを誇りに思うべきだよ。俺様が国家の首領なら表彰状を贈るな。絶対に贈るぜ。

――でも、イズマイウさんが絶賛する永久電機はいつまで経っても完成しないから、ほとんどのマスコミはまったく無視してるんですよ。

イズ　ナニ？　お前のマガジンも無視してるのかっ!?

――いや、ウチはしっかり報道してます！

イズ　報道するのは当たり前だ！　何しろ永久電機はたくさんの貧しい人たちを助ける発明になるからな。もっと日本国民はサポートすべきだよ。エジソンを見ろ！　彼が電球を最初に発明したときに周囲はなんて言ってた？「クレイジー！」と決めつけてたんだろ！　あるいはライト兄弟！　飛行機を作ったときに、これまた「クレイジー」だと言われたよな。ところが成功した途端にヒーローだ！　彼らと同じように、ミスター・イノキは歴史に名を残す発明者になる。俺様はあの発明を、そしてミスター・イノキを信じたいんだよ！

――あと、イズマイウさんは新日本LA道場のサポートもしているって聞いてますけど。ロス道場にはLYOTOさんもいますよね。

イズ　LYOTOは順調に進歩しているなぁ。俺様も指導したことがあるし、彼の成長は鼻が高いよ。うんうん。

――それほど思い入れが強いから、LYOTOのデビュー戦のときは自費来日まで

みんなも知っての通り、俺様は日本の雑誌で12回も表紙を飾っているんだぞ!!

してセコンドに付いたんですか？

イズ　……な、なんで自費来日のことを知ってるんだ？　そんなこと、誰から聞いたんだよ、おい!?

――誰からというか、どこの団体や事務所に聞いてもイズマイウさんを「呼んでない」「関係ない」って言われるし、成田空港に着いたときも一般客に混じってリムジンバス乗り場に並んでたじゃないですか。それで自費来日かなって思ったんですけど。

イズ　（言葉に詰まって）い、いや……とりあえず自分で航空券を買ったのは本当だけども、あとからミスター・イノキに払い戻してもらったからね。自費で来日したことなど一度もない。それはお前らの誤解だよ！

――じゃあ、イズマイウさんがLA道場にいるのは、猪木さんが来たときだけって話も誤解なんですか？

イズ　（鬼気迫る表情で）そ～れも違うッ!!　それはきっと俺様とミスター・イノキがあんまり仲良しなのを妬んだ奴が悪口を言いふらしてるんだ！　この業界は足を引っ張る奴が多いから、そんな話を聞くんじゃないぜ。俺様が、いかに正直で謙虚な人間かってことをお願いだから理解してくれ！

――け、謙虚な人間でしたか!?

イズ　だいたいなあ、俺様はロス道場を手伝ってるけど、一銭だってもらってないんだぞ！

――ノーギャラの理由はなぜですか？

イズ　それは恩返ししたいからだ。俺は柔術をやることによって、技術以外にいろんなことを学んだ。それを若いファイターに伝えていきたいんだよ。

――じゃあ『ワールドプロレスリング』中継で、ジョニー・ローラーの隣で何をするわけでもなく不気味に微笑んでいたのは、何を伝えようとしてたんですか？

イズ　ローラーとのテレビ出演？　あ～れはビジネスとして出ただけだ！

――どんなビジネスですか（笑）。しばらくリングから離れてますけど、復帰する予定はないんですか？

イズ　『ジャングル・ファイト』もそうだけど、いまはビジネスが忙しいんだよ。俺様はビジネスマンとしてかなり稼いでいるからね。リオに150店も入ってるショッピング・モールと建設会社を持っている。自宅はロスとリオに二つ、車も二台所有！

――実業家としての顔もあるんですか！

イズ　俺様のワイフがよく言うんだよ。「ウチの主人は、そこらのファイターがサイドビジネスをやってるのとはわけが違いますのよ」と。つまり俺様は実業家としても一流だってことだ。驚いたか！

――というか、イズマイウさんが結婚されてることにビックリしましたよ！

イズ　俺様のワイフはブラジルのトップモデルだったんだぜ！　何度もフィットネス・マガジンの表紙になってるんだよ。まあ俺様にしたって、ブラジルじゃ50回以

PRIDE 超異人列伝 PART 3

上も格闘マガジンの表紙になってるけどな。

――50回以上!!

イズ そしてみんなもご存知の通り、日本では12回もカバーになってるしな！（キッパリ）。

――じゅ、12回も表紙！ そんな話は聞いたことありませんけど……イズマイウさんのギラついた目を見ていたら、なんだかあるような気がしてきましたよ！（笑）。

イズ そういえば、俺様が出てる雑誌を持ってきてるよ……（カバンからアメリカでは有名らしい雑誌を取り出して）ほれ！俺様とジェームズ・カーンが一緒に載ってるぞ！

――たしか『ゴッド・ファーザー』とかに出ていた俳優ですよね。たしか猪木さんとも知り合いだって聞いてますよ。

イズ 俺様が仲を取り持ったんだ！ ミスター・イノキは今度、ハリウッドでもイベントをやるって話があるだろ？ だからハリウッドの顔役であるカーンを紹介したんだよ。

――顔が広いんですねえ。

イズ （再びカバンから雑誌を取り出して）『TATAME（ブラジルの格闘技雑誌）』の最新号の表紙もミスター・イノキと俺様だぞ。やっぱり俺様は偉大なんだ！ なにしろ「4人のグレイシーを倒した男」だからなっ！

――桜庭選手は「グレイシーハンター」と呼ばれてましたけど、ハウフ、ヘンゾ、ホイス、ハイアンの4人を倒したイズマイウさんもその名に相応しいですね。

イズ そうかそうか。俺様を〝ブラジルのサクラバ〟と呼んでくれるのか。

――そ、そうは言ってないんですけど……。

イズ ところで、俺様がグレイシーたちを倒した話は、当然聞きたいんだろ？（返事を聞かずにしゃべり始めて）ます、最初にやったのはハウフ。あれは俺様が13～14歳の頃で、茶帯の決勝戦だったな。誰もが「グレイシーを負かすことは絶対に無理だ！」と言っていてな。当時は絶対的なグレイシー神話があったんだ。

――それをイズマイウさんが打ち砕いたんですね。

イズ そうだ！ 俺様は口だけじゃないんだ。みんなは「イズマイウは口が達者」って批判するけど、やるときはかならずやる男なんだよ！

――というか、そんな悪口言われてたんですか（笑）。

イズ 昔はしゃべりすぎたことがもとで「イズマイウはクレイジーだ！」ってよく言われてたんだよ。いまはビジネスマンになったから、気をつけて控えめにしてるんだけど。

――ワハハハ！ これで控えめ（笑）。

イズ とにかく！ 俺様は昔からトークもするがアクションも完璧だったんだ。

――そして、ハウフの次はヘンゾを倒したわけですよね。

イズ あれは柔術のブラジル王座決定戦だったな。グレイシー陣営は、30分だった試合時間を「1時間にしてくれ」と言ってきた。しばらくたってから「いや2時間半だ」とクルクル条件を変えてきやがったんだ。審判もグレイシー側の奴らばっかりだったが俺様は何も怖れず、グレイシーの条件をすべて飲んでやったよ。そしてぇ、93分の死闘を制したんだ！

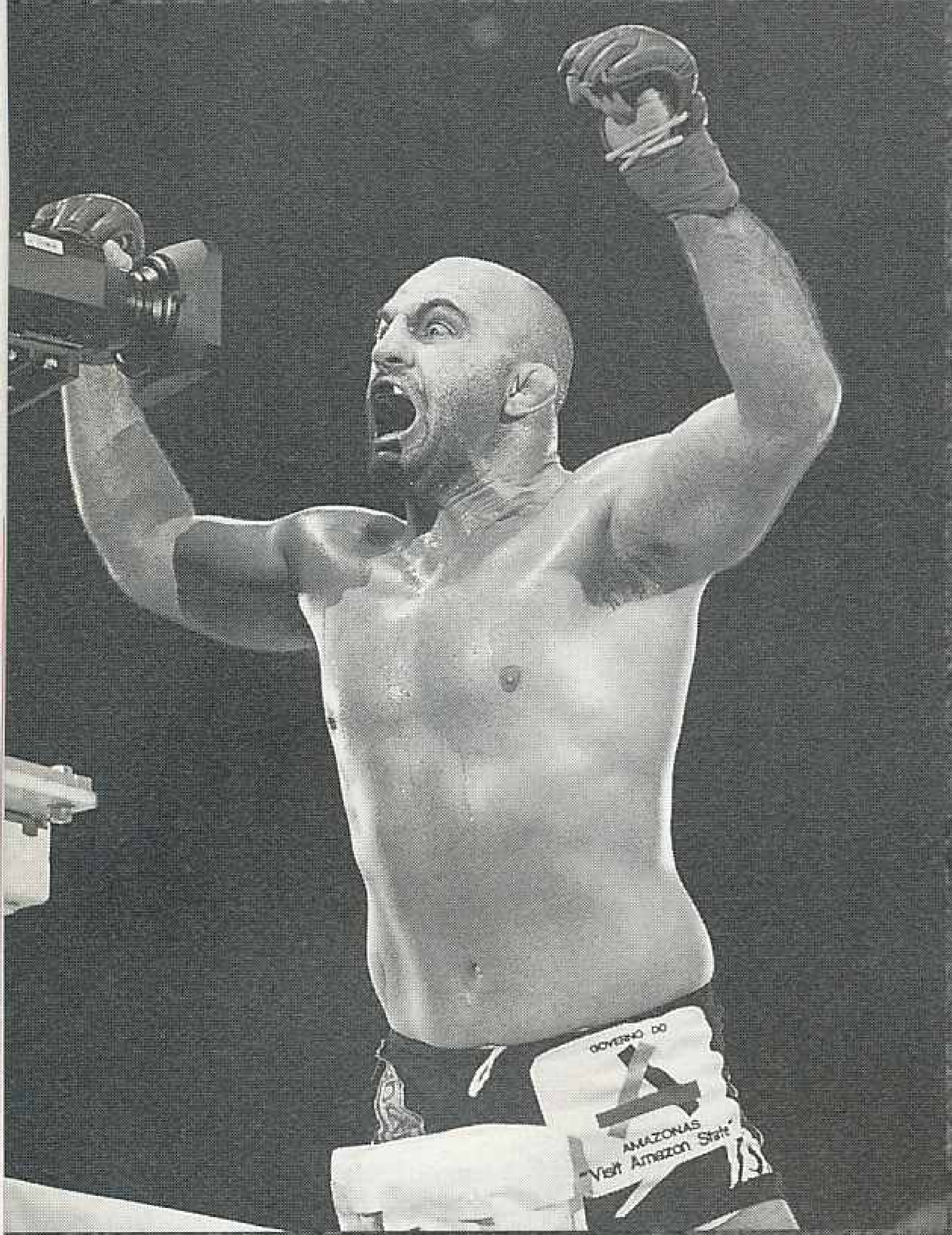
――それで、3人目となるホイス戦の話をお願いします！

イズ ホイスとはもともと因縁があったんだよ。奴がUFCに出て行ったときに「ホイスは柔術のチャンピオンじゃない！」ってマスコミに真実をしゃべったんだ。そしたらあの野郎、そのことを根に持ちやがってな。



WALLID ISMIL

8000人の大観衆の前でぇ 俺様がキッチリィ、ホイスを締め落としたんだぞォ!!



『PRIDE.14』で大山俊悟に勝利。とにかく嬉しいイスマイウ!!

――ホイスがUFCで連続優勝していた頃ですね。

イズ ブラジルに帰ったときに「イズマイウはどこだ？ 出てこい！」って吠えやがるから出て行ってやったよ！ そうしたら逃げてやんの。で、奴が復帰するってことで、またブラジルに帰ってきたときに「誰の挑戦でも受ける」って大ボラを吹きやがった。それで俺様と闘うことになったんだ！

――ホイス戦は最初から柔術マッチという設定だったんですか？

イズ べつにVTでも良かったけどな。時間制限なしでもいい。ポイント制じゃなくてもかまわない。すべての条件を飲んでやったよ。あんときは客も興奮していてな。試合開始は8時だったのに、その5時間前にはもう8000人の会場が札止めになってしまったんだぜ。そしてぇ、その大観衆の前でぇ、俺様がキッチリィ、ホイスを絞め落としてやったんだぞォォォ!!（目をギラつかせながら大興奮）。

――そして4人目となるハイアンも、フロントチョークで締め落としたんですよね。しかもストリートファイトなんてデンジャラス過ぎます！

イズ ナイトクラブでやってやったよ。ブラジルでは誰もが知ってる話だぜ。

——イズマイウさんの実力はブラジル全土に知れ渡っているんですね。

イズ　そりゃそうだ！　ホイス戦のあとに、ダコタ・フラックス・ゴールド（食品会社）と年間100万ドルのスポンサー契約をしたんだけど。そのテレビCMに出演したことがあるからな！

——イズマイウさんがCM出演ですか（笑）。

イズ　俺様がパワードリンクを持ってる姿の広告看板が街中の至るところを飾ったこともあったなあ。

——ブラジルでは、オロナミンCの大村崑みたいな存在だったんですね（笑）。

イズ　そんなわけでな、ブラジルで「各ジャンルで誰が一番有名か？」っていう調査をしたら「サッカーではロナウド、VTではイズマイウ」って結果が出やがった。VT＝俺様だよ！

——VT界のロナウドでしたか!!　そんなイズマイウさんが『PRIDE・26』に「誰も呼んでない」ってことで、関係者入り口で追い返されそうになったのは、どういうことなんですかね（笑）。

イズ　やっぱり俺様が日本では知られてないからだろうなあ。俺様がどれだけ総合格闘技に影響を与えたか、みんなわかってないんだよ。いいか、Tシャツにスポンサーをつけて売ったのは俺様が最初！　ブラジルの柔術選手権チャンピオンの中で、柔術着に広告をつけて闘ったのも俺様が最初なんだぜ！　なにしろ、かつてミノタウロ（ノゲイラ）が記者から「職業は？」って質問されて「VTです」と答えたら、「イズマイウさんがやってる職業ですね」とうなずかれたことが何度もあったぐらいなんだぞ。ミノタウロに聞いてみぃ！

——きっとノゲイラさんも偉大な先輩を誇りに思ってますよ！（後日、ノゲイラにこのことを尋ねると苦笑交じりにノーコメント）。

イズ　ある程度ビジネスにケリがついたら、俺様はかならずリングに帰ってくる。心は闘う準備ができているんだ。シュワルツェネガー調に言うと、アイル・ビー・バック……だ！

——イメージ的には執念深そうなT1000型になりますけどね（笑）。じゃあ、『PRIDE』のリングにカムバックする可能性もあるわけですね。

イズ　もちろんだ。ただそうは言っても今度はリオにも猪木道場ができたからな。道場を統括しないといかんし、俺様もプロデューサーとしてますます忙しくなるんだって。

——リオに猪木道場ができたんですか？



イズマイウの勇姿がゴールデンタイムにオンエア!!　『LEGEND』の前日会見、主役でもなんでもないないイズがド真ん中にいてもなんとも思わない。慣れって怖い!!

ノゲイラに聞いてみい！ブラジルではサッカーといえばロナウド!! VTといえば、イズマイウ様なんだぞ!!



WALLID ISMIL

イズ　知らなかったのか？　ムエタイのコーチには、ミノタウロを鍛えたことで有名なルイズ・アウビス。それから柔術担当はヒカルド・デラヒーバ先生がやってるんだよ。

——あのデラヒーバが猪木軍入りしましたか（笑）。

イズ　ヒカルド・モラエスもいるし、カーロス・バヘットもリオ道場所属だ（後日、二人ともどういうわけか離脱）。生徒を含めると108名もいるんだぞ！

——猪木軍というよりは、もはやショッカー軍団化してますね。それにバヘットはBTT所属なんじゃ……。

イズ（聞かずに遮って）選手のためのアパートも買ったんだぜ。食べるための金も一切持ってない連中ばかりだから、そういう面倒も見てるんだよ。

——業界発展のためにイズマイウさんは貢献してるんですねえ。これからもイズマイウさんのあらゆる場面での活躍＆登場を期待しています！

イズ　……おい、もう帰るのか？　俺様が載ってる雑誌がまだまだたくさ〜んあるから見ていけよ！（カバンから本を取り出して）これこれ、これなんかペレと一緒に載ってるんだぞ！

——いや、イズマイウさんの凄さはよくわかりましたから（笑）。

イズ　おいおい、あと3冊！　いや、あと1冊だけでもいいから、見ていけよォォ!!（目をギラつかせながら）。

【03年8月某日／都内某ホテルにて収録】

自費来日を突っ込まれてちょっとアタフタしていたイズマイウ。このインタビューのあとは、めっきり日本で姿を見ることが減ってしまって残念だ。ちなみに「ブラジルではサッカーといえばロナウド、VTと言えばイズマイウ」という発言を伝え聞いたムリーロ・ブスタマンチは3分以上大爆笑。アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラは「きっとそれは真実だから、いろんなブラジル人にその質問をしたほうがいいよ。みんな笑って答えにならないと思うけどね」と、笑い泣きの涙を拭きながら答えている。さらにノゲイラは、「あるときイノキさんがボクのことを〝ベスト・フレンド〟と紹介してくれたことがあったんだけど、それを傍らで聞いていたイズマイウが怒り狂ってたことがあったよ（笑）」と素敵なエピソードを教えてくれた。さすが、闘魂ストーカー、イズマイウ！　今年は『ジャングル・ファイト』の日本進出がウワサされているだけに、あのギラギラした目に遭遇する可能性は高そうだ。

PRIDEまんが道

featuring
エメリヤーエンコ・
ヒョードル
竹熊健太郎
相原コージ
夏目房之助
にわのまこと
長南亮
中澤一登
ジョシュ・
バーネット
(登場順)



なろう、なろう
明日なろう!!

梶原一騎の時代から「格闘技とマンガ」は相性がいい。むしろ「最強とは何か?」という人類不滅の命題の前では「格闘技とマンガ」が相互に補完し合い、マンガの世界をも凌駕する『PRIDE』という夢舞台にまで至った。今回はそんな「格闘技とマンガ」「『PRIDE』とマンガ」を横断する選手、マンガ家に直撃、その関係性をひも解いてみたい。

撮影/乾晋也



1976年9月28日、ウクライナ出身。第2代PRIDEヘビー級王者。『PRIDE・GP2004』の優勝を誇る、人類60億最強の男。『PRIDE無差別級GP』への出場で連覇が期待される、PRIDEの顔。

PRIDEまんが道

〝人類最強の男〟は〝ファンシーなイラストレーター〟でもあった!!

E・ヒョードル 画伯

独占インタビュー

PRIDEヘビー級チャンピオンであり「60億分の1」「人類最強の男」として誰もが認めるエメリヤーエンコ・ヒョードル選手。じつは、その破壊的なパウンドを生み出す右手から、あまりにもファンシーかつ乙女チックなイラストが生み出されていた！　ヒョードルのホームページではすでに公開されている「皇帝の意外な趣味」に迫る独占インタビュー！

聞き手／真下義之　撮影／乾晋也

――今日はファイターとしてのヒョードルさんではなく、趣味で絵を描かれている〝アーティスト〟、ヒョードルさんの側面についてお話をうかがいたいと思います。

ヒョードル　ハイ。よろしくお願いします。

――じつは日本ではヒョードルさんのホームページで公開されている絵の腕前がとても話題になっているんです。日本の有名な漫画評論家（竹熊健太郎氏）も絶賛しているんですよ！

ヒョードル　それは嬉しいですね（笑）。

――どれも傑作揃いなんですが、こういった絵を描き始めたのはいつくらいからなんでしょうか？

ヒョードル　描きはじめたのは、軍隊を退役してからになりますね。具体的には97年くらいです。

――では約8年くらい前からなんですね。しかし〝世界最強の格闘家〟が描いたとは思えない達者な絵なんですが、絵の先生がいらっしゃったんでしょうか？

ヒョードル　いえ完全に独学です。最初からひとりで描いてます。絵を描くごとに自分でも「うまくなってるな」と思いますし、最近描いたこの作品（写真右下）はこれまででもベストだと思ってます。

――「絵は描く人自身に似てくる」と言われますけど、この絵も雰囲気がヒョードルさんに似ている気がします。

ヒョードル　どうもありがとうございます（笑）。

――細密なタッチで描かれてるんですが一枚の絵にはどのくらい時間をかけてますか？

ヒョードル　う～ん……絵にもよりますが、だいたい2週間くらいでしょうか。最後の絵はちょうど2週間ですね。



ヒョードル画伯が「もっともお気に入り」の最新作はディズニーの『白雪姫』に出てくるような小人チックなかわいいキャラクター。鼻の感じがヒョードルに似ていないこともない。

――じっくり描かれてるんですねえ。絵はどのくらいのサイズに描かれてるんでしょうか？

ヒョードル　だいたい、A3くらいのサイズに描くことが多いですね。

――確かにそのサイズならタッチがデッサンぽい感じですけど、道具は何で描かれているんでしょうか？

ヒョードル　基本的にはどの作品も鉛筆で描いています。

――なるほど。これから鉛筆以外、たとえばカラーで描かれたりする予定はありますか？

ヒョードル　う～ん。まだわかりませんが、カラーで描いてみるのもおもしろいかもしれませんね。

――ヒョードルさんの油絵や水彩画もぜひ見たいです！　ヒョードルさんはいろんなキャラクターの絵を描かれてますけど、これらは「すでに存在する絵を模写してる」んでしょうか？　それとも「自分の想像やオリジナルで描かれた」ものなんでしょうか？

ヒョードル　え～、いくつかは家にあったぬいぐるみを見て描いたものですけど、基本的には僕のオリジナルです。

――おっ！　オリジナルなんですか！　いや、あまりにもお上手なので日本の漫画

水森亜土ちゃんの絵本、とてもカワイイと思います（笑）

評論家の方も、オリジナルなのか模写なのかがわからなかったようです。

ヒョードル それは光栄ですね（笑）。

—しかし「人類最強の男」や「60億分の1」と言われる男が描く絵としては、かなりファンシーで乙女チックなかわいらしいタッチですね（笑）。ファンはそのギャップにとても興味があるんですけど。

ヒョードル その理由を教えましょうか？（笑）。これらの絵は「私の娘のために」描いているからなんですよ。

—なるほど〜。ファンシーなタッチにはそんな理由があったんですね……。ちなみに娘さんは絵を見てどんな反応ですか？

ヒョードル もちろん凄く喜んでくれますよ。正確には「これまでは喜んでいた」といいますか（笑）。じつは娘がロシアの芸術学校に絵を習いに行っているんです。

—おお、皇帝らしくロシアの英才教育がスタートしたと。

ヒョードル だから彼女にとって私は〝絵のライバル〟になってしまったんです（笑）。

—ヒョードルさんにとっても、難しい局面になってきたんですね。

ヒョードル いままで手放しで喜んでくれてたんですが、最近は私が絵を見せて「どうだい？」って聞いても、「う〜ん。まぁまぁかなぁ」と言われたりね（笑）。

—ワハハハ！ それは悲しいですねえ。絵のほうも修練していただくしかないですね。

ヒョードル ガンバリマス（笑）。

—今日は、そんなファンシーな絵を描かれてるヒョードルさんに〝キャラクター大国〟日本の有名キャラの資料を持ってきたんですよ！（とズラズラと並べだす。）『鉄腕アトム』、『ドラえもん』、『ポケットモンスター』、『ドラゴンボール』、水森亜土の絵本など）どれも人気キャラクターなんですが、ヒョードルさんがお気に入りのものはありますか？

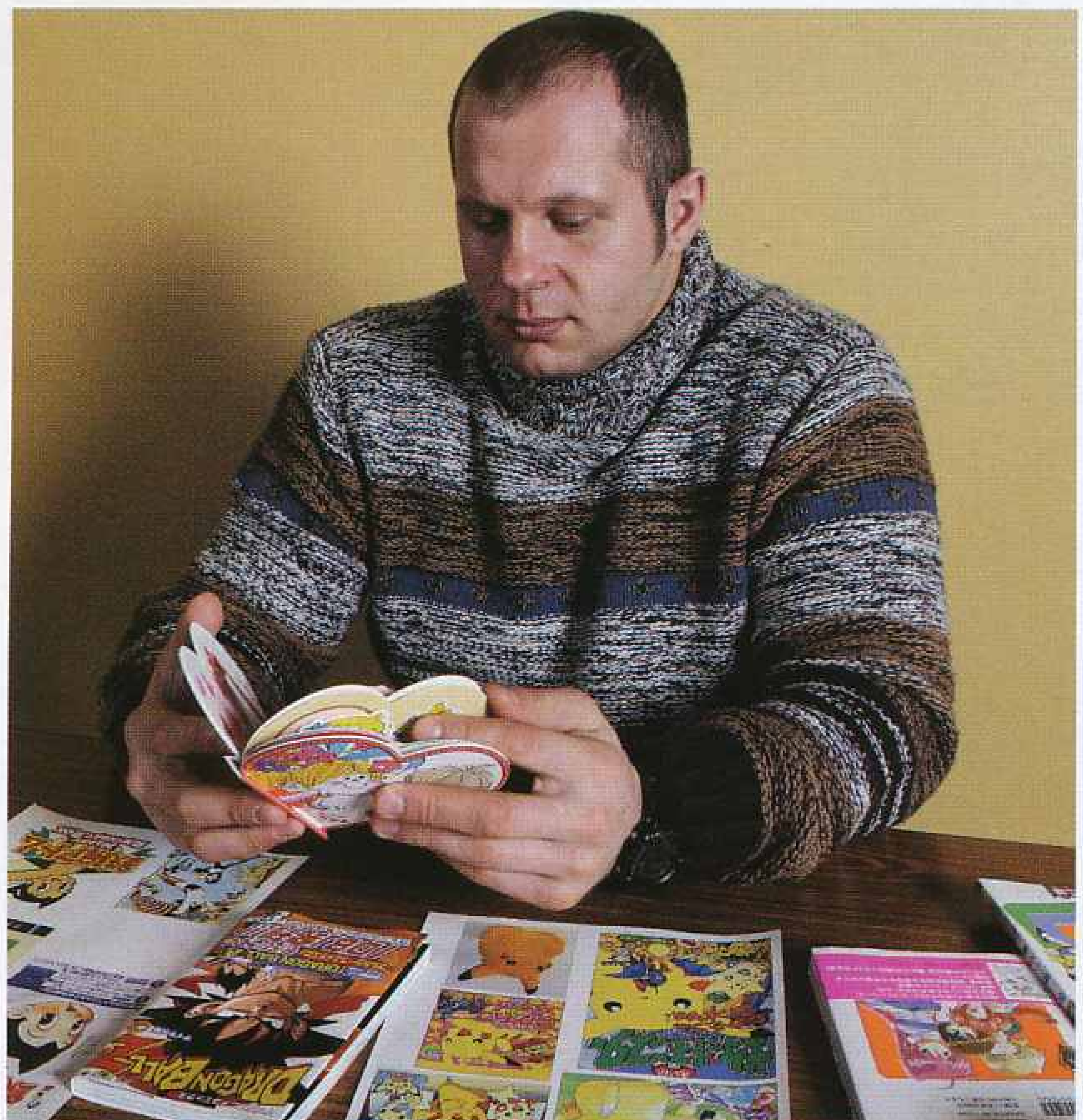
ヒョードル （興味深く見ながら）う〜ん。そうですねえ。

—ど、どうでしょうか？

ヒョードル ……申し訳ないんですが、いまパッと見てみてどれが好きか？というのは難しいです。時間をかけてじっくり見てみないとね。

—そうですかぁ。ちなみに藤子・F・不二雄先生が生んだ、日本の国民的キャラクター、『ドラえもん』はご存知ですか？

ヒョードル ああ、『ドラえもん』は知ってますよ。以前、どこかでアニメーションを見たことがありますね。あとこの黄色いやつは『ポケモン』でしたっけ？





真剣な表情で『ドラえもん』や『ケロロ軍曹』など、大量のキャラクター資料を読みあさるヒョードル画伯。もっとも興味深そうに見ていたのは、日本を代表するイラストレーター水森亜土ちゃんのハート型の飛び出す絵本だった！

—あ、皇帝はピカチュウのこともご存知でしたか。

ヒョードル これもアニメを観たことがあります。（ハート型の絵本を手にして）ところでこれはなんですか？

—あっ、いまお持ちの絵本の著者は水森亜土さん、通称〝亜土ちゃん〟という有名なアーティストなんですけども……。

ヒョードル アドチャン？

—はい。マジックでガラスに歌いながら絵を描くユニークなスタイルのアーティストなんですよ！ その亜土ちゃんの絵がヒョードルさんの絵に近い気がするんです。

ヒョードル （絵本をじっくりと見ながら）そういえば、似ているところがあるかもしれませんね（笑）。とてもカワイイと思います。

—その絵本を差し上げますので、娘さんにもぜひ見せてみてください！ そういえば、ヒョードルさんは弟のエメリヤーエンコ・アレキサンダー選手の似顔絵も描かれているとうかがったんですがそちらは完成されたんでしょうか？

ヒョードル いや目を入れるくらいで「完成まであとわずか」という段階だったんですが、指の手術が入ってしまったので、いまストップしている状態なんですよ（残念そうに）。

—その膨れ上がった指では仕方ないですよねえ。……ではお時間もないようなので、これからどんな絵を描いてみたいと思ってらっしゃいますか？

ヒョードル 私の絵のライバルでもありますけど、じつはウチの娘は馬がとても好きなんですね。それで前から「次は馬を描いて！」ってせがまれているんです。

—おお、次の標的は馬ですか！

ヒョードル デッサンふうなのかアニメふうなのか……どういうふうに描くかはともかくとして、馬をテーマにして描いてみようかと。

—なるほど、娘さんに負けないように絵のほうも頑張ってください！ 最後にファンにメッセージをいただけますか？

ヒョードル 皆さんが私の絵を喜んでくれてとても嬉しいです。絵を描くことは本当に大好きなので、将来的にも続けていきたいです。いまは怪我をしているから絵を描くことはできないんですけども……。娘に負けないよう頑張ります（笑）。

—怪我を治してもらって、さらなる傑作をお待ちしています！ きょうは本当にありがとうございました！

［06年2月26日／『PRIDE・31』さいたまスーパーアリーナ・プレスルームにて収録］

PRIDEまんが道



編集者、ライター、漫画原作者として知られる竹熊健太郎氏は、マンガやイラストについて幅広い知識を持つ。そんな竹熊氏のブログ『たけくまメモ』の05年8月31日の日記で、『ヒョードル選手の絵心』と題してヒョードルのイラストを大絶賛！　誰よりもヒョードル画伯を評価する竹熊氏が皇帝の傑作群を徹底解説！

撮影／乾晋也

E・ヒョードル
皇帝のアートギャラリー

［解説：竹熊健太郎］

自分も格闘技は好きだが、格オタと名乗れるほどディープではない。だから編集部からいきなし「ヒョードル選手について の原稿を…」と依頼されたときには、ちょっと驚いた。ライターとしては、今までの俺の営業品目にはなかった分野であるし、まさか氷の皇帝に関節技をかけられてその痛さについて書け、なんて取材ではあるまいな、と受話器を耳に当てつつ額に汗が滲んだのである。

なーんて、さすがにそんなことはなく、「実は〝たけくまメモ〟を拝見しまして…」などという。あ、もしかしてイラストの件ですか、と尋ねたらビンゴであった。「たけくまメモ」というのは俺が個人的に開設しているブログであるが、昨年ここで、ヒョードル選手の公式サイトに掲載されているご本人のイラストの素晴らしさについて紹介したのである。

まるでサンリオというか水森亜土たんとでも言おうか、絵だけを見れば、まず絶対に60億人中最強の男が描いたとは思えぬ極度にファンシー、かつメルヘンなものである。「この人はできる」と思った。ヒョードル選手相手に「できる」もないものだが、ことイラストについてなら、俺にも一家言はあるのだ。俺だってもとはマンガ家志望の時期があったわけだし、デザイン学校で本格的にデッサンを学んだこともある。さらに言うなら現在、多摩美術大学で「漫画文化論」の講師もしているのであります。非常勤ですけど。

一枚ごとの評価はキャプションに譲るとして、まずは総論から。最初に見た印象は、「完全に自己流だが、形のセンスは天性のものがある」ということだった。アメリカのカートゥーン、おそらくワーナー

01



犬なのかクマなのかよくわからないが、とぼけた表情がよい。髪の毛？ に見られる微妙なボカシの表現が日本画を思わせるものもある。

02



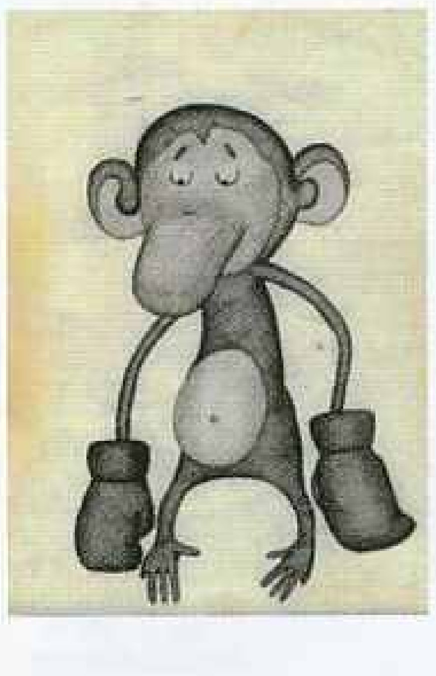
どこからどうみても「ルーニーチューン」に登場するカナリヤ、トゥイーティそっくりだが、娘さんのぬいぐるみがモデルだろう。足の形などはじつにしっかりしている。

03



これもアメリカのアニメに出てくるようなリス。木の根に顔が生えているのがなんともいえない。ヒョードルは「娘が生まれてから描き出した」と言っているが、絶対に子供時代から描いているはずだ。

04



これまた面白い表情のサル。あの筋骨たくましいヒョードル選手からは想像もつかないが、案外、本人の自己イメージはこうなのかもしれない。虫も殺さない芸術青年の姿がここにはある。

05



これは完成度が高い。まじでファンシーグッズとして、サンリオに商品化してもらったらどうだろう。キノコの形が漫画風ではなく妙にリアル。下にうずくまる臆病なライオンみたいな犬も愛嬌がある。

06



いわさきちひろの児童画とモンチッチを足したような愛らしい子供。前のイラストもそうだが、洋服のシワの描き方が素人の域を超えている。軽井沢あたりでしゃれた喫茶店を開くなら、ぜひ看板はヒョードルに依頼したいもの。

07



ヒョードルのイラストはすべて全身像であるところも注目したい。日本のアニメオタクみたいに、萌えキャラの顔だけ、ということがないのだ。この作品は特にポーズが秀逸である。

08



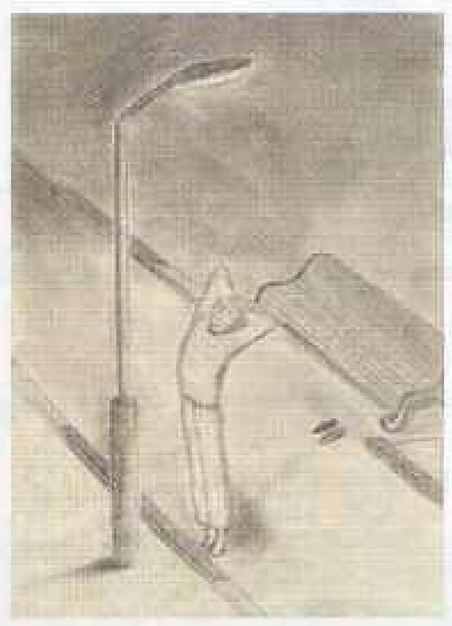
唯一の大人の女性イラストだが、グラマーにもかかわらず筋肉の描写がすごい。手をさしのべているが、何を触っているのか妙に気になる。

09



完成度では、5番と、この作品が際だっている。比較的最近の作なのだろうか、陰影のつけ方に不自然さがない。特にヒゲの一本一本を細密に描いて全体をぼかしているところは狩野派を思わせる。表情も申し分ない。

10



新作らしい。夜道でぼんやりとした街路灯に照らされる青年。孤独なのに、なぜか安心感を漂わせている。つげ義春の夢をテーマにしたシュール作品に出てきそうな場面である。

11



これも新作。皇帝の、氷の表情の裏に存在するセンチメンタルな孤独を表しているのか。ひざを抱える青年の目には涙が。その傍らには枯れた花が。ぜひデビッド・リンチに映画化してほしいイメージである。



の短編アニメ『ルーニーチューン』あたりに影響されたとおぼしきキャラは、たぶん娘さんに買ってあげたぬいぐるみをスケッチしたものだと思うが、形はまことに正確である。リンカクだけを抽出すれば完璧と言ってもよい。

ただ惜しむらくは陰影のつけ方。鉛筆で丹念につけた陰影は、その繊細さ、丁寧さで非常に好感が持てるものの、光の方向性が考慮されていない。すべてが前光、つまり正面からしか光が当たっていないので、やや平板で固い印象になっているのである。これが「自己流」と判断した理由だ。ただしデッサンをきちんと勉強すれば、もともと素質があるだけに劇的に印象が変わるはずだ。

その点、小さな男の子と女の子の線画イラストは完璧と言っていい。なまじな陰影がないので、線の美しさ、形の正確さが際だっている。なによりデザインセンスがよく、可愛い。このまま「ぬり絵ブック」としてセイカノートあたりから発売したら売れるのではないだろうか。

あと注目したいのは、ドワーフやリスなどファンタジーなキャラに混じって、裸の女性が描かれていること。なにかを求めるように腕を差し出し、どこか憂いを帯びたタッチは、あまりも強すぎるがゆえの孤独を表しているのか……と、ここまで書いたところで、編集部から「ヒョードル選手の新作です」といって2点のイラストが届いた。

こ、これは……。まるでムンクが「星の王子様」の挿絵を描いたらこうなるというか、硬質な詩情をたたえた「孤独」の描写に胸をうつものがある。これまで見てきた作品は、明らかに子供向けを意識したものだが、自分のために描くとこうなるのか。リング上でのヒョードル選手は、その圧倒的な強さとともにどこか繊細な憂いを感じることがあるが、まさに「皇帝の孤独」とはこういうものなのかもしれない。リングの鬼としてのヒョードル、妻と娘を愛する温厚な家庭人としてのヒョードルともまた違う、孤高の芸術家としての側面が、確かに顔を覗かせている。

ヒョードル選手には、芸術方面でも刺激を与え合う友達が必要なのではないだろうか。そこで老婆心で進言すれば、どこかの画廊を借り切って、日本が誇る格闘イラストレーター・藤原喜明組長とイラスト対決をしていただきたいものである。藤原組長のイラストは、露骨に山藤章二に影響されているものの、完全に玄人はだしのそれである（近年は焼き物にもはまっておられるらしい）。二人は、たぶん友達になれるのではないか。そんな気がする。イラスト対決のレフェリーは、もちろん亜土たんで。

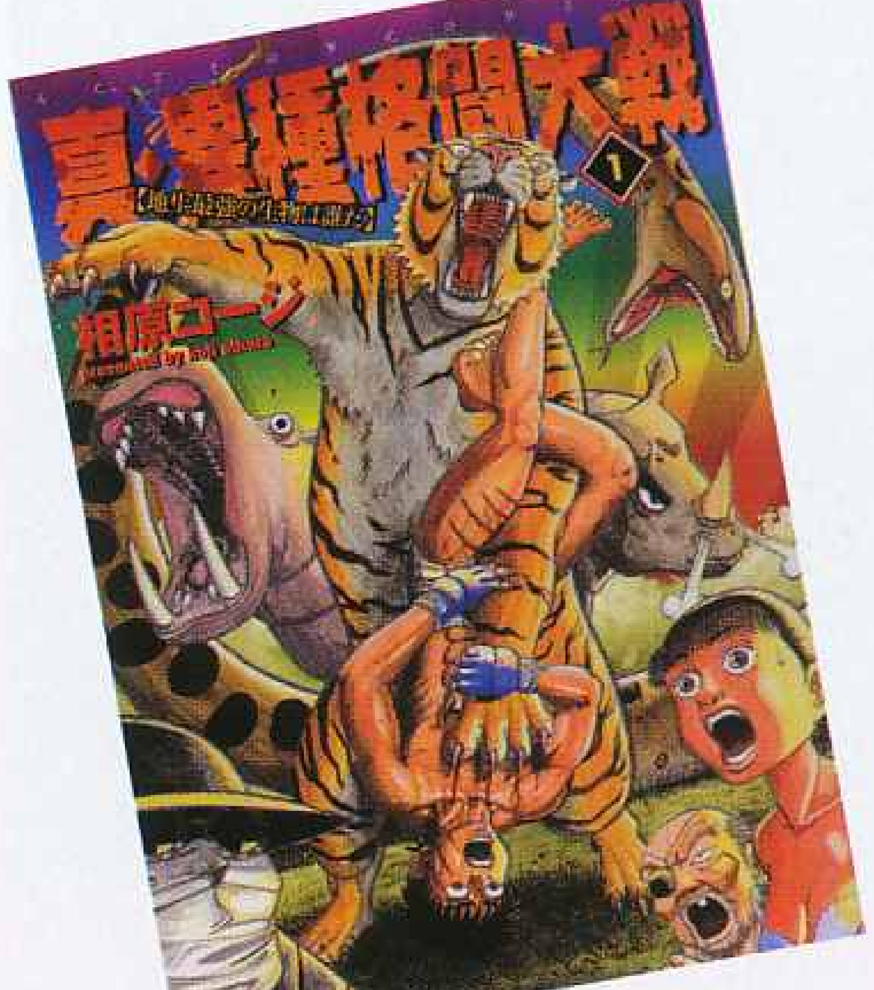
●たけくまメモ●

(http://takekuma.cocolog-nifty.com/)



たけくま・けんたろう■1960年、東京生まれ。編集者、ライター、漫画原作者。桑沢デザイン研究所中退。多摩美術大学非常勤講師を務める。専攻は漫画文化論。高校在学中にミニコミ誌「摩天楼」を創刊。その後自販機本編集者を経て、現在に至る。代表作に『サルでも描けるマンガ教室（相原コージと共著）』など。







これが日本中の『kamipro』読者に衝撃を与えた（元『週刊ファイト』）I編集長の“殺し”引用場面だ! 土佐犬vsオオカミの激闘の中で「闘いとは何か?」を説く場面。(『週刊漫画アクション』2006 No.4 ,P277より） ©相原コージ／双葉社

進化する“動物総合格闘”マンガ

『真・異種格闘大戦』作者

相原コージ

PRIDEまんが道

『かってにシロクマ』や『コージ苑』、『サルでも描けるまんが教室』（竹熊健太郎と共著）、など従来のギャグマンガの枠を破壊する先鋭的なセンスで注目を浴びた、相原コージ。彼がいま、総合格闘技の世界観をベースにした動物総合格闘マンガ『真・異種格闘大戦』を『週刊漫画アクション』（双葉社）で好評連載中だ。マンガのために柔術道場にも通う鬼才・相原コージに何が起こっているのか? 直撃インタビュー!

聞き手／星野一樹、真下義之　撮影／堀江ガンツ

〝本能〟と〝競技〟の闘いがテーマの回でI編集長の〝殺し〟が頭に浮かんだんです

―今日はギャグ漫画界の大御所でありながら、「地球上の動物たちが〝地上最強〟を決める」というマンガ『真・異種格闘大戦』（『漫画アクション』連載）を執筆中の相原さんにお話をうかがいたいと思います。

相原　よろしくお願いします。

―じつはこの『真・異種格闘大戦』、とくに『漫画アクション』2月21日発売号が『kamipro』編集部でも大変、話題になってまして……。

相原　はいはい。あの（元『週刊ファイト』編集長）井上義啓編集長（以下、I編集長）の言葉を引用した回ですよね（笑）。

―そうなんです。狼と土佐犬の闘いの中でI編集長のキメ言葉である〝殺し〟のくだり（右ページコマ参照）を引用されてますよね。

相原　じつは、この回は〝本能〟対〝競技〟の闘いがテーマだったんで、『kamipro』のI編集長の〝殺し〟という言葉がパッと浮かんだんです（笑）。『紙プロ』は創刊号から読んでましたしね。



―これを見たときは本当にシビレましたよ。ところで、先生の『真・異種格闘大戦』は様々な動物たちが総合格闘技的な世界観の中で入り乱れて闘うという、凄まじい話ですね。ゴリラがマニアックな柔術技を使ったりして……。

相原　ええ、かなり意図的に格闘技っぽい要素を入れてますね。

―このマンガのために柔術の道場にも通われてるそうですけど、格闘技は昔からお好きだったんでしょうか？

相原　いや、昔からというわけじゃないですね。UFCを観て本格的にハマったって感じかな。

―ほ～。UFCがきっかけというのは珍しいかもしれませんね。

相原　うん。僕はいま42歳なんですけど、僕の同世代って格闘技やプロレスファンが多い。でも僕はアニメの『タイガーマスク』は大好きだったんですけどスポーツ全般にまったく興味がなかったんです。

―まさに文系男子一直線という感じですね。

相原　18歳で上京してから尊敬する、いがらしみきお先生のマンガにプロレスネタがよく出てくるんで、影響されてちょっとプロレスをテレビで観てたぐらいで。

―やはりUFCとの出会いが大きいんでしょうか。

相原　あれは衝撃でしたね。「梶原一騎の世界が本当に実現しちゃった！」っていう驚きがありました。様々な格闘家が〝なんでもあり〟状態で闘って、それをグレイシー柔術という未知の格闘技が完全制圧するというね。

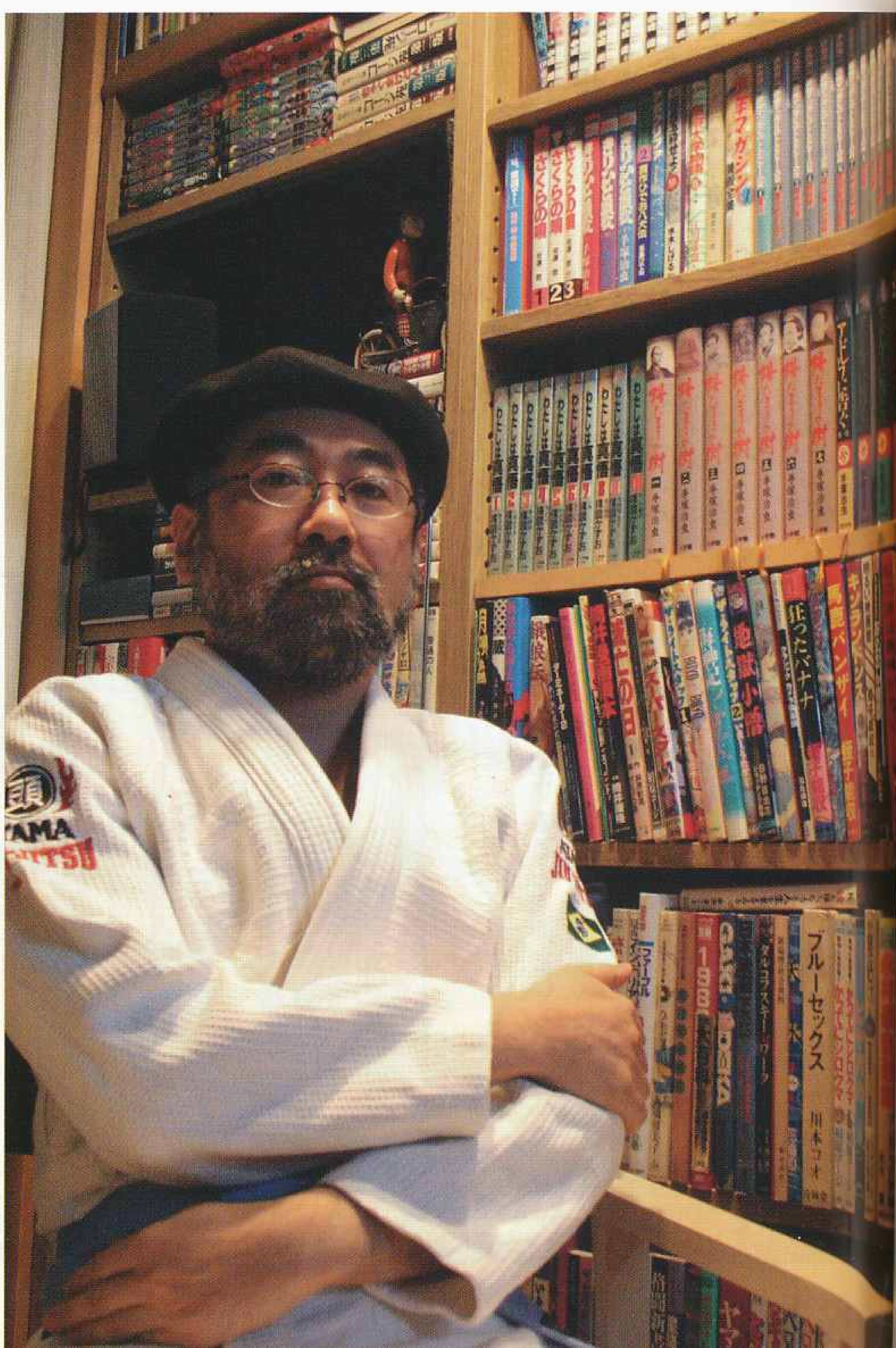
―まさに梶原ワールド的なファンタジーですよね。

相原　当時からウワサには聞いてそられてはいたんだけど、実際に初期UFCのビデオを観て「なんだこれ？」って。キックボクサーやサンボやカポエラの選手がいるかと思えば、なぜか忍術までいるでしょ（笑）。

―しかも名前が〝アメリカン忍術〟ですから（笑）。

相原　あとは〝ケンポー・カラテ〟とかいう聞いたことない格闘技や51歳の空手家が出場したり、300キロの相撲取りがいたり……。現実の世界に〝マンガ的空間〟が出現してるのが衝撃的でしたね。

―その衝撃が遠因となって、この『真・異種格闘大戦』を描くまでに至ったんで



ご自宅の仕事場において、ベレー帽をかぶりつつ、柔術着に着替えてくれた相原コージ先生。その柔術キャリアを示すように白い柔術衣がビシッとキマっていた。ちなみに現在は青帯とのこと。

しょうか。

相原　じつは最初は他の雑誌で〝女性版、虎の穴〟みたいなマンガ原作を考えてたんですよ。

――〝女性版、虎の穴〟ですか。

相原　〝性の商品〟にされる女性たちがヒマラヤの山奥にある〝牝の穴〟でSMの技術だったり、性の技術を仕込まれるんですが、その中に格闘技部門もあった……。という感じでドロドロした梶原一騎的、大映テレビ的な格闘技マンガをやりたかったんですけど、実現しなかったですねえ。

――すでにおもしろそうなのに残念ですね。

相原　その準備をしているときにやっぱり自分でもやらないとわかんないかな、と思って一番興味のあった柔術を習い始めたんです。とにかくUFCでホイス（・グレイシー）を観たときって「なんでこんなにあっさり勝てるんだ」ってビックリしたし、柔術という競技のバックグラウンドにも惹かれてしまって。

――「裏柔道」としての柔術の世界観ですね。

相原　うん。秘境はないと思ってたのに、世界にはまだこんなにおもしろい「知られていない物語」があったのかと。グレイシー一族が継承した物語性にもハマりましたね。

――そういった総合格闘技の世界をどうして動物に置き換えようと思われたんでしょう?



相原　当時、「マンガ本来のおもしろさってなんだろう」ってことを凄く考えてたんです。最近、マンガが売れなくなってる原因って、リアルな描写を突き詰めたり、キッチリ取材したり、ツッコミどころのない作品を描こう、という方向が強過ぎてマンガ本来の荒唐無稽さが失なわれちゃった。だからいまこそマンガしかできない表現が求められてるんじゃないかと思ったんです。

――いい意味での「マンガっぽいマンガ」への回帰ですね。

相原　映画『少林サッカー』を観たときもショックでね。映画の世界で〝マンガでしかできない表現〟をやられたちゃったなって。

――チャウ・シンチーは『ドラゴン・ボール』好きそうですもんね（笑）。

相原　そういうこともあって総合格闘技も動物にしちゃえば、映画も真似できないだろうって（笑）。「どの動物が一番強いのか?」という子どもじみた興味もイイと思うし。それに最近の総合格闘技って初期のハチャメチャさ加減が後退して、競技として洗練されてきてるじゃないですか?

総合格闘技をマンガでやるなら、動物のほうがいいんじゃないかって

――そうですね。ルールも整備されてスポーツ的になってきてます。

相原　僕はむしろ初期UFCみたいなマンガっぽい部分や、とんでもない面こそ表現したいと思ってて。

――なるほど。この『真・異種格闘大戦』にはオモプラッタみたいな、非常に専門的な技も登場しますけど、やっぱり柔術の道場に通ってるのは大きいですか?

相原　じつは柔術は子どもと一緒にやっているんですよ。

――お〜、お子さんと一緒に通ってらっしゃるんですか。

相原　小学生の頃から通わせてまして、いまは中2なんですけど「教養の一つとして格闘技を学ばせる」のもおもしろいかなと思ってね。

――ちなみに道場はどちらに行かれてるんですか?

相原　調布にある大賀道場というところで、そこの大賀幹夫先生に教わってます。穏やかな人が多くていい道場ですよ。

――ちなみに帯の色は何色ですか?

相原　いやぁなんとか青帯はもらったんですけど……。僕は凄く弱いですよ（笑）。いまだに白帯にもよく負けてるし……。

――柔術をやってる知り合いは「青帯だって、なかなかもらえない」と言ってましたけど。

相原　柔術は技術体系がハッキリしてて合理的にできてるので、幻想がないのがイイですね。僕は基本が文系なので本を見て技術を勉強できるのも楽しいし、肉体的にハードじゃないものがありがたい。机に座りつつ技術を頭にたたき込めるし。

――たまには息子さんを実験台にしてみたり。

相原　そうそう。教本を読みながら子どもに試したり（笑）。この本に出てくるゴ



格闘技トーナメント『THE 最強』を制した、強矢鋼が謎の人物に導かれアフリカ奥地のコロシアムへ。ここで地球上の全生物から厳選した16種の動物による「異種格闘大戦　地上最強の生物決定トーナメント」が開催。第一試合は「ヒトvsカバ」の一戦だった!　©相原コージ／双葉社



リラのコンガが柔術家という設定なんですけど、技術的には間違ってないはずですよ。お姉さん座りをするように極めるとか。

――マンガ家ですと、花くまゆうさくさんが柔術やってるのは有名ですけども。

相原　じつは面識はあまりないんですけど。彼は明大前のAXISに通ってるんですよね。

――実際に試合に出たり。花くまさん原作の映画『東京ゾンビ』では自ら、柔術指導したくらい打ち込んでますよね。

相原　絶対、歯が立たないでしょう（笑）。そういえば、これ言っていいのかわからないけど昔、柔術のセミナーでマンガ家の○○○○○さんに会ったことがありましたね。

――えっ！　○○○さんといえば、ちょっとHな学園コメディの大御所として知られる有名マンガ家じゃないですか？

相原　あれは驚きましたね。で、せっかくだから乱取りしようってことになって、あっさり三角絞めで負けてしまいましたけどね（笑）。

――やっぱり柔術には文系少年を惹き付ける魅力があるんでしょうか。

相原　そうかもしれない。あとはグレイシー柔術という新しい可能性がこれまでの常識を覆すことが起こっているところに興奮したんでしょうね。

――格闘技やプロレスの常識が全部、覆った部分はありましたからね。

相原　僕は「なんにもおもしろいことがないな～」と思っていたころに、格闘技に触れたんですよね。ギャグマンガも行くところまで行くと、最後は停滞してしまう。思想界でも80年代にニューアカデミズムっていう学問の価値観をひっくり返すものが出てきて興奮したけど、それもやがて停滞して……。そんな時期に意外にも格闘技というジャンルでどのジャンルよりも一番おもしろいことが起こってたんです。それで僕は魅せつけられたんですね。

――そういう意味では、この『真・異種格闘技大戦』は昔のマンガのいい部分を参照しながら、常識を覆してると思うんですけども。

相原　そうですね。解説もたくさん入れてますけどあれは梶原一騎さんのマンガを意識して……。あの「大山倍達・談」というスタイルがやりたいためにワニ対シマウマの回では、熱川バナナワニ園に行ってワニについて園長さんに話を聞いたりね（笑）。



——ガハハハ！　そのためだけに取材しましたか！

相原　「ワニは強いよキミィ～」ってマンガに入れたいがために。「キミィ～」とは言ってないですけど（笑）。あと土佐犬協会にも取材に行きましたし。梶原さんもそうですが、そういうオールドスクールな表現を再現したいという気持ちはありますね。

——ファンタジーっぽい世界なのに理論づけが凄いんですね。

相原　あとはつのだじろうさんの『うしろの百太郎』的な解説とか、白土三平さんの忍術解説のおもしろさとかね。『真・異種格闘大戦』も荒唐無稽な話なんだけど、そういう理屈をつけることでリアルに錯覚するマンガらしいおもしろさを出したかったんです。

——驚いたのが、人類最強の選手（強矢）をトーナメントに出場させて盛り上げるだけ盛り上げて、コロッとカバに負けちゃうじゃないですか。

相原　それは最初から考えてましたね。いかに人間最強でも、動物にはかなわんだろうと。だってカバって素手で勝てる気しないもんね（笑）。

——ガハハハハ！　エメリヤーエンコ・ヒョードル選手でも倒すのは難しいかもしれないですね。

相原　でも大山倍達さんってそういうことを本気で考えていたのが凄いよね。実際に『地上最強への道―大山カラテもし戦わば』（ちくま文庫）という本で、いろんな猛獣との闘い……ライオンとかゴリラと戦う想定をしてるんですけど。

——実際、牛とは闘ったみたいですしね。

相原　そうなんですよ。そういう本気かつバカバカしいノリを出したかったんです。本気で描いて、あとから見てギャグとして完成されてればいいなって。

——ところで、最近の格闘技マンガは読まれていますか？



相原　やっぱり板垣恵介さんの『グラップラー刃牙』は凄いですね。一回会って挨拶しましたけど、冬なのに半袖でしたしね（笑）。あの人は実際に格闘技もやってたし、ああいう表現を、迷いなく本気で描けるのはうらやましい。

——あのタッチで"マンガ的なマンガ"を描けるのは凄いですよね。

相原　僕もそうなんですけど、自分で格闘技やると「そんなのありえない」という視点が入りがちなんです。けど、そこをあえて描く心意気が素晴らしいし「これこそマンガだ」って感服しましたね。

——格闘技マンガは描いてて難しいですか？　楽しいですか？

相原　やっぱり「闘いの攻防だけでおもしろく見せる」っていうのは非常に難しいですよ。じつは僕は格闘技を始めてから、逆に「プロレスって凄いな」って思ってるんです。

——ああ、魅せる格闘技としてプロレスを再評価された、と。

相原　格闘技って観てるぶんには膠着するのはおもしろくないし、「休むな！」とか平気で言えるでしょ？　でも実際にやってみて自分のスタミナが切れたりすると膠着してるファイターの気持ちが凄くよくわかるんです（笑）。

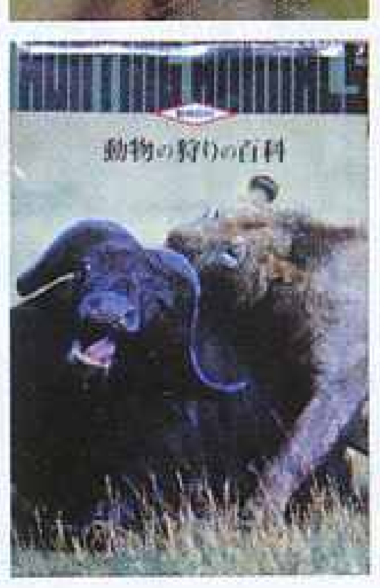
——ああ、もう動きたくないとか、判定に持ち込もうとか。

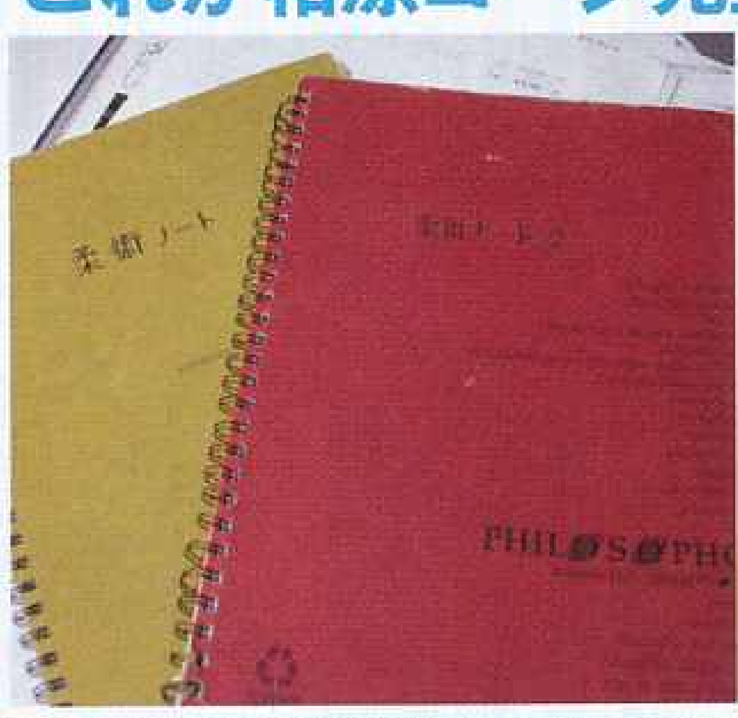
相原　瞬間的に勝負が決まる格闘技の凄さもあるけど、マンガでそれを表現するのはかなり難しい。その一方で総合格闘技本来のハチャメチャな部分を見せたいという気持ちもあるんですよ。動物は負けたら死んじゃうしね（笑）。

——野生の掟に沿った非常に残酷な闘い

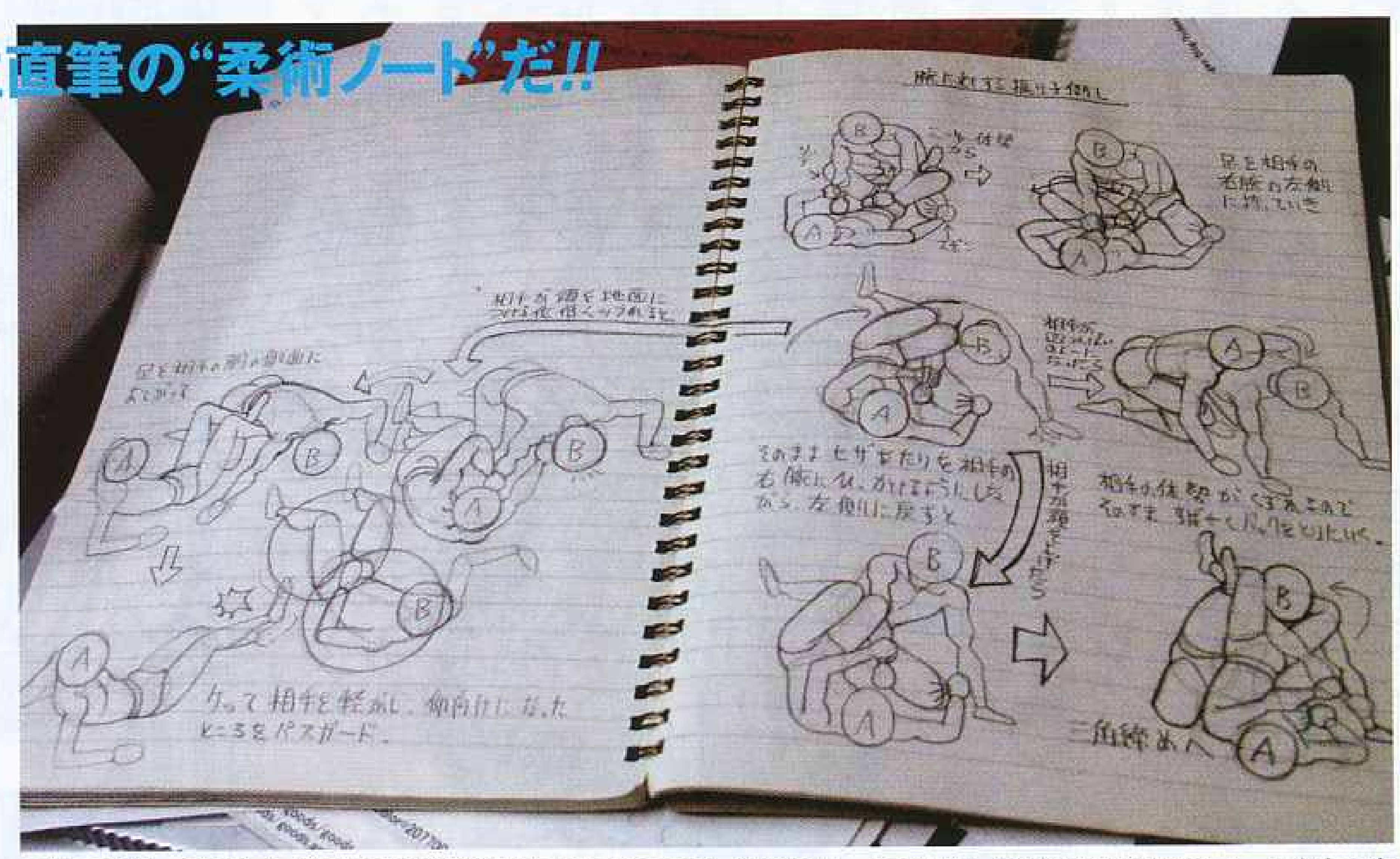
衝撃！ これが相原コージ先生直筆の"柔術ノート"だ!!







写真上：これが問題の柔術ノートだ！　まさに一子相伝的なレアな逸品。いつか書籍化させてほしい！　**写真左上**：インタビュー中で明かしていた『真・異種格闘大戦』のモトネタ的な位置づけの『地上最強への道―大山カラテもし戦わば』(ちくま文庫)。ジャケから完璧。　**写真左下**：相原氏の仕事場には当然のごとく『動物の狩りの百科』(データハウス)なる百科事典も。この他、動物人形も多数所蔵されている。



取材の終盤、相原先生が柔術の指導を忘れないようにメモした柔術ノートを披露！　藤原喜明のゴッチノートも真っ青な丁寧に図解された内容はまさに『サルでもできる柔術教室』！　全3冊に至る。





ですよね。

相原　まぁリアルに考えると狼とかは集団で闘う動物だし、厳密にはいろんな矛盾があるけどそういうのは無視して「おもしろいほうが正しいんだ！」というノリで。

――いまの総合格闘技界やPRIDEで好きな選手はいらっしゃいますか。

相原　やっぱり柔術をやっているから基本的に極め系の選手は好きですね。桜庭（和志）や（アントニオ・ホドリゴ・）ノゲイラとかね。

――やっぱり極め系ははずせない、と。

相原　それからミルコ（・クロコップ）もイイですね。某格闘技雑誌で『ミルコからの手紙』というのがときどき載ってるんですけど、あれは最高です！「世界中の猛者たちが弱肉強食のリングを目指して血の汗を流してるあいだ、俺はいったい何をしていた？　映画に出ていただろう、バカやろう！　いまの俺に必要なのは遮眼帯だ！　脇目もふらず走る競走馬みたいに。待ってろヒョードル、ノゲイラ！」みたいな（笑）。

ミルコは星飛雄馬みたい。〝リアル梶原一騎〟な世界だよね（笑）

――まさにリアル梶原一騎キャラクターというか。

相原　ほとんど星飛雄馬ですよ。一生懸命みんなが野球の練習やってるのに、一人だけクリスマスパーティやろうとして、誰もこなかった。いったい俺は何をやってるんだ、バカやろう！　みたいな（笑）。そういうマンガみたいな世界を地で行く姿勢が素晴らしいです。

――現在、人類最強と言われているエメリヤーエンコ・ヒョードル選手についてはどう思いますか？

相原　最初に彼を観たときは、そのパウンドに衝撃を受けたんですが。最近はあの戦法が総合格闘技のスタンダードになってきつつあるのは、個人的にはあまりおもしろくない。ヒョードルvsノゲイラ戦ではヒョードルが寝技に付き合わずに判定勝ちというのは少しがっかりしましたね。競技的なクレバーな勝ち方というか……。

――やっぱりレベルが上がりすぎたことによる弊害なんでしょうか。

相原　どうでしょうね。あとはグレイシー系が勝てなくなっているのは寂しいですね。より進化した技術は出てきているけど……ジャンルのパイオニアをないがしろにするな！　と言いたいよね。

――あ〜、そこはマンガとも共通しそうですね。

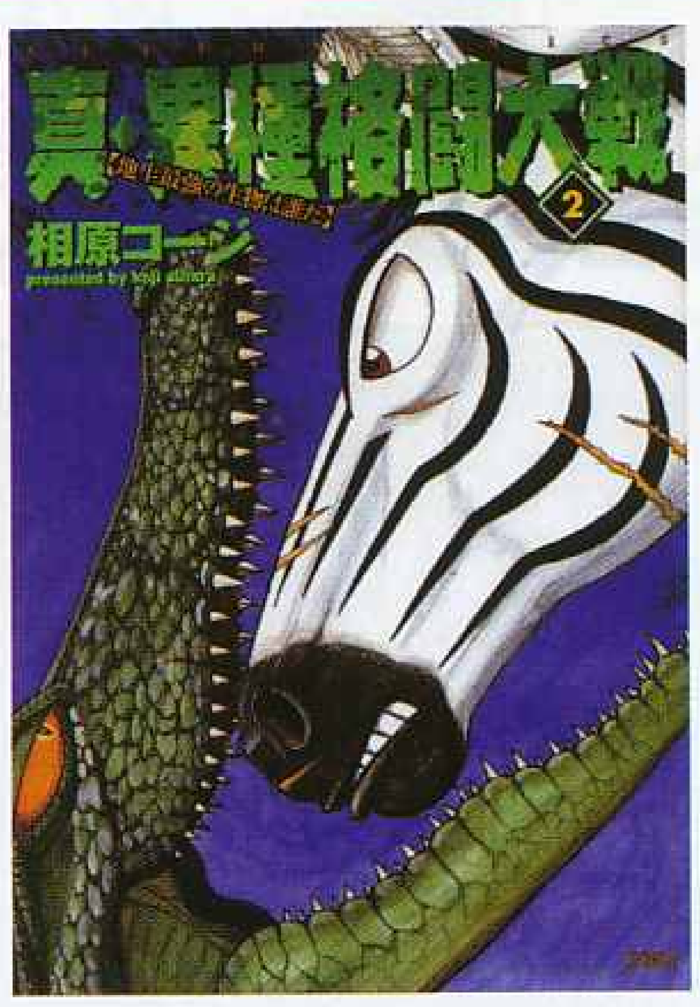
相原　うん。僕もギャグマンガで、いろいろ新しいことをやってきた自負はあるので、グレイシーが「もう終わってる」みたいな言われ方すると、ちょっと自分に重ねたりして悔しい気持ちになったりね。

――相原さんの活動は完全にパイオニアだと思いますよ。

相原　いやいや僕はパイオニアって言えるほどたいした人間ではないですけど（笑）。

――『真・異種格闘技大戦』でさらに新しい地平を切り開くことを期待してます。今日はどうもありがとうございました。

【06年3月1日／相原コージ先生の仕事場にて収録】



『真・異種格闘大戦』相原コージ
（アクション・コミックス）
地球上の動物から厳選された16種の最強生物が真の地上最強をめぐってトーナメントを展開！　相原コージが新境地に挑んだ"動物総合格"闘巨編。現在2巻まで絶賛発売中！



あいはら・こーじ■1963年、北海道登別市出身。日本デザイナー学院まんが専攻科卒業。1983年「漫画アクション」に掲載された「八月の濡れたパンツ」でプロデビューを果たす。代表作に『コージ苑』、『かってにシロクマ』、『サルでも描けるマンガ教室』（竹熊健太郎と共著）、『ムジナ』など。従来のギャグマンガからハミ出すような先鋭的なギャグマンガを数多く執筆。

PRIDEまんが道

マンガ的ハッタリとリアリズム

夏目房之介（マンガ評論家）

格闘技を観る面白さに目覚めたのは、40歳で健康のため太極拳を習い始めてからだ。相撲を観てたら技がわかり、小兵が大男に勝つ理由がわかってハマった。しばらくしてK―1、『PRIDE』が盛り上がり始め、今ではテレビで熱心に観る。最近、馬貴派八卦掌（中国武術）を習い始めたが、僕自身は実戦などしたことがない。だから口と目だけの生兵法である。

僕より少し下の年代にはマンガと映画で興味をもち中国武術を始めた人が多い。映画はおおむねブルース・リー、マンガでは『拳児』（松田隆智原作、藤原芳秀画）（注1）だろう。70年代『空手バカ一代』（梶原一騎原作、つのだじろう～影丸譲也画）で空手人口がふえたが、主人公が太極拳に負ける話と『男組』（雁屋哲原作、池上遼一画）（注2）に登場する、円を描く不思議な拳法（太極拳）のことも、ある年代の中国武術好きはよく話題にする。プロレス、空手、中国武術など、梶原マンガが格闘技マンガを確立したといっていいだろう。

最近では『ホーリーランド』（森恒二）（注3）というストリートファイト物が面白い。じっさいにキックをやってる作者の「実践的」な注釈は説得力がある。ルールなしの街のケンカでは、下がアスファルトか草かで全然違うとか、その時の心理的状態がどう影響するかとか、僕はケンカなんかしたことないけど面白い。柔道、空手、剣道、キック、ボクシング、レスリングなど異種格闘技的要素も織り込んである。異種格闘技をストリートで展開するマンガといってもいい。

「柔道対空手」に鎖鎌など古武道が参加する伝統的パターンは昔からあったが、異



“関節技的な作家”谷口ジローが描いた『餓狼伝』（原作／夢枕獏）のリアリズムとは？

種格闘技マンガは、あきらかに梶原マンガ以降大きな流れになった。彼の演出で試合が組まれ、マンガから現実の舞台が作られ、やがてエンターテインメントとして洗練された格闘技イベントにつながる。一体どの流派が、どんな技が、誰が一番強いのか、という素朴な「リアル・ファイト」への興味が人気の根底にある。格闘技の歴史は、どこかでマンガと想像力をわかちあってきたんじゃなかろうか。

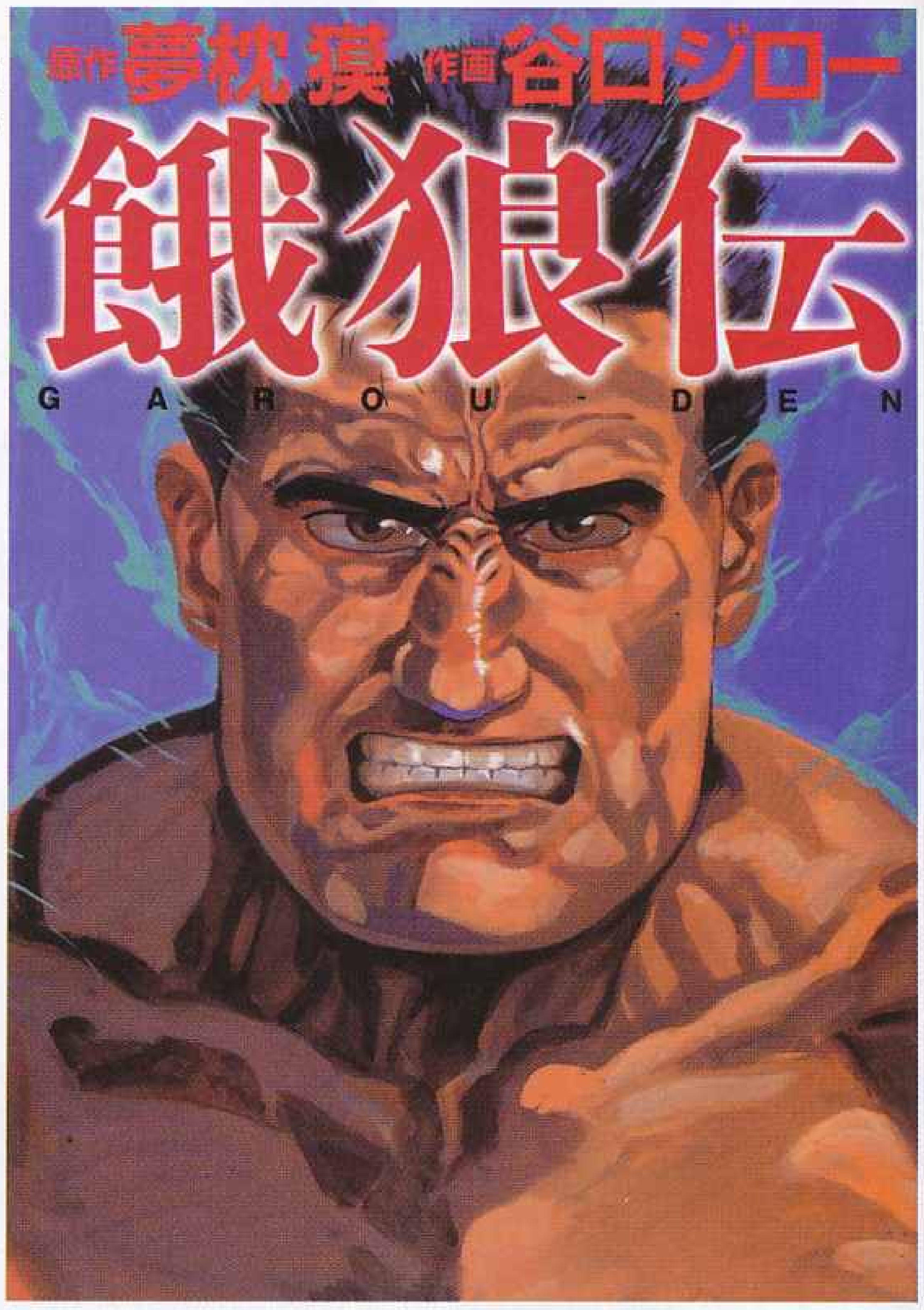
技への想像力も時代を下ると精緻になる。とくに『PRIDE』など総合系は、寝技、関節技の知識が多少あるとものすごく面白いが、興味のない人にはむちゃくちゃ退屈らしい。僕はホンのさわりだけ、ボクササイズやキックをスポーツクラブの教室でマネし、ついでに一瞬だけ総合系の練習をしてみたことがある。総合のグラウンド練習はべらぼーに地味で、爽快感がなく、しかもキツイので、すぐやめた。関節技なんて素人がそう簡単にできるものじゃないし、第一非常に危ない。でも、おかげで観る楽しみはさらに増した。

ところで夢枕獏『餓狼伝』のマンガ化には**『グラップラー刃牙』**（注4）の板垣恵介版と谷口ジロー版がある。板垣は、それこそもし大山増達と猪木がやったら、みたいな素朴な期待に応えるところがあって、マンガ的な誇張表現でありえない展開を楽しむ面白さに満ちている。が、谷口はまるで逆だ。**『青の戦士』（狩撫麻礼原作）**（注5）でボクサーの狂気とともに筋肉と汗のリアルな描写をし、**『坊ちゃんの時代』（関川夏央共作）**（注6）で明治の手触りを精緻に復元した作家だけに、異様なほどきっちりと技や筋肉や動き、とくに関節系の技を描いている。ライバル同士が最後に展開する闘いは、まるで技の練習用連続写真みたいだ。

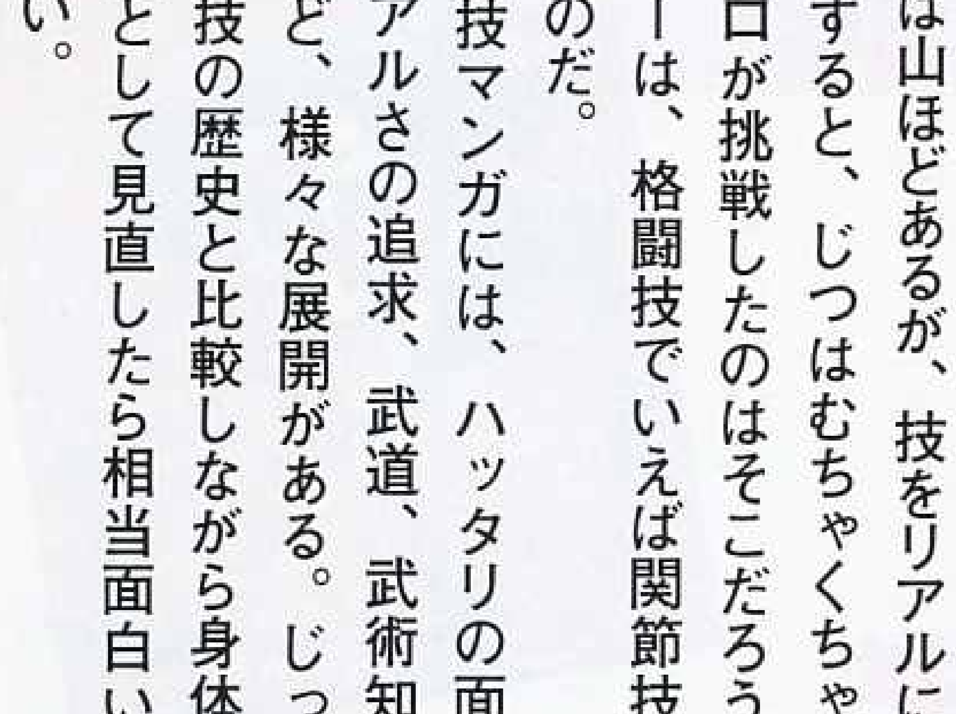
主人公がかつて締め落とされたのと似た技でライバルの頭を決めようとする場面がある（右頁図版）。敵は締めた手を必死で抜け、そのまま相手を逆手に決めようとする。技をかける、抜ける、そのまま次の技へという動きを、何でわざわざここまでと思うほどカットを使って続け、開始から決着まで、図版と同様の格闘場面だけでじつに30ページ以上あるのだ。

プライドの技の応酬を楽しむ人なら面白いだろうが、バトル・マンガとしてはハッタリの効いた見せ場がない。そのかわり肉体と運動のぎりぎりとした熱量が伝わり、こっちまで力が入る。格闘技を描くマンガは山ほどあるが、技をリアルに見せようとすると、じつはむちゃくちゃ難しい。谷口が挑戦したのはそこだろう。谷口ジローは、格闘技でいえば関節技的な作家なのだ。

格闘技マンガには、ハッタリの面白さからリアルさの追求、武道、武術知識の渉猟など、様々な展開がある。じっさいの格闘技の歴史と比較しながら身体観の変遷史として見直したら相当面白いかもしれない。



『餓狼伝』原作：夢枕獏、作画：谷口ジロー（メディアファクトリー）流浪の格闘家、丹羽文七はプロレス道場の道場破りに失敗。復讐を誓うも、やがて格闘界の渦に巻き込まれる。格闘群像劇を夢枕獏が描いた格闘小説を谷口ジローが原作に忠実に完全マンガ化。



なつめ・ふさのすけ■1950年8月18日、東京生まれ。マンガコラムニスト、マンガ評論家。祖父は夏目漱石。青山学院大学文学部史学科卒業。『手塚治虫はどこにいる』よりマンガ評論評論家としての活動。海外での講演でも活躍。1999年朝日新聞社手塚治虫文化賞マンガ特別賞受賞。NHK「BSマンガ夜話」レギュラーコメンテーター。主な著作に『マンガはなぜ面白いのか?』『漱石の孫』など。

注1★拳児
原作：松田隆智、作画：藤原芳秀（小学館）
中国拳法「八極拳」を学ぶ少年、拳児が幾多の困難にぶつかりながら、中国に師匠でもある祖父を探しに行くという目標に突き進む。少年～青年時代の成長劇。後のアクション漫画や格闘ゲームに多大な影響を与えた

注2★男組
原作：雁屋哲、作画：池上遼一（小学館）
劇画の巨匠こと池上遼一の代表作。原作は『美味しんぼ』の雁屋哲。悪の一派に牛耳られてしまった私立の名門「星雲学園」。ここに父親殺しの罪状を持つ転校生、流全次郎が登場し、校内粛清に乗り出す。

注3★ホーリーランド
森恒二（白泉社）
「ヤングアニマル」で連載中の格闘漫画。いじめ・引きこもり・自殺未遂という過去を背負った高校生、神代ユウがボクシングの素振りを覚え、ある相手を殴ったことをきっかけに街の喧嘩にのめりこむ。05年にテレビ東京系でドラマ化。

注4★グラップラー刃牙
板垣恵介（秋田書店）
『週刊少年チャンピオン』連載中。近年の格闘マンガの代名詞的存在。「強くなること」にこだわり続ける少年、範馬刃牙の成長を描く。地上最強の生物である父でもある範馬勇次郎を打ち倒すために様々な敵と戦う。連載中、タイトルが2回変更されている。

注5★青の戦士
原作：狩撫麻礼、作画：谷口ジロー（双葉社）
最初期の『ビックコミック・スピリッツ』で連載された谷口ジローのボクシングマンガの傑作。主人公は口数の少なく、自分の生を憎む孤高のボクサー、礼桂（レゲ）。ボクシング王者ゲランとの闘いに挑み、壮絶な結末を迎える。

注6★坊ちゃんの時代
原作：関川夏央、作画：谷口ジロー（双葉社）
夏目漱石の『坊っちゃん』を文明開化という時代についていけなかった者の悲劇としてとらえた原作者、関川夏央の視点から、当時の夏目漱石を中心に明治の文学者や世相を丁寧に描いた作品。手塚治虫文化賞受賞。

注／編集部



増刊"BJ魂"で連載されていた『THE MOMOTAROH-PART2-』では主人公のモモタロウとミルコならぬミルモ・シロコップが壮絶バトルを繰り広げている。ミルモ必殺の左ハイキックを食らったモモタロウの運命は!? 気になる人は『ヤングジャンプ・コミック』バックナンバーを探そう。 ©集英社／にわのまこと

リアル&ギャグの"ハイブリッド"格闘マンガ

『THE MOMOTAROH』作者

にわのまこと

PRIDEまんが道

20代後半から30代の『PRIDE』、そして『kamipro』ファンなら、記憶に残っているであろうプロレス&格闘技マンガ『ザ・モモタロウ』。ほかにも『陣内柔術流武闘伝 真島クンすっとばす!!』など、いくつかのプロレス&格闘系マンガを手掛け、学生時代には学プロも経験していたという、にわのまこと先生にインタビューを敢行!!

聞き手／篠本634 撮影／松澤チョロ

恥ずかしながら『薩摩はやと』って名前で学プロをやってました

――「ニッポンいちのぉ～・モモタロ～～!!」ということで、プロレス・格闘技マンガ家といえば、やっぱり『THE MOMOTAROH』であり、『陣内流柔術武闘伝 真島クンすっとばす!!』の、にわのまこと先生です。というわけで、本日やってまいりました。

にわの いや～、全然そんなことないです。自分なんか、ねぇ。

――何を言ってるんですか！ いまの20代後半から30代半ばくらいまでのジャンプっ子たちからしたら、『モモタロウ』はバイブルですよ。ギャグ満載かと思えば、リアルで熱い闘いもする。良質の学生プロレスでも観ているかのよう……と思ってたんですが、噂によると先生は学プロ出身だったと？

にわの はいはい（笑）。ボクの場合は専門学校生だったんですけどね。『九州デザイナー学院』のグラフィックデザイン科だったんですけど、福岡のタウン情報誌で『学生プロレスメンバー募集』っていうのが書いてあったんですよ。高校は柔道部だったんですけどプロレスも大好きで。それを見て、「部外者ですけど入れてもらえませんか？」みたいな感じで入ったんですよね。

――凄い積極的ですね。

にわの ＫＷＦ（九州レスリングフェデレーション）っていう団体で。いまは九産大の後輩の方が中心に運営してるみたいですけど。日本で唯一の部なんですよ、同好会や研究会じゃなくて。常設のリングとかもあって練習し放題でしたね。後輩には、藤崎君（現・富豪2夢路）やタレントの松村邦洋君とかいましたね。

――松村さんも！ それは意外ですね！

にわの 彼の場合は、リングアナだったらしいですよ。ボクもビデオでしか観たことないんですけども、本当に古舘氏の実況まんまでしたね。自分らの次の代だと、ＳＷＡっていう熊本商科大学（現・熊本学園大学）の研究会があって、そこにおじゃましてやったこともあるんですけど、そのときはハヤブサ選手とかもやってたんじゃないですかね？

――ＳＷＡといえば、ミスター雁之助さんもそうですよね。ちなみに、にわの先生はどんなファイトスタイルだったんですか？

にわの いやいや。もう本当に恥ずかしいんですけど、『薩摩はやと』っていうリングネームで『薩摩スープレックス』っていうベタな名前の技が必殺技なレスラーでした。最初はお笑いやってたんですけれども、一年二年過ぎるうちに「このまま消えていくのもちょっとなぁ……」って思って、引退の半年ぐらい前からちゃんと試合してましたね。当時シューティングが出始めで、同じＫＷＦの中でも流れがあってですね。〃格闘技志向〃と〃プロレス志向〃と〃お笑い志向〃なんていうのがありましたね。「笑いをしっかり取って、かつ格闘技も極めよう」なんてワケのわからないことを言ってました（笑）。プロの方が聞いてたら怒られそうなんですけどね。当時、お笑い志向は〃笑ティング〃って言ってましたから。

――でも〃笑いをしっかり取って、かつ格闘技志向〃って、まさにモモタロウですよね。ルーツですね。

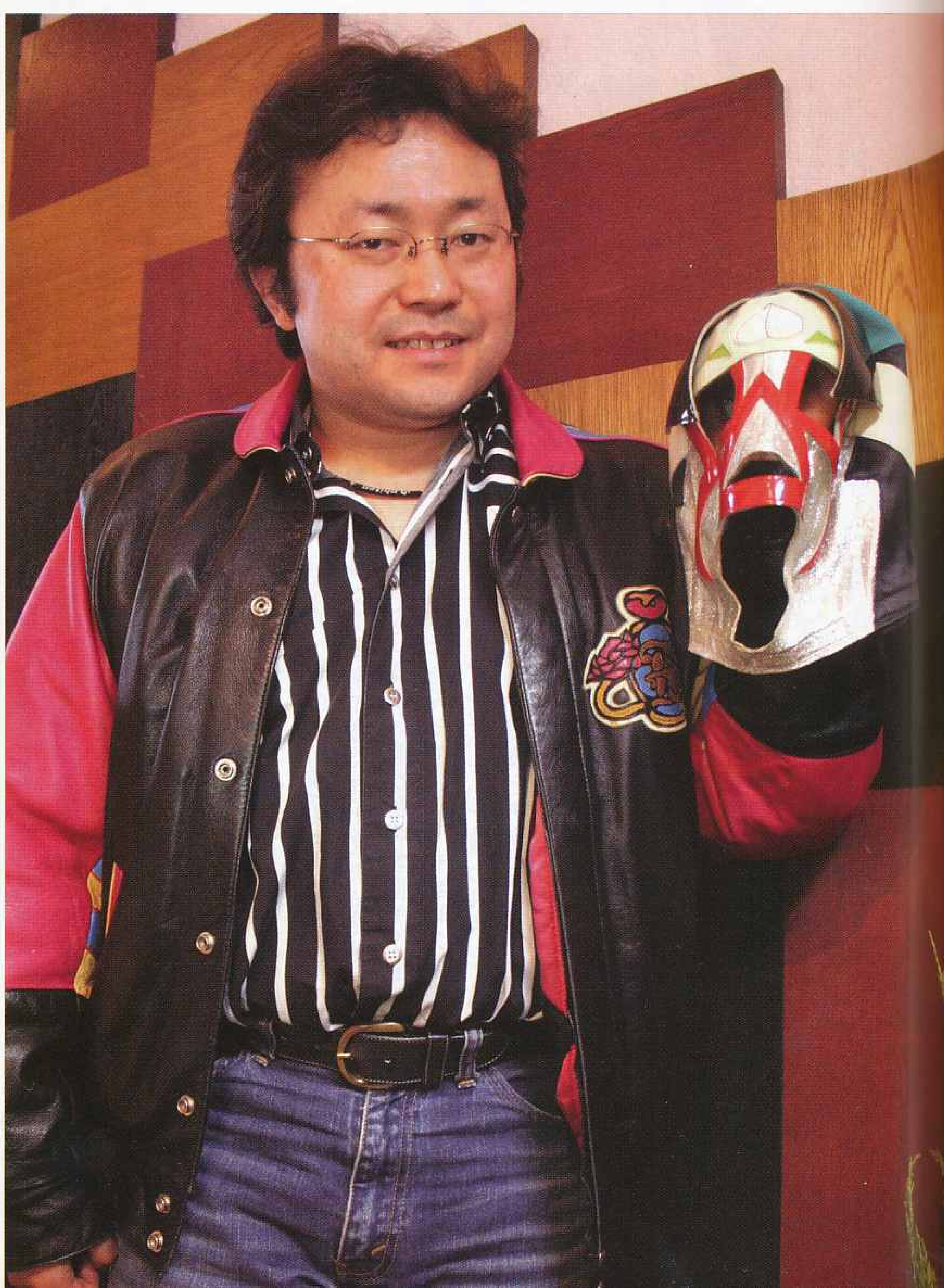
にわの そうですね。その匂いはプンプンしてるかもしれないです（笑）。

――じゃあモモタロウって、学プロ時代に考えついたんですか？

にわの いや、高校時代からすでにモモタロウっていうキャラはできあがってましたね。そもそも一番最初にマンガを描き始めたのは高校1年のときで。マスカラスとカネックが出てくるプロレスギャグの短編を描いたんですけど、ためしに送ったら赤塚賞の佳作に引っかかって。

――す、凄いですね！

にわの そう、その当時は「オレって凄い！」って思ったんです（笑）。で、その後、モモタロウのキャラも生まれて、当



ファン作製のモモタロウやターキーのマスクを持参してくれた、にわの先生。ちなみに某柔術家がターキーマスクで、あるインディー団体のリングに登場していたことはあまり知られていない。

時の担当に見せて「これいいね」とまで言われたんですけど……専門学校に入ったら『学プロメンバー募集』の文字に惹かれて……「いまはこれをやらねば！　マンガは二の次だ！」って（笑）。

——じゃあ、本格的な活動は、専門学校を卒業してから、と。

にわの　その後、モモタロウの読み切りでデビューですね。23歳のときだったんですけど。でも『ジャンプ』って、ゆでたまご先生の『キン肉マン』があるわけじゃないですか？「二番煎じ」って見られるのが不安でしたけどね。

——いや〜、でも少年時代を思い出すと、キン肉マンとモモタロウは全然別でしたけどね。ボクは個人的に『もんがー』と『牛馬鹿丸』が大好きだったんですけども。

にわの　あぁー（笑）その二人というか二キャラには助けられましたよ。もんがーは、一話目の原稿描いて、最初ネームとか下書きの段階では出てきてないんですよ。で、ペン入れの直前に「なんかここらでギャグが一発ほしいなー」って思って生まれたのが、もんがーなんです。まったく意味ないですね、アレ（笑）。

——そ、そうなんですか!?　子ども心に「意味ねぇ〜」って思ってましたけど。

にわの　急場しのぎのギャグです。だから、もんがーは一話以降あんまり出てこないんですよ。でも当時の担当の茨木さん（現在の『ジャンプ』編集長・茨木政彦氏。マッチ茨木の愛称で様々なマンガに登場）も喜んでくださって「ちょっとこのキャラいいんじゃない？」って言ってくれて。「じゃあしつこく出しましょうか」って（笑）。それと牛バカも四話か五話目で登場するんですけど、『ジャンプ』の場合、新連載は四話ぐらいで計りにかけられるんですよ。人気がなかったらスパーンって切られる。でも、そのころのモモタロウって人気が微妙で（笑）。そこで牛バカをポンって出したら読者が食い付いてきて。それからやっと良い感じで回っていきましたね。だから牛バカには凄い感謝してるんですよ、自分のキャラとはいえ（笑）。



2002年にSHUEISHA JUMP REMIXから発売された『ザ・モモタロウ』の単行本には01年12月に後楽園で開催された大阪プロレスの大会に登場したザ・モモタロウの独占インタビューが掲載されている。その正体は、なんと村浜武洋!　©集英社／にわのまこと

——魅力的なキャラが多かったですよね。でも最初は『ダイビング・ピーチ・ボンバー』（※トップロープから回転しながらのヒップアタック）みたいな、実現不可能なプロレス技が多かったのに対して、後期は、『ストライク・スリー』（※相手の腕をヒジで交差させて、ヒザで蹴り上げて後方に投げ飛ばす大技）みたいな危険かつ、実現不可能な技が増えていきますよね。

にわの　そうですね。やっぱり技の説得力っていう意味で、普通のプロレスの技だと読者は納得してくれない気がして。どんどん本気で痛い方向に行ってますね。あと、あんまり子どもたちがマネしやすい技を描いちゃうと、困るなっていうのもありましたね。

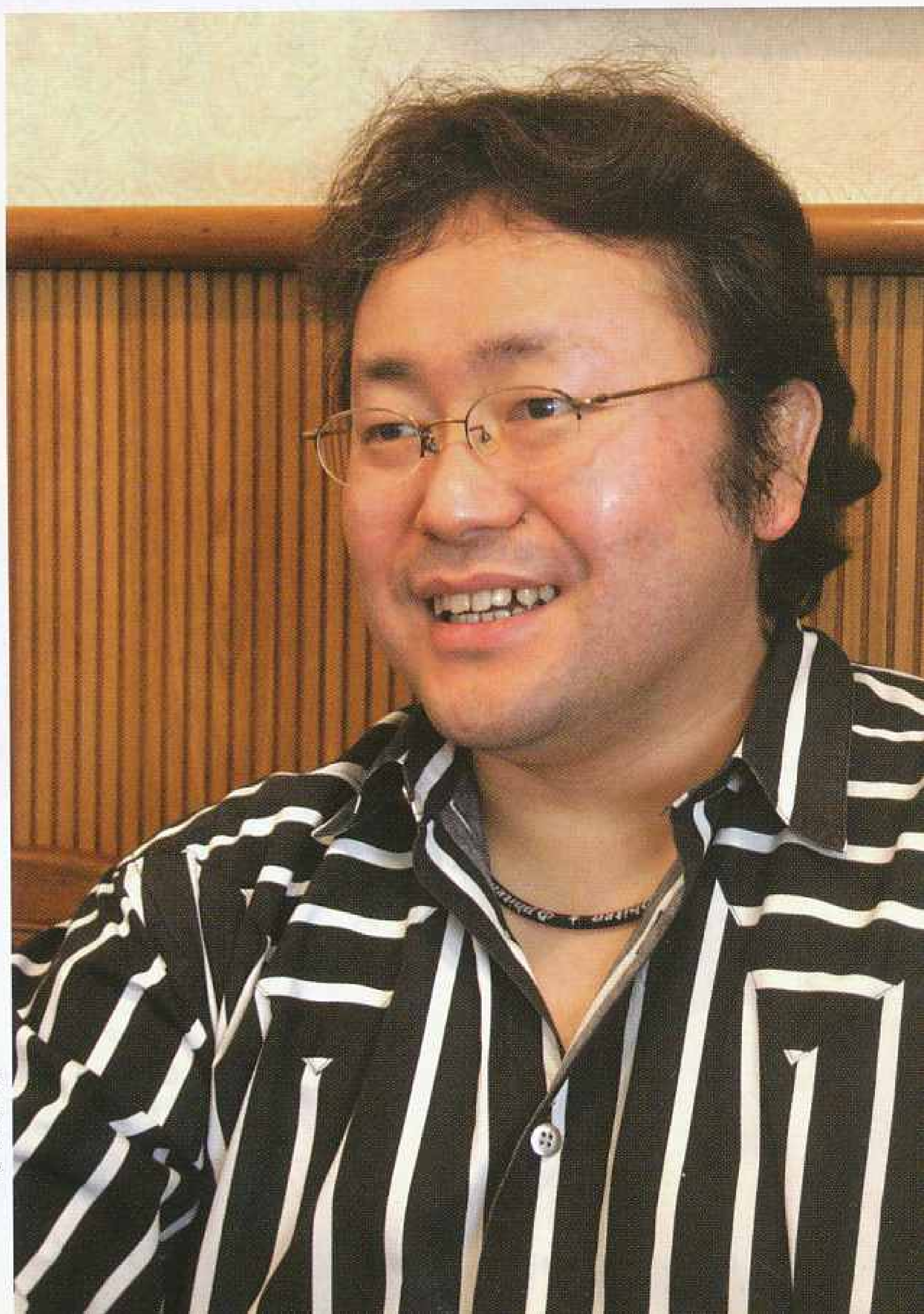
——あぁ〜、ナイーブな問題ですよね。ボクも小学校時代、よく友だちにウォーズマンのパロスペシャルをかけられましたよ。

にわの　そうそう。だから、簡単にマネできるのは、『ファイナルエルボー』くらい（笑）。あ、でも、『アグラツイスト』（※インディアンデスロックのまま後ろから巻き付いてコブラツイストに入る。かかった相手がアグラをかいているように見えることから）もできるんですよ。っていうか、学プロ時代のボクのオリジナルホールドだったんですよ！　でも、某プロレス専門誌の特集でアグラツイストが出てて、「この技はマンガでも似たようなモノがあるがこれは元々メキシコにある技だ」って書かれていて。相当ヘコみましたね……。

——そんなプロレスマンガを経て、バリバリのガチマンガ『真島クンすっとばす!!』へと流れていくわけですけども、やっぱり心境の変化があったんですか？

にわの　やっぱりあの当時、佐山さんのシューティングに憧れてたんですよね。で、シューティング部の学園モノを描こうと思ったんですよ。でも当時の編集部では「わかんない」って言われまして。でも高校生が格闘技をやるっていう設定だけは残って、当時台頭してきてたグレイシー柔術に影響を受けて始まったんです。真島の陣内流柔術は、いま盛んな柔術とはちょっと違いますけどね。それに自分自身が格闘技マンガをどうしても描きたかったっていうのはあります。

——いや、でもかなりリアルな格闘技マンガでしたよ。柔術が空手、柔道、相撲か



ちなみに本文中に出てくる高校1年のときに赤塚賞の佳作を受賞したマスカラスとカネックが登場するマンガのタイトルは『迷勝負』。受賞パーティーでは梶原一騎を見かけ感動したという。



らテコンドーと、まさに異種格闘技戦でしたもんねぇ。

にわの　やっぱり猪木イズムですから（笑）。でも、当時はいまの『PRIDE』みたいな闘い方は想像できませんでしたよね。やっぱり寝てる相手を上から殴るのっていうのは非常に危ないと。マンガに描いたら凄く悲惨な絵になるなって。それこそ子どもたちがマネしちゃうでしょ。いまは『ガードポジション』とか『サイドポジション』って名称が付いて一般化してますけど。

――たしかに。ボクらの子ども時代のプロレスごっこには、まったくない発想ですからね。で、ご自身でも取材と称して実際に格闘技を習いに行ったりしたんですか？

モモタロウはキン肉マンの二番煎じって見られるのが不安でしたね

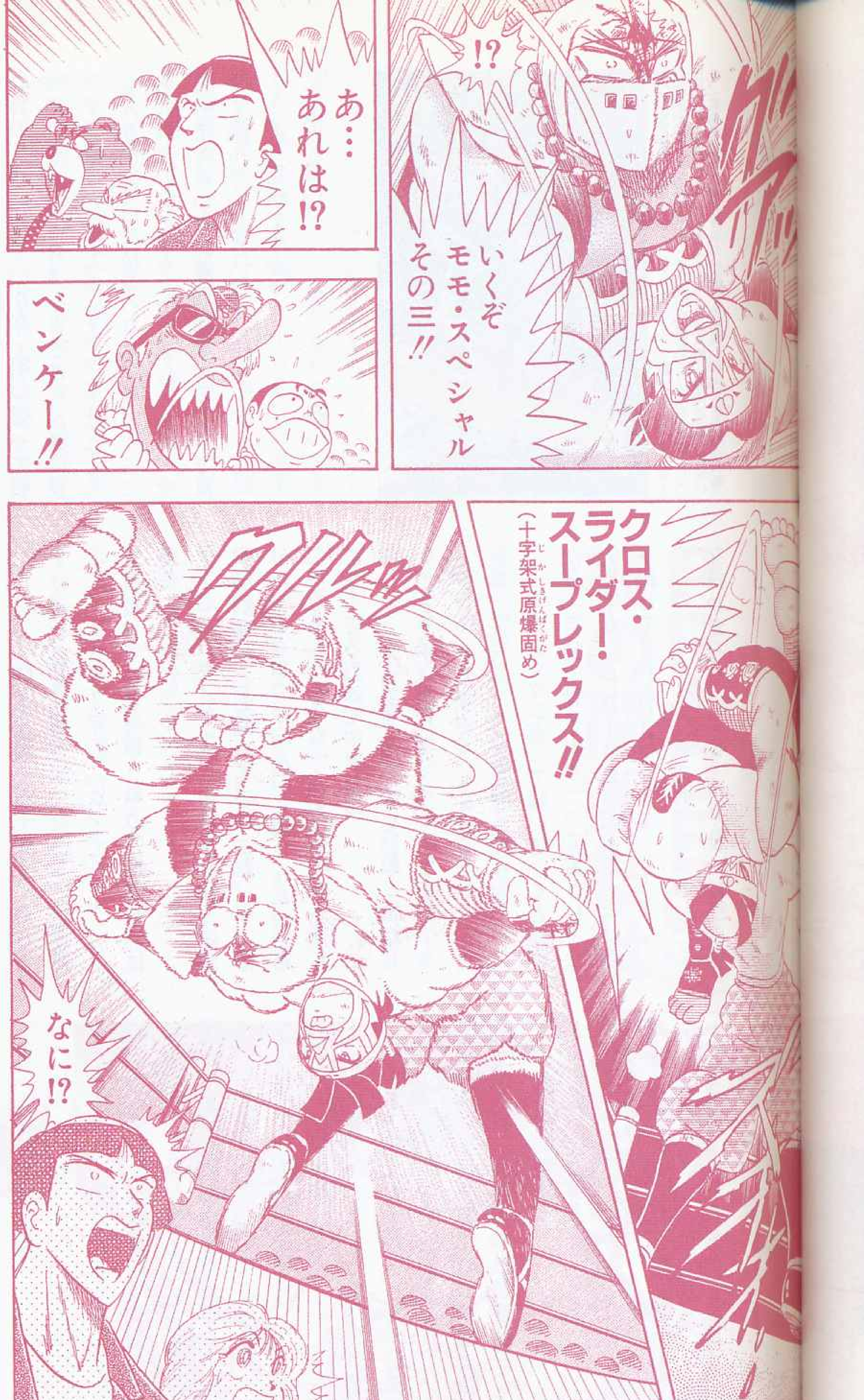
内容も相当リアルでしたけど。

にわの　いろいろ行きましたね。陣内流のベースになった柳生心眼流とか。島津先生に実際に技もかけていただいて。柔術以外にも、コンバットレスリングやテコンドー、正道会館にも行きました。練習にも参加するんですけど、厳しいところは「右腕折られるか？」と思うほどやられたところもありましたね。

――「漫画家が来るらしいから右腕狙おうぜ」って言ってたんですかね（笑）。ところで陣内流の技の名前はみんな実際にある名前なんですか？

にわの　ボクの創作もありますね。技の名前は甲冑の部品から付けてるのが多いんです。例えばなんだろう、う～ん……（しばし考えて）マンガ読まなきゃ自分でもわかんないや（笑）。忘れました。

――鉄菱（親指を握りこんで、中指だけ立てる拳の握り方）はどうですか？



こちらがモモタロウの得意技の一つ、クロス・ライダー・スープレックスだ。ほかにもファイナル・エルボーやダイビング・ピーチ・ボンバー、ストライク・スリーなど数多くのオリジナルホールドがある。©集英社／にわのまこと

にわの　鉄菱は創作ですね。ただ近い握りは古武術であるんですよ。石臼っていう名前で他の流派が使ってます。そういえば、恐れていたことがあったんですよ。

――恐れていたこと！

にわの　ファンレターの中で重いのが一通ありまして、読者の親御さんから「あなたの書いた鉄菱で私が息子から暴力受けて困ってます。なんとかしてください！」って。「アチャー！」って思いましたね（苦笑）。

――わぁ！　チビッ子がとうとうマネを！……でも、家庭内暴力ってことは、中学生とかでしょう？　チビッ子じゃないからセーフですよ（笑）。それにしても母親を鉄菱で打つ息子ってイヤですねぇ……。

にわの　ねぇ。「アタタタタ」ってきましたよ（苦笑）。

――でも、そんな『真島クン』も、あまりにリアルな展開になっていって、『ジャン



モモタロウの得意技の一つ「アグラ・ツイスト」。インディアン・デスロックとコブラツイストが合体した全身を極める複合技。にわの先生は学プロ時代、実際にこの技を使っていたという。 ©集英社／にわのまこと

プ』に合わなくなって終わったって、もっぱらの噂でしたね。

にわの　もう最後は、『ジャンプ』打ち切りのお約束、「さぁ、行くぜ!」で終わりましたね（笑）。その後は、同人誌で『モモタロウvs真島クン』っていうのを描いてました。

——ど、同人誌で!

にわの　じつは、『モモタロウvs真島クン』は、いまでも描いてるんですよ。さすがに同人誌じゃなくて、コンビニの廉価版で真島やモモタロウが出てるんで、そこに一話ずつ収録してます。もうかなり描いてるんですけど、まだ試合してないですけどね。

——あ、まだなんですか? いまの時点で何話くらい描いてるんですか?

にわの　八話くらいかな…引っ張って引っ張って……自分でもまさかこんなにダラダラ続くとは思ってなかったんですよ。なんか展開上これも入れたいなとかここも入れたいなとかあってですね。まぁ、今月もモモタロウの廉価版が出てるんで買って読んでください。

——あ、宣伝ですか?

にわの　はい。



『陣内流柔術武闘伝　真島クンすっとばす!!』■1995年11号より98年8号まで『週刊少年ジャンプ』で連載されていた当時としては珍しい格闘マンガ。元ヤンキーで古流武術・陣内流柔術の使い手、真島零16歳が世界最強の格闘家を目指し様々な敵と闘う物語。

増刊〝BJ魂〟で連載されていた『THE MOMOTAROH－PART2－』ではノゲイラ似の〝アントニコ・ノドリオ・ホゲイラ〟やヒョードル似の〝エンタツーアチャコ・ピョードル〟らが登場し、モモタロウと激戦を繰り広げている。パート2のモモタロウは「万人を楽しませつつ、勝負にこだわる闘い方をするボクの中の理想のプロレスラー像」として、桜庭和志を意識して描いたという。



——で、じつはモモタロウって、『PRIDE』の選手たちと闘ってるんですよね?『THE MOMOTAROH PART.2』というマンガで。

にわの　一応、名前も若干変えてありますけど。あと、顔も似てないんですけど（笑）。2003年の『ビジネスジャンプ』で連載してましたね。最近の格闘技熱に便乗しようかって。

——ミルコやノゲイラ、ヒョードル（本編中は別称）とも闘ってますよね。やっぱり「モモタロウがミルコと闘うんだったらこうなるんだろうな」っていうのを予測してやってるわけですよね。

にわの　そうですね。ページ数と相談しながらですけど（笑）。「ここらでちょっとダメージを増さないといけないな」とかね（笑）。ページ数を睨みながら。

——でもよくマンガって描いていくと途中から「自分で動き出す」って言うじゃないですか。『PRIDE』の選手たちは動き出してくれました?

にわの　う〜〜ん、「でも、ホントはこんな技かからないよな」って思いながら描



©集英社／にわのまこと



©集英社／にわのまこと

いてましたね。なんか本人に申し訳ないなと思って（笑）。実在の人物だとファンもいますから難しいですよ。

—それこそ、モモタロウがミルコに左ハイキックでブッ倒されたり、『ダイビング・ピーチ・ボンバー』にカウンターを合わせられたりしてますもんね。ノゲイラからSTFの進化系STC（STFの形のままのチョークスリーパー）でタップも奪ってましたし。

にわの　ノゲイラにもノゲイラファンにも「ごめんなさい」って謝りながら描いてました（笑）。でも、『PRIDE』の選手の中ではノゲイラはかなり好きですよ。彼の関節技は、ある種の芸術を感じますね。女性的っていうか、美しいですよね。

—ノゲイラは女性的。

にわの　なんかそんな趣があるんですよ。直線で曲線で技に入っていくみたいな。「ガッ！」っていくんじゃなくて、「シュルル～」って、入ったらもう技が極まってるみたいな。スピニングチョークなんて芸術ですよ。なんかね、相手に少しだけ猶予を与えてあげてるような気がするんですよね。もちろんそんなことはないでしょうけど。そう思わせてしまうモノがノゲイラにはありますよね。

—じゃあファイトスタイルとしてはパウンド系やストライカーよりも関節系が好きなんですか？

にわの　個人的にはそうですね。う～ん、ヒョードルの無表情なパウンドもカッコいいけど……怖いですね（笑）。ただマンガとして描く場合、組み技だとデッサン取るのが大変なんですよ。殴るときって多少相手の顔も変形したり、青タンになれば、読者に〝痛み〟が伝わるじゃないですか。関節技はなかなか読者にリアルな痛みが伝わりにくいんですよね。

PRIDEの選手ではノゲイラが好きですね。彼の関節技は女性的で美しい

—ですね。地味ですもんね。そういえば、リアルの世界でもモモタロウっていましたよね。大阪プロレスに。

にわの　はいはい。でも脇田さん（スペル・デルフィン）がやってることは最初全然知らなくて。たまたま『週プロ』を見てたら「あれっ？　モモタロウが出てる」って思って。メキシコマットでモモタロウになった脇田さんとサスケさんが二人でタッグでやってて。

—あ、じゃあデルフィンさんは、勝手にやられたわけですか？

にわの　一応、大阪プロレスの会場で売店に脇田さんがいたんで、「にわのです」って話かけたくらいなんですよ。そしたら脇田さんが「あ、どうもどうも！　モモタロウ好きなんでどっかで使ってもいいですか？」っておっしゃられて。「ああ、いいっすよ～」みたいな感じの話は、あとからしましたけどね（笑）。で、その後、後楽園で大阪プロレスがやったときに、村浜さんがモモタロウのマスクをかぶって出てくれてましたね。

—アレは一回きりですね。村浜さんがモモタロウのマスクをかぶって『PRIDE』に参戦してくれたら、まさにリアル『THE MOMOTAROH PART.2』になるのに。

にわの　ですねぇ（笑）。

—じゃあ、にわの先生自身がモモマスクをかぶって『PRIDE』に上がるとしたら、誰と闘いたいですか？

にわの　え、上がるの？　ボク自身が？……そうですねぇ……シウバの打撃を受けてみたいけどね（笑）。

—わ～、無茶ですね～。

にわの　「ボゴッ！」ってこう、首が吹っ飛ぶぐらい強烈なのを受けてみたいですね（笑）。もちろん一発で昇天ですよね。逆にミシミシやられるほうが怖いでしょう？　同じブッ倒されるぐらいならもうシウバのヒザか、ヒョードルのパウンドで果てたいですね（笑）。

—じゃあ、たとえばシウバとならどう闘います？　一応勝とうと思った上で参戦するという設定で。

にわの　え、そうなの？　どうしましょうね……。タックル行っても踏んで蹴られそうだし。踏んづけられるのって怖そうだな～。あれ痛そうですねぇ。勝てる見込みなさそう。

—オリジナルの〝薩摩スープレックス〟ならいけそうですか？（笑）

にわの　えぇぇーー!?　どうだろうなぁ。その場合、技かけるまで待ってくれるんですよね？（笑）。

—シウバにプロレス心があるかどうかでしょうね（笑）。

【06年3月7日／都内某所にて収録】



『デルトラ・クエスト』■翻訳物児童文学ではトップクラスの人気を誇る作品をにわの先生が漫画化。剣や魔法、そして不思議な宝石をはめこまれたベルトを巡る物語。にわの先生の壮大なファンタジーストーリー『デルトラ・クエスト』（原作／エミリー・ロッダ）が読める『コミックボンボン』は講談社から定価480円で毎月15日発売！



にわの・まこと■1964年5月1日、鹿児島県出身。専門学生時代に『薩摩はやと』のリングネームで学プロで活躍したのち、87年に週刊少年ジャンプで連載デビュー。代表作には『THE MOMOTAROH』『陣内流柔術武闘伝 真島クンすっとばす!!』などがある。作品中には独自に創作した技が多数登場し、かなりのプロレス・格闘技通であることがわかる。モモタロウの廉価版が3月下旬に宙出版から発売されるので要チェック！



長南選手が大好きだという『ナニワトモアレ』の登場人物"ゼンちゃん"。長南選手は原作者・南勝久先生から"ゼンちゃん"のイラスト入りサインをもらったことがある。©南勝久／講談社

PRIDEまんが道

ピラニア格闘家が語る
ヤンキーマンガ論

長南 亮

聞き手／ジャン斉藤

――今日は、格闘家のなかでもヤンキーにうるさいという長南さんに"ヤンキーマンガ論"をうかがいにきました！

長南　……いやあ、マンガはヤンキーモノ以外も大好きだし、しゃべりたいことはたくさんあるんですけど、どこで誰が読んでるかわからないじゃないですか？　迂闊なことは言えないですよねえ（笑）。

――マンガ家の方で格闘技好きは多いですからね（笑）。無難な質問から入りますけど、最近、おもしろいと思ったヤンキーマンガを挙げるとすると？

長南　やっぱり『ナニワトモアレ』（注1）がこのジャンルではいま一番おもしろいと思いますよ。あと俺が小学校のときに『たいまんぶるうす』っていうヤングオート（注2）かなんかで連載していたマンガが文庫になってたんですけど、あれはおもしろかったですね。族が実名で出てきたりする実録ヤンキーマンガなんですけど。

――小学生の時分にヤングオート（笑）。

長南　グフフフ。あと自分の青春時代は『湘南爆走族』（注3）に影響されました。まあ、ろくなもんじゃねえって感じですけど（笑）。でも、マンガの中のヤンキーは現実世界と違ってちゃんと礼儀やモラルを持った奴らが多かったし、ある意味で人生の教科書みたいなもんですからね。

――ヤンキーマンガで人生のなんたるかを知ったところもある、と。

長南　そこまで大げさじゃないですけど（笑）。そこらへん『湘爆』の江口洋助（注4）はカッコよかったっすね。仲間を大事にしながら、いばったりするより楽しく生きているっていうか。『BAD BOYS』（注5）の後半とか、あとは『グレアー』（注6）の前半とか、ズキズキしたストーリー展開が良かったなと思いますね。悪いヤツらのほうにもちゃんと物語があって。

――明るい光があったら、逆に暗い光がないといけないわけですね。

長南　あと『CROWS』や『WORST』（注7）にも、敵も味方もカッコいいところはありますよね。坊屋春道やリンダマンには人生像みたいなものが見えたし、個人的にはパルコが一番好きなんですけど（笑）。

――パルコ&デンジャラーズですね（笑）。

長南　そうそう（笑）。あとヤンキーマンガでいうと『ろくでなしBLUES』（注8）か。でも、あれはヤンキーマンガではないですね。どっちかっていうと青春系。

――不良を扱っているけども。

長南　根本はヤンキーじゃないってところはありますね。マンガとしては凄くおもしろいんですけど、どうしてもヤンキーのリアリティが薄いんすね。「あれ？」と思う瞬間があったりして。全員が同じ黒いとんがった靴を履いてるところとか（笑）。同じように『今日から俺は!!』（注9）も、ヤンキーマンガというよりギャグマンガかなあ。その回その回で笑いをとって。

――たとえば、『ビーバップハイスクール』（注10）ってリアリティありました？

長南　最初はありましたね。あんなヤンキーが自分の地元にはいっぱいいましたから。自分より上の世代ですけど、小学校のときとか怖かったですもん。あんなにすぐケンカしたりはしないですけど（笑）。

――ほかにヤンキーの空気感が伝わってくるマンガってありました？

長南　だいたいバイクのカットを見るとわかるんですよね。そういう意味では『カメレオン』（注11）なんかバリバリ伝わってきますよ。話自体はありえないことの連

マシンのカットを見るとだいたいヤンキー度がわかるんですよね

続なんですけど、要所要所で「ああ、知ってるなぁ！」って思わせるんですよ。

――マニアのツボを心得えていたんですね。

長南　そうなんです。マンガに出てくるバイクや車の改造具合を見ても、手を抜いてないことがわかるんですよ（キッパリ）。

――バイクの改造具合が肝になる（笑）。

長南　そういうことがやっぱ大事なんですよ！　まあ高校生でローレプのSR－1乗ってるというのはありえないんですけどね。ほかに出てくる単車は、FXとかヨンフォアとかRZとか、当時みんながほしがってた単車で……（単車の説明が延々と続くがスペース都合上、泣く泣くカット）。

――充分わかりました（笑）。その世代では、『特攻の拓』（注12）もメジャーですよね。

長南　一応、全巻持ってますけど、バイクに関してはときどき、現実的にありえない改造の仕方があって。「そんな改造したらバイクのバランスが悪くなるだろ！」って。単車の描き方の面でいうと、自分としては『カメレオン』のほうがリアルでしたね。逆に単車のカットが格好良くなかったのは『湘南純愛組』（注13）かなあ。全巻ありますけど……。

――単車がダメだからダメ（笑）。

長南　単車は重要なポイントですよ！

――単車の描写は少ないですが、『ゴリラーマン』（注14）の空気感はどうでしたか？

長南　『ゴリラーマン』はメチャクチャおもしろいっすね！　作者の方が学園生活の空気を熟知してるというか、ホントわかってますよね、あれ。

――じつは今回、作者のハロルド作石先生にインタビューの依頼をしたんですけど、残念ながら超多忙のために実現しなかったんです。

長南　『ゴリラーマン』はホントにおもしろいです！　藤本たちの会話にしたって普通にありえる内容だし、くっだらないことでケンカするところも現実的ですよ。そういうとこにもまた唸らされましたねえ。ゴリラーマンみたいな奴いたら周囲はマンガと同じ反応すると思います。

――結論付けると、長南さんのヤンキーマンガの絶対条件は、ちゃんとした空気感と、単車の改造具合なんですね（笑）。

長南　あとファッションもやっぱり気になりますよね～。『ビーバップ』とかは学ラン全盛の時代ですから、あまりファッションは関係ないと思うんですけど、最近だと『CROWS』なんかは一番気を使ってるんじゃないですかね。『カメレオン』のヤンキーはちょっと化石・ヤンキーみたいなところがありますね。当時、うしろ髪を長くしたりするヤンキーはもういなかったですから。だから、ヤンキーの描き方でその作家がどういう時代を生きてきたかわかるところがありますね。それに最近はヤンキー魂があるマンガ家がめっきり少なくなったんですよねえ。つまらないヤンキーマンガも多いし、ケンカした悪いことした云々じゃなくて、繰り返しますけど、ヤンキーのリアリティを持って描いてほしいんですよ。

――それって格闘家も同じで、闘う魂を表現できるかが問われてくるわけですね。

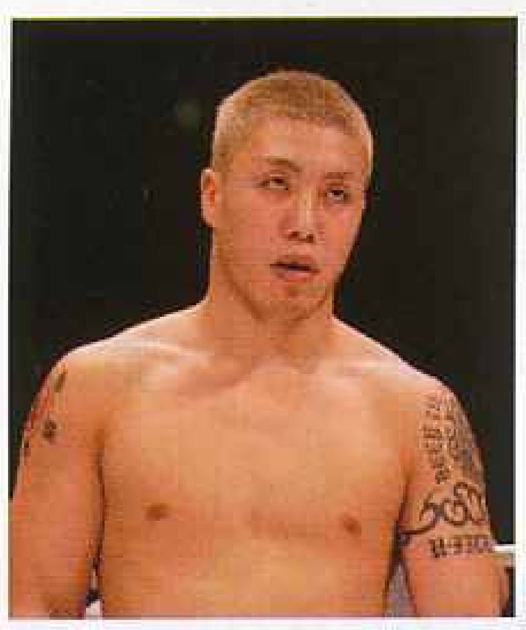
長南　そういう部分では、通じるところはあるし、影響を受けているところはありますよね。まあ、自分も30歳に近いんで、いつまでもヤンキーヤンキー言ってる場合じゃないんですけど（笑）。

――ガハハハハハ！　そんなこと言わないで、ヤンキーマンガの原作者になるぐらいまで突き詰めてください（笑）。

【06年3月1日／都内某所にて収録】



「ヤンキーマンガの“ヤンキー度”はマシンのコマを見ればわかる」と豪語する長南選手。自身もバイクのカスタマイズにはこだわりをもっており、高校時代は愛車「400Ninja」をコツコツ改造していたという。©加瀬あつし／講談社



ちょうなん・りょう■1976年10月8日、山形県出身。01年『DEEP』でプロデビュー。『PRIDE』には『武士道・其の参』から参戦しており、“殺戮のピラニア”のキャッチフレーズで親しまれている。本インタビューでヤンキーマンガにかなり精通していることが発覚。175cm、82.9kg。

注1★ナニワトモアレ
南勝久（著）、講談社。平成元年の頃の大阪環状線を舞台に、二人の主人公・グッさんとマーボが大活躍するドアホ＆走り屋マンガ。

注2★ヤングオート
芸文社が発行しているVIP仕様の軽自動車専門誌（毎月発行）。車本体だけでなく、カスタマイズ法やパーツなどの情報も充実している。

注3★湘南爆走族
吉田聡（著）、少年画報社。“湘南爆走族”という暴走族を中心に描いたの愛と友情の青春コメディ。“地獄の軍団”や“横浜御伽”との抗争が見物。

注4★『湘爆』の江口洋助
『湘南爆走族』に登場する湘南爆走族の二代目リーダー。1987年に上映された『湘南爆走族』映画版で、江口洋助役を江口洋介が演じたことは有名な話。

注5★BAD BOYS
田中宏（著）、少年画報社。お坊ちゃまから一念発起。不良修行で男を磨く桐木司を中心に、広島で熱い時代を生きた男たちを描いた伝説の暴走グラフィティ。

注6★グレアー
田中宏（著）、少年画報社。広島を舞台に、二世代に渡る宿命の対決を描いた作品。情に厚く、優しいヤンキー・大友勝将が主人公。

注7★CROWS、WORST
高橋ヒロシ（著）、秋田書店。鈴蘭男子校に転向してきた不良少年・坊屋春道を軸に描いたヤンキーマンガ。『WORST』は『CROWS』の続編。

注8★ろくでなしBLUES
森田まさのり（著）、集英社。ケンカには強いが、頭と恋愛に関してはちょっと弱い主人公・前田太尊を中心に描いた学園ドラマ。

注9★今日から俺は!!
西森博之（著）、小学館。転校をきっかけに、ツッパリの道に入った三橋貴志と伊藤真司の名コンビ物語。三橋の金髪と伊藤のツンツンに固めたトンガリ頭が印象的。

注10★ビーバップハイスクール
きうちかずひろ（著）、講談社。恋とケンカに生きるツッパリ高校生コンビ・加藤浩志と中間徹が主人公の青春アクション。

注11★カメレオン
加藤あつし（著）、講談社。高校デビューを果たした新米ヤンキー・矢沢栄作を中心に描いたヤンキーマンガ。

注12★特攻の拓
佐木飛朗斗（著）、所十三（イラスト）講談社。チビで弱いが友だち思いで勇気ある男・浅川拓を主人公に描いた暴走族マンガ。

注13★湘南純愛組
藤沢とおる（著）、講談社。かつて反町隆史と松島菜々子熱演したTVドラマ『GTO』の主人公・鬼塚英吉の高校時代を描いたマンガ。

注14★ゴリラーマン
ハロルド作石（著）、講談社。“ゴリラーマン”の異名で呼ばれる恐ろしい男・池戸定治が転校先の白武高校で繰り広げる不良＆学園コメディ。



60秒の衝撃!!

PRIDE オープニングアニメーションを創った男



『キル・ビル』、『サムライ・チャンプルー』の

中澤一登（アニメーション監督）*Interview*



06年『PRIDE 男祭り』にて上映された『PRIDE』オープニングアニメーションはわずか60秒に異様なカット数、めまぐるしく展開する高い完成度が話題となった。このアニメを創ったのは、Q・タランティーノ監督の映画『キル・ビル』でアニメーションパートを担当した気鋭のアニメ監督、中澤一登。わずか60秒に閉じ込められた圧倒的情報量、その才能を解き明かす特別インタビュー!

聞き手／真下義之、どんぐり上杉



これが『PRIDE』オープニングアニメで描かれた世界のファイターだ！

アメリカ



「ガムを噛みつつビリヤード＆金髪美女」というベタなUSA観が素敵なアメリカ。タックルからのマウントパンチで敵を破壊すると、美女が胸をはだけて大サービス!



ロシア



軍隊の同じ顔を持つ戦士たちに囲まれつつ、凶暴なパンチ＆キックを放つのは孤高の存在感のロシアン・ファイター。赤い皮膚と鋭い眼光で一網打尽にシュート三昧。



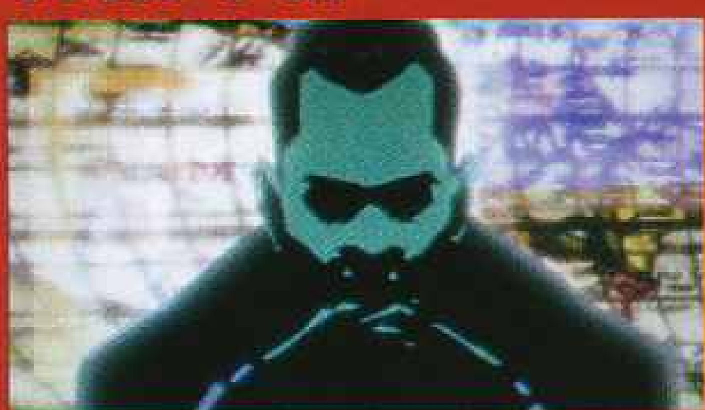
日本



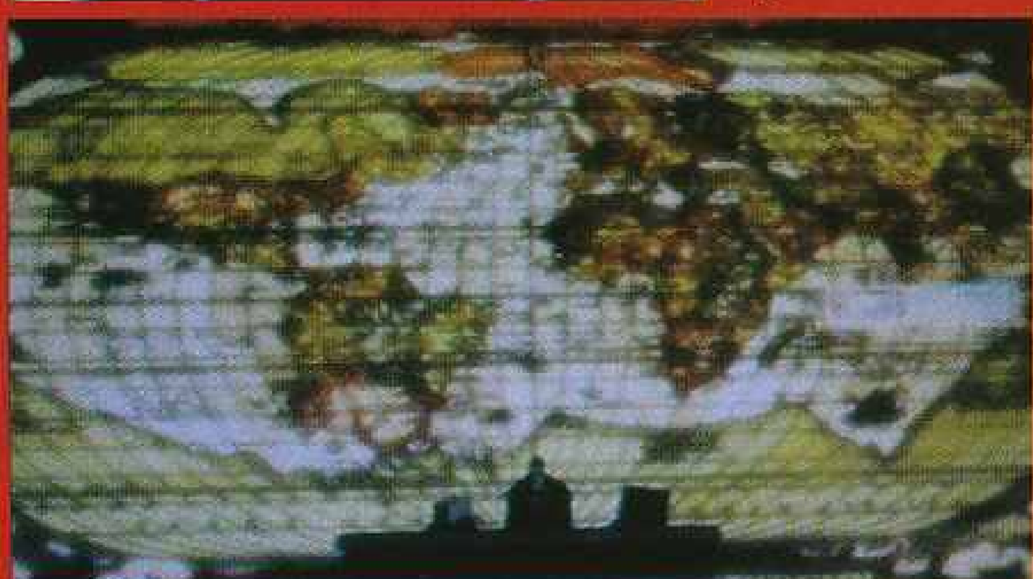
桜舞い散る美しい山々。純和風的な景観の中、主人公っぽく赤いマントをなびかせ、たずむ一人の格闘家。彼こそが日本代表。必殺のヒザ蹴りを炸裂させる。



総括本部



ワールドマップが展開し、各国情報が瞬時にウィンドウで立ち上がる。情報が集中するここ統轄本部は、眼光鋭いリーダーが睨みをきかせるコントロールタワー。



チベット



寺らしき建物の中、なぜか相撲レスラーが修行僧らしきファイターを急襲！　だが慌てず騒がず足がらみの関節テクで相撲レスラーを見事にしとめ、ギラリとやぶにらみ。



ブラジル



「熱帯ジャングル、そしてゴリラ」というまたもやベタなオブリガード感が炸裂するブラジル編はキックボクサー的なモヒカン・ファイターがゴリラのアゴにヒザ蹴り一閃!



『キル・ビル』は日本的なタッチで『PRIDE』はアメコミっぽくした

――中澤さんは、昨年末の『PRIDE男祭り』で披露された素晴らしいオープニングアニメを作られたんですが、この仕事はどういう形で依頼がきたんですか？

中澤　いま一緒にお仕事してるアニメスタジオ、**マッドハウス**(注1)さんから「こういう話が来てるけど、やんない？」ってお話をいただきました

――正直、あの『**キル・ビル**』(注2)の中澤さんが『PRIDE』のオープニングアニメを担当！　ってことでもっと話題になってもいいかな、って思ったんですが。

中澤　けっこう、知らないみたいですね。

――ちょっともったいない気がしますね。

DSE広報　じつは今回のオープニングアニメの概要は世間に公表してないんですよ。中澤さんがこの仕事を受けられたこともほとんど知られてないんです。

中澤　でも知り合いの人にはけっこう言われますけどね。「あれって中澤さんじゃないの？」とか。

――やっぱり。ちなみに周囲でも『PRIDE』がお好きな方は多いですか。

中澤　いや、みんな大好きですよ。だって普通にノゲイラとかヒョードルの名前っていうのは世間に通るじゃないですか。

――電車で男子高校生が（ヴァンダレイ・）シウバの話とかしてますからね。今回、あらためて全部をスローモーションで見たんですけど、1分間に情報量がメチャクチャ詰め込まれてますよね。

中澤　そういう意味では本当に好き勝手にやらせてもらいました。

――アメリカ、ロシア、ブラジルなど世界各国の強豪が日本、つまり『PRIDE』のリングに集まってくるという展開なんですけど、絵的に苦労した点はどこらへんですか？

中澤　いや描きやすかったから、ほとんど苦労してないですね。背景もほとんどないですし。でも「アメリカの格闘家のキャラをどうしよう？」っていうのはちょっと悩みましたね。

――結論は「ガムを噛んでる」という（笑）。

中澤　「ガム噛んでバーでビリヤードをしてる」っていう、あまりにベタですよね（笑）。

――ロシアは軍隊みたいなイメージで、ブラジルは密林でゴリラと闘ってる、いい意味でかなりベタですよね（笑）。あとアジアっぽいところが出てきますけど。

中澤　これはチベットなんですよ。最初は「なぜチベット？」って思ったんですけど。

――『PRIDE』にチベットの選手は出てこないですもんね。なぜかお相撲さんも出てきますけど。

中澤　じつはブラジルにキックボクサーっぽいのがいるので、「関節のマスターはチベットあたりにいそうだ」ということで（笑）。

――中澤さんはいくつか絵のタッチをお持ちですけど、『キル・ビル』みたいな劇画チックな絵でなく、わりとシンプルな線になってるのはどうしてですか？

中澤　『キル・ビル』はアメリカで公開するので、日本でコテコテとか古いと言われてるもののほうが新鮮かな、という読みがあったんです。で、今回は日本でやるんだったら、逆にアメコメっぽい感じ、ちょっとインチキくさい感じがおもしろいかなと。

——なるほど。格闘技をメインに描くことのやりづらさはなかったですか？

中澤　いや、今回は絵描きがメインの仕事でしたから。自由にやらせてもらえましたし、描きながらストレス発散みたいな。

——かなり「やりたい放題やってるな」って気がしたんですけども。

中澤　あ～、そこは言われなくてもやるタイプなんで。

——言われなくてもアクセル全開で踏み切ってしまう、と（笑）。

中澤　で、アニメができ上がってから「困りたければ困ればいいじゃないか？」と思うタイプですね。ただ今回は……僕が困っちゃったんですけど（苦笑）。

——それはどういうことですか？

中澤　じつは絵コンテの段階で計算を失敗してたんですよ。完成したら全体の尺が多すぎる……。長さを間違えちゃって。絵コンテの時点で10秒オーバーくらいの感覚で作ってたんですけど……でき上がったら長さが倍以上あって（笑）。「どうしたらいいんだぁ？」って。

——途方に暮れてしまったと。では泣く泣く削られた部分とかもあるんですか？

中澤　いっぱいあります。たとえば……風車のシーンがなくなりましたね。オランダの場面で風車を描いたんですけど。

——アリスター・オーフレイムの出身地のオランダはなくなってしまったと（笑）。で、このアニメは『PRIDE男祭り』で初披露されたんですが。やっぱり会場でご覧になったんですか？

中澤　いや、大晦日は家にいたんで、テレビの前で待ってたんですけど……じつは見過ごしちゃったんですよ（笑）。

じつは絵コンテの計算違いで、尺が倍以上になっちゃって



——最後の最後で見過ごしましたか。

中澤　ちょうど流れるタイミングを見逃しちゃったみたいで「アレ？　やらないのかな」って（笑）。年越しそばの準備をして待ってたんですが、さすがにおかしいと思って「ずっと見てるんだけど、いつやんの？」って関係者に電話したら、「もうやったよ！」って言われてね……。

——それは残念でしたね。ところで話は変わりますけど、中澤さんがアニメの道に進まれたきっかけは？

中澤　よく聞かれるんですけど……。なんか最初から描けたんです（笑）。小学校の頃から絵を描くことで自分のアイデンティティを築いてて、それでイジメとかにも遭わなかったし。おとなしいやつとも、ヤンキーとでも付き合えたんですよ。

——『まんが道』の満賀道夫みたいですね。

中澤　でも僕が食うためには一番いい手段だったかなって気はしますけどね。

——では大志を抱いて、業界入りしたわけじゃないんですか？

中澤　そうですね。僕らの時代って絵を描いて食ってくとしたら、マンガ家かアニメーターしかなかった。イラストレーターは食えなそうだし、マンガ家は持ち込みとかが、面倒くさいなって。

——ではかなり引き算的に考えた末の決断だったと（笑）。

中澤　あと僕が行ったアニメ専門学校の学費が凄く安かったんですよ！　他の学校だと凄くお金が高かったんですけど、当時は「安いな～！」って思って。

——そういうことで進路がドンドン決まっていったんですか（笑）。

中澤　あとはアニメを辞める勇気がなかったってことですかね。一日5回ぐらい「辞めたい」って思ってましたから。

——いまはさすがにないと思うんですけど。

中澤　いや、いまでもたまに思いますね。「辞めたい……」って。いつのまにか、あとに引けない歳になっただけです（笑）。だから他の人とはモチベーションが違うと思いますね。

——作家として起点になった作品っていうのはなんでしょうか？

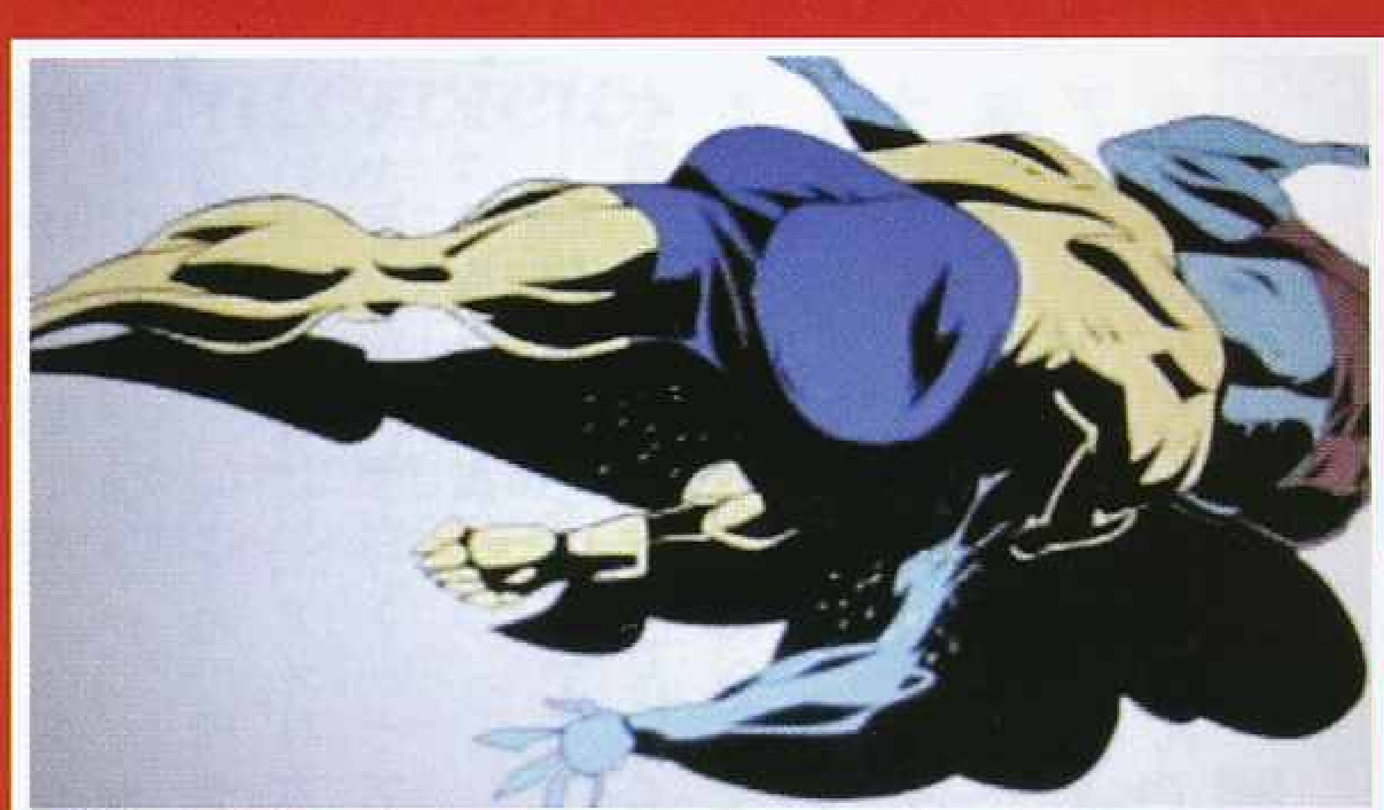
中澤　やっぱり『キル・ビル』ですね。あと**Linkin Park**（注2）のPVがアメリカのMTVで賞を獲ったんですよ。それが結構大きかったような気はしますね。

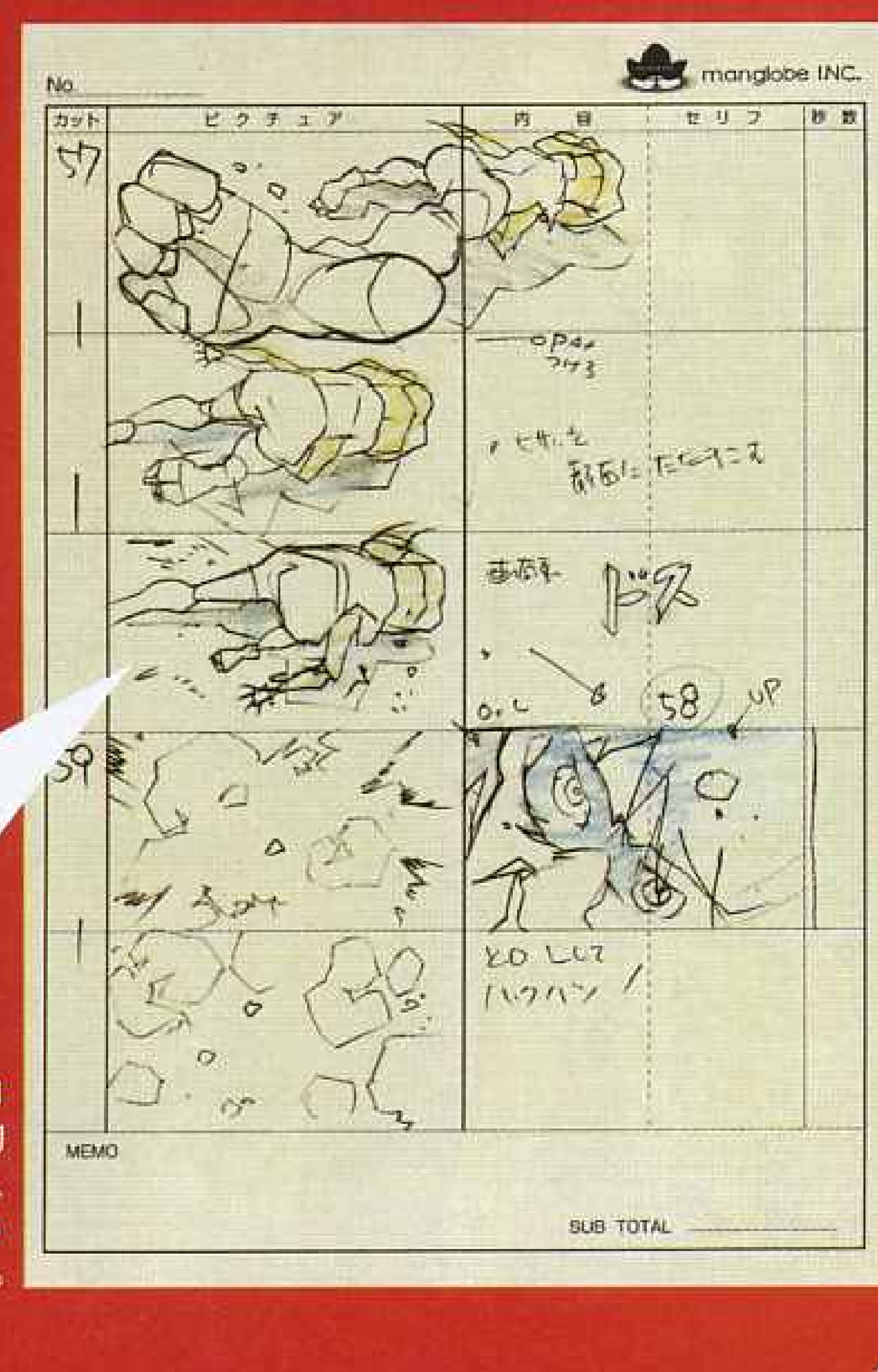
——なるほど。海外ではその後もオファーとかは多いんですか？

中澤　いや、ホントかウソかわからない

これが世界的アニメーター中澤一登の直筆絵コンテだ！







アニメマニア垂涎！　中澤氏による「絵コンテ」（アニメを作る際ベースとなる計画書件、指示書となる）がコレだ。左のコンテのように初期段階からカラーバランスを検討してるものあるのだ。

上がアニメの完成画像で、右が絵コンテ時のプランニング状況。結果的に尺のボリュームは増えたようだが、最終的な絵作りの到達点は当初から決してブレてないことは一目瞭然だ。

ような話が多いので、あんまり聞かないようにしてます。

——もの凄い話が来たりしてそうですけどね（笑）。そういえば『キル・ビル』のときは、けっこうお任せ的な感じだったって聞きましたけど。

中澤　最初はお任せなんですよ。でも作業が終わってから（クエンティン・）タランティーノにギャースカギャースカギャースカ言われて大変でしたね。

——それは細部の修正なんですか。

中澤　まぁ、あの人、アニメのことはなんにも知らないから。絶対に甘やかされてますよ！　末っ子ですよ、あれは！

——ガハハ！　タラちゃんは甘やかされすぎだと（笑）。

中澤　どんどん欲が湧いてきて「そういえば実写で撮り忘れた部分があるんだよ」とか「もっと尺を延ばそう！」とか言われてね。で、「いや、延ばすものじゃなくて、そのぶん描くんだからさ」って（笑）。

——じゃあかなり、振り回された感じなんですね。

中澤　まぁ仕事はなんでもそうですけどね。いつも最終的には倒れそうになるようなことが多いです。

——今回は大丈夫でしたか。

中澤　いや大丈夫です。全体の尺を見たときに「なんでこんなに簡単な計算ができないんだ〜」ってのはありましたけどね。「小2で習うことやんけ！」と。「二ケタの足し算もできないのか！」と思って。

——まぁクリエイターの方って乗ってくると暴走しがちですからね。でもこれから中澤さんは長編映画の監督の話とかきそうな気がするんですけど。

タランティーノ監督？　あの人は甘やかされすぎだと思います（笑）





『PRIDE』オープニングアニメとして制作された本編は、最終カットで大会のロゴがオーバーラップする。各国の選手が集結、『PRIDE』宇宙を凝縮した60秒の世界は到達点を迎える。

中澤　まぁやれたらやりたい……っていう位ですね。「やるぞ！」って気合い入れてあんまりうまくいったことないんで。

——最近のアニメ界で気になる方とかいらっしゃいます？

中澤　いやよく知らないんです。ホントに疎いし、たぶん働いてる時間帯も他のアニメーターの方とかなり違うんで。僕、規則正しくて朝方なんですよ。

——じゃあけっこう早めにあがっちゃうと。

中澤　長くても7時とかに終わって、溜まり場行って「ワー！」って遊んでる。土日も絶対休むようにしてます。だから「よくアイデア思いつきますね」と言われるんですけど、考えてる時間が君らより長いだけだよって。君らがガリガリ頑張ってる中、俺はポケ〜ってしながらいろいろ考えてる（笑）。この業界って、机に向かったり鉛筆を動かしているあいだが仕事っていう発想しかない人が多いですね。

——日本が世界に誇る、スタジオジブリの宮崎駿さんなんかはまさに「長時間、机の前に座って、常に手を動かしてなきゃダメ」というタイプですよね。

中澤　いや〜一緒に仕事したら、もの凄く説教されると思いますね。

——ガハハハハ！　しかし今回のアニメがかなり好評をいただいたということで、今後、続編の話がきたらどうしますか。もしかして二作目があるならドリームステージピクチャーズのほうですかね？

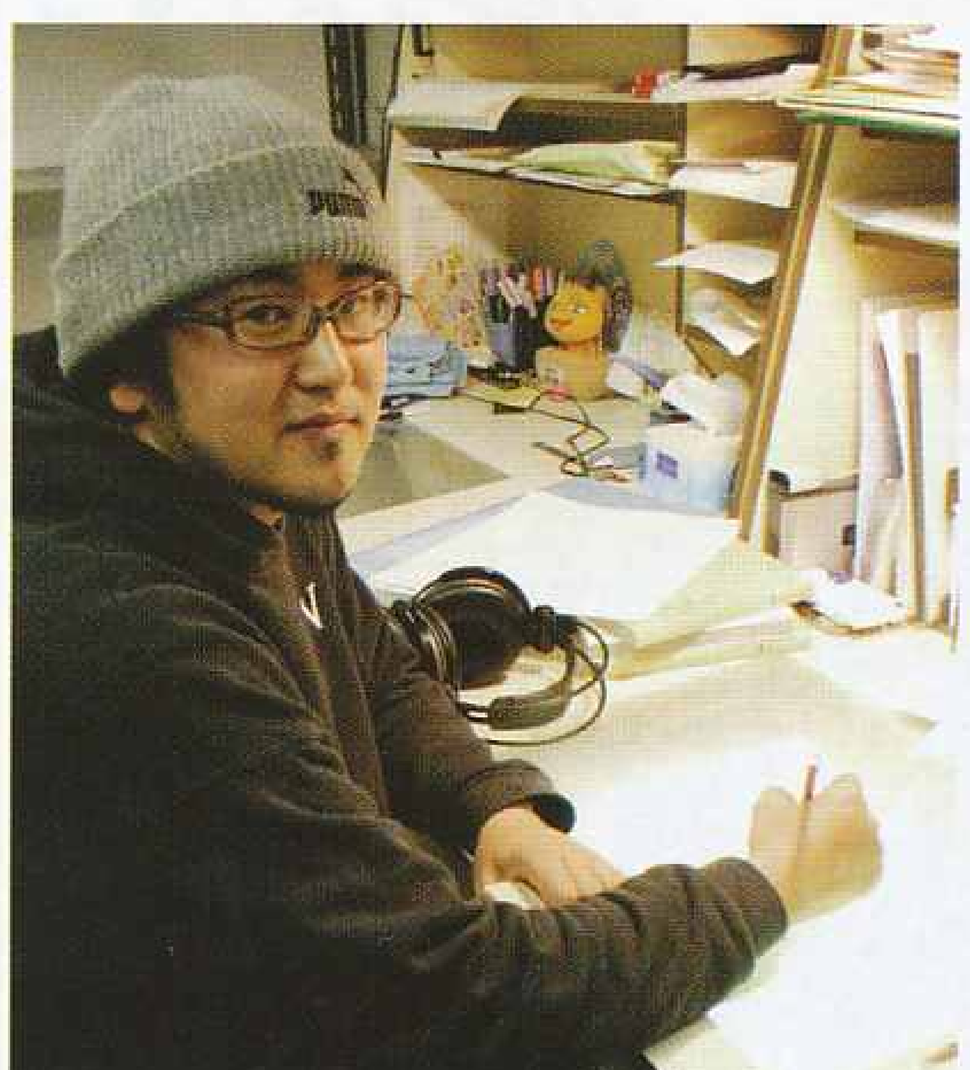
中澤　ドリームステージピクチャーズってなんですか？

——DSEさんが立ち上げた映画専門の会社ですね。略してDSPという名前で、いま二作目となる「シムソンズ」がヒットしてるんです。じつはDSEの榊原社長はアニメも作りたがってるみたいで。

中澤　あ、ホントですか。じゃあ予算も含めてぜひマッドハウスにご相談していただければ、と（笑）。

——ではぜひ次回作は、DSPで初長編監督作品を期待してます！　今日はありがとうございました。

【06年3月4日／マッドハウス本社にて収録】



なかざわ・かずと■1968年、新潟出身。血液型B型。アニメーター、イラストレーター。東京アニメーター学院卒業後、アニメスタジオを経て、現在はフリー。映画『キル・ビル』のアニメパートの監督や、Linkin ParkのPVを手掛けて世界的なアニメ作家に。『サムライ・チャンプルー』のキャラデザインも担当。

注1★マッドハウス
1972年、アニメ制作会社として誕生。以降、『幻魔大戦』や『メトロポリス』らの映画作品、『YAWARA』や『カードキャプターさくら』のような娯楽性の高いテレビ作品。『千年女優』のような芸術的なアニメまで幅広く手掛け、伝統と新鮮さを失なわないアニメ界の老舗スタジオ。

注2★キル・ビル
鬼才クエンティン・タランティーノが6年ぶりに発表した話題作。女性主人公ブライドが結婚式を襲撃され、殺戮した元恋人ビルへの復讐を描く。中澤氏は中盤のアニメパートを担当。敵役オーレン・イシイの幼少時〜殺し屋にまでの経緯を描いた。制作はプロダクションI.G。

注3★Linkin Park
ロックにヒップホップやエレクトロを加えたアメリカのオルタナティブ・ロックの雄として世界をまたにかけて活躍中。中澤氏がPVを担当した『Breaking the Habit』は04年MTVビデオ・ミュージック・アワードで視聴者賞の最優秀者に選ばれている。

すべての子どもは、この〝紙とインク〟の世界に憧れの人を見つけるものだ。夢を感じさせ、元気づけてくれるヒーローたち。そのヒーローは、プロアスリートや彼らの親であることもあるだろう。

だが、それと同じくコミックやアニメも、世界中の数え切れない子どもたちにインスピレーションを与えてきた。また、想像から生まれたヒーローも多く、彼らは現実の世界に登場する偉人よりも、到底信じがたいことをやり遂げるのだ。

ボクも子どもの頃は、ほかの多くの子どもたちと同じように、登校前の朝の時間を好きなアニメを観て過ごした。そして、先生や教科書と苦戦したあとには、自分の好きなアニメを観るために急いで家に駆け戻った。

アニメを観たことがない子どもをボクは知らない。子どもというものは、アニメを観るために存在しているようにさえ思う。みんなそれぞれ好みの番組があるが、例えば『トランスフォーマー』(注1)は、多くの子どもたちが熱狂していた。ボクも例外ではなかったが、バーネット家で「トランスフォーマー」よりおもしろいとされていたのは「宇宙戦艦ヤマト」(注2)の米国版、『スターブレーザーズ』であった。『スターブレーザーズ』の時間になると、家族全員、暗黙のルールがあるかのようにぞろぞろとリビングに集まったものだ。

その後、ボクと友人たちは『超時空要塞マクロス』(注3)の米国版続編『ロボテック』の世界に引きずり込まれた。その頃のボクは、ワルキューレの騎士を宇宙に放り投げ残忍なゼントラーディを倒すことに、すべてを懸けていたと言ってもいい。

紙とインクのヒーロー

ジョシュ・バーネット

The Heroes of Ink and Paper





そして、そんなボクがさらにファンタスティックな底なし沼へと足を踏み入れたきっかけがある。当時、マーベルコミックスの中毒でもあったボクに、友だちがある一冊の〝マンガ〟を貸してくれた。神崎将臣の『重機甲兵ゼノン』(注4)。ボクが11歳のときだった。叩きのめされるほどの衝撃を受けた。

これを読んだとき、「これはまさに自分のために描かれたコミックではないか!」と感じた。〝マンガ〟にはリアリズムがあり、背景のアートは信じられないほど細かい。しかも人間ドラマは悲喜劇に溢れ、信じられないほどその登場人物にはキャラクター性があった。また日本の〝マンガ〟に登場する人々は、ボクが慣れ親しんだアメリカンコミックのキャラクターとはまったく違う気質を持っていた。当然、彼らは屈強であったが、とても人間的でもあり、ときには傷つきやすい内面を持っていた。〝マンガ〟のヒーローは往々にして、常人ではありえない、とんでもないことをやってのけるものだが、彼らの繊細で傷つきやすいキャラクターは、現実を生きるボクとヒーローの距離をぐっと近づけてくれたのだった。

それぞれの人間にそれぞれのヒーローが存在する。

現在、〝マンガ〟の世界では多くのヒーローが誕生しているが、ボクにとってのヒ

ーローとは、いつ何時でも、常に『北斗の拳』のケンシロウである。どんなにこの世が荒れ果て、残忍な悪党に苦しめられる混沌とした世界になろうとも、男であれば正しいことをやり遂げる力と勇気を持たなければならない。それがどんなに孤独な作業であろうとも、だ。

ケンはボクに、男とはこうあるべきだという究極の姿を見せてくれた。ケンは正義のために、心ない世界に秩序を取り戻そうと、その力を酷使する。幸せな時間もめったになく、足下には常に死が迫っている。でも決して闘いから逃げることはない。どんなに不利な状況であろうと、相手を倒す方法を模索するのだ。

いつの時代も、常人はこの世の不幸・不正に耐える方法を模索し、やがてそれに慣れる。きっとそのほうが簡単なのだろう。だがケンにそんな考えはなく、偉大なヒーローは肉体的にも精神的にも想像を絶する苦痛を抱きながら立ち向かう。

「おれにはもうなにも目的はない。すべてを失った人間だ。ただ……きさまらのような狂信者のために犠牲になり、ながされる幼い子供たちの涙が……悲しみが……おれをここにつれてきた……きさまの野望はここまでだ!!」（『北斗の拳』「死のブーメラン」の巻より）

誠実さをもって正義の守護者になりえるのなら、どれほど壮絶な痛みが生じようとも、そこには立ち向かう価値があるのだ。

ケンが示した決断力はボクに衝撃を与え、いまでもボクをインスパイアしてやまない。実際、『北斗の拳』には、多くの賛美すべきマーシャルアーツや超人間的なドラマがあるが、ボクの頭から離れることがないのは、やはりケンのキャラクターである。ジムでトレーニングしているときなど、常に己のレベルを昇華させるため、**『愛を取り戻せ！』**（注5）を聴く。楽曲だけならそれほど心に響くことはないが、『愛を取り戻せ！』は『北斗の拳』の象徴である。この殺伐とした愛の歌を聴くと、自分はケンシロウになり、闘いの爪痕が残る不毛の地を歩きながら、闘いに備え常に神経を研ぎ澄ましている心境になるのだ。ラオウ、カイオウ、シン、サウザー、ファルコ……道の最後にはどんな強敵（とも）が待ち受けているかわからない。そしてボクは彼に立ち向かう。いや、彼ら全員に立ち向かう、と言おう。ケンならいかなる条件であろうと、譲歩はないのだから。

ボクにとって、この曲で入場するということは、ファンタジーやインスピレーションを自分に与えるということなのだ。この曲がかかると、ファンが激昂し、泣く声が聞こえる。ボクは知っている。彼らもまたボクと同じく、『北斗の拳』に心を揺さぶられていることを。

〝マンガ〟のヒーローは多くの人を刺激してきた。そして、これからもずっと影響を与え続けていく。未来の『PRIDE』ファイターは、**『格闘太陽伝・ガチ』**（注6）や**『餓狼伝』**（注7）を読み、その主人公のようになりたいと、日夜練習に明け暮れたファイターかもしれない。きっといつの日か、**幕之内一歩**（注8）はリングに実在しているだろう。彼に憧れ、〝はじめの一歩〟を踏み出した若いファイターによって。

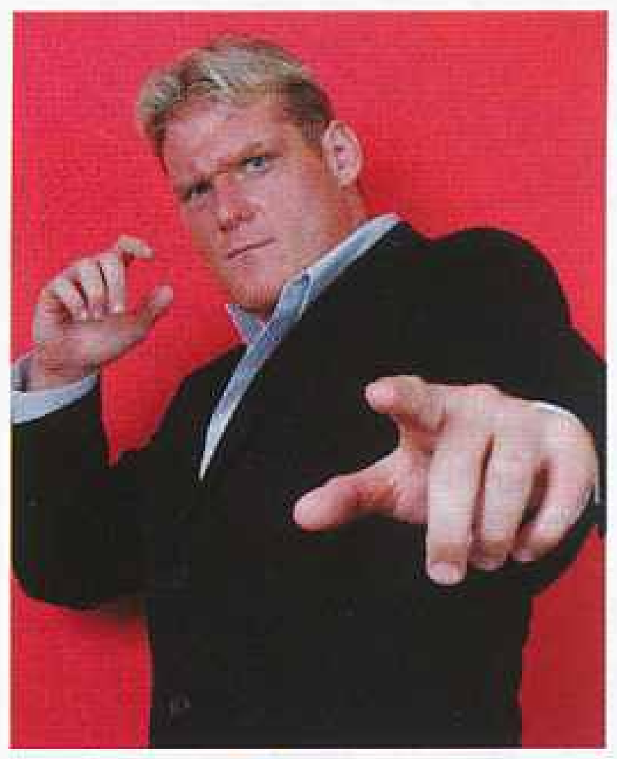
インスピレーションが降ってくるとき、それがいつなのか誰も知らない。10分後なのか、10日後なのか、10年後なのか——。幸運にもボクはケンシロウに出会った日、インスピレーションとは何かを知った。そしてボクはケンになるべく常に努力してきた。もちろん、スーパーマンの力を持つ〝リアル・ケンシロウ〟になることは到底不可能だとわかっている。だが、もしも「ケンになれた！」という感覚が一試合、いや、一瞬でもボクに訪れるなら、ケンシロウの道を歩んできたことを後悔することは絶対にない。

ケンシロウは“男とはこうあるべきだ”という究極の姿を見せてくれた

ケンシロウと『北斗の拳』。ボクを深くインスパイアしてきた〝マンガ〟。『北斗の拳』がキミをインスパイアすることがなくとも、大丈夫、案ずることはない。心配しなくとも〝マンガ〟のヒーローは、天空に輝く無数の星ほどいる。その中にはきっときみに語りかけるヒーローがいるだろう。『北斗の拳』のそれぞれの戦士に背負うべき宿星があるように。

そして、そのヒーローは不可能だと言われることに挑戦し、成し遂げるよう、あなたを鼓舞する。リングの上であれ、ビジネスの世界であれ、夢を実現する道を、しっかりとその目で見ることができるまで。

そう、どんなときもボクらは、紙とインクのヒーローに憧れ、前に進むのだから。



Josh Barnett■1977年生まれ、アメリカ出身。新日本プロレス所属。日本のマンガ・アニメ文化をこよなく愛する“世界最強のオタク”。キメゼリフは「オマエはもう死んでいる!!」。そして入場テーマは「愛を取り戻せ!」。

注1★トランスフォーマー
玩具メーカー・タカラ社（現・タカラトミー社）が販売した製品をベースに、84年米マーベル・コミック社が初期作品を制作したSFロボットアニメ。日本テレビなどが放送。

注2★宇宙戦艦ヤマト
74年から読売テレビ系列で放送されたSFアニメ。原作／松本零士。製作／西崎義展。劇場版「さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち」は日本アニメ史上記録的な大ヒットに。

注3★超時空要塞マクロス
SFアニメ。原作／スタジオぬえ。制作／タツノコプロダクションなど。若いスタッフによるラブコメやアイドル的な要素が加わった新機軸のストーリーが話題に。

注4★重機甲兵ゼノン
小学館『少年ビッグコミック』で86年より連載されたヒーロー漫画。神崎将臣著。講談社『ヤングマガジン・アッパーズ』にて続編『鋼～HAGANE～』が連載された。

注5★愛を取り戻せ！
クリスタルキングの代表曲の一つで、フジテレビ系アニメ『世紀末救世主伝説北斗の拳』主題歌。「ユー・アー・ショック!!」の出だしはあまりに有名。

注6★格闘太陽伝・ガチ
小学館『ビッグコミックスピリッツ』で連載された格闘マンガ。プロレスラーの息子、原田太陽が自己流トレーニングで格闘家になって様を描いた。監修はルー・テーズ。

注7★餓狼伝
流浪の格闘家、丹波文七を主人公とする本格格闘漫画。原作／夢枕獏、漫画／板垣恵介。谷口ジロー氏の作画版もあり。映画化もされている。

注8★幕之内一歩
森川ジョージが89年から講談社『少年マガジン』に連載中のボクシング漫画『はじめの一歩』の主人公。ボクシングを通して描かれた様々な人間模様は秀逸。

PRIDEわっしょい!!

超! 激レア PRESENS

この豪華なメンツを見よ!! 編集部も驚きの夢の対談&インタビュー続出っぷりに、強固、読プレを敢行しました。こんな激レアグッズは本当にほかでは入手不可能! 応募しまくって、一生モンのお宝を手に入れてください。ん〜、ゲッツ!!

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑦の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(賞品は4月29日以降発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤面白かった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦あなたが考えるPRIDE夢の対談

【宛先】〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F (株)ダブルクロス『kamipro』編集部「PRIDEわっしょい」係まで

※締切は2006年4月28日(金)当日消印有効

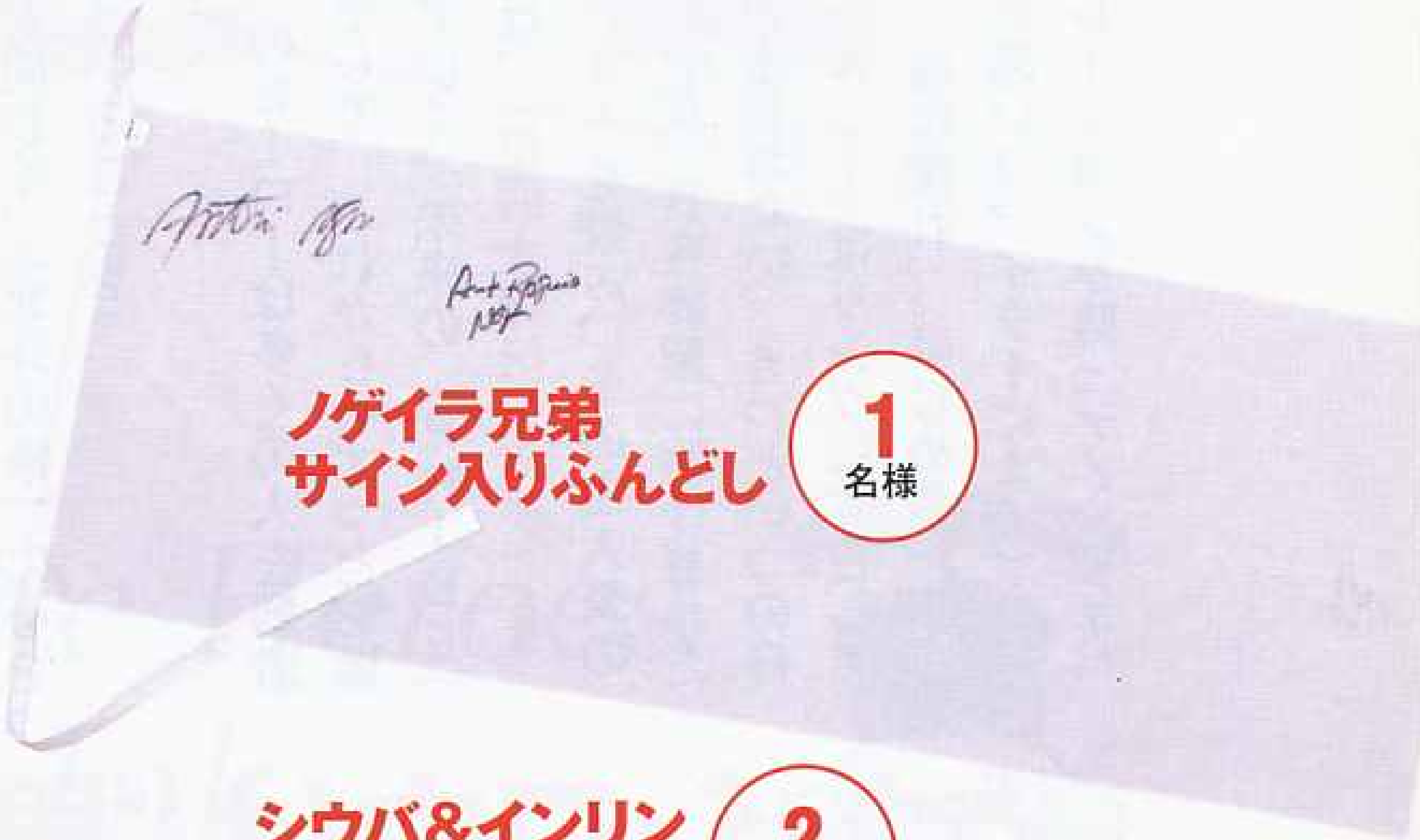
kamipro SPECIAL 応募券 PRIDE わっしょい!

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

髙田本部長×ノゲイラ兄弟



ふんどし兄弟、……じゃなくてノゲイラ兄弟のサイン入りふんどしと、3人の寄せ書きサイン色紙を各1名様にプレゼント! ちなみに、ふんどしはノゲイラ兄弟が着用したものではないのではありません。ご安心ください〜。

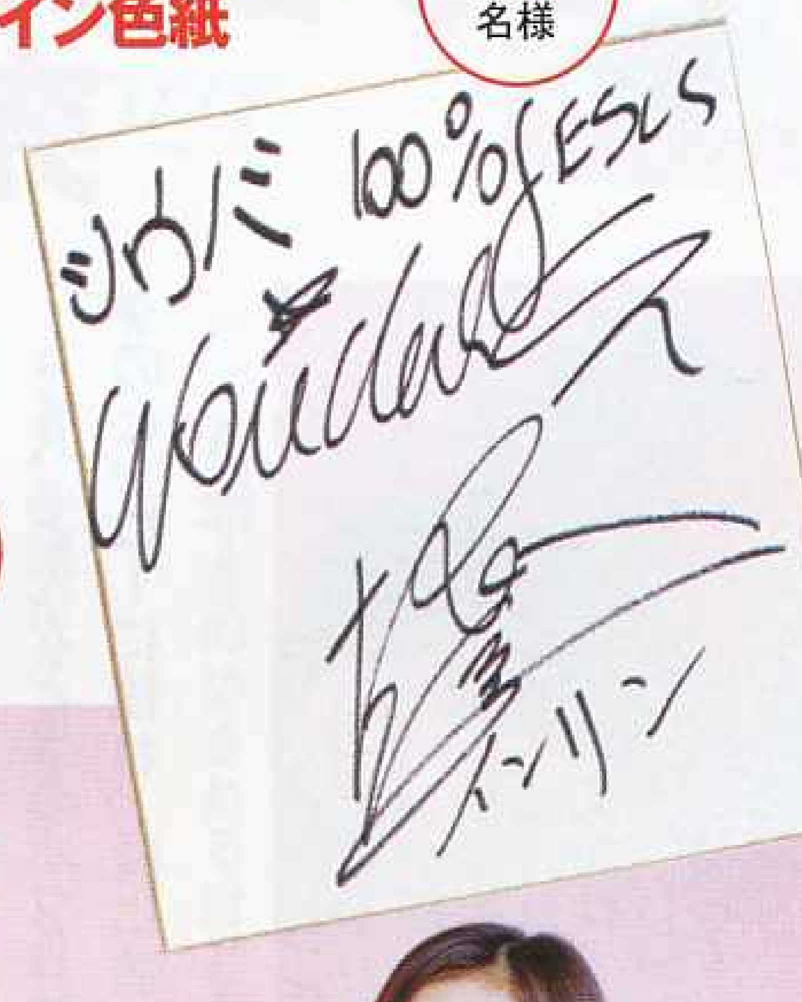


ノゲイラ兄弟 サイン入りふんどし 1名様

髙田本部長&ノゲイラ兄弟 サイン色紙 1名様



シウバ&インリン サインキャップ 1名様



シウバ&インリン サイン色紙 2名様

ヴァンダレイ・シウバ×インリン・オブ・ジョイトイ





シウバ&インリン サインパーカー 1名様

PRIDEミドル級王者と、モンスター軍No.2インリン様の大ファンであるインリン・オブ・ジョイトイさんのサインがドッキング! パーカー、キャップと品物も豪華。なんでもいいけど、ヴァンダレイの顔がご機嫌すぎるぞ!!

商品協力:(株)ドリームステージエンターテインメント

桜庭和志×HG



ポラロイド写真は「オッケ〜イ!! 僕たちにもプレゼントしてくださいよ〜!」と本人たちも言って出るほどのレアグッズ。色紙、ポラ合わせて5枚もサインを書いてくださいました。夢のコラボレーション、フォー!!



桜庭和志&HG サイン入りポラロイド写真 2名様



桜庭和志&HG サイン色紙 3名様

I編集長の言う"殺し"にまで精通している、相原コージさんの直筆イラスト入りサイン色紙をプレゼント! ちなみに「おぼん小僧」は相原先生の作品『コージ苑』のキャラクターです。

相原コージ

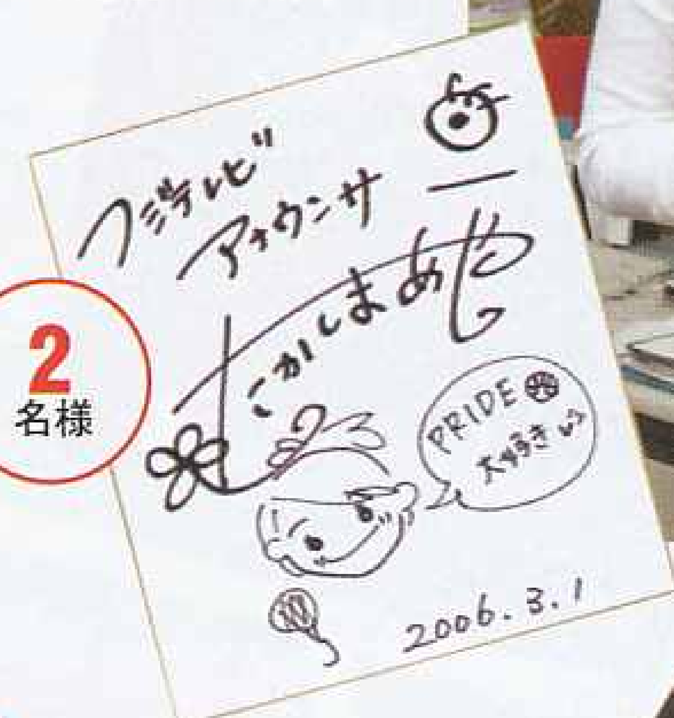




相原コージ サイン色紙 1名様

これは貴重すぎる!! 撮影で使用したオープンフィンガーグローブにアヤパンこと高島アナウンサーがサインをしてくれました〜。「会場で会いましょう♥」のステキなメッセージ入りです。右手、左手、どっちがいいか書いて応募してね。





高島彩 サイン色紙 2名様



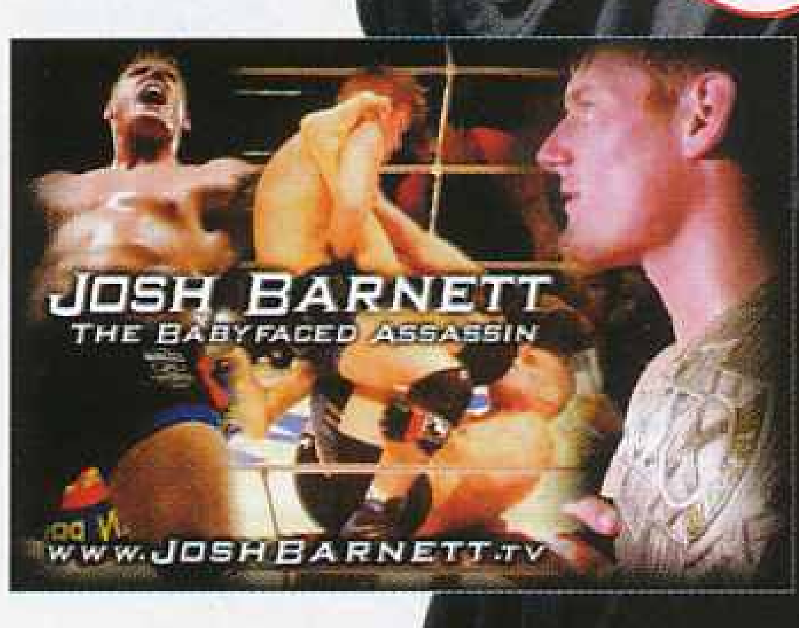
高島彩サイン入り PRIDEグローブ 2名様

来日した際、ジョシュが配りまくっている名刺を10名様にプレゼント! ジョシュはこの名刺で営業活動をしているのだとか(詳細は『kamipro Hand』のジョシュ・バーネットインタビューにて!!)。ちなみに、なんの営業なのかはまったく不明。

ジョシュ・バーネット



ジョシュ・バーネット名刺 10名様



にわのまこと サイン色紙 1名様



おとぎ話『桃太郎』の子孫がプロレスラー"モモタロウ"となって登場するマンガ『ザ・モモタロウ』の主人公を、にわのまこと先生自ら描いていただきました。ファンにはたまりません!!



にわのまこと

PRIDE GOODS INFORMATION



ミルコ ジップパーカー
¥10,290
S / M / L / XL　COLOR : WHITE / BLACK



シウバ ジップパーカー
¥10,290
S / M / L / XL　COLOR : WHITE / BLACK



BTTジップパーカー
¥10,290
S / M / L / XL　COLOR : BLACK / GREEN



レッドデビル ジップパーカー
¥10,290
S / M / L / XL　COLOR : BLACK / RED



SAKUジップパーカー
¥10,290
S / M / L / XL　COLOR : ORANGE / NAVY



シュートボクセ ジップパーカー
¥10,290
S / M / L / XL　COLOR : GRAY / BLACK



SAKU オブリガード Tシャツ
¥4,200
S / M / L / XL　COLOR : ORANGE



SAKU ポコ・カンサード Tシャツ
¥4,200
S / M / L / XL　COLOR : GRAY×BLUE / GRAY×RED



川尻T-BLOOD Tシャツ
¥3,990
S / M / L / XL　COLOR : BLACK



ハント～オセアニアン～Tシャツ
¥3,990
S / M / L / XL　COLOR : BLACK



SAKUボクサーブリーフ
¥2,625
M / L / XL　COLOR : ORANGE



シウバ ボクサーブリーフ
¥2,625
M / L / XL　COLOR : WHITE



ミルコボクサーブリーフ
¥2,625
M / L / XL　COLOR : BLACK



シュートボクセ ボクサーブリーフ
¥2,625
M / L / XL　COLOR : BLACK



ミルコ ニットキャップ
¥3,150



SAKU ニットキャップ
¥3,150



シウバ ニットキャップ
¥3,150



RED DEVIL ニットキャップ
¥3,150



シュートボクセ ニットキャップ
¥3,150



BTT ニットキャップ
¥3,150

『PRIDE GOODS』通販専用NAVIダイヤル

TEL.0570-007100

［月曜日～土曜日、AM10:00～PM6:00］

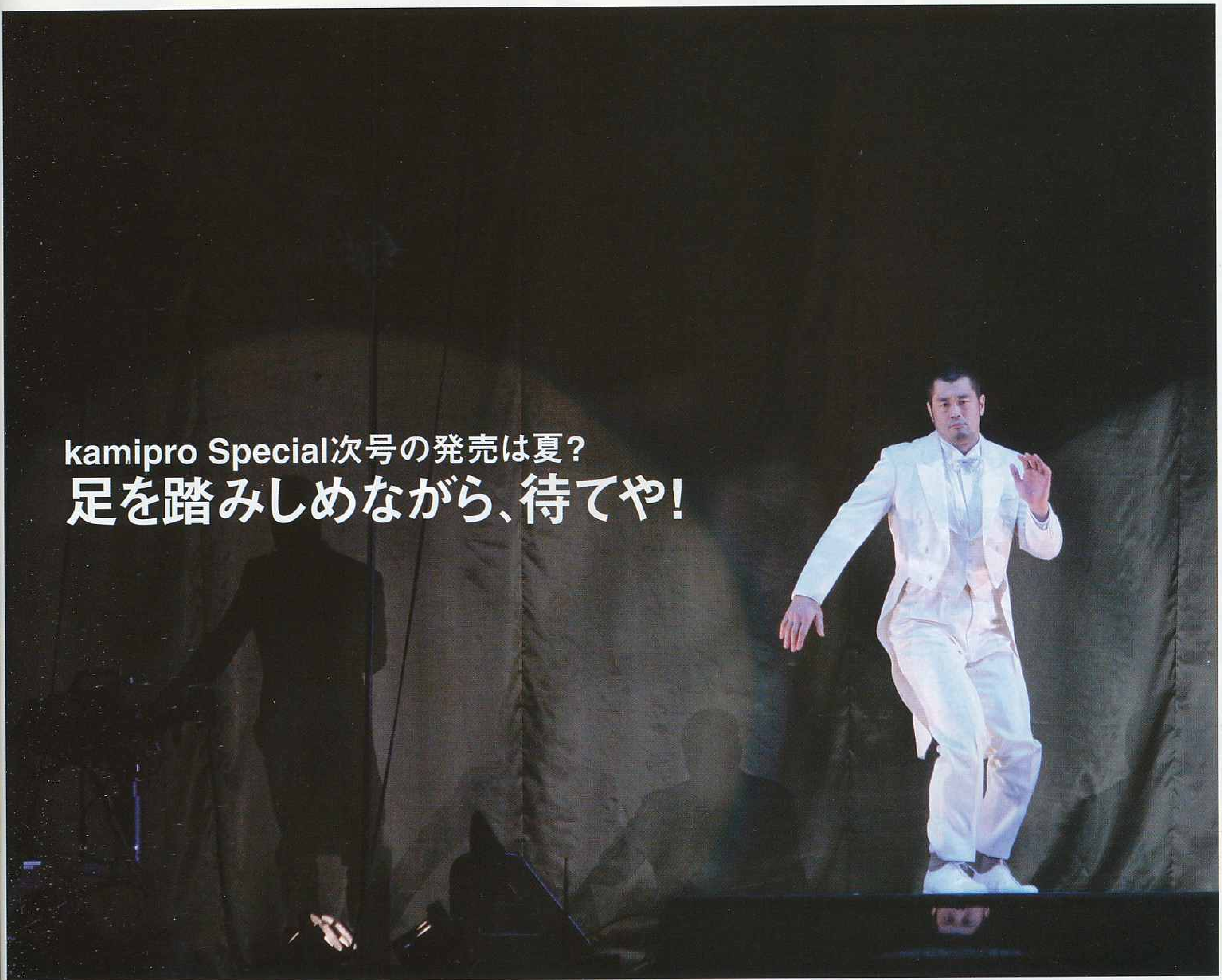
PRIDE オフィシャルサイト

http://www.pridefc.com/

［販売元］株式会社ドリームステージエンターテインメント

［商品お渡し方法］代金引き換えでのお受け取りになります。商品代金のほかに630円（ヤマト便）+代引き手数料がかかります（3万円未満＝350円。3万円以上～10万円未満＝650円。10万円以上～30万円まで＝1,100円）。
商品到着時に配送業者の方に代金をお支払いください。★ご注意：代金は、送料の先払いはお受けできません。
［配送について］お届けはご注文確定後、1週間前後を予定しております。お届先は日本国内に限らせていただきます。ご注文が集中した場合は、お時間をいただくことがあります。商品は大阪の（株）ジャンボからの発送になります。
［返品について］サイズ交換等の返品・交換はお受けできません。不良品等の理由による返品・交換の場合は商品到着後7日以内にお電話にてご連絡ください。（株）ジャンボ 0570-00-7100（期限の過ぎた場合は、受付致しかねます）


KIGUCHI
CHUTE BOXE
MUAY THAI
VALE TUDO
PRIDE 男祭り2005
-ITADAKI-
SAITAMA SUPER ARENA
はなまる
福



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2006 SPRING
2006年4月11日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
山口日昇
青柳昌行

編集若頭代理
ジャン斎藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
真下義之
松下“かぼちゃ”ミワ
八木賢太郎（ご近所付き合いのため非番）

電気部
ささきぃ
松澤チョロ

企画制作部
坂井ノブ
プリン体2号？ 上杉だるま

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子RGM

編集次長リローデッドPart.6.5
松林 貴

デザインカントク
出田さん（TwoThree）

デザインキャプテン
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂“ヤミショーグン”マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木しらき（以上、TwoThree）
トメさん
はなえちゃん
黄川田洋志（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊地茂夫
丸山剛史
平工幸雄
戸成嘉則
山口比佐夫
松本 崇
黒田史夫
平 専英

お勘定&衣料部
林 一枝

メシ行くけど？
プリン体1号・入江（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
割石“歓迎会ならどこでも行きます”芳司

“請求書は早めにください！”編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子

広告営業
株式会社ビューポイント
（広告掲載のお問い合わせは☎03-5776-0717まで）

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00） メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL:http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。


©菊池茂夫
「ヒョードルに勝つ自信はあるよ」
――ジョシュ・バーネットの無差別級GPへ向けたインタビューは
携帯サイト「kamipro Hand」でチェック!!
PRIDEファイタースペシャルインタビュー続々掲載!!
世界で二番目に『PRIDE』に詳しいケータイサイト
1 QRコードでクイック・アクセス!!
2 http://kamipro.dsn.ne.jp/hand/ を入力して直接アクセス
3 hand@kamipro.com へ空メールを送信
携帯サイト「kamipro Hand」への簡単アクセス方法
アクセス方法
DoCoMo iMenu ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技／大相撲 ▶
au/TU-KA トップメニュー ▶ カテゴリで探す ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶
vodafone メインメニュー ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶
kamipro Hand
[QRコード]
ただいまリニューアルに向けてご意見大募集中!! アンケートに答えてプレゼントをゲッツ!
[お問い合わせ] (株) ダブルクロス 03-5368-1795

kamipro Special 2006 SPRING PIRDEわっしょい!!

2006年4月11日
発行人／浜村弘一　編集人／山口日昇、青柳昌行　発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555（代表）
印刷・製本／図書印刷株式会社　©2006 ENTERBRAIN,INC.　©2006 DOUBLECROSS

enterbrain

9784757727489

定価: 本体819円 ＋税
雑誌61953-98 Ⓗ2007.4
Printed in Japan 図書印刷

ISBN4-7577-2748-8
C9476 ¥819E

1929476008190